

熊本県文化財調査報告第317集

新屋敷遺跡6

— 国土交通省白川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査 —

2016

熊本県教育委員会

新屋敷遺跡6

— 国土交通省白川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査 —



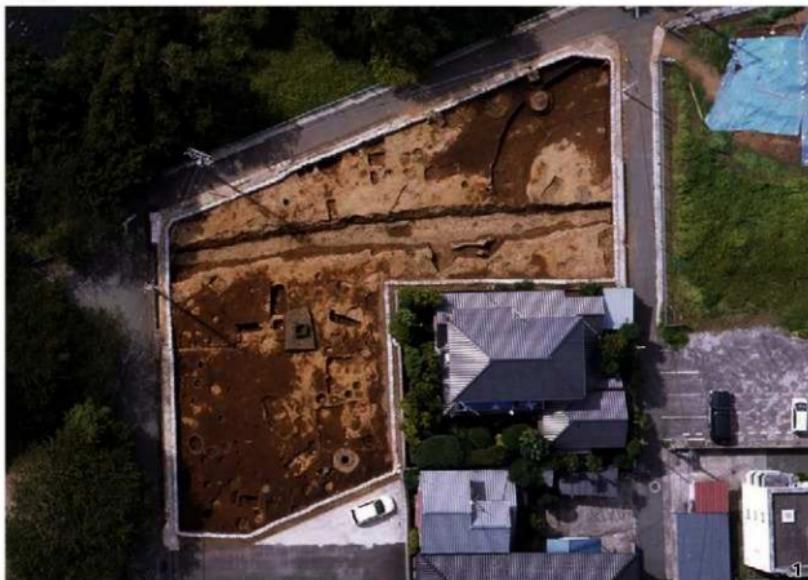


1



2

1. 熊本城・金峰山方面を望む
2. 熊本市中心街より阿蘇方面を望む



1. 8区調査区全景
2. 10区調査区全景



2

1. 11区・12区調査区全景
2. 10区調査区基本土層



8 区 S101 出土遗物



1. 5D区完掘状況
2. 6C区調査区全景(樹木移動前)



1. 6 C 区 ST04 人骨出土状况
2. 6 C 区 ST09 人骨出土状况



6C区 SDO3 出土遺物



1



2

1. 6C区 SD03 須恵器
2. 赤彩蓋・杯

序 文

熊本県教育委員会は、白川河川改修工事に伴い、明午橋と大甲橋の間の発掘調査を平成 17 年度から実施してきました。遺跡からは主に、古代（奈良・平安時代）の遺構・土器などが数多く出土しています。明午橋上流の白川左岸は、平成 21 年度と平成 23 年度に発掘調査を実施しました。本報告書はその発掘調査報告書です。

新屋敷遺跡は、大江遺跡群に隣接しており、熊本市の発掘調査でも以前から遺跡の存在が確認された地域で、大宰府へとつながる西海道や、託麻国府が存在したと推測される出水国府跡に近い遺跡です。

このような立地から、古代肥後国の政治的中心地の近隣集落の様子を垣間見ることができる遺跡です。

今回の調査によって縄文時代後晩期の人々の生活の様子、古代の土地利用の様子、近世の溝の形成など、その当時の人々の生活の様子の一端を知ることができました。

この報告書が、埋蔵文化財の保護に対する認識と理解を深め、さらにはこの地域の歴史資料の一つとして活用されることを願っています。

なお、本調査を実施するにあたり、文化財保護の観点から多大のご協力をいただきました国土交通省九州地方整備局熊本河川国道事務所、熊本市教育委員会及び地元の方々、また御指導・御助言をいただきました諸先生方に深く感謝申し上げます。

平成 28 年 3 月 31 日

熊本県教育長 田崎 龍一

例　言

- 1 本書は、国土交通省白川河川改修工事に伴って実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
- 2 本書は、熊本県教育委員会が国土交通省九州地方整備局熊本河川国道事務所の委託を受けて実施した、熊本市新屋敷二丁目（現熊本中央区新屋敷二丁目）に所在する新屋敷遺跡8～12区、熊本市新屋敷一丁目（現熊本中央区新屋敷一丁目）に所在する新屋敷遺跡4～7区の調査報告書である。
- 3 新屋敷遺跡8～10区は平成21年5月から12月まで、11～12区は平成23年5月から7月まで、現地において熊本県教育庁文化課が発掘調査を実施した。
5C区は平成22年6月から7月まで、4D・F区、5D区、6C区、7B区は平成23年1月から12月まで、5E区、6E区、7C区は平成24年1月から9月までの期間、現地において熊本県教育庁文化課が発掘調査を実施した。
- 4 発掘調査に伴う遺構の実測ならびに現地の写真撮影は、上村龍馬・横田光智・遠山宏・福田拓也・木下勇が行い、地形測量・遺構実測の一部を株式会社埋蔵文化財サポートシステム熊本支店に委託した。
- 5 調査区全体の4級基準点測量・メッッシュ杭の設置は、株式会社埋蔵文化財サポートシステム熊本支店に委託した。
- 6 各調査区の全体写真は、株式会社埋蔵文化財サポートシステム熊本支店と株式会社九州航空がラジコンヘリコプターを使用し撮影した。
- 7 整理作業・報告書作成は平成25年4月から平成27年3月まで、上村龍馬・稻葉貴子が行い、平成27年4月から平成28年3月までは長谷部善一・高瀬美智代・横山明代が熊本県文化財資料室（熊本市南区城南町沈目1677）で実施した。
- 8 一次整理は資料室で実施し、遺物の実測は稻葉・土田みどり、田中裕子・井上淨湖・坂本貴美子が主として行った。遺物のデジタルトレースを株式会社有明測量開発社、株式会社埋蔵文化財サポートシステム熊本支店に委託した。
- 9 遺構はデジタルトレースとし、株式会社埋蔵文化財サポートシステム熊本支店に委託した。また、写真図版掲載の遺物の写真撮影は、写測エンジニアリング株式会社に委託した。
- 10 陶磁器については、佐賀県立九州陶磁文化館の学芸課長家田淳一氏に年代等の鑑定をお願いし、色調等はDICカラーガイド「中国の伝統色（2版）」を基準に使用した。
- 11 新屋敷遺跡より出土した古代人骨については、（NPO）人類学研究機構の松下真実・松下孝幸両氏に鑑定を委託した。
- 12 新屋敷遺跡8区より出土した刻書土器（15）については、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所の主任研究員山本崇氏に調査を依頼し、同研究所主任中村一郎氏に遺物写真の撮影を依頼した。
- 13 遺構図面中の出土遺物実測図の縮尺は任意である。
- 14 新屋敷遺跡8～12区の編集は上村が編集し、稻葉が補佐した。平成27年度に入り上村の原稿を長谷部が再編集し、横山が補佐した。
- 新屋敷遺跡4～7区の編集は長谷部が行い、高瀬・横山が補佐した。

新屋敷遺跡6発掘調査報告書

— 国土交通省白川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査 —

本文目次

卷頭図版

序文

例言

目次

第1章 調査の経過

第1節	調査に係る経緯	1
第2節	調査組織	1
第3節	調査の経過	4

第2章 遺跡の位置と環境

第1節	地理的環境	16
第2節	周辺遺跡と歴史的環境	16

第3章 調査の方法

第1節	調査区・グリッドの設定	17
第2節	基本順序	20
第3節	調査方法	20
第4節	その他	20

第4章 調査の成果

8区	27
9区	33
10区	39
11区	57
12区	62
遺物実測図	66
遺物観察表	80
4区	91
5区	99
6区	111
7区	128
遺物実測図	132
遺物観察表	154

第5章 自然科学分析調査報告	— 人類学研究機関 松下真実・松下孝幸 —	168
----------------	-----------------------	-----

第6章まとめ		185
--------	--	-----

写真図版

報告書抄録

挿図目次 (Fig.)

- Fig. 1 新屋敷遺跡周辺遺跡地図 (1/25,000)
Fig. 2 新屋敷遺跡内調査地点図 (縮尺任意)
Fig. 3 8～12区位置図
Fig. 4 8区遺構配置図・調査区北壁土層断面図
Fig. 5 8区SI01、カマド平面・断面図
Fig. 6 8区SB01平面・断面図
Fig. 7 8区SD02平面・断面図
Fig. 8 8区防空壕01平面・断面図
Fig. 9 8区SD01平面・断面図
Fig. 10 9区遺構配置図
Fig. 11 9区南東壁土層断面図
Fig. 12 9区SD05・06・07・08平面・断面図
Fig. 13 9区SD01・03平面・断面図－①
Fig. 14 9区SD01・03平面・断面図－②
Fig. 15 9区防空壕02平面・断面図
Fig. 16 9区不発弾出土地点
Fig. 17 10区遺構配置図(縦文)
Fig. 18 10区SI03平面・断面図
Fig. 19 10区SI04平面・断面図
Fig. 20 10区SI08平面・断面図
Fig. 21 10区SK32平面・断面図
Fig. 22 10区SK33・34平面・断面図
Fig. 23 10区遺構配置図(古代)
Fig. 24 10区SB01平面・断面図
Fig. 25 10区SB02平面・断面図
Fig. 26 10区SB03平面・断面図
Fig. 27 10区SB04平面・断面図
Fig. 28 10区SD18平面・断面図
Fig. 29 10区遺構配置図(近世・近代)
Fig. 30 10区SD11・12・13・15・16平面・断面図
Fig. 31 10区防空壕03平面・断面図
Fig. 32 10区下層確認トレンチ土層断面図
Fig. 33 10区東壁土層断面図
Fig. 34 11区遺構配置図
Fig. 35 11区SK32平面・断面図
Fig. 36 11区SI02平面・断面図
Fig. 37 11区SD03平面・断面図
Fig. 38 11区SD05・07平面・断面図
Fig. 39 11区防空壕04平面・断面図
Fig. 40 12区遺構配置図・調査区南壁土層断面図
Fig. 41 12区SI01・02平面・断面図
Fig. 42 12区SD01・02平面・断面図
Fig. 43 8区SI01出土遺物実測図－①
Fig. 44 8区SI01出土遺物実測図－②
Fig. 45 8区SI01出土遺物実測図－③

挿図目次 (Fig.)

- Fig.46 8 区 SD02 出土遺物実測図 (古代)
Fig.47 8 区 SD01 出土遺物実測図 (近世)
Fig.48 9 区 SD03 出土遺物実測図
Fig.49 10 区 SI03 出土遺物実測図
Fig.50 10 区 SI04 出土遺物実測図
Fig.51 10 区 SI08 出土遺物実測図
Fig.52 10 区 SK32 出土遺物実測図 - ①
Fig.53 10 区 SK32 出土遺物実測図 - ②
Fig.54 10 区 SK32 出土遺物実測図 - ③
Fig.55 10 区 SK32 出土遺物実測図 - ④
Fig.56 10 区 SK33 出土遺物実測図
Fig.57 10 区 SK34 出土遺物実測図
Fig.58 11 区 SK32 出土遺物実測図
Fig.59 11 区 SI02 出土遺物実測図
Fig.60 11 区 SD04 出土遺物実測図
Fig.61 12 区 SI01、SD01・02 出土遺物実測図
Fig.62 石器実測図- ①
Fig.63 石器実測図- ②
Fig.64 石器実測図- ③
Fig.65 4 ~ 7 区位置図
Fig.66 4 D 区遺構配置図 (古代)
Fig.67 4 D 区 SK02、SP20・22・23・24・25 平面・断面図
Fig.68 4 D 区遺構配置図 (近世)
Fig.69 4 D 区 SD01 土層断面図
Fig.70 4 F 区遺構配置図・調査区南壁土層断面図
Fig.71 4 F 区 SI01 平面・断面図
Fig.72 4 F 区 SK21 平面・断面図
Fig.73 4 F 区 SD01・02 平面・断面図
Fig.74 5 C 区遺構配置図 (近世)
Fig.75 5 D 区遺構配置図・調査区南壁土層断面図
Fig.76 5 D 区 SI01・02・03・04 平面・断面図
Fig.77 5 D 区 SK01・05・31 平面・断面図
Fig.78 5 D 区 SD01・02 平面・断面図
Fig.79 5 D 区 SD03・04・05 平面・断面図
Fig.80 5 E 区遺構配置図
Fig.81 5 E 区旧河川土層断面図
Fig.82 5 C・5 E 区 NRO1 平面図
Fig.83 5 E 区 ST01 平面・断面図
Fig.84 5 E 区 SK01 平面・断面図
Fig.85 6 C 区遺構配置図
Fig.86 6 C 区 SI01 平面・断面図
Fig.87 6 C 区 SK02・04 平面・断面図
Fig.88 6 C 区 SK10・11 平面・断面図
Fig.89 6 C 区 SK15 平面・断面図
Fig.90 6 C 区 SK18・19 平面・断面図

挿図目次 (Fig.)

- Fig.91 6C区SK20平面・断面図
Fig.92 6C区ST01・02・03平面・断面図
Fig.93 6C区ST04・05・06平面・断面図
Fig.94 6C区ST07・08・09平面・断面図
Fig.95 6C区ST10・11平面・断面図
Fig.96 6C区SD01・02・03・04・05平面図
Fig.97 6C区SD01・02断面図
Fig.98 6C区SD04・05断面図
Fig.99 6C区SD03断面図
Fig.100 6C区SD03縦検出状況平面・断面図
Fig.101 6E区遺構配置図・トレンチ1土層断面図
Fig.102 6E区SD01・02断面図
Fig.103 7B区遺構配置図(近世)
Fig.104 7B区南壁土層断面図
Fig.105 7C区SK01平面・断面図
Fig.106 7C区遺構配置図・トレンチ2南壁土層断面図
Fig.107 4D、4F区遺構内出土遺物実測図
Fig.108 5D、5E区遺構内出土遺物実測図
Fig.109 6C区SI01出土遺物実測図、SD01出土遺物実測図－①
Fig.110 6C区SD01出土遺物実測図－②
Fig.111 6C区SD02出土遺物実測図－①
Fig.112 6C区SD02出土遺物実測図－②
Fig.113 6C区SD02出土遺物実測図－③
Fig.114 6C区SD03出土遺物実測図－①
Fig.115 6C区SD03出土遺物実測図－②
Fig.116 6C区SD03出土遺物実測図－③
Fig.117 6C区SD03出土遺物実測図－④
Fig.118 6C区SD03出土遺物実測図－⑤
Fig.119 6C区SD03出土遺物実測図－⑥
Fig.120 6C区SD03出土遺物実測図－⑦
Fig.121 6C区SD04出土遺物実測図
Fig.122 6C区SD05出土遺物実測図
Fig.123 6C区ST06出土遺物実測図
Fig.124 6C区SK02出土遺物実測図
Fig.125 6C区SK04出土遺物実測図
Fig.126 6C区SK11出土遺物実測図
Fig.127 6C区SK15出土遺物実測図－①
Fig.128 6C区SK15出土遺物実測図－②
Fig.129 6C区SK15出土遺物実測図－③
Fig.130 6C区SK15出土遺物実測図－④
Fig.131 6C区SK18・19・20出土遺物実測図
Fig.132 6E区遺構内出土遺物実測図
Fig.133 7C区SD01出土遺物実測図
Fig.134 7C区NRO2出土遺物実測図－①
Fig.135 7C区NRO2出土遺物実測図－②

挿図目次 (Fig.)

- Fig.136 石器実測図
Fig.137 鉄器実測図
Fig.138 8～12区遺構配置図（縦文）
Fig.139 8～12区遺構配置図（古代）
Fig.140 8～12区遺構配置図（近世）
Fig.141 4～7区遺構配置図（古代）
Fig.142 4～7区遺構配置図（近世）
Fig.143 8～12区座標測定地図
Fig.144 4～7区座標測定地図

表目次 (Tab.)

Tab. 1	遺跡地名表	Tab.14	遺物観察表 - ①
Tab. 2	新屋敷遺跡内調査地一覧	Tab.15	遺物観察表 - ②
Tab. 3	遺物観察表 - ①	Tab.16	遺物観察表 - ③
Tab. 4	遺物観察表 - ②	Tab.17	遺物観察表 - ④
Tab. 5	遺物観察表 - ③	Tab.18	遺物観察表 - ⑤
Tab. 6	遺物観察表(石器)	Tab.19	遺物観察表 - ⑥
Tab. 7	遺物観察表(瓦)	Tab.20	遺物観察表(土製品)
Tab. 8	遺物観察表(写真のみ) - ①	Tab.21	遺物観察表(石器)
Tab. 9	遺物観察表(写真のみ) - ②	Tab.22	遺物観察表(鉄製品)
Tab.10	遺物観察表(写真のみ) - ③	Tab.23	遺物観察表(写真のみ) - ①
Tab.11	遺物観察表(写真のみ) - ④	Tab.24	遺物観察表(土製品・写真のみ) - ②
Tab.12	遺物観察表(写真のみ) - ⑤	Tab.25	遺物観察表(瓦・写真のみ) - ③
Tab.13	遺物観察表(鉄製品・写真のみ) - ⑥		

写真目次 (PL.)

PL.1	1. 熊本城・金峰山方面を望む 2. 熊本市中心街より阿蘇方面を望む	PL.11	1. 9区 SD03 完掘状況 2. 9区 3層完掘状況(縦文)
PL.2	1. 8区調査区全景 2. 10区調査区全景	PL.12	1. 10区調査区全景 2. 10区 SK32 遺物出土状況
PL.3	1. 11区・12区調査区全景 2. 10区調査区基本土層	PL.13	1. 10区 SI03 完掘状況 2. 10区 SI04 遺物出土状況
PL.4	8区 SI01 出土遺物	PL.14	1. 11区・12区調査区全景 2. 11区 SI01 遺物出土状況
PL.5	1. 5D区完掘状況 2. 6C区調査区全景(樹木移動前)	PL.15	1. 11区 SD03 完掘状況 2. 12区 SI01 完掘状況
PL.6	1. 6C区 ST04 人骨出土状況 2. 6C区 ST09 人骨出土状況	PL.16	8区 SI01 出土遺物 - ①
PL.7	6C区 SD03 出土遺物	PL.17	8区 SI01 出土遺物 - ②
PL.8	1. 6C区 SD03 須恵器裏 2. 赤彩 蓋・杯	PL.18	8区 SI01 出土遺物 - ③
PL.9	1. 8区調査区全景 2. 8区 SI01 完掘状況	PL.19	8区 SI01 出土遺物 - ④
PL.10	1. 8区 SD02 完掘状況(古代) 2. 8区 SD01 完掘状況(近世)	PL.20	1～4. 8区 SD02 出土遺物 5・6. 8区 SD01 出土遺物 7. 9区 SD03 出土遺物

写真目次 (PL.)

PL.21	1. 10 区 SI03 出土遺物 2. 10 区 SI04 出土遺物 3. 10 区 SI08 出土遺物 4 ~ 6. 10 区 SK32 出土遺物 - ①	PL.39	1. 6C 区 ST02 人骨出土状況 2. 6C 区 ST03 人骨出土状況
PL.22	10 区 SK32 出土遺物 - ②	PL.40	1. 6C 区 ST06 人骨出土状況 2. 6C 区 ST10 人骨出土状況
PL.23	1 ~ 2. 10 区 SK32 出土遺物 - ③ 3. 10 区 SK33 出土遺物	PL.41	1. 4D 区 SK02, SP22・25 出土遺物 2. 4F 区 SK21 出土遺物 3. 5D 区 SI01・02・03 出土遺物
PL.24	1. 10 区 SK34 出土遺物 2 ~ 3. 11 区 SK32 出土遺物 4. 11 区 SI02 出土遺物 5. 11 区 SD04 出土遺物 - ①	PL.42	1. 4D 区 遷構内出土遺物 2. 5D 区 SD05 出土遺物 3. 5E 区 SK01 出土遺物 4. 6C 区 赤彩蓋・杯
PL.25	1 ~ 3. 11 区 SD04 出土遺物 - ② 4. 12 区 SI01 出土遺物 5. 12 区 SD01 出土遺物 6. 12 区 SD02 出土遺物	PL.43	6C 区 SD01 出土遺物 - ① 6C 区 SD01 出土遺物 - ②
PL.26	1. 鉄製品 2. 石器 3. 石製品	PL.44	6C 区 SD02 出土遺物 - ① 6C 区 SD02 出土遺物 - ②
PL.27	1 ~ 2. 緑釉陶器 3. 染付 (景德鎮窯碗) 4. 白磁 (中国皿)・青磁 (中国碗) 5. 染付 (漳浦窯系 皿)	PL.45	6C 区 SD03 出土遺物 - ① 6C 区 SD03 出土遺物 - ②
PL.28	1. 広東 (皿・碗) 2. 肥前 (皿・碗 16 世紀) 3. 肥前・青磁 (皿・碗・鉢 17 世紀) 4. 肥前・緑釉 (碗・壺 17 世紀)	PL.46	6C 区 SD03 出土遺物 - ③ 6C 区 SD03 出土遺物 - ④
PL.29	肥前 (皿・碗・小鉢・壺・仏花器 17 世紀)	PL.47	6C 区 SD02 出土遺物 - ③
PL.30	1 ~ 2. 肥前 (擂跡・蓋・碗 18 世紀) 3. 肥前 (蓋・道具 19 世紀) 4. 有田 (蓋・碗・鉢 17 世紀) 5. 有田 (碗 18 世紀)	PL.48	6C 区 SD03 出土遺物 - ① 6C 区 SD03 出土遺物 - ②
PL.31	1. 有田 (合子 18 世紀) 2. 有田 (碗・鉢 17 ~ 18 世紀) 3. 肥前 (紅皿) 4. 擂跡	PL.49	6C 区 SD03 出土遺物 - ③ 6C 区 SD03 出土遺物 - ④
PL.32	1. 初期伊万里 (盃) 2. 唐津 (碗) 3. 熊本 (碗・急須) 4. 姫野 (蓋) 5. 薩摩 (急須)	PL.50	6C 区 SD04 出土遺物 - ① 6C 区 SD04 出土遺物 - ②
PL.33	1. 土人形 2. 酒瓶・サイダー瓶	PL.51	6C 区 SD03 出土遺物 - ⑤ 6C 区 SD03 出土遺物 - ⑥
PL.34	1. 4F 区 調査終了時状況 2. 4F 区 SD01 完掘状況	PL.52	6C 区 SD04 出土遺物
PL.35	1. 5C 区 調査終了時状況 2. 5D 区 SI01 完掘状況	PL.53	6C 区 SD05 出土遺物 - ① 6C 区 SD05 出土遺物 - ②
PL.36	1. 5D 区 SI03 完掘状況 2. 5D 区 SK05 遺物出土状況	PL.54	6C 区 SD05 出土遺物 - ③ 6C 区 SD05 出土遺物 - ④
PL.37	1. 5E 区 SK01 遺物出土状況 2. 6C 区 SI01 完掘状況	PL.55	6C 区 SK02 出土遺物 6C 区 SK04 出土遺物
PL.38	1. 6C 区 SK19 獣骨出土状況 2. 6C 区 ST01 人骨出土状況	PL.56	6C 区 SK15 出土遺物 - ① 6C 区 SK15 出土遺物 - ②
		PL.57	6C 区 SK15 出土遺物 - ③ 6C 区 SK20 出土遺物
		PL.58	1 ~ 3. 6C 区 SK15 出土遺物 - ④ 4. 6C 区 SK20 出土遺物
		PL.59	6C 区 SK18・19・20 出土遺物 6E 区 遷構内出土遺物
		PL.60	3・4. 7C 区 NR02 出土遺物 - ① 7C 区 NR02 出土遺物 - ②
		PL.61	7C 区 NR02 出土遺物 - ③ 7C 区 NR02 出土遺物 - ④
		PL.62	1. 黒書土器・刻書土器 2. 製塙土器 3. 土鍬 4. 瓦
		PL.63	6C 区 SD03 須恵器大甕

第1章 調査の経過

第1節 調査に係る経緯

1 調査に係る経緯

白川の上流域にあたる阿蘇カルデラは外輪山と火口原及び中央火口丘群を形成し、白川の流れは比較的穏やかで草原及び田畠が多い。また、細長い中流域は急流で水の流れが速く、河岸段丘及び洪積台地上に田畠が多い。下流域は扁状地及び沖積平野で、熊本市街地が広がり、流れは緩やかで河口域は水田地帯となっていている。洪水時は川の水がスムーズに海へ流れ出にくい構造をしているため、洪水を引き起こしやすい川といえる。

また、白川上流域の阿蘇山は年間降水量約3,250mmで、熊本市の約1,990mmと比較しても豊富な降水量であることがわかる。新屋敷遺跡は標高約14～16mで、白川の流れが遺跡の北東で蛇行し、南西に直進する流域の左岸側に位置する。白川下流域は、現在河川堤防の整備が進んでいるが、大雨の際には河川氾濫が心配される地域である。白川は市街地付近では天井川であり、一度越水してしまうと市街部に甚大な被害を与える。近年では昭和28年6月26日の白川大水害や昭和55年8月30日の出水被害、平成2年7月2日の白川大水害等、過去に幾度となく水害を起こしてきた。水害に備えて緊急対策特定区間を設けて無堤区間の解消に努力してきたが、平成24年7月12日に白川激甚災害が起き、甚大な被害を与えたことにより、白川改修工事の早期完成が望まれている。

大甲橋～明午橋は「縁の区間」と呼ばれ、熊本市を代表する景観を有しており、市民の関心も高い区間であるため、有識者及び地域の代表からなる「白川市街部景観・親水検討会」によって樹木の配置等も考慮しながら護岸改修が進められてきた。この区間は川幅の拡大に向け樹木の移植及び掘削をする必要がある。これは、洪水に対する安全度を高め、流下する断面を確保するためである。

2 予備調査

熊本県中央区新屋敷二丁目から一丁目の白川左岸において、国土交通省九州地方整備局熊本河川国道事務所による河岸掘削工事と築堤工事が計画された。工事予定地は新屋敷遺跡の南西端側の白川沿いであり、主に古代～中世の遺跡を包蔵することが予想されたため、平成15年5月27日、国土交通省九州地方整備局熊本河川国道事務所から熊本県教育庁文化課に埋蔵文化財確認調査が依頼された。これを受けて平成16年2月17日から3月10日にかけて確認調査を行ったところ、古代の埋蔵文化財の残存が確認された。よって、国土交通省九州地方整備局熊本河川国道事務所と文化課の間で協議し、平成17年より工事によって遺跡が破壊される区域について、記録保存のための発掘調査を実施することになった。

第2節 調査組織

本事に伴う埋蔵文化財発掘調査は、熊本県教育委員会が主体となり、熊本市教育委員会の協力を得て実施している。また、調査に伴い関係機関の方々より各種の助言、指導も得ている。

以下、当課の調査体制を記すとともに芳名を記し、感謝申し上げたい。(敬称略、役職は当時)

【8区～12区】

平成21年度(2009)本調査

調査主体 熊本県教育委員会

調査責任者 米岡正治(文化課長)

調査統括 村崎孝宏(文化財調査第1係長)

調査事務局 宗村士郎(教育審議員兼課長補佐)

辛川雅弘(主幹兼総務係長)

山田京子(参事)

調査担当 上村龍馬(文化財保護主事)

横田光智(非常勤職員)

遠山 宏(非常勤職員)

平成 23 年度（2011）本調査

調査主体 熊本県教育委員会

調査責任者 小田信也（文化課長）

調査統括 村崎孝宏（文化財調査第1係長）

調査事務局 川上勝美（課長補佐）

水元敬浩（高校教育課主幹兼総務係長）

山田京子（高校教育課参事）

調査担当 上村龍馬（文化財保護主事）

横田光智（非常勤職員）

福田拓也（非常勤職員）

木下 勇（非常勤職員）

近世陶器・磁器に関する遺物実見・指導

佐賀県立九州陶磁文化館 家田淳一

調査助言・指導及び調査協力者

国土交通省九州地方整備局熊本河川国道事務所

熊本市教育委員会

熊本県立装飾古墳館

平成 25 年度（2013）調査報告書作成

整理主体 熊本県教育委員会

整理責任者 小田信也（文化課長）

整理統括 村崎孝宏（主幹兼文化財調査第1係長）

整理事務局 馬場一也（課長補佐）

廣石啓哉（主幹兼文化総務係長）

天草英子（主任主事）

整理担当 上村龍馬（文化財保護主事）

稻葉貴子（非常勤職員）

整理作業員 橋本由美子 高松孝子 中村正子

宮本令子 中島幸子 大川好美

小原有子（一次整理）

土田みどり 田中裕子 井王淨湖

（二次整理）

空中写真撮影業務

株式会社埋蔵文化財サポートシステム熊本支店

株式会社九州航空

遺構実測業務

株式会社埋蔵文化財サポートシステム熊本支店

出土遺物実測及びデジタルトーレス業務

株式会社明測量開発社

株式会社埋蔵文化財サポートシステム熊本支店

遺構実測図デジタルトーレス業務

株式会社埋蔵文化財サポートシステム熊本支店

遺物写真撮影業務

写測エンジニアリング株式会社熊本支店

【4 区～7 区】

平成 22 年度（2010）本調査

調査主体 熊本県教育委員会

調査責任者 小田信也（文化課長）

調査統括 村崎孝宏（文化財調査第1係長）

調査事務局 宗村士郎（教育審議員兼課長補佐）

元鳥茂（高校教育課課長補佐）

兼総務係担当

山田京子（高校教育課参事）

松島英二（高校教育課主任主事）

調査担当 上村龍馬（文化財保護主事）

横田光智（非常勤職員）

福田拓也（非常勤職員）

木下 勇（非常勤職員）

平成 23 年度（2011）本調査		整理事務局 松永隆則（課長補佐） 廣石啓哉（主幹兼文化総務係長） 天草英子（主任主事）
調査主体 熊本県教育委員会		
調査責任者 小田信也（文化課長）		
調査統括 村崎孝宏（文化財調査第 1 係長）	整理担当 長谷部善一 （主幹兼文化財調査第 1 係長）	
調査事務局 川上勝美（課長補佐） 水元敬浩（高校教育課主幹兼総務係長） 山田京子（高校教育課参事） 松島英二（高校教育課主任主事）		高瀬美智代（臨時職員） 横山明代（臨時職員）
調査担当 上村龍馬（文化財保護主事） 横田光智（非常勤職員） 福田拓也（非常勤職員） 木下 勇（非常勤職員）	整理作業員 橋本由美子 高松孝子 中村正子 中島幸子（一次整理） 坂本貴美子 土田みどり 田中裕子 (二次整理)	
平成 24 年度（2012）本調査		調査助言・指導及び調査協力者
調査主体 熊本県教育委員会		国土交通省九州地方整備局熊本河川国道事務所 熊本市教育委員会
調査責任者 小田信也（文化課長）		
調査統括 村崎孝宏（文化財調査第 1 係長）	調査・整理に伴う業務委託先	
調査事務局 川上勝美（課長補佐） 天草英子（施設課主任主事）	4 級基準点測量及びメッシュ杭設置業務 株式会社埋蔵文化財サポートシステム熊本支店	
調査担当 上村龍馬（文化財保護主事） 横田光智（非常勤職員） 福田拓也（非常勤職員）	空中写真撮影業務 株式会社九州航空	
平成 26 年度（2014）調査報告書作成		遺構実測業務
整理主体 熊本県教育委員会		株式会社埋蔵文化財サポートシステム熊本支店
整理責任者 手島伸介（文化課長）		
整理統括 村崎孝宏（主幹兼文化財調査第 1 係長）	出土遺物実測及びデジタルトレース業務	
整理事務局 松永隆則（課長補佐） 廣石啓哉（主幹兼文化総務係長） 天草英子（主任主事）	株式会社有明測量開発社 株式会社埋蔵文化財サポートシステム熊本支店	
整理担当 上村龍馬（文化財保護主事） 稲葉貴子（非常勤職員）	遺構実測図デジタルトレース業務	
整理作業員 橋本由美子 高松孝子 中村正子 宮本令子 中島幸子 大川好美 楓々野ふみ 井王淨湖（一次整理） 土田みどり 田中裕子（二次整理）	株式会社埋蔵文化財サポートシステム熊本支店 遺物写真撮影業務 写測エンジニアリング株式会社熊本支店	
平成 27 年度（2015）調査報告書作成		
整理主体 熊本県教育委員会		
整理責任者 手島伸介（文化課長）		
整理統括 村崎孝宏（課長補佐）		

第3節 調査の経過

調査日誌（8～12区）

【2009】

(8区)

- 5・18 表土剥ぎ1日目。
- 5・19 表土剥ぎ2日目。擾乱掘りを実施。幅約3mの区画溝を確認。
- 5・20 調査区の清掃を実施し擾乱のラインを確定する。
- 5・21 雨天のため現場休止。
- 5・22 調査区の清掃・擾乱掘り。調査区の周りに安全杭を設置する。
- 5・25 株式会社埋蔵文化財サポートシステムによる基準点測量を実施。1層削除及び擾乱掘りを実施。2層は削除されており、古代の層は南西側（明午橋側）に残る。
- 5・26 株式会社埋蔵文化財サポートシステムによるメッシュ杭設置。清掃及び擾乱掘り。調査区東側に古代の住居跡を検出。
- 5・27 雨天のため現場休止。
- 5・28 摰乱掘り及び包含層掘削（1・2層）。北側には溝が2条の可能性があり。
- 5・29 北側包含層（1～3層）掘削を実施。
- 6・1 遺構検出のための清掃。北側はトレンチの土層確認。
- 6・2 遺構検出状況写真撮影。2カット（東側・西側）。SI01の床面検出。SPの半段。
- 6・3 雨天のため現場休止。
- 6・4 SI01の壁検出及びカマドの調査を実施。袖部分の残りはよくない。SD01の掘り下げ。
- 6・5 係会議のため現場休止。
- 6・8 SI01の硬化面検出状況・土層断面及びカマドの土層断面写真撮影。1/200の遺構配置図作成。SD01の掘削。
- 6・9 SI01の土層断面とカマドのベルト設定のやり直しを実施。カマドの袖にかかるように再度設定し直す。SI01の土層断面・平面実測。SI01、P1～5及びPit 1～7の写真撮影。
- 6・10 雨天のため現場休止。
- 6・11 SD01の掘削はあと30cmほどで下端が出てきそうである。
- 6・12 SD01の掘削部分はかなり深くなっている。はっきりしてから除去を進める。遺構配置図作成。
- 6・15 SI01のカマド検出及び出土遺物状況写真撮影。SI01の平面図及びカマド実測図作成。
- 6・16 SI01は床面をはがして、掘り方を出して柱穴を検出した。村崎係長・長谷部参事・亀田主任学芸員来跡。防空壕も記録保存の必要性を言われる。
- 6・17 SI01、Pit 土層断面及びSD01土層断面1～3の写真撮影。
- 6・18 SD01とSK01～04の完掘を実施。SD01の土層断面1～3と調査区東側の土層断面を実測。SI01遺物検出状況・調査区東側土層断面・SD01の完掘状況写真撮影。
- 6・19 調査区平面図・SI01のカマド遺物・SD01の土層断面3の実測図作成。

6・23 SD01の掘削。調査区の平面図実測作成。防空壕の完掘写真撮影。

6・24 村崎係長・長谷部参事来跡。SI01のカマド除去。調査区平面図及びSI01カマド土層断面図作成。SI01の遺物点上げ。

6・25 SI01完掘状況・SD01土層断面3修正の写真撮影。

6・26 SD01の擾乱掘り。

6・29～7・1 雨天のため現場休止。

7・2 調査区北側のSD02を検出してから、掘削に入った。古代の遺物が多く、角が磨耗していることから流れ込んだ可能性が高い。

7・3 SD02の掘削。

7・4 SD02の掘削。壁を出していこうとしているが、北側の壁がわかりにくい。

7・8 宮崎参事来跡。空撮前清掃実施。

7・9 空撮前清掃。九州航空株式会社に委託して、4カッタ撮影。個別に SD01 と SD02 の完掘状況も写真撮影する。

7・10 雨天のため現場休止。調査区の実測。

7・13～7・22 新屋敷1の調査の補助を行う。

7・15～7・17 調査区埋戻し実施。

(9区)

7・22 表土剥ぎ1日目。

7・23 表土剥ぎ2日目。石列(近世の建物の基礎石)を検出。

7・24 雨天のため現場休止。

7・27 表土剥ぎ3日目。壁切りや環境整備を実施。

7・29 南側トレチ掘りを実施。

7・30 SD03の掘削及び石列出し。

7・31 男性作業員は調査区の清掃を実施。女性作業員は石列出しを実施。

8・3 石列周辺の遺構検出。

8・4 SD03の擾乱ラインをはっきりさせてから、擾乱の除去に入る。調査区南西部検出状況1（35mm）を写真撮影。石列出し。

8・5 石列の配置図及び調査区のラインを実測した。午後4時50分頃擾乱掘りをしていた作業員さんが、不発弾しき物を見発した。表土から50cmほどのところに立った状態で埋まっていた。警察、文化課に連絡。自衛隊の爆弾処理班によって対処してもらう。爆弾の信管が抜かれていたため大事には至らなかった。

8・6 調査区配置図作成。擾乱掘りと検出のため周りの表土を下げる。

8・7 石列の検出と擾乱掘りを行う。集石遺構検出状況写真撮影。

8・10 集石遺構 SB02 (K 1～3・K 5～10) SB04 (K 1～14) の検出状況写真撮影。SB01・02の平面図作成。

8・11 村崎係長・長谷部参事来跡。集石遺構の半段及び擾乱掘り。集石遺構の平面図・断面図を作成。

8・12～8・13 雨天のため現場休止。

8・17 村崎係長・長谷部参事来跡。集石遺構の検出及び消掃を行いながら、写真撮影を実施。SB01～04の平面図・断面図作成。

- 8・18 集石遺構の半裁及び完掘。集石遺構の平面図・断面図作成。SD03の掘削。
- 8・19 SD03の掘削。集石遺構の断面図作成及び完掘。SB01～04の平面図・断面図作成。
- 8・20 村崎係長・インターンシップ(県立大学生1名)来跡。SD03の掘削。集石遺構 SB01 の半裁及び写真撮影。
- 8・21 調査区東側清掃及び遺構検出状況写真撮影を実施。その後亂掘りを行う。集石遺構の完掘及び完掘状況の写真撮影を行う。
- 8・24 SD03の掘削。集石遺構 SB01、K1 半裁及び集石遺構の実測図作成。
- 8・25 SD01・03の掘削。集石遺構 SB01、K1 半裁及び完掘。調査区東側の遺構配置図作成。SB01 (K48～50) の断面写真撮影。
- 8・26 村崎係長・宮崎参事来跡。調査区東側の遺構掘りを行なう。SD05・06の掘削及びSK類の掘削を行う。SB01、K1 完掘写真撮影。
- 8・27 SD01・03の掘削を行いながら、SK01～05の断面写真・図面作成に入る。
- 8・28 SB01、K22 の半裁及び SK01・02 完掘。SB01、K51 平面図作成。
- 8・31 SD03のトレンチ掘削及び SD05・06の掘削。SB01 (K22・51) の断面図作成及び写真撮影。
- 9・1 SD03・05・06の掘削。SI02の掘り下げ及び写真前清掃。SB01、K22 断面・調査区南側土層断面及び SD03 土層断面(3カット)写真撮影。
- 9・2 SD03の掘削。調査区平面図及び土層断面図作成。SB01、K22 断面図作成。
- 9・3 長谷部参事来跡。SB01、K22 完掘。SD01断面・調査区土層断面・SD03断面 1～3 の実測図作成。SB01、K22 断面写真撮影。
- 9・4 SD03掘削及び中央ベルト掘削。土層断面分層及び注記を実施。調査区東側 SK01～05 の完掘写真及び SD05・06 の断面写真撮影。
- 9・7 SD01・03の掘削。
- 9・8 北側0層(集石遺構)の掘り下げを実施。写真前清掃。集石遺構完掘状況及び SB01、K22 完掘状況写真撮影。
- 9・9 北側集石遺構掘り下げ。SD05・06 の断面図作成。長さ 50cm の円筒形をした不発弾を発見。文化課と警察に連絡。熊日、RKK の取材を受ける。
- 9・10 北側 0～2 層掘削。遺構検出消清。北側井戸遺構(近世)の実測図作成及び集石遺構井戸検出状況写真撮影。熊本市文化財課の師富氏来訪。
- 9・11 集石遺構掘り下げ及び乱掘り。集石遺構井戸の実測図作成。井戸検出2(蓋石除去状況)の写真撮影。
- 9・12 SD03・04の掘削。井戸の断面図・平面図作成完了。調査区南側の(1/20)実測図を作成。
- 9・15 調査区北側の遺構検出のための精査実施。その後、乱掘り。調査区の南側(1/20)実測図作成。SB01、K52 断面図作成。調査区北側検出状況写真撮影。
- 9・16 調査区北側 SD07・08 の掘削開始。SB01、K52 断面図及び SD04・07 の断面図作成。
- 9・17 写真前清掃及び周辺の除草作業。北側(1/20)実測図作成及び SD06～09 断面図作成。SD07 完掘状況写真撮影。
- 9・18 国土交通省との協議。調査区北側・東側乱掘り。北側(1/20)レベル入れ。
- 9・23 作業員が少ないとめ土器洗いを実施。
- 9・24 土器の整理。
- 9・25 新屋敷1の発掘作業の手伝い。
- 9・28 新屋敷1の発掘作業の手伝い。国土交通省との打ち合わせ。
- 9・29 新屋敷1の発掘作業の手伝い。除根の立会。
- (10区)
- 10・19 表土剥ぎ1日目。住宅のベタ基礎があり、かろうじて2層が残っている状態であった。中央にはコンクリートの防水槽らしきものがあり、瓦が埋められていた。
- 10・20 表土剥ぎ。2層が残っている所と3層直上の所がある。
- 10・21 表土剥ぎ及び置場形成。国土交通省との打ち合わせ。
- 10・22 調査区の環境整備(壁切り・土養づくり)
- 10・23 表土除去状況写真前清掃及び写真撮影。出土遺物がこれまでの区と違って縄文土器が多い。
- 10・26 雨天のため現場休止。コンクリートのベタ基礎を重機により除去。
- 10・27 村崎係長・長谷部参事来跡。乱掘り。
- 10・28 北側壁切り及び浮き土除去。南側に水道管らしき埋設物があり除去する。
- 10・29 メッシュ杭設打(株式会社埋蔵文化財サポートシステム)。調査区東側トレンチ掘り及び調査区内の乱掘り。
- 10・30 亂掘りを実施。乱掘の壁からも縄文土器が出土。堅穴建物の可能性有り。
- 11・2 集石遺構の石列検出及び乱掘りを実施。遺構配置図(略図)1/20を作成。
- 11・4 亂掘りを実施。調査区北側(1/20)を作成する。
- 11・5 0～1層掘削及び乱掘り。調査区(1/20)を実測する。
- 11・6 亂掘り及び北側集石遺構平面図(1/20)の作成。2層直上遺構検出状況写真撮影。
- 11・9 現場休止。
- 11・10 14日の現場説明会に向けての準備。途中雨が降り、土器の整理を行う。
- 11・11 雨天のため現場休止。
- 11・12 空掘前清掃。集石遺構のレベル入れ。9区 SD05・06・09 の完掘状況及び SK07 の土層断面写真撮影。
- 11・13 9区の遺構確認。高所作業車による9区完掘状況写真撮影(中版2カット)。
- 11・14 現地説明会(38名来客)。体験発掘や県立考古館職員による勾玉づくりを実施。その後、0～1層の掘削。9区防空壕の実測図作成。
- 11・16 10区遺構検出のための精査。その後乱掘り。近世遺構配置図(1/20)作成。
- 11・17 雨天のため現場休止。

- 11・18 近世遺構 SD10・11 の掘削。
 11・19 SD11～13 の掘削。SD12 の実測図作成。
 11・20 SD12 平面図作成。
 11・24 SD07・12・13 の掘削。SD12 完掘状況・SD10 土層断面 2 カ所・SD11 土層断面 2 カ所写真撮影。
 11・25 SD 写真前清掃。SD07・10・11 土層断面実測図作成。SD07・10・11・14 土層断面及び SD10・11 の完掘状況写真撮影。
 11・26 北側 1 層掘削及び写真前清掃。SD14 土層断面・平面図作成。SD07・10・14 完掘状況写真撮影。
 11・27 写真前清掃。SD13 土層断面①②の実測図作成。SD12 土層断面①②・防空壕・近世遺構断面状況写真撮影。
 11・30 2 層掘り下げ実施。SD12 土層断面の実測図作成及び調査区平面図作成。
 12・1 2 層掘削及び SK01・02 の土層断面図作成。SD12 の完掘状況写真撮影。
 12・2 遺構検出のための精査及び 2 層掘削。SD15 のトレチ掘り下げ実施。SD02 の土層断面写真撮影。
 12・3 国土交通省 3 名・村崎係長・長谷部参事来跡。写真前清掃及び古代遺構掘削・古代構造配置図（2 層）作成。古代（2 層）遺構検出状況写真撮影。
 12・4 国土交通省・成南建設との打ち合わせ（11 区の件）。古代 Pit 挖削及び写真前清掃実施。3-1 層繩文土器集中（F-3・4 グリッド）写真撮影。
 12・7 成南建設・国土交通省来跡（光ケーブルの確認）。調査区南側トレチ掘り及び搅乱掘りを実施。SP01～48 土層断面実測図。SP01～56 土層断面写真撮影。
 12・8 SP57～62, Pit 完掘及び SK05～10 の半堀。SK04・10 の土層断面実測。
 12・9 写真前清掃を実施したが、雨が降ったため中止。
 12・10 雨天のため現場休止。
 12・11 雨天のため現場休止。土層注記及び SK05～09 の実測図作成。SK01～03 の完掘写真撮影。
 12・14 装飾古墳館学芸課長坂口氏来跡。SK 類を掘削しながらの清掃。
 12・15 3 層掘削。2 層（古代）平面図作成。2 層（古代）完掘状況写真撮影 2 カット。
 12・16 3 層以降検出のための清掃。SD13 周辺の平面図作成。SK05～07・09・11 の完掘状況写真撮影。3 層（縄文）遺構検出状況 2 カット写真撮影。
- 【2011】**
- （11 区・12 区）
- 5・9 村崎係長来跡。作業員 31 名で作業開始。環境整備（草刈）。
- 5・10 雨天のため現場休止。
- 5・11 係会議のため現場休止。
- 5・12 雨天のため現場休止。
- 5・13 初心者の作業員に向けての作業を指導。
- 5・16 11 区の環境整備及び表土剥ぎ。北側に集石遺構を 10 基検出。
- 5・17 11 区環境整備及び表土剥ぎ。
- 5・18 11 区環境整備及び表土剥ぎ。その後清掃し、搅乱掘りを実施。
- 5・19 12 区表土剥ぎ及び搅乱掘り。その後環境整備。11 区は搅乱掘り。
- 5・20 12 区環境整備及び 1 層掘削。
- 5・23 雨天のため現場休止。
- 5・24 11 区集石遺構（建物基礎石）の検出を実施。12 区は搅乱状況とトレチ掘り。11・12 区は株式会社埋蔵文化財サポートシステムによる基準杭設置。12 区、K 1 平面図作成。
- 5・25 株式会社埋蔵文化財サポートシステムにメッシュ杭委託。11・12 区ともに集石遺構の検出及び搅乱掘り。12 区、K 1 断面図作成及び断面・完掘写真撮影。
- 5・26 雨天のため現場休止。
- 5・27 11 区、集石遺構の石出し及び写真前清掃。平面図作成（1/100）。集石遺構出土状況及び SB01～03・K 1～7 の写真撮影。12 区 1 層包含層掘削及び搅乱掘り。K 2 平面図及び調査区遺構略図作成。2 写真撮影。
- 5・30 11 区検出清掃。SB01・02 実測図作成。K 8～K12 の出土状況写真撮影。12 区清掃及び検出。1～2 層掘削。K 2 土層断面実測図作成及び写真撮影。
- 5・31 11 区 SB01・02、K 1～7 の掘削及び平面図作成。SB01・02 の土層断面写真撮影。12 区全体清掃・1 层掘削。調査区北側検出状況写真撮影。
- 6・1 国土交通省・文化課による協議。11 区石出し・搅乱掘り・写真前清掃。SB01・02 の完掘及び K 1～6 の半堀。K 1～4 の断面図作成及び SB01・02 の完掘状況、K 1～6 の土層断面写真撮影。12 区精查及びトレチ掘り。
- 6・2 11 区 K 3～6 及び SB03（K 1・2）の掘削。南西搅乱・トレチ掘り。K 4～6 及び SB03（K 1・2）の土層断面図作成。K13～30 出土状況写真撮影。12 区 SI01・02、トレチ掘り。SK01～04 の土層断面実測図作成及び土層断面写真撮影。
- 6・3 12 区 SI01・SD01、トレチ掘り、SK01～04 完掘。SK01～04 土層断面実測図作成及び断面・完掘写真撮影。
- 6・6 11 区 K 8～12 挖削。12 区 SI01・SD01 挖削及び土層断面図作成。SI01・SD01 断面写真。
- 6・7 雨天ため現場休止。
- 6・8 村崎係長・長谷部参事来跡。11 区集石遺構の石出し及び K13～31 の掘削。SD03 の掘り下げ。K 類の土層断面・完掘写真撮影。SD01・防空壕完掘状況写真撮影。12 区 SI03 のトレチ掘り。
- 6・9 11 区集石遺構の半堀・完掘。北側 1 层掘削。SD03 挖削。集石遺構断面・完掘図作成。K 類の土層断面・完掘状況写真撮影。
- 6・10 雨天のため現場休止。
- 6・13 大雨による調査区の環境整備。12 区 SI01 実測図作成。
- 6・14 11 区 0～1 層掘削及び SD03 の完掘。12 区 SD01・SI02 挖削。包含層（F-6 グリッド）3-1 層掘削及び SI01 完掘写真撮影。
- 6・15 作業員は雨天のため現場休止。11 区 SD03 の実測

- 図作成。
- 6・16 雨天のため現場休止。
- 6・17 11・12区写真前清掃。11区包含層掘削。1/200遺構配置図作成及びSD03 完掘状況写真撮影。12区 SI02, SD01・02 土層断面図作成及びSD01 の完掘写真再撮。
- 6・20～6・21 雨天のため現場休止。
- 6・22 11区0～1層包含層掘り下げ及びSD04 トレチ振り。12区清掃及びSD02 の掘削。SI02 土層断面及びNP-SP 土層断面実測。SI02 土層断面写真撮影。
- 6・23 11区0層～1層包含層及びSD04 掘削。12区 SD02 掘削及び3・1層包含層掘削。
- 6・24 11区0層～1層包含層及びSD03・04 土層清掃。SD03 土層断面写真撮影。12区調査区壁の断面清掃。
- 6・27 雨天のため現場休止。
- 6・28 11区SD04・5～6層掘削SDトレチ振り。SD03・04 土層断面実測図。12区SD02 精查及び使用面1検出状況写真撮影。
- 6・29 11区SD04・7層掘削及びトレチ振り。12区 SK01～03, SD02 の掘削。
- 6・30 11区SD04 掘削。12区SK05・06 土層断面作成及び写真撮影。
- 7・1 雨天のため現場休止。
- 7・4 12区SD02, SK07 及び包含層掘削。SD04, SK07 土層断面及びSD02 使用面2の実測図作成。SK05 完掘及びSK07 土層断面写真撮影。
- 7・5 11区SD04 掘削及び土層断面写真撮影。12区 SD02 掘削及び全体清掃。SD02 使用面2検出状況写真撮影。
- 7・6～7・7 雨天のため現場休止。
- 7・8 11区SD04 掘削(14～16層)、SD04 ベルト掘削。12区 SK08～18の半裁。SK08・09・13・15 土層断面図作成。SK08～18 土層断面及びSD02 完掘・SK06 完掘状況写真撮影。
- 7・11 装飾古墳館学芸課長坂口氏・文化課亀田主任学芸員来訪。
- 11区SD04 ベルト外し、調査区中央1層掘削。12区 SK08・09・13・14・15 完掘。SK11・12・14・16・17・19 土層断面図作成。SK20 土層断面及びSK08・09・13・14・15 完掘状況写真撮影。
- 7・12 11区清掃終了。12区SK11・12・16・17・19 完掘及びSI03 掘削。SK18 土層断面実測図作成。SK11・12・16・17・19 完掘状況及びSK18 土層断面写真撮影。
- 7・13 11区全体清掃及び北側遺構検出。SD04 使用面1 完掘状況写真撮影。
- 7・20 11区SD04・SD05、SI01 の掘削及びSD04 燃土炭検出状況写真撮影。12区SK21～24 半裁・土層断面図作成。SK21～24 土層断面及び調査区東側土層断面①～⑤写真撮影。
- 7・21 11区包含層1層掘り下げ及びSK 半裁。SK01 遺物出土状況・SD04 平面図及びSD05 割付け図作成。SI01 遺物出土状況写真撮影。12区SK20・SK25～42 半裁・Pit類半裁。
- 7・22 11区土坑の土層注記・断面図終了後掘削。SD05 完
- 掘状況・土坑土層断面写真撮影。12区SK20・SK25～42 完掘。包含層(3・1層)掘削。SK38～42 土層断面図作成・1/20 割付図。SK20・SK25～42 土層断面及び完掘・SP05～07 土層断面写真撮影。
- 7・25 11区SK18・19及びSD07・08 完掘。SI02 完掘。SK01～19, SD06・08 完掘。SK18～20 土層断面及びSD07・08 土層断面写真撮影。12区3・1層包含層掘削及びSK43～45 半裁。SK43～45 土層断面写真撮影。
- 7・26 11区SK20～25 完掘及びSI01 のPit 完掘。SK20～25 土層断面図作成。SK21～25 土層断面写真撮影。
- 7・27 11区SK26～30 完掘。SK26～31 土層断面、SK26～31 完掘平面図・調査区複数割付け図作成。SK26～31 土層断面写真・SI01 完掘状況写真撮影。12区写真前全体清掃。
- 7・28 11区空撮のため全体清掃。SD07・08 平面図作成。調査道具の整理・運搬。

調査日誌（4～7区）

【2010】

(5C区)

- 6・14 表土剥ぎ実施。作業員（19名）開始のため作業内容の確認及び切り・清掃を実施。機材等の搬入実施。
- 6・15 雨天のため現場休止。
- 6・16 トレーナー掘り及びSB01、K1・2の検出。SB01、K1・2の実測図。表土除去状況及びSB01、K1・2出土状況写真撮影。トレーナーが深い為、安全面から二段掘りを実施。
- 6・17 村崎係長・長谷部参事来跡。トレーナー掘り及び清掃。調査区全体が流路層などの構の中なかを確認した。層の変化が見られるところまで重機を入れることを確認。
- 6・18 雨天のため現場休止。
- 6・21 SB01、K1・2の半裁及び土層断面実測。SB01、K1・2断面写真撮影。
- 6・22 SB01、K1・2の土層断面図作成及び調査区の遺構配置図（1/50）を作成。近世の完掘状況写真撮影。
- 6・23 雨天のため現場休止。
- 6・24 重機による掘り下げ。6区からの大溝（近世）が調査区を南北に横断している。
- 6・25・6・28～6・30は雨天のため現場休止。
- 7・1 検出前清掃及び調査区掘り下げ。トレーナー1土層断面図及び配置図作成。検出状況写真撮影。
- 7・2 近世の溝掘削。1m程掘り下げたが底の部分は検出できず。
- 7・5 雨天のため現場休止。
- 7・6 SD01の掘り下げ。南側の溝の立ち上がりは確認できるが、溝の中心部から北側の立ち上がりは調査区外になると考えられる。深くなるため危険である。
- 7・7 SD01土層断面図作成。
- 7・8 村崎係長・長谷部参事来跡。写真前清掃実施。SD01土層断面図作成及び断面写真撮影。
- 7・9 掘り下げ及びSD01の立ち上がりの上端の検出を実施。
- 7・12～7・15 雨天のため現場休止。
- 7・16 別の調査区の搅乱取りを実施。
- 7・20 完掘状況写真前清掃を実施。朝から猛暑である。連日の雨で、溝に水がたまつていて写真撮影の時間をすらす。
- 7・21 SD01の平面図作成。梅雨明けで朝から暑い為体調管理に注意する。

【2011】

(7B区)

- 1・17 表土剥ぎ1日目。
- 1・18 表土剥ぎ2日目。7A区から続く溝が銀杏の根回しなどから判別できない。川側で一度削平を受けていたため、溝の残りは検出できない状況である。
- 1・19 重機の都合で、調査区が半分表土を剥いた状態で壁切りなどの環境整備を行った。包含層3層の残りが悪く、遺構はほぼ壊されている状態である。川側は盛土で深くなっている。調査区中央に石垣が2列あり川側に傾斜している。石垣の下から瓦が出てくることから古い石垣ではないと判断。

1・20 表土剥ぎ3日目。大甲橋側が深くなっている。

1・21 表土剥ぎ4日目。排土の成形を実施。

1・25 環境整備及びトレーナー掘りを実施。調査区南側にトレーナーを入れてどのくらいの盛土があるかを確認した。地表面から3mあり、何處か整地してある様子である。

また、砂層が入っていることから、白川の氾濫による洪水層である。

1・26 大甲橋に沿ってトレーナーを入れているが、なかなか地山が出てこない。北側にも整地層を見るためのトレーナーを入れる。

1・27 トレーナー掘りの続き及び1層粘土剤。株式会社埋蔵文化財サポートシステムによるメッシュ杭設置。

1・28 調査区中央にトレーナー4を入れる。南側のトレーナー1より浅いところで黒砂が出てきた。造成を受けている所が橋側で深くなっている。

1・31 調査区土層断面写真を近景と遠景の2カット撮影。トレーナー1は地表面から約6mの深さがあり危険なため、掘り下げを止める。

2・1 調査区中央の石垣使用状況1の写真撮影を実施。

2・2 トレーナー1と石垣との間の客土の掘削。時代が混入した遺物の出土が目立つ。石垣01の断面図作成。

2・3 昨日に続き客土の掘り下げを実施。石垣は株式会社埋蔵文化財サポートシステムが実測。石垣01使用状況2写真撮影。

2・4 中央石垣につながる2段の石垣を検出。昨日に続き株式会社埋蔵文化財サポートシステムが石垣の実測図作成。

2・7 石垣02が北側に延びているが、搅乱によって壊されている。北側の石段とは高低差があるため、時期がずれている。崩れた石を取り除いて、実測図作成及び写真撮影。

2・8 石垣03を検出。石垣03の実測中に敷石を検出した。石垣02の平面図作成。

2・9 客土の掘り下げ実施。石垣02土層断面図及び平面図作成。石垣04は弧を描くような階段状になっている。

2・10 朝から全面清掃し写真撮影の準備を実施。昼寝には撮影終了。石垣02・04の立面、平面図作成。

2・15 全体清掃及び石垣04の実測図作成。石垣02断面写真及び石垣04検出状況写真撮影。

2・16 調査区の完掘に向けて、遺構の確認や調査区全体の整備を行った。

2・17 雨天のため現場休止。

2・18 写真前清掃及び空撮（株式会社九州航空）。

(4D区)

2・18 表土剥ぎ開始。遺構の残存は分からぬが、基本土層の残りは比較的良好である。一部搅乱が見られる。株式会社埋蔵文化財サポートシステムに基準杭設置を委託。

2・21 環境整備及び搅乱取りを実施。乾燥がはげしい。搅乱の範囲が広く、遺構検出は難しい。昨日に続きメッシュ杭の設置を実施。

2・22 朝から搅乱除去及び1層粘土剤を実施。搅乱に壊れ生きている所が飛び地のようになる。搅乱の壁にPit遺構を検出。

- 3・1 雨天のため現場休止。
- 3・2 調査区の清掃後、擾乱除去。近現代の建物跡の基礎石・栗石地業（K 1～6）を検出及び清掃。
- 3・3 SDO1 トレチ 2・3 の掘削及び写真前清掃を実施。集石（基礎石）K 1～8 の実測。集石検出状況及び側面 K 1・2 の写真撮影。
- 3・4 SDO1 の掘削・落ち込み部分及びトレチ 4 の掘り下げを実施。K 1 の半裁。集石 K 1～8 の実測及び K 1 の土層断面写真撮影。
- 3・7 SDO1・落ち込み部分の掘り下げ実施。落ち込み部分に見られる幅約 50cm の硬化した部分は道路として利用していた可能性が高い。K 2～8 の平面図作成。
- 3・8 SDO1 の掘削。集石の断面図作成及び写真撮影。
- 3・9 SDO1 の使用面 1 の実測図及び平面図（削付）を作成。集石 K 7・8 の断面図作成。
- 3・10 集石 K 6・8 の断面図作成。
- 3・11 SDO1 の掘削及び写真前清掃を実施。調査区平面図作成及び SDO1 の実測。集石遺構完掘状況写真撮影及び集石 K 1～8 の側面完掘写真撮影。
- 3・14 調査区写真前清掃及び SDO1 覆土 2 の掘削。SDO1 の使用面 1 の写真撮影（中版）。
- 3・15 SDO1 の掘削。調査区平面図作成及びレベル入れを実施。SDO1 の土層断面図作成、土層断面写真撮影。
- 3・16 SDO1 のベルトははずし、レベル実測。
- 3・17 調査区完掘状況写真撮影前清掃及び集石、SDO1 の完掘状況写真撮影。
- （4F 区）
- 8・1 表土剥ぎ 1 日目。
- 8・2 表土剥ぎ 2 日目。作業員は壁切り等の環境整備を実施。
- 8・3 表土剥ぎ 3 日目。作業員は擾乱掘りを実施。
- 8・4 表土剥ぎ 4 日目。作業員は擾乱掘りを実施。
- 8・5 表土剥ぎ 5 日目。作業員は擾乱掘りを実施。
- 8・8 作業員は環境整備及び擾乱掘り実施。株式会社埋蔵文化財サポートシステムによる基準杭設置及び調査区外周平面図作成。
- 8・9 調査区内擾乱掘り実施。調査区グリッド杭設定。
- 8・10 摾乱掘削及び包含層掘削。栗石検出を実施。平面擾乱ラインの実測図作成。深い擾乱と平面に残る客土を掘削し終えたので包含層 1 層を掘削。南壁に栗石が 4 枚検出。
- 8・11 摶乱除去終了及び包含層 1 層掘削。2 層は削平を受けているため、あまり残っていない。
- 8・12～8・15 盆休み。
- 8・16 雨天のため現場にて図面整理。
- 8・17 調査区南側 1 層掘削及び川側の落ち込み部分の掘削。基礎石（栗石）K 1～4 平面図（1/10）を作成。
- 8・18 雨天のため現場休止。現場で図面・写真整理。
- 8・19 落ち込み部分（整地層）の掘削及び調査区の清掃。現地説明会の準備。
- 8・21 現場説明会実施。雨天のため体験発掘を中止し、勾玉作りと遺跡の紹介を実施。
- 8・22 雨天のため現場休止。
- 8・23 調査区の清掃。栗石検出及び完掘状況写真撮影（全体・個別）。包含層 1 層が残っている所や遺構などの検出を実施。包含層 1 層は掘削終了。
- 8・24 SDO1 掘削。SP 半裁。包含層 1 層の掘削し終えたところを清掃し、SK や SP、SD のラインを確定。
- 8・25 SDO1 及び SK の掘削。SK01～03 土層断面及び Pit の土色 A～C の写真撮影。SDO1 は 1 層掘削後に検出、土師器出土のため古代の溝であると判断。
- 8・26 SK 半裁及び写真前清掃。SDO1 掘削。SK01～08・SK10～12 の土層断面図作成。SK04～12 土層断面写真撮影。土師器や須恵器が出土していることから、古代（7～8c）の土坑であると考えられる。
- 8・29～8・30 別の区の清掃及び環境整備を実施。
- 8・31 SDO1 の平面図及び擾乱のライン実測。SK13 土層断面写真撮影。
- 9・1 調査区清掃及び SDO1 の完掘状況写真撮影。
- 9・2 SK の写真前清掃及び SK15～19 の半裁。SK01～13 完掘状況及び SK14 の土層断面写真撮影。
- 9・5 SK15～19 の土層断面写真撮影。
- 9・6 SK14～19 の掘削及び SK21（土壇を含む土坑）を掘削。SK14～19 の土層断面図作成。SK21 は長軸にベルトを設定し、トレチ掘削を行った。SK の掘り方を壁で確認した。
- 9・7 平面を少しずつ掘削。SK14～18 の完掘状況写真撮影。南側の SDO1 の続きにトレチを入れ断面を確認した。南側に向かって緩やかに上がっている様子。その下に SDO1 に切られるように SK22・23 を検出した。
- 9・8 SK21 掘削及びトレチ掘り下げ。SK14～19、SDO1・02、S101、SK20 の土層断面図作成。SDO2、SK19 の完掘状況及び S101 土層断面・SK21 遺物出土状況・焼土範囲検出状況の写真撮影実施。SK21 は埋土 2～3 層が自然堆積した後、焼土坑として使用されたものと考えられる。
- 9・9 SK22 の掘削及び SK22・23 の土層断面図作成。S101、SK20 の完掘状況写真撮影。3 層を掘削しているが古代の遺物片が出土しているので、2 層の残りがあると考えられる。
- 9・12 調査区包含層掘削。SK21 焼土範囲及び遺物出土状況・K 1～4 土層断面図作成。SK21 土層断面・SK22 完掘状況・K 4・8 土層断面写真撮影。SK21 は焼土坑と思われ、埋土 1 層内に焼土や土師器を含む。
- 9・13 調査区清掃後、少しずつ包含層を掘削。SK23 完掘。SK21 土層断面図作成及び SK23 完掘状況写真撮影。
- 9・14 調査区包含層掘り下げ後トレチ掘り実施。SK21 の掘削及び焼土範囲・遺物出土図追加。南側に調査区の土層を確認するためのトレチを入れた。
- 9・15 土層確認のため中央にトレチを入れる。整地層の落ちを清掃する。SK21 の完掘状況写真撮影。
- 9・16 雨天のため午後から作業中止。
- 9・20 雨天のため現場休止。写真や日誌の整理を行う。
- 9・21 調査区の写真撮影を行うため、朝から清掃を実施。SK21 完掘状況写真撮影（掘り直し）。

- 9・22 写真前清掃。高所作業車による調査区全体撮影。南北から2カットと北側・南側を1カットずつ撮影した。
- 9・26 繩文の遺構を探すために調査区全体の4層掘削。Pit平面・SK20・21・23平面図、SI01平面図作成。調査区土層断面図作成。
- 9・27 トレンチ掘削。SK21の周辺を3・2層まで掘削したところで繩文土器片を検出。ただ遺構は検出できていない。
- (6C区)
- 8・24 表土剥ぎ開始。
- 8・25 表土剥ぎ2日目。環境整備及び土嚢作り。
- 8・26 表土剥ぎ3日目。環境整備及び清掃。排土置場への運搬に時間がかかり、表土剥ぎに時間をとられる。矢板に沿って土を取る。
- 8・29 表土剥ぎ4日目。排土置場の成形とシートかけを実施。
- 8・30 近現代の栗石が出てきたところで表土剥ぎを止める。古代の遺構があるため、深さ確認のトレンチを入れる必要がある。調査区北側に東西方向のトレンチを入れ、約60～70cmの深さまで下げる。古代の面が出ないため、近現代の基礎石の調査が終了次第、再度重機を入れて掘り下げ予定である。
- 8・31 近現代の栗石検出及びトレンチ掘りを実施。
- 9・1 近現代の栗石検出及びトレンチ掘りを実施。K 1～7出土状況写真撮影。
- 9・2 トレンチ掘り及び壊乱掘り実施。
- 9・5 トレンチ掘り及び壊乱掘り実施。K 1～9の平面図作成。K 8・9の出土状況写真撮影。
- 9・6 朝から精査をかけた後、トレンチ掘りと壊乱掘りを実施。
- 9・7 トレンチ及び壊乱掘り。K 1～9の半裁及びK 8・9平面図(1/10)作成。
- 9・8 K 1～4の半裁及びK 2の土層断面写真撮影。
- 9・9 国交省との協議で調査区北側の部分は11月までに終了予定。調査区北側1層掘削。K 1～3土層断面図作成。
- 9・12 調査区北側1層掘削及びトレンチ掘り。明日、1層掘削部分の検出を行う。
- 9・13 トレンチの土層から溝を確認した。幅にすると約6mあるので何本か切り合いかがると考えられる。
- 9・14 K 5・6の平面図作成及びK 5～7の土層断面写真撮影。トレンチで確認した溝は2本あると考える。
- 9・15 K 5～7の土層断面図作成。
- 9・16 雨天のため、午後から作業休止。
- 9・20 雨天のため現場休止。写真整理・日誌整理。
- 9・27 環境整備及び壊乱掘削。
- 9・28 煙の畳を清掃し、検出状況を写真撮影する。
- 9・29 室内作業。
- 10・3 整地層の客土掘削。SI01のトレンチ掘削。
- 10・4 SI01の硬化面のない部分は、SKが切っていることがわかった。
- 10・5 雨天のため現場休止。
- 10・6 溝の向きに合わせて幅1mのベルトを設定し、ペルト以外の整地層と青灰色洪水層を掘削。
- 10・7 洪水層(青灰色)を掘削したので、清掃して溝のラインを検出。SI01 東西ベルト・南北ベルト写真撮影。
- 10・11 SK20・01 完掘・SDトレンチ掘削。SX01土層断面・SK01完掘状況・歎検出状況写真撮影。
- 10・12 歓2・SK20の掘削。写真前清掃。
- 10・13 SK02掘削及び土層断面図作成。
- 10・17 SK02土層断面・完掘状況写真撮影。
- 10・18 SD01の埋土1～3層掘削。SK03土層断面図作成及び写真撮影。
- 10・19 古代の整地層掘削。
- 10・20 SK04、SD01掘削。SK05・06トレンチ掘削。SK04土層断面図作成及び写真撮影。
- 10・21 両天により現場休止。
- 10・24 SD01、SK04・05の掘削。SK05・06の土層断面・SK04遺物出土状況写真撮影。
- 10・25 調査区清掃後にSD01の延長部を検出。そのため、土坑(SK07)の調査を実施。SK07はSD01より時代は新しい。
- 10・26 調査区北側の南北トレンチは複数のSKがかかっている。SK07掘削時に埋土1層目のレベルから約3cmの骨が出土した。
- 10・27 旧堤防掘削及びSD01掘削。SK06平面図・SK07・08・10・11の土層断面図作成。
- 11・1 古代整地層2の掘削及び全体清掃。SD01完掘状況写真撮影。
- 11・2 古代整地層2の掘削、SK08～10の完掘。
- 11・4 SK08・09・12の剖付図(1/20)作成。
- 11・8 調査区北側は樹木の移植が必要であり、国交省に早めに引き渡す予定。調査区北側の完掘写真を撮った。SD02はトレンチ2で確認した溝の最底部を、地表面から約4mで確認できた。
- 11・12 SD02の埋土1～5層の掘削を行った。埋土3層を掘削中に骨とその近くから甕が出土した。
- 11・14 歓1完掘写真撮影後、甕が重なり合って出土した部分に掘り込みラインが検出できたため、SD02の掘削を中断し、SK13として検出写真を撮った。その後古代整地層2の掘り下げ作業を実施。
- 11・15 SK13はSD03の埋土として処理することになり、SK13は欠番とした。石垣の検出及び歓1の剖付図(1/20)を作成。
- 11・16 古代整地層2の掘削。
- 11・17 古代整地層2の掘削及び石垣1出土状況写真撮影。
- 11・21 古代整地層2の掘削・精査。
- 11・22、24 トレンチ5の掘り下げ及び石垣1(1/20)の実測図作成。
- 11・25 試掘トレンチを掘削。
- 12・1 トレンチ5の掘削。
- 12・2 SD03にトレンチ5を設定して土層確認中に人骨が出土した。掘り方は確認できなかった。骨3出土状況写真撮影。
- 12・5 SD02の埋土9層直下で頭がい骨が出土した。体の部分の骨が出土していないので土壤墓とは言えない。

- 12・6 SD03 の埋土 5 ~ 9 層掘削。トレーナー 5 の抜張。
 12・7 SD03 の埋土 10 層掘削及び人骨の検出を実施。
 12・8 現場休止。
 12・12 SK16 完掘・清掃及び SD04 掘削。SK16 土層断面図作成。ST04 ~ 06 出土状況写真撮影。
 12・13 SD03 の埋土 10 層掘削。ST03 ~ 06 の掘削及び完掘図作成。
 12・14 SD02・03 の埋土掘削。SK15 の掘削及び遺物出土状況写真撮影。
 12・15 SD02 の埋土 13 ~ 14 層掘削。SD03 の埋土 1 ~ 4 層掘削。SK15 の遺物出土状況写真撮影。
 12・16 SK15 のトレーナー掘削。SD02・03 の埋土掘削。SK15 の出土遺物点上げ。
 12・19 SK15・17 掘削及び SK15 の土層断面図作成。
 12・20 SK15・17 を掘削。SK17 の半裁を行ったが、人骨が出土したので土壤墓と判明。
 12・21 調査区全体清掃。SD02 の削付図及び SD03 の土層断面図作成。桶の移動前の全景を写真撮影した。

(5D 区)

- 11・1 環境整備を実施。
 11・2 調査区の清掃及び擾乱の除去。北側に 4F 区からの溝の継ぎが検出された。
 11・4 摆乱除去及び防空壕を検出。
 11・8 摆乱除去及び防空壕の完掘状況写真撮影。南側と北側から撮影した。
 11・12 摆乱除去を実施。
 11・14 摆乱除去及び調査区清掃。遺構検出にからむ擾乱の除去は完了。近現代の井戸のそばに近世の溝や古代の溝を検出。遺構の重なりの可能性あり。
 11・15 摆乱・整地層掘削・擾乱の平面ラインを実測。
 11・16 比較的脛が残っている部分を南側から、グリッド A・B・C 領域に分けて調査を行った。グリッド B 区には樹木の影が映るため、写真撮影には時間を考えないといけない。
 摆乱ライン・整地層の落ちライン・調査区下端ラインの実測。
 11・17 SD01 ~ 03 を掘削。SI・SX (SK05) トレーナーを入れて確認する必要がある。SD04 と SK の切り合ひが見られるため、トレーナーを入れて確認する。SK → SI → SD の順に掘り下げていく。
 11・21 SI01 埋土 1 層掘削、SK02 完掘。SD03・04 土層、SK01・02 土層断面図作成及び写真撮影。SI01 には古代の SK が切り合っている。
 11・22 SK01・03 完掘図及び SI01 土層断面図作成。SK01・03 完掘状況及び Pit サンプル (土層) A ~ D、SI01 使用面の硬化面範囲検出状況写真撮影。SI01 で Pit 3 基と硬化面を確認した。浅かったため本遺構に伴う Pit ではないと考える。
 11・24 SI01 完掘。SD04 埋土 1・2 層掘削。SK04 土層断面図作成。SD03 完掘状況及び SK04 土層断面写真撮影。SD04 の井戸より西側を掘削しているが、埋土 2 層を掘り下げる段階で硬化面が広がっているので、面をそろえて硬化面を検出する。

- 11・25 試掘トレーナー掘削。
 11・28 SK04 完掘。SD04 (1・2 層) 掘削。SK07 半裁、SK01 埋土 1 層掘削。SK04 完掘状況写真撮影。SK01 は平面と断面を確認したところ、燃焼部とカマドと思われる個所が見られず、土坑 (SK05) として検討している。(後に、SK05 に変更。以下、SK05 と表記。)
 11・29 SD04 埋土 1 ~ 3 層掘削。SK06 ~ 12、SD04・05 土層断面図作成。SK05 完掘平面図及び遺物出土状況実測図作成。SD04、SK05 土層断面写真撮影。SK05 の埋土 1 層から完形の杯が 3 基出土した。
 11・30 SK06 ~ 11 完掘平面図作成。SD01 平面図及び SD04 上端ライン作成。SK06 ~ 11 土層断面及び完掘状況写真撮影。SK08 と SK09 は切り合っているため、SK08 を先に完掘した。
 12・1 SD01・04 掘削、SI02 完掘を実施。SK09・13・14 の完掘。SD04 硬化面範囲・SI02 生活面・完掘平面実測図作成。SD04 は埋土 4 層直上で硬化面の広がりが見られ、その当時道路状遺構として使用していたと考えられる。
 12・2 SD04 の完掘。全体清掃。SD01・04 完掘状況写真撮影。SD04 の硬化面を外し、残りの埋土を掘削して完掘終了。
 12・5 SK12・15・17・18 完掘及び SK17 ~ 21 半裁実施。SI03 トレーナー掘削。SK15 ~ 20 土層断面図作成。SI02、SK12 完掘状況及び SK17 ~ 20 土層断面写真撮影。SI03 の南側は硬化面が不自然になくなる場所がある。再検出した結果、土坑が切り合っていることが判明。
 12・6 SI03 埋土 1 層掘削。SK12 ~ 23・25 ~ 27 土層断面図作成。SK 土層断面・SI03 土層断面写真撮影。SI03 はベルト残して埋土 1 層を掘削した。SK23 の底よりやや浅いところに大きめの石が 2 つ出土した。
 12・7 SK 類の完掘及び SI03 埋土 1 層掘削。SK24 ~ 30 土層断面図作成。SK の写真撮影。SI03 は土層断面終了後にベルトを埋土 1 層だけ掘削して生活面上の硬化面範囲を検出した。住居内に須恵器片を含む PH を確認した。
 12・8 SI03 使用面・SK15・17 ~ 30 完掘平面図作成。SK33 を完掘し終えて、平面図を書き終えた。
 12・9 SI03、SK34・35、SD05 の掘削。SI03 内の Pit 3 棚出状況及び完掘状況、SK の土層断面及び完掘状況、SD05 の完掘状況写真撮影。SI03 の使用面で検出した須恵器片が出土した Pit は、単体で土層・完掘の処理を行った。立て直しの柱穴か補強のための柱穴の可能性が高い。
 12・12 SK36 ~ 39・41・42 の土層断面図作成。SK39 ~ 42 土層断面、SI04 土層断面、SI03 完掘状況写真撮影。SD01 の完掘底面に SI03 のものと思われる Pit を検出。
 12・13 SK 類の完掘状況の写真撮影を行った。SI03 の画面も終了し、SI03 に切られていた SI04 の完掘も終了した。
 12・14 SK44 ~ 46 土層断面図作成及び写真撮影。SK31 に切られている SK32、SK41 に切られている SK42 を完掘した。調査区土層断面用のトレーナーの掘削が終了し、土層ラインを引く。
 12・15 SK47 土層断面及び SP32 の土層断面図作成。SK47・48 の土層断面・完掘状況写真撮影。調査区土層断面

写真撮影。

- 12・16 遺構掘削が終了したので、確認のため包含層を2～3cm掘削した。繩文の遺構は確認できなかった。
- 12・19 調査区南側（グリッドA）には、Pitが集中している所があるため完掘状況の写真を撮った。調査区の壁を清掃し、調査区の写真撮影の準備を行った。
- 12・20 調査区の全体清掃を実施。
- 12・21 全体清掃を実施し、5D区の完掘状況を写真撮影終了。

【2012】

(6E区)

- 1・5 表土剥ぎ1日目。擾乱により多く壊されている。
- 1・6 表土剥ぎ2日目。
- 1・11 摆乱掘削。6C区から続いているSD02にトレンド1を設定して掘削。
- 1・12 摆乱掘削。トレンド1での土層断面写真を撮る。旧堤防及びSD02の理土が含まれる。上層の白土が旧堤防。
- その下2層が近世の整地層であり、その下にSD02の理土がある。
- 1・13 摆乱掘削。
- 1・17 調査区外周の実測図作成。
- 1・18 川側の擾乱を掘削終了後、清掃して旧堤防のラインを検出。トレンド1の土層断面実測図作成。
- 1・20 旧堤防の掘削終了。調査区中央の擾乱掘削。調査区北東の栗石地業（K1）の出土状況写真撮影。
- 1・23 トレンド1の土層断面を終了し、旧堤防のラインを実測した。
- 1・24 調査区西側整地層掘削及び擾乱掘削。K1半裁及び土層断面図作成。旧堤防の下あつた整地層を掘削中である。終了次第SD02を検出する。
- 1・25 整地層及びトレンド掘削。SD02は白川に沿って南北に流れると考えていたが、北側では白川に向いている。
- 1・26 白川側整地層掘削。SD02にトレンド2を掘削して土層確認。整地層がまだ約20cm残っている。トレンド2に残るSD02の理土は、理土4層目から下と考えられる。SD01（古代）を掘削。

1・27 SD01・02の掘削。SD01の土層断面図作成。

- 1・30 SD01は完掘底面に鉄分沈着による硬化が見られる。SD02は南側にトレンド3を設定し掘削。SDの理土1～3層を掘削した。

- 1・31 調査区南西の根回し部分に残っていたSD02の理土を掘削中に、骸骨を2点検出した。また、理土5層直上付近からSKを検出した。旧河川理土1・2層の掘削。

- 2・1 SK01の土層断面図を作成後に完掘。須恵器の杯蓋が出土した。SD02の一部を完掘した。

- 2・2 SD02の5層直上から骸骨2点出土。SD02の掘削実施。

2・3 SD01・02、旧河川の実測図作成。

- 2・6 調査区完掘状況写真撮影のための調査区清掃及び擾乱の残りを掘削。

- 2・7 調査区の壁が一部崩れていたため修復し、明日写真

をとる予定。

- 2・8 高所作業車による写真撮影を実施。

(5E区)

- 1・10 表土剥ぎ1日目。調査区南側で旧河川を検出。
- 1・11 表土剥ぎ2日目。調査区が狭いため2日で表土剥ぎが終了し、環境整備を行った。
- 1・12 環境整備。
- 1・17 摆乱掘削及び調査区外周実測。
- 1・20 旧河川の土層を確認するためトレンドを掘削。株式会社埋蔵文化財サポートシステムによるグリッド杭設打。
- 1・23 昨日に引き続きトレンド掘削。
- 1・24 旧河川のトレンド掘削は終了し、整地層と擾乱を掘削。
- 1・25 旧河川のトレンドを地山まで掘削するため、安全勾配を作り振り下げる。
- 1・26 旧河川のトレンドは深くなることが予想されるので、安全面を考えて現時点を取りやめた。
- 1・27 整地層（近世・近代）がまだ残っているため、掘削終了次第、精査して遺構を確認する予定。
- 1・30 調査区北側の擾乱を掘削中に土壤墓を検出。江戸～明治にかけての人骨と考えられる。
- 1・31 旧河川の埋土上でSK01を検出。半裁し、土層断面図作成及び写真撮影を実施。
- 2・1 摆乱の掘削終了。旧河川の土層断面図作成及び写真撮影実施。
- 2・2 旧河川が埋められた後に白川側を整地したと思われる理土を掘削。
- 2・3 旧河川の埋土上で検出したSK01の壺の出土状況と完掘の写真撮影が終了。SK01から出土した人骨の出土状況の写真撮影と見通し断面図作成が終了した。
- 2・6 ST01の人骨を取り上げた。理土は单層で座葬であると判断した。後日、人骨調査委託の松下氏に相談したら、下半身の骨が出土していないのはおかしいので、横に寝かせた土壤墓の可能性があるとのことであった。
- 2・8 全体清掃を行い、午後に調査区完掘状況写真を高所作業車にて撮影。

(7C区)

- 1・11 表土剥ぎ1日目。
- 1・12 表土剥ぎ2日目。
- 1・13 環境整備及び石垣掘削。7B区で検出された石垣の続きを検出。石垣の上には7B区と同じ客土が乗っていた。同時に埋められたものだと考える。
- 1・17 石垣の石出し及び中央に土層の傾斜を見るためのトレンド1を入れる。基準杭設置。
- 1・20 表土がとれていなかった部分の除去を実施。グリッド杭設置。
- 1・23 調査区外周実測図作成。
- 2・1 石垣検出。
- 2・2 石垣の検出状況を写真撮影するため、全体清掃を実施。

- 2・6 調査区南側から整地層（近世）の掘削を実施。
トレンチ2を拡張して掘り下げを行ふ。
- 2・7 トレンチ2の掘削中の底部に骨が1点出土。全体的に整地層（近世）を掘り下げていて、トレンチ1から北側は掘り終わり、南側は掘削中である。
- 2・8 清掃しながら整地層の残りを掘削した。
- 2・16 3日間の雨の後だったので、調査区を清掃しトレンチ1の掘り下げ及び整地層（近世）の南側を掘削した。
- 2・17 トレンチ1はトレンチ2との合流地点で深くなっている。安全面を考えて底まで掘れない状況である。整地層下げを実施しているが、北側と南側では近世の残りに違いがあり注意が必要。
- 2・20 宮崎参事来跡。整地層下げの続きを実施。畠の歴史及びSTO1の検出状況写真撮影。
- 2・21 敵出しの続きを実施。その後検出状況の写真前清掃を実施。敵のローム（固まった土）が北側では不規則なため、畠の一部が壊されている可能性がある。STO1の完掘及び出土状況写真撮影。
- 2・23 STO1の完掘状況及び敵完掘状況を写真撮影。写真撮影後に実測図の作成。
- 2・24 研修のため現場休止。
- 2・27 整地層（古代）敵の掘り下げを実施。NRO2（旧河川）覆土1（黄褐色土）の掘り下げを実施。
- 2・28 昨日の続きを実施。南側は清掃検出を試みたが遺構はなかった。北側は6C区からの続きをトレンチを土層確認のために拡張した。
- 2・29 NRO2の覆土1の掘り下げを実施。南側はまだ整地層（古代）が残っているため除去作業を実施。層ごとに下げては清掃確認の繰り返しである。
- 3・1～3・5 雨天のため現場休止。
- 3・6 全体清掃後にNRO2の覆土を確認し、その後2～4層を掘り下げた。土師器や須恵器の破片を含む大きな土器も出土している。
- 3・7 NRO2覆土5～7層の掘り下げを実施。雨のせいで滑りやすくなっているので注意が必要。遺物は7層（黒色土）に多く出土。
- 3・8 清掃して層の確認。6C区からの溝（SD04）の検出。NRO2の図面との兼ね合いから、立ち上がりを残してSDを掘る。
- 3・9 北側NRO2覆土6層の残りを掘削。SD04埋土1～4層掘削。SD05のトレンチ掘削を実施。
- 3・12 SD04・05の土層断面図及びトレンチ2南側土層断面図作成。溝とNRO2との切り合い関係を確認する。
- 3・13 SD04は北側が深くなりNRに流れ込んだと考えられる。NRO2南側は13層の掘削。北側は8・10層の掘削。
- 3・14 昨日に続き、SD04・05（6C区）の完掘に向けて作業実施。SD04・05は溝の底部に鉄分の沈着が見られた。完掘状況の写真撮影を実施。
- 3・15 NRの掘り下げを実施。特にNRは鉄分が多く硬い部分が厚く残っていたため、その部分を取り除いたら黒砂が出てきた。
- 3・16 NRO2の14層掘削及びNR掘削を実施。
- 3・19 現場機材の整理や洗浄を実施。
- 3・21 高所作業車による調査区の完掘状況写真撮影を実施。朝から写真前清掃を実施し、午後に写真を撮る。その後、調査区の整理を行う。
- （6C区 樹木移動後）
- 5・16 楠の立曳き部分の土を除去する。やわらかいため崩れる部分が出てくる。
- 5・17 昨日に引き続き重機による掘削。楠の根回しの下から人骨らしきものを検出した。
- 5・18 現地表から約3mの深さになることから、排土置き場が足りないため国土交通省に連絡。
- 5・21 村崎係長・福津文化財保護主事・佐藤文化財保護主事ら来跡。今日から、作業開始。
- 5・22 墓壁切り、トレンチ跡の掘削を実施。気温が30度近くになり体温管理が必要である。
- 5・23 白川に沿ってトレンチ10を掘る。安全勾配を設定しながら掘り下げる。10層から土器が検出される。特にSD03の両サイドから土器が多くなっている。
- 5・24 トレンチ10の掘り下げを実施。土層を確認しSD03とSD02の切り合いを考慮する。SD03が切り通しで存在した後に埋まつていて、SD02とSD03が同じレベルで墓地として利用される時期があったのではないかと考える。
- 5・25 雨天により現場休止。
- 5・28 SD02は近世の整地層を掘削し、埋土7・9層を掘削。埋土10層（極端褐色土）直上でST検出面なので、この面で掘削を止める。SD03は6・7層（にぶい黄褐色・褐色）直上の面が出ているが、一部残っている埋土3～5層を掘削した。
- 5・29 SD03の埋土6層（にぶい黄褐色）と7層（褐色）を順に掘削。この層を剥いた面から土壤草が出てくる可能性が高い。
- 5・30 SD02の10層直上にSD03の7層が乗っていたので掘削した。SD02とSD03は同じ時期に自然堆積し、SD03の9層直上とSD02の10層直上で墓地として使用され、その後褐色土が堆積したと思われる。
- 5・31 全体清掃をかけて検出を試みたが、土壤草は検出されなかつた。SD03の8層を少しずつ掘削。
- 6・1 現場休止。
- 6・5 雨天のため現場休止。
- 6・6 村崎係長・亀田参事来跡。
- 6・7 SD03の8層掘削。ベルトコンベアの設置。
- 6・8 雨天のため現場休止。
- 6・11 連日の雨で排水が滞っていたため、調査区の復元に時間がかかった。
- 6・12 雨天のため現場休止。
- 6・13 環境整備及び整地層掘削。整地層を完掘するかは後で判断する。
- 6・14 南側にある整地層（近世・現代）の深さを調べるために、トレンチ10を南側に拡張した。SD03は整地層により削られてはいたが、溝の立ち上がりは残存していた。トレンチ掘削はやめて、整地層掘削に取り掛かった。

- 6・15 雨天のため現場休止。
- 6・18 雨天のため現場休止。
- 6・19 現場休止。台風4号最接近の予定。
- 6・20 台風5号の養生のため環境整備。水の流れを良くするための溝を掘り、排土のブルーシートに土壌を裁せたりした。
- 6・21 台風5号上陸により大雨で現場休止。
- 6・22 台風や大雨で現場内に泥などが多く残っていたため、除去作業を実施。
- 6・25 調査区内の水抜きを実施。
- 6・26 北側の排土の崩れ部分を整備。
- 6・27 雨天のため現場休止。
- 6・28 水中ポンプによる水くみ上げ実施。
- 6・29 ~ 7・2 雨天のため現場休止。
- 7・3 ~ 7・11 調査区内の水が抜けるまで現場休止。
- 7・12 朝から豪雨。記録的な雨が降り続いている。白川が氾濫する危険が生じたため、現場事務所から機材等を車に乗せて資料室に避難した。その後、昼前にかけて白川水域に避難勧告が出された。(九州北部豪雨)
- 7・26 調査区は洪水により現状復旧するのに時間がかかるため、乾燥するまで時間をおいた。洪水層の深さを測るためにトレンチを入れる。白川側の壁やSD03の深いところで約75cmを確認。重機で下げられるように目安を付けた。
- 7・27 現状復興、洪水層除去及び周辺清掃。
- 7・28 重機を入れ洪水層を除去。南側半分を除去し終わる。
- 7・31 重機2日目。南側は人力で洪水層を除去した。
- 8・1 重機3日目。洪水層の除去を終了した。トレンチ掘り及び清掃。
- 8・2 既存のトレンチの分層ができるまでになった。次からはSD03の8層と近世の整地層(南側)を下げる。SD03とSD02の使用面で実測する必要がある。
- 8・3 整地層(近現代)掘削。SD03 埋土8層掘削。SD02とSD03の切り合い関係を確認するためトレンチ10の拡張を実施。
- 8・6 SD03の埋土8層及び整地層掘削。トレンチ10拡張。
- 8・7 SD02・03の使用面の写真を撮るために清掃を実施。SD03がSD02を切っていることを確認。SD02・03をそれぞれ使用面として写真を撮る。
- 8・8 SD03 埋土9層掘削。ST07・08 半段及び完掘。SD02・03 使用面1の下端及びレベル実測。SD03の埋土9層は中央になれば厚くなるため、2度にわたって掘削を実施。遺物は側面から費の破片が多く出土した。
- 8・9 雨天のため現場休止。
- 8・10 SD03の使用面2を清掃及び写真撮影。SD03の埋土10層を掘削。
- 8・17 SD03の埋土10層を掘削。骨の取り上げ、No.24~30。
- 8・18 現場公開。体験発掘や勾玉作りを実施。子ども5名を含む24名が参加。午後からSD03の埋土16層掘削。
- 8・20 SD03 埋土16・17層掘削。骨の取り上げ、No.32~34。
- 8・21 雨天のため現場休止。
- 8・22 SD03 埋土16~18層の掘削。SD03の南側の立ち上がり部分に9'層が残っているため掘り上げる。
- 8・23 南側立ち上がりの埋土がSD03のどの層と同じになるのかをトレンチを入れて確認する必要がある。黒く炭化した土がしみ込んだ所まで洪水層の一部として除去するのが望ましいと判断。
- 8・24 SD03の立ち上がり部分の埋土は7'層、9'層と新たな埋土を決めて除去を始めた。9'層には灰や須恵器がかなり多く出土する。土坑の可能性も考えたが9'層が7'層の下に入り込んでいるため、上部のSK15の流れ込みと考えられる。
- 8・25 SD03の掘り下げ。
- 9・3 トレンチを広げて50cm下のところに硬い土層があった。この硬い土層は黒砂の層(地山)の下に入っている。この硬い層は地山である。
- 9・4 SD03の埋土19層の溝中央をとり、埋土21層直上を出している。南側に埋土20層が堆積しており、埋土21層が堆積した後に崩れて堆積したものである。
- 9・5 SD03の埋土20層を掘削。
- 9・6 SD03の南側立ち上がりの埋土20層と北側立ち上がりの埋土19層を掘削中に人骨が出土。今後の進め方を検討する。
- 9・7 SD03の埋土22層内から石が多数出土。6A区からの続きの道路状構と思われる。獸骨(馬)も多く出土。
- 9・10 ST09・10の骨出し。SD03の底部の石出しの続きを実施。ST09~11の検出状況写真撮影。人骨については明日、人骨調査委託をした松下氏が来られる予定。
- 9・11 人骨調査委託の松下氏、他来跡。人骨の取り上げを実施。SD03の両サイド立ち上がりに2体(北側)と1体(南側)を取り上げた。3体とも男性であるとのこと。SD03の敷石出し及びSD02の10~12層掘削。
- 9・12 SD03の敷石検出及びSD02埋土12層掘削。SK18遺物出土状況及びST09・10の完掘状況写真撮影。SD03土層断面図作成。
- 9・13 SD03敷石出土状況写真撮影のための清掃実施。北側の立ち上がりの掘削を実施。SD03敷石平面及びSK18遺物出土状況実測。
- 9・14 圖面作成のため作業員休み。昨日に続きSD03の敷石平面図を作成。
- 9・18 SD03敷石平面図作成。
- 9・19 SD03敷石外し及び南側掘削。敷石の間の土器や獸骨はナンバリングして取り上げた。獸骨については、部位の分かるものを中心に取り上げた。
- 9・20 SK19出土状況図及びSD02土層断面図作成。SK19には獸骨と見られる骨とともに土器も含まれていた。
- 9・21 SK19の出土状況写真撮影後に取り上げを行った。SD02も完掘の予定である。
- 9・24 SD03の南側の立ち上がり部分(埋土20'・21'層)を掘削。その後清掃し、SD03の完掘写真撮影。SD02は北側の上端を残していた場所を掘削中のでもう少しで完掘である。

9・25 SD02 の完掘状況写真撮影及び調査区全体の写真撮影の準備を行う。

9・26 SK18 振削及び土層断面図作成。高所作業車による調査区完掘状況を撮影。中版を 3 カット撮った。

【K（栗石）表記の遺構の取り扱いについて】

調査時において、K として表記される近現代期の建物跡の基礎としての栗石については、近現代の遺構であると確認されたため、調査は実施したが調査報告書の段階では省略し報告している。近現代の遺構については、文化庁の調査指針に示すとおり、「地域にとって大事なもの」という評価のなかで、今回の栗石からなる建物基礎群はその対象からは外れると判断した。よって、表土剥ぎ直後から確認されてきた K（栗石）は報告時点ですべて省略した。

（長谷部）

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

本遺跡は熊本市のほぼ中央部、白川の左岸に位置する。標高は14mから16mの白川に隣接する。北側に立田山が位置し、本遺跡の所在する位置より約10km下流で有明海に注ぎ込む白川河口となる。当該地域では、白川の流れも緩やかになり、下流域は河川改修前も含め川幅も広くなる。

熊本市域は市の北東部の丘陵地と南西部に広がる標高200m以下の沖積地により形成され、北側には安山岩質溶岩を主とする金峰山、これに連なる立田山等が所在する。市域東側には阿蘇外輪山火山群によって形成された低丘陵地が広がるとともに、北部、東部域には阿蘇の火碎流噴出物[※]を起源とする溶結凝灰岩台地が形成され、その後の自然の作用により削り出された河岸段丘が発達する。

この火碎流堆積物は九州北部域の大半を覆っており、福岡県、佐賀県の一部にまで達する。県内では熊本市を中心とする北部域に位置する菊池台地、植木台地、託麻台地及び熊本平野にも厚く堆積し、本堆積層中には大量の地下水を包含することから、熊本市域においては豊富な地下水の恩恵を受けている。

遺跡の西側を貫流する白川は、標高1,500m付近を起源とする阿蘇カルデラ内に水源を有し、南阿蘇村立野付近でカルデラから平野に向かって流入しながら、大津町で深い谷を形成する。その後、熊本市で凝灰岩台地を蛇行し、当該遺跡の所在する下流域から緩やかな流れを見せる全長74kmの1級河川である。

この川は古くから「暴れ川」として知られ、戦後から現在まで熊本市域が被害を受ける等した氾濫を8度繰り返し、最も近い時期においては、平成24年7月の九州北部豪雨（激甚災害指定）によって、甚大な被害を受けている。

[※]火碎流台地周辺域は、約9万年前の阿蘇山塊におけるカルデラ噴火による火碎流噴出物（ASO-1～4火碎流堆積物）とされる。

第2節 周辺遺跡と歴史的環境

【旧石器時代】 熊本市域における同時代の遺跡は龍田陳内遺跡、新南部遺跡群及び石の本遺跡から定住を示す遺物等が出土している。なかでも石の本遺跡からは、約3万4,000年前を示す層から石器が出土するなど、今後も同時代の遺跡の発見が期待される地域もある。

【縄文時代】 新屋敷遺跡、大江遺跡群、黒髪町遺跡群、カブト山遺跡、大江白川遺跡、新屋敷遺跡第39次（熊本市）等からは縄文早期を示す押型文及び撲糸文を施す土器が出土しており、縄文時代において早い時期から丘陵地と連続しない平野部への進出が始まっていたことが窺える。

その後も、新南部遺跡群、大江遺跡群等からは縄文時代前期から中期の土器である轟、曾畷、阿高式の各土器が、国分寺跡からも曾畷、並木、船元式の各時期の前期から中期土器が出土し、新屋敷遺跡第15次（熊本市）で後期の辛川式土器が、新屋敷遺跡42次で縄文後期から晩期後半に至る時期の北久根山、太郎迫、古閑式土器が出土している。また、大江白川遺跡群7次で三万田、天城式の縄文時代後期後半の時期の土器が出土するなど、長期間平野中央部における縄文人の活動の痕跡を追うことができる。

【弥生時代】 この時期の遺跡は熊本平野における調査歴は長く、これまで多くの遺跡が知られている。その中で近年、江津湖周辺の開発に伴い、前期遺跡の発掘調査事例が熊本市教育委員会において多く実施されている。江津湖遺跡群第9次では、縄文晚期から弥生前期の堅穴建物、墓壙等が確認されるなど新たな資料が提示されている。新屋敷遺跡でも弥生時代前期の濠と見られるものが遺跡北側の地域で検出されるなど、前期資料の調査事例が増えている。中期以降の遺跡については調査、報告の事例が多くここに記すには膨大となるため割愛させていただく。

【古墳時代】 この時期の遺跡はこれまで報告してきた熊本市中心部域での事例は少なくなる。江津湖に近い水源地遺跡からは古墳前期とみられる円形、方形周溝墓が検出されており、前時代からの連続性を示しながらも、その広がりは見られなくなる。立田山周辺において墳墓の事例としてつづじヶ穴横穴墓群（熊本市）等が、集落の事例として新南部遺跡群3（熊本県）で後期の堅穴建物群が確認されている。調査の一例ではあるが、この時期の遺跡は平野周辺部の丘陵縁辺部において増加していることが窺える。

【古代】 肥後國においても、大和朝廷内における大化の改新以後、13の郡が設置され、それぞれに郡衙・郡寺を中心とする支配体制が確立していくこととなる。熊本市域においては、託麻郡、飽託郡の2つが置かれたことが知られている。現在までの調査で、託麻郡衙が大江遺跡群内の渡鹿A遺跡を中心とする地域、託麻郡衙が渡鹿B遺跡周辺に置かれていたことが調査事例の増加により推定されている。また、当時の国道とも言える西海道が大江遺跡群のほぼ中央を南北に縱断し、その周辺に出水国府（託麻）、国分寺・国分尼寺が配置されていることも知られている。

当該地域では9世紀以降、遺跡規模が縮小していくことが調査事例から知られている。その大きな要因の一つが、託麻国府から飽田国府（現在の新熊本駅周辺）への国府の移動であることが想定される。

【中世以降】 中世以降の集落等については、本地域が近世以降急速な都市化を図ったことから後世の開発で失われている部分が多く、詳細は市域中心部においてはよく分かっていない。断片的な資料は増加しているが地域の歴史を語るまでは至らない。

近世になり、熊本城を中心とする町作りが始まり、当該遺跡周辺は大江村の一部であったが、安政4年（1857）安巳橋が高田原から九品寺村に架橋された後、一帯は新たな城下町として発展していくこととなった。

第3章 調査の方法

第1節 調査区・グリッドの設定

現在、白川に架かっている大甲橋から明午橋間で、国土交通省は「緑の区間」として河川改修工事を計画し施工した。それに伴い、発掘調査を委託された熊本県では、調査に着手した順に1区から7区の番号を割り振って国土交通省の要望に沿う形で調査を実施した。また、明午橋上流においても国土交通省が同事業を展開することとなったため、その地区を8区から12区として割り振り調査を実施した。

8・9・10区	平成21年5月～12月
11・12区	平成23年5月～ 7月
5C区	平成22年6月～ 7月
4D・4F・5D・6C・7B区	平成23年1月～12月
5E・6E・7C区	平成24年1月～ 9月

発掘調査に当たっては、8区から12区までの発掘調査が終了したのち、整理作業を開始した時点でグリッド標記を付け替え8区以降の調査に対応した。

ここで出土した遺物は、グリッド若しくは遺構毎に、各層位を付して取り上げている。



Fig. 1 新屋敷遺跡周辺遺跡地図 (1/25,000)

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	備考	
225	池田山伏塚遺跡群	池田町2丁目、清水町高平	弥生・古墳	古墳地	造石式右棺、珠文鏡、長須溝式右室		
228	水道遺跡群	清水町石越、水道	古墳・中世	古墳地			
230	池田町【池田小学校】	池田町1丁目	弥生～平安	古墳地	池田小学校裏寶相墓		
231	津瀬二ノ谷横穴群	清水町津瀬字浦迫	古墳	古墳	古基以上		
232	一ノ谷	清水町津瀬字中寺	古墳	古墳			
233	稗田横穴群	池田町稗田字浦迫	古墳	古墳	古基以上		
234	舟場	清水町舟瀬	縄文～中世	古墳地			
235	舟場古墳	清水町舟瀬字船場	古墳	古墳	円墳、右棺		
236	打越新村群	清水町打越	弥生～中世	古墳地			
237	打越古墳	清水町打越	縄文	貝塚	北久留山式		
238	京町1号道路群	京町	弥生～世帯	古墳地			
239	寺原横穴群	京町	古墳	古墳	多数の横穴		
240	京町2丁目遺跡	京町2丁目	縄文～近世	古墳地			
241	伝大通寺遺跡群	京町2丁目	縄文～近世	古墳地	伝大通寺跡を含む		
242	内坪町遺跡	内坪町	弥生	古墳地			
243	藤原御学校校庭	千葉城町	弥生～平安	古墳地	櫻柏群あり		
246	熊本城跡遺跡群	古城、京町、千葉城町	古墳～古世	古墳地			
247	熊本城跡	古城、京町、千葉城町	古世	城	国指定重要文化財・国指定特別史跡・加藤清正歿長12年		
250	船岡町遺跡	新町2丁目、菊池町	弥生	古墳地	櫻柏群		
253	辛島町遺跡	辛島町	弥生～古墳	古墳地			
254	古町【宝町人町】	唐人町、吉町ほか	弥生～明治	古墳地			
257	佐崎町遺跡群	清水町佐崎	弥生～平安	古墳地			
258	三間	清水町三間	縄文～中世	古墳地			
259	黒野町下立田遺跡群	黒野町	古墳～江戸	古墳地			
262	衆勝寺細川家魚池・庭園	黒野4丁目	江戸	寺社	細川家堂廟は国指定の史跡。今跡を含む庭園は県指定		
277	小崎	黒野町1崎	縄文～平安	古墳地			
278	黒駒町遺跡群	黒駒町坪井	縄文～中世	古墳地	一帯に櫻柏群		
280	子阿波跡	子阿波	縄文～中世	古墳地			
281	大丘白川遺跡	大丘1丁目	縄文～平安	古墳地	櫻柏		
283	新屋敷遺跡	新屋敷1～3丁目	縄文～近・現代	散布地	竪穴建物・井戸・礎・土坑・ピット 縄文土器(後・後期)・土師器・須恵器・棘突陶器 黒色土跡(縄文・古代9～10c)		
283	大江3号跡	大江3丁目	縄文～明治	古墳地			
285	本庄【奥大柄洞廻敷】	本庄2丁目	古墳～平安	古墳地	大大理文調査室調査		
290	出水木舟跡	九品寺、国府、国府町本町	弥生～中世	古墳地			
291	西畠寺町遺跡	水前寺2丁目	縄文～中世	古墳地			
292	国分寺跡	出水1丁目	縄文～中世	古墳地	市・市による多数の調査あり		
293	江津湖遺跡群	神水町、岡町は江津	縄文～平安	古墳地	H16.2.24範囲修正		
296	万石塚山	清水町万石	縄文・弥生	古墳地	復元武士像		
297	林野	祖田町立団	縄文～平安	古墳地			
300	立田山古墳	立田山頂	古墳～平安	古墳地			
301	万石塚山古墳	清水町万石(通称)茶山	古墳	古墳	竪穴式石室		
302	立田山裏中腹	黒駒町	古代～中世	古墳地			
303	宇留山遺跡	黒駒町1丁目	縄文～平安	馬場			
306	桜山中学校校庭遺跡	黒駒町3丁目	古墳～平安	古墳地			
307	カブノ山遺跡	黒駒町平留毛字甲山	縄文	古墳地	早期。轟8、北久留山、黒川、山の寺		
308	平留毛A遺跡	黒駒町6丁目	縄文	古墳地			
309	宇留毛B遺跡	黒駒町6丁目	縄文～平安	古墳地			
310	圓山2号横穴群	黒駒町1丁目浦山	古墳	古墳			
316	宇留毛神社山の遺跡群	黒駒町4～8丁目	古墳～中世	古墳地			
332	新南部遺跡群	熊本市新南部町	射石器	平安	古墳地	立田山南麓古墳群2号・基盤式右室 飛北ハイバス調査、セマンシアン調査、 田切原三井調査などあり H16.4.21範囲修正	
335	渡鹿遺跡群	熊本市南面2丁目	縄文・古代	古墳地	縄文土器(後～晩期)・弥生土器(中期後半) 土器鉢、須恵器(古代8～9c)		
336	魔界原神社境内遺跡	熊本市南面6丁目		寺社	市		
337	辻遺跡	熊本市南面7丁目	縄文～平安	古墳地	縄文後晩期、ヘラ彫き土器・織物土器		
338	新南部西原遺跡	熊本市新南部町	縄文～平安	馬場			
339	南平1号遺跡	熊本市南大江3丁目南平上	奈良～平安	古墳地			
340	衡山新村群	熊本市南山1丁目	縄文～平安	古墳地	細目瓦、菅草、阿彌、竹崎、H21.7.22範囲縮小		
347	北水寺遺跡	熊本市水前寺3丁目	奈良～平安	古墳地			
348	水前寺魔寺跡	熊本市水前寺公園	奈良～平安	古墳地			
350	水前寺今成園	熊本市水前寺公園	江戸	庭園	国		
352	圓山1号跡	熊本市水前寺公園	奈良～平安	寺社	田分尼寺推定地		
355	神水遺跡	熊本市神水本町・出水2丁目	縄文～平安	古墳地	市・市調査、報告書あり		
469	池田町跡	池田町新	中世	城			
481	折衷園跡	梁町	近世	古墳地	博士重視開闢		
556	永道町遺跡	熊本市 水道町	古代	古墳地	H120.10.1新規記載(白川河川改修工事に伴う試掘調査結果による)		

Tab.1 遺跡地名表

第2節 基本層序

調査区の基本層序は、遺構外出土と遺構内出土遺物を明確に区別するため、遺構外の層については算用数字で表記し、遺構内出土遺物については算用数字の前に埋土出土遺物であることを示すため「埋」を冠し標記した。しかし、報告時点ではそれらは整理し算用数字による標記に統一している。

基本層序

0層：暗褐色土 現地表下に位置し、近現代の建物痕跡を確認している層。調査対象外。

1層：暗褐色土 基本、近世に整地された層。新屋敷が城下町に組み込まれていく過程で整地された層と判断した。造成工事、当時の擾乱等による掘削で近世から古代の遺物まで混在する。

2層：黒褐色土 基本、古代の遺物包含層をなす。上層から古代以降の遺構が掘り込まれる後世の擾乱等が幾重にも重なり、遺物の混入が著しい。

3層：褐色土 遺構は、2層から掘り込まれていたと考えられるが、遺構検出面は本層上面で最終的に実施した。シルト質が硬化した層を形成し、白川左岸域では市内域において広く見ることができる。

第3節 調査方法

発掘調査着手にあたっては、表土剥ぎを重機（バックフォー 0.4m³）を用いて実施した。掘削対象は0層から1層とした。2層以下を調査対象とし、3層以下は、予備調査時点で遺構、遺物を確認していないことから調査対象外とした。国土交通省との契約により、調査終了後は、バックフォーを用いて排出された土を簡易的に埋め戻す作業まで実施した。

発掘調査は熊本県の職員が非常勤職員とともに実施し、遺構の実測の一部を外部委託して実施した。実測を委託する際には、基本手実測として、1/20の図面作成とした。

調査で必要となった写真撮影については、本来はより大きい版により写真撮影が必要であったが、機材の使用に不慣れであったこと等から、基本 35mm カメラによる撮影とし、一部重要と判断した遺構のみ中型カメラ（6cm × 7cm）を用いた撮影とした。使用フィルムは、モノクロ、リバーサルフィルムで撮影している。また、適宜コンパクトデジタルカメラを用い、手持ち資料撮影も実施した。

第4節 その他

(1) 発掘調査は、遺構の種別を示す以下の記号と、一連の二桁の数字の組み合わせにより表記した。

SA (廻、柵列)、SB (建物)、SC (廊)、SD (溝)、SE (井戸)、SF (道路)、SG (池)、SH (広場)、SI (竪穴建物)、SJ (土器埋設遺構)、SK (土坑)、SL (井戸、カマド)、SN (水田、畑)、SP (柱穴)、SS (礎石、葺石、配石)、ST (墓)、SU (遺物集積)、SW (石垣、防護壁)、SX (その他)、NR (自然流路)、K (栗石群)

※上記略号には、当遺跡で使用しない記号も含む。

(2) 遺物觀察表に記している色調については「新版標準土色帖」(2013)、DIC カラーガイド「中国の伝統色（2版）」を使用した。

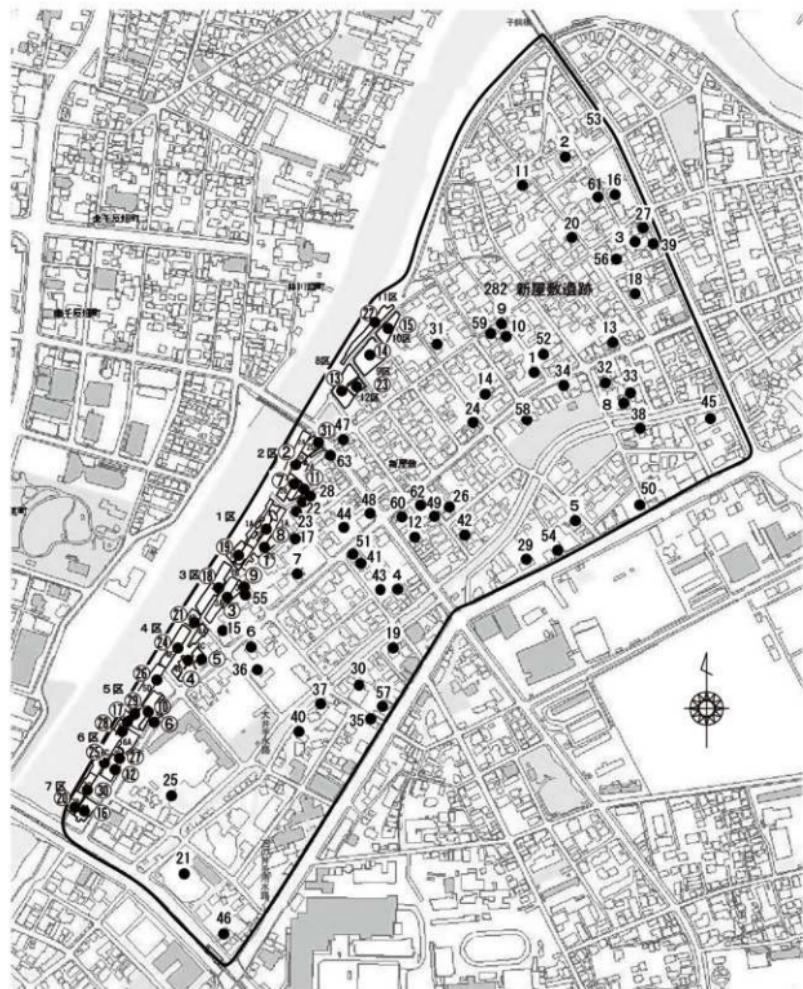


Fig.2の調査地点番号は、Tab.2の番号に対応する。

なお、

- ・数字は、熊本市教育委員会観光文化交流局文化振興課による調査地点
- ・丸込み数字は、熊本県教育委員会教育総務局文化課による調査地点を示す。

調査個所は、平成27年末現在で合わせて94地点である。

Fig. 2 新屋敷遺跡内調査地点図（縮尺任意）

Tab.2 新屋敷遺跡内調査地一覧

番号	調査地点名	調査年	調査機関	主な時代	主な遺構	主な遺物	文献
1	第1次調査区	1988	熊本市教育委員会	奈良・平安	竪穴建物など	土師器・須恵器	1
2	第2次調査区	1989	熊本市教育委員会	弥生前期 奈良・平安	溝(弥生)・竪穴建物・道路など	弥生土器・石器 土師器・須恵器	3
3	第3次調査区	1990	熊本市教育委員会	奈良・平安	竪穴建物・土坑・溝・道路	土師器・須恵器 縄文土器	9
4	第4次調査区	1990	熊本市教育委員会	奈良・平安 江戸	竪穴建物・土坑 水路など	土師器・須恵器 陶器・石器など	1
5	第5次調査区	1990	熊本市教育委員会	奈良・平安	水田・溝	土師器・須恵器 白磁 青磁・縄文陶器など	9
6	第6次調査区	1991	熊本市教育委員会	奈良・平安 中世	竪穴建物・土坑・溝	土師器・須恵器 白磁	9
7	第7次調査区	1994	熊本市教育委員会		竪穴建物・土坑 柱穴群	土師器・須恵器 縄文陶器片・軒丸瓦 越州窯系青磁	10
8	第8次調査区	1996	熊本市教育委員会		柱穴		10
9	第9次調査区	1996	熊本市教育委員会	奈良・平安	竪穴建物・溝	土師器・須恵器	10
10	第10次調査区	1996	熊本市教育委員会	奈良・平安 中世	竪穴建物・溝	土師器・須恵器・青磁片 铁製品・石鏡	10
11	第11次調査区	1996	熊本市教育委員会	奈良・平安	竪穴建物 据立柱建物	土師器・須恵器 獸脚鏡・墨書き土器 ヘラ描き土器	2
12	第12次調査区	1996	熊本市教育委員会	奈良・平安	溝など	土師器・須恵器	3
13	第13次調査区	1997	熊本市教育委員会	奈良・平安 近世	柱穴列	土師器・須恵器	4
14	第14次調査区	1997	熊本市教育委員会	奈良・平安	竪穴建物・土坑 柱穴	土師器・須恵器 鐵製品	11
15	第15次調査区	1997	熊本市教育委員会	縄文・奈良 平安	竪穴建物・土坑	縄文後期土器 土師器・須恵器	7
16	第16次調査区	1997	熊本市教育委員会	奈良・平安	竪穴建物・据立柱建物	土師器・須恵器	4
17	第17次調査区	1999	熊本市教育委員会	奈良・平安	竪穴建物・据立柱建物 土塁墓・小穴群・不明遺構	土師器・須恵器・鐵製品 銅製品・縄文土器	11
18	第18次調査区	1999	熊本市教育委員会	古代	竪穴建物・土坑 柱穴	土師器・須恵器	12
19	第19次調査区	1999	熊本市教育委員会	古代	溝	土師器・須恵器	12
20	第20次調査区	1999 ～00	熊本市教育委員会	古代	竪穴建物・据立柱建物 土坑・柱穴	土師器・須恵器 縄文土器	12
21	第21次調査区	2000	熊本市教育委員会	古代	水田・竪穴建物・据立柱建物 土坑・溝・柱穴	土師器・須恵器 青磁・白磁片・耳環	13
22	第22次調査区	2000	熊本市教育委員会	古代	柱穴・小穴・溝・道路	土師器	13
23	第23次調査区	2000	熊本市教育委員会	古代	竪穴建物・柱穴群	土師器・須恵器 青磁・水注片	13
24	第24次調査区	2000	熊本市教育委員会	古代・近世	竪穴建物・土坑・溝 井戸・柱穴	土師器・須恵器 陶磁器	13
25	第25次調査区	2000	熊本市教育委員会	古代・近世	竪穴建物・据立柱建物・土坑 溝・柱穴	土師器・須恵器 獸骨	13
26	第26次調査区	2000	熊本市教育委員会	奈良・平安	竪穴建物	土師器・須恵器	6
27	第27次調査区	2000	熊本市教育委員会	奈良・平安	竪穴建物など	土師器・須恵器	3
28	第28次調査区	2001	熊本市教育委員会	古代	竪穴建物・溝	土師器・須恵器 金剛製貝環	13
29	第29次調査区	2001 ～02	熊本市教育委員会	古代・中世	水田・溝	土師器・須恵器 縄文土器・弥生土器	13
30	第30次調査区	2002 ～03	熊本市教育委員会	古墳 ～平安	竪穴建物・溝・小穴	土師器・須恵器 獸骨	14

番号	調査地点名	調査年	調査機関	主な時代	主な遺構	主な遺物	文献
31	第 31 次調査区	2003	熊本市教育委員会	古代・近世	竪穴建物・土坑・溝	土師器・須恵器 風字硯・繩文土器	15
32	第 32 次調査区	2003	熊本市教育委員会	古代	竪穴建物・掘立柱建物 土坑・柱穴	土師器・須恵器 黒色土器・鉄製品	15
33	第 33 次調査区	2003	熊本市教育委員会	奈良・平安	竪穴建物・土坑	土師器・須恵器	6
34	第 34 次調査区	2004	熊本市教育委員会	縄文・奈良 平安	掘立柱建物	縄文土器・土師器 須恵器	4
35	第 35 次調査区	2004	熊本市教育委員会	縄文・奈良 平安	竪穴建物・溝	縄文土器・土師器 須恵器	4
36	第 36 次調査区	2004	熊本市教育委員会	奈良・平安 近世	竪穴建物・溝	土師器・須恵器 陶磁器	4
37	第 37 次調査区	2004	熊本市教育委員会	奈良・平安 近代	溝・道路・小穴 井戸	土師器・須恵器 縄文土器・鉄斧・獸骨	16
38	第 38 次調査区	2005	熊本市教育委員会	古代	土坑・柱穴など	土師器・須恵器など	16
39	第 39 次調査区	2005	熊本市教育委員会	縄文・古代	集石造構・柱穴	縄文土器・石器 土師器・須恵器	17
40	第 40 次調査区	2005	熊本市教育委員会	古代・近代	竪穴建物・土坑・溝・柱穴・小穴	縄文土器・石器・土師器 須恵器・陶磁器	17
41	第 41 次調査区	2005	熊本市教育委員会	奈良・平安	竪穴建物・土坑・溝・小穴	土師器・須恵器	5
42	第 42 次調査区	2005	熊本市教育委員会	奈良・平安	竪穴建物・土坑	土師器・須恵器	6
43	第 43 次調査区	2005	熊本市教育委員会	古代	竪穴建物・土坑 小穴	土師器・須恵器 青磁片・繩文土器	17
44	第 44 次調査区	2005	熊本市教育委員会	古代	竪穴建物・土坑 小穴など	土師器・須恵器 石製防錆串・縄文土器	17
①	1A 区	2005 ~ 06	熊本県教育委員会	古代	竪穴建物・土坑 道路状遺構など	土師器・須恵器	28
②	2A 区	2005 ~ 06	熊本県教育委員会	古代	竪穴建物・土坑 柱穴など	土師器・須恵器	28
45	第 45 次調査区	2006	熊本市教育委員会	古代・中世 近世	溝・柱穴・竪穴状遺構 掘立柱建物	土師器・須恵器 瓦質土器・陶磁器	18
③	3A 区	2006 ~ 07	熊本県教育委員会	古代	竪穴建物・溝・井戸・土坑 掘立柱建物	土師器・須恵器 縄文土器	27
④	4A 区・4B 区	2007	熊本県教育委員会	古代	竪穴建物・溝・井戸・土坑 掘立柱建物	土師器・須恵器	24
46	第 46 次調査区	2007	熊本市教育委員会	古墳・古代 中世	水田・竪穴建物 土坑・柱穴群	土師器・須恵器	19
⑤	4C 区	2007	熊本県教育委員会	縄文・古代 近代	竪穴建物・溝・井戸・土坑 掘立柱建物・近代建物基礎	土師器・須恵器 陶磁器	24
⑥	5A 区	2007	熊本県教育委員会	古代・近代	竪穴建物・溝・井戸・土坑 掘立柱建物	土師器・須恵器 陶磁器	24
⑦	2B 区	2008	熊本県教育委員会	古代	竪穴建物・土坑 掘立柱建物	土師器・須恵器	28
⑧	1B 区・1C 区	2008	熊本県教育委員会	古代・近代	竪穴建物・溝・土坑 掘立柱建物・近代建物基礎	土師器・須恵器 陶磁器	28
⑨	3B 区	2008	熊本県教育委員会	古代・近代	竪穴建物・溝・土坑	土師器・須恵器 縄文土器	27
⑩	5B 区	2008 ~ 09	熊本県教育委員会	古代・近代	竪穴建物・溝・土坑 掘立柱建物	土師器・須恵器 陶磁器	24
⑪	2C 区	2009	熊本県教育委員会	近代	近代建物基礎	土師器・須恵器 縄文土器・石鏡・石斧	28
47	第 47 次調査区	2009	熊本市教育委員会	奈良・平安	竪穴建物・土坑 小穴・不明遺構	土師器・須恵器 近世陶磁器・縄文土器	8
⑫	6A 区・6B 区	2009	熊本県教育委員会	古代・近代	竪穴建物・溝・井戸・土坑 掘立柱建物・近代建物基礎	土師器・須恵器 陶磁器	25
⑬	8 区	2009	熊本県教育委員会	古代・近世	溝・土坑	土師器・須恵器 縄文土器	今回
⑭	9 区	2009	熊本県教育委員会	縄文・古代 近世	竪穴建物・溝・土坑 近代建物基礎	縄文土器・土師器 須恵器	今回

番号	調査地点名	調査年	調査機関	主な時代	主な遺構	主な遺物	文献
⑯	10区	2009	熊本県教育委員会	縄文・古代	竪穴建物・土坑	縄文土器・土師器 須恵器・石器・石斧	今回
⑯	7区	2009 ～10	熊本県教育委員会	古代・近代	竪穴建物・溝・土坑 掘立柱建物・近代建物基礎	土師器・須恵器 陶磁器	25
48	第48次調査区	2010	熊本市教育委員会	古代	竪穴建物・土坑・柱穴群	土師器・須恵器	20
49	第49次調査区	2010	熊本市教育委員会	古代・中世	道路	越州窯系青磁・丸瓦	22
50	第50次調査区	2010	熊本市教育委員会	中世～近世	溝・土坑	縄文後期土器	22
⑰	5C区	2010	熊本県教育委員会	古代・近代	竪穴建物・溝・土坑 近代建物基礎	土師器・須恵器 陶磁器	今回
⑯	3C区	2010	熊本県教育委員会	古代・近代	竪穴建物・溝・土坑	土師器・須恵器・陶磁器	27
⑯	1D区	2010	熊本県教育委員会	古代	溝	土師器	28
⑯	7B区	2011	熊本県教育委員会	古代・近代	竪穴建物・溝・土坑 掘立柱建物・近代建物基礎	土師器・須恵器 陶磁器	今回
51	第51次調査区	2011	熊本市教育委員会	古代・近世	溝	土師器・須恵器	22
⑯	4D区	2011	熊本県教育委員会	古代・近代	竪穴建物・溝・土坑 近代建物基礎	土師器・須恵器 陶磁器	今回
52	第52次調査区	2011	熊本市教育委員会	古代	竪穴建物	土師器・須恵器	22
⑯	11区	2011	熊本県教育委員会	古代	竪穴建物・溝・土坑	土師器・須恵器	今回
⑯	12区	2011	熊本県教育委員会	縄文～近代	竪穴建物・溝・土坑 近代建物基礎	縄文土器・土師器	今回
53	第53次調査区	2011	熊本市教育委員会	縄文～中世	流路・土坑・柱穴	縄文土器・石器 土師器・須恵器・陶磁器	26
54	第54次調査区	2011	熊本市教育委員会	古代・中世	水田・溝	土師器・須恵器	26
55	第55次調査区	2011	熊本市教育委員会	古代・近世	道路・竪穴建物	鉄製鍬・白磁 越州窯系青磁	26
⑯	4F区	2011	熊本県教育委員会	古代	竪穴建物・溝・土坑	土師器・須恵器	今回
⑯	6C区	2011 2012	熊本県教育委員会	古代・近世	竪穴建物・溝・土坑・土壤層	土師器・須恵器	今回
56	第56次調査区	2011	熊本市教育委員会	古代・近世	溝・道路・竪穴建物 縄文早期集石	縄文早期・中期 後期土器・石器	26
⑯	5D区	2011	熊本県教育委員会	古代・中世	竪穴建物・溝・土坑・柱穴	土師器・須恵器	今回
⑯	6D区	2011	熊本県教育委員会	古代	竪穴建物・溝	土師器・須恵器・陶磁器	25
⑯	6E区	2012	熊本県教育委員会	近代	溝・土坑	土師器・須恵器	今回
⑯	5E区	2012	熊本県教育委員会	近世	溝・土坑	陶器	今回
⑯	7C区	2012	熊本県教育委員会	近世	溝	土師器・須恵器	今回
57	第57次調査区	2012	熊本市教育委員会	古代・近世	竪穴建物・溝・土坑	土師器・須恵器・陶磁器	26
58	第58次調査区	2012	熊本市教育委員会	古代・中世	竪穴建物・溝	土師器・須恵器・陶磁器 和同開跡	26
59	第59次調査区	2012	熊本市教育委員会	古代	竪穴建物・土坑	黒色土器・土師器 須恵器	26
⑯	2D区	2012	熊本県教育委員会	古代	竪穴建物・溝・土坑	土師器・須恵器	26
60	第60次調査区	2013	熊本市教育委員会	古代	竪穴建物・土坑	土師器・須恵器 綠釉陶器・越州窯系青磁	28
61	第61次調査区	2013	熊本市教育委員会	古代～中世	竪穴建物・土坑	土師器・須恵器 メノウ製勾玉	29
62	第62次調査区	2013	熊本市教育委員会	古代	竪穴建物・溝・土坑	土師器・須恵器・陶磁器	29
63	第63次調査区	2013	熊本市教育委員会	古代～中世	竪穴建物・溝・土坑	土師器・須恵器・陶磁器	29

参考文献

(番号はTab.2 新屋敷遺跡内調査地一覧の参考文献番号と一致する)

1. 綱田龍生・美濃口雅朗 1999 「新屋敷遺跡第1次調査区」「新屋敷遺跡第4次調査区」
『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集－平成10年度－』 熊本市教育委員会
2. 林田和人 2003 「新屋敷遺跡第11次調査区」『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集－平成13・14年度－』 熊本市教育委員会
3. 綱田龍生 2004 「新屋敷遺跡第2次調査区」「新屋敷遺跡第12次調査区」
『新屋敷遺跡27次調査区』『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集－平成15年度－』 熊本市教育委員会
4. 松村真紀子 2005 「新屋敷遺跡第13次調査区」「新屋敷遺跡第16次調査区」「新屋敷遺跡第34次調査区」
『新屋敷遺跡第35次調査区』『新屋敷遺跡第36次調査区』『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集－平成16年度－』 熊本市教育委員会
5. 岩谷史記 2006 「新屋敷遺跡第41次調査区」『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集－平成17年度－』 熊本市教育委員会
6. 美濃口雅朗 2007 「新屋敷遺跡第26次調査区」「新屋敷遺跡第33次調査区」
『新屋敷遺跡第42次調査区』『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集－平成18年度－』 熊本市教育委員会
7. 美濃口雅朗 2008 「新屋敷遺跡第15次調査区」『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集－平成19年度－』 熊本市教育委員会
8. 美濃口雅朗 2010 「新屋敷遺跡第47次調査区」『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集－平成21年度－』 熊本市教育委員会
9. 熊本市教育委員会編 1995 『熊本市埋蔵文化財年報第1号－昭和63年度～平成3年度－』 熊本市教育委員会
10. 熊本市教育委員会編 1999 『熊本市埋蔵文化財年報第2号－平成4年度～平成8年度－』 熊本市教育委員会
11. 熊本市教育委員会編 2000 『熊本市埋蔵文化財年報第3号－平成9年度～平成10年度－』 熊本市教育委員会
12. 熊本市教育委員会編 2001 『熊本市埋蔵文化財年報第4号－平成11年度－』 熊本市教育委員会
13. 熊本市教育委員会編 2003 『熊本市埋蔵文化財年報第5号－平成12年度～平成13年度－』 熊本市教育委員会
14. 熊本市教育委員会編 2004 『熊本市埋蔵文化財年報第6号－平成14年度－』 熊本市教育委員会
15. 熊本市教育委員会編 2005 『熊本市埋蔵文化財年報第7号－平成15年度－』 熊本市教育委員会
16. 熊本市教育委員会編 2006 『熊本市埋蔵文化財年報第8号－平成16年度－』 熊本市教育委員会
17. 熊本市教育委員会編 2007 『熊本市埋蔵文化財年報第9号－平成17年度－』 熊本市教育委員会
18. 熊本市教育委員会編 2008 『熊本市埋蔵文化財年報第10号－平成18年度－』 熊本市教育委員会
19. 熊本市教育委員会編 2009 『熊本市埋蔵文化財年報第11号－平成19年度－』 熊本市教育委員会
20. 豊崎晃一 2011 「新屋敷遺跡第48次調査区」『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集－平成23年度－』
熊本市の文化財 第12集 熊本市教育委員会
21. 熊本市教育委員会編 2011 『熊本市埋蔵文化財年報第13号－平成21年度－』 熊本市教育委員会
22. 熊本市教育委員会編 2012 『熊本市埋蔵文化財年報第14号－平成22年度－』 熊本市教育委員会
23. 綱田龍生 2012 「新屋敷遺跡1」 熊本市の文化財 第22集 熊本市教育委員会
24. 水上正孝 2012 「新屋敷遺跡1」 熊本県文化財調査報告第270集 熊本県教育委員会
25. 水上正孝 2013 「新屋敷遺跡2」 熊本県文化財調査報告第286集 熊本県教育委員会
26. 熊本市教育委員会編 2013 『熊本市埋蔵文化財年報第15号－平成23年度－』 熊本市教育委員会
27. 水上正孝 2014 「新屋敷遺跡3」 熊本県文化財調査報告第298集 熊本県教育委員会
28. 水上正孝 2015 「新屋敷遺跡4」 熊本県文化財調査報告第314集 熊本県教育委員会
29. 熊本市教育委員会編 2015 『熊本市埋蔵文化財年報第17号－平成25年度－』 熊本市教育委員会

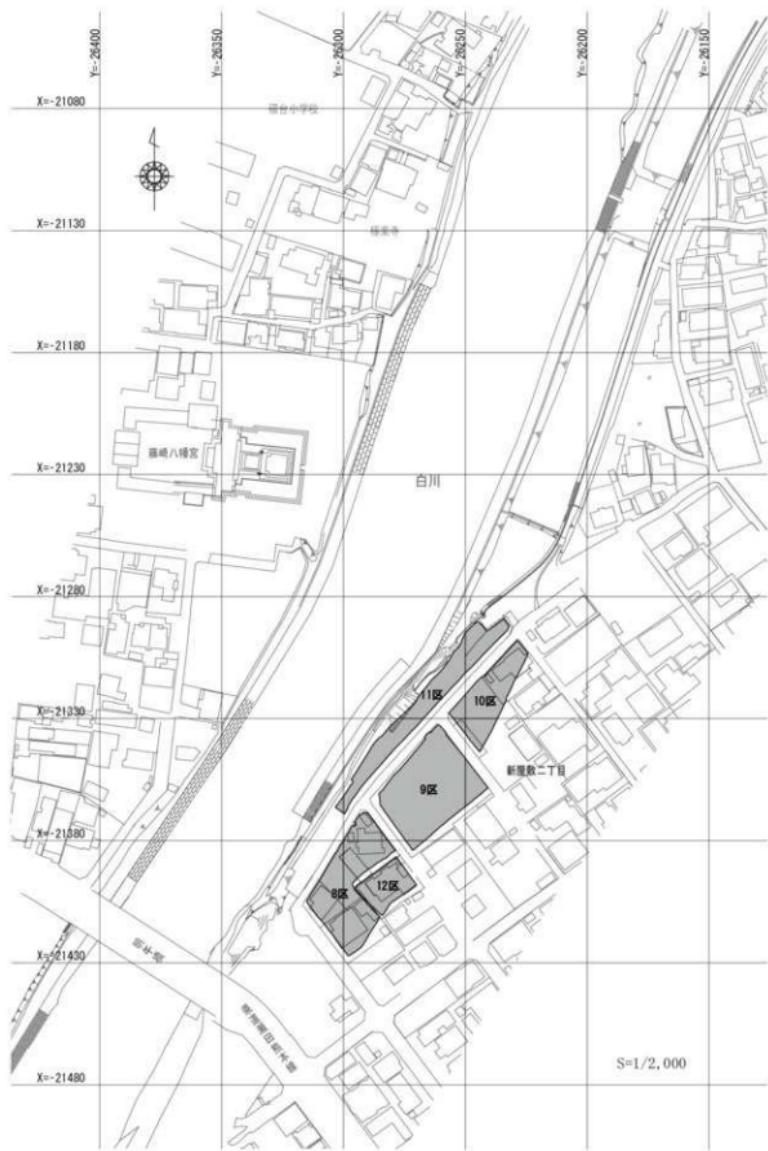


Fig. 3 8～12区位置図

第4章 調査の成果

8区

本調査区は、江戸後期に新屋敷地区が整備されたのち現在まで長く住居域として使用され続けている土地にあたり、現在も北東・西・南西の三方を道路に囲まれ、住宅地として利用されてきた歴史を持つ。

調査区内、北壁土層断面で見られる層では、近現代における整地の結果か、周辺地域で見られる調査対象となる2、3層が見られず、削平されたものと考えられる。

調査では、当該地域における表土層（近現代の整地層）を取り除き、発掘調査対象となる江戸後期に整地され、古代の遺物が混入し始める層から調査の対象とした。

古代

竪穴建物 S101 (Fig. 5、PL. 9)

本遺構は、E・F - 25・26 グリッド上に位置する。遺構規模は、南北に 5.0m、東西に 4.4m、主軸（長辺）は N - 45° - E を測る。

遺構の各所には近現代の搅乱が多数据り込まれ、建物壁及び柱穴があったとみられる位置が搅乱により失われている。カマドは北東壁中央部にあり、内部の埋土は3層に分層される。袖部内には砂岩が包含され、その上から白色粘土が存在していることから、カマド本体は白色粘土により構築されていたと推測される。

崩れた白色粘土下からは、継続して強い火を受け赤化した燃焼面が検出されている。燃焼面から竪穴建物外部に向か掘方が広がり、煙道が伸びていたとみられるが、上部の削平で煙道部は残っていない。柱穴は P 1 を北西隅、P 2 を南東隅の対角線上に 2 か所確認したが、その他のは搅乱で残されていない。床面にはカマド対面下から両壁際近くにまで硬化面が広がり、その上面で遺物を検出している。遺構掘方は硬化面下で検出した4層がそれに相当し、本層が貼床となる。

遺物は、カマド前面から土師器甕が2点（18・19）、建物中央部から南東壁近くにかけて土師器杯が数点出土している。出土状況が安定していることから、建物内の使用場所を示唆しているものとみられる。

掘立柱建物 SB01 (Fig. 6)

本遺構は、B・C - 26・27 グリッド上に位置する。検出した位置が調査区際にあたり、全柱穴を検出していないことから当初の規模は不明である。現状では南北に主軸を持つ桁行2間×梁行1間の掘立柱建物で、柱穴間 1.6～1.8m を測り、主軸（長辺）は N - 23° - W を測る。しかし、検出した柱穴の規模が梁行（P 1、P 2～4）で直径 70.0cm 以上、掘方も P 5 と比べると深いことから掘立総柱建物の側柱とみられ、掘立柱建物の南東隅部を検出していると想定される。

溝 SD02 (Fig. 7、PL.10)

E・F - 17～20 グリッド上に位置する。調査区北端にあたり、遺構の大半は調査区外に延びる。遺構南側において溝 SD01（近世）と切り合うが、SD02の遺構が SD01 の南側に延びないことから、SD01 の中で掘削が終わっている。出土遺物は古代の須恵器、土師器を包含するため、古代の遺構と考えられる。

近世

溝 SD01 (Fig. 9、PL.10)

A～G - 19～25 グリッド上に位置する。遺構は、南西方向から北東方向へと直線に延び、本調査区内での検出長は 42.0m、深さ（最も深い場所）1.2m を測る。また、遺構上端幅は南西側で 4.0m、北東側で 2.2m を測る。幅の違いは溝本来の幅ではなく、土地の傾斜が北東側において高くなっていることから後世の削平によるものと考えられる。出土遺物は近代の陶器、磁器類が小片で多く含まれていることから、近代の遺構と推測する。

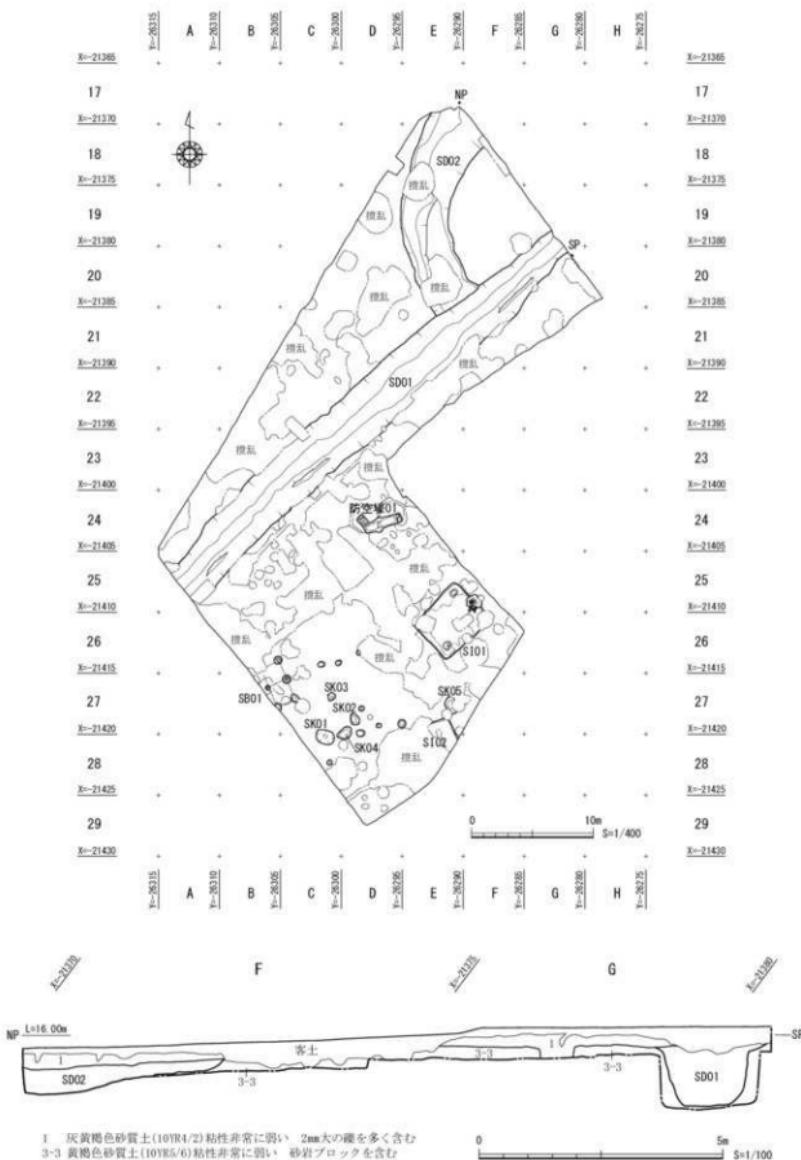


Fig. 4 8区造構配置図・調査区北壁土層断面図

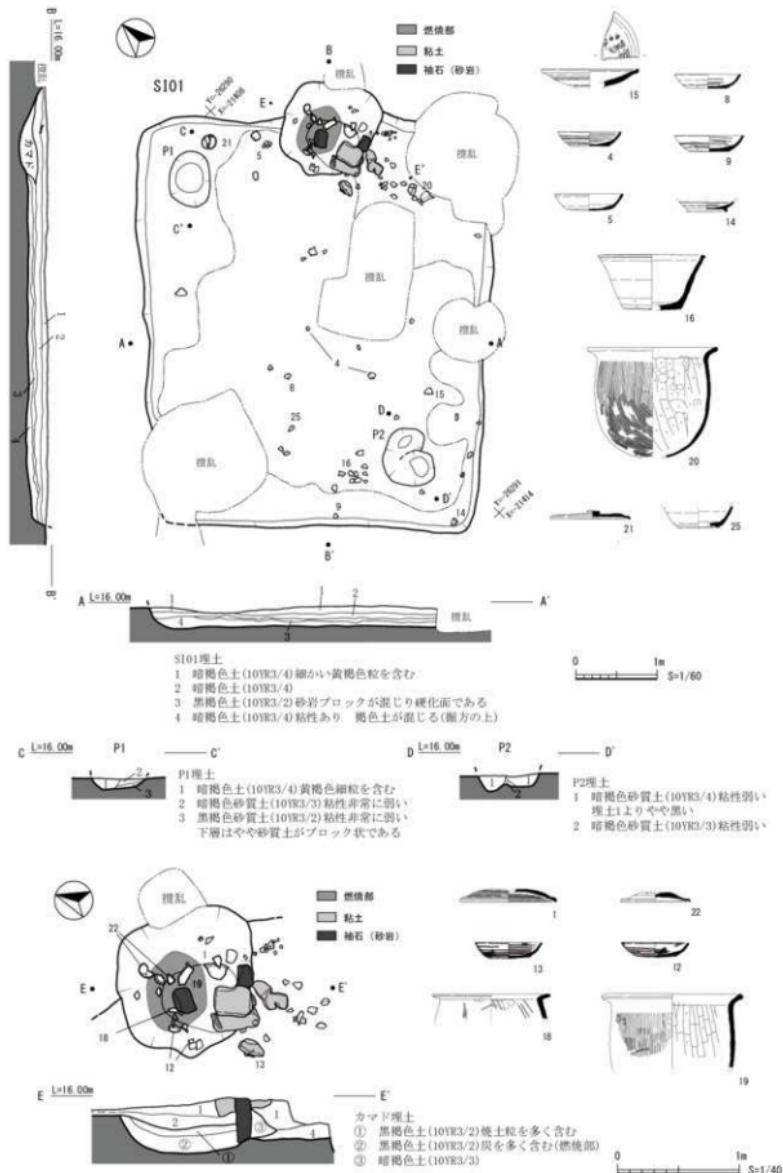


Fig. 5 8区 SI01、カマド 平面・断面図

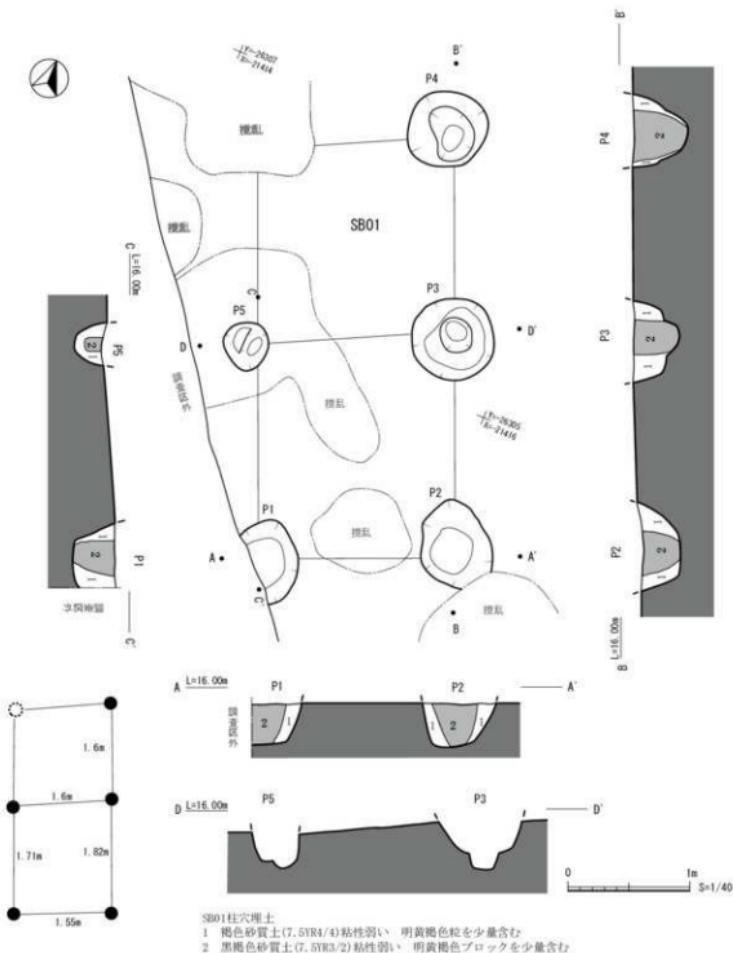


Fig. 6 8区 SB01 平面・断面図

近代

防空壕 01 (Fig. 8)

D-24 グリッド上に位置する。全長 4.0m、幅 1.2m(平均)で、階段部と本体部を L 字状に繋ぐ平面を呈する。遺構は表土剥ぎ直後から発見と同様の土が入っていることから戦後に埋められたものと考えられる。本体部床は二段の深さを示しており、これが何を意味しているのかは興味深い。遺構最深部となる東側には棚状の段が見られ、後に削平を受けたことを想定すると棚の存在も考えられよう。

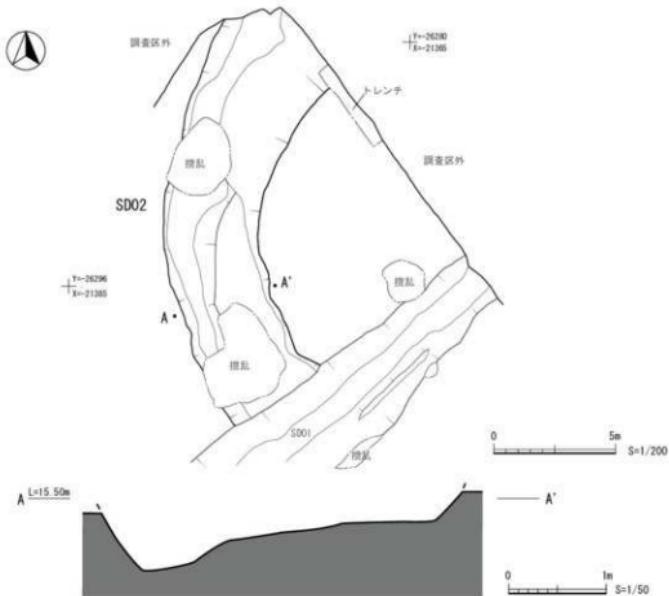


Fig. 7 8区SD02平面・断面図

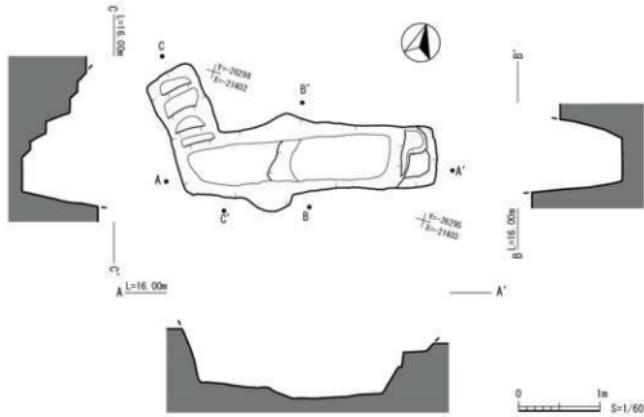


Fig. 8 8区防空壕 01 平面・断面図

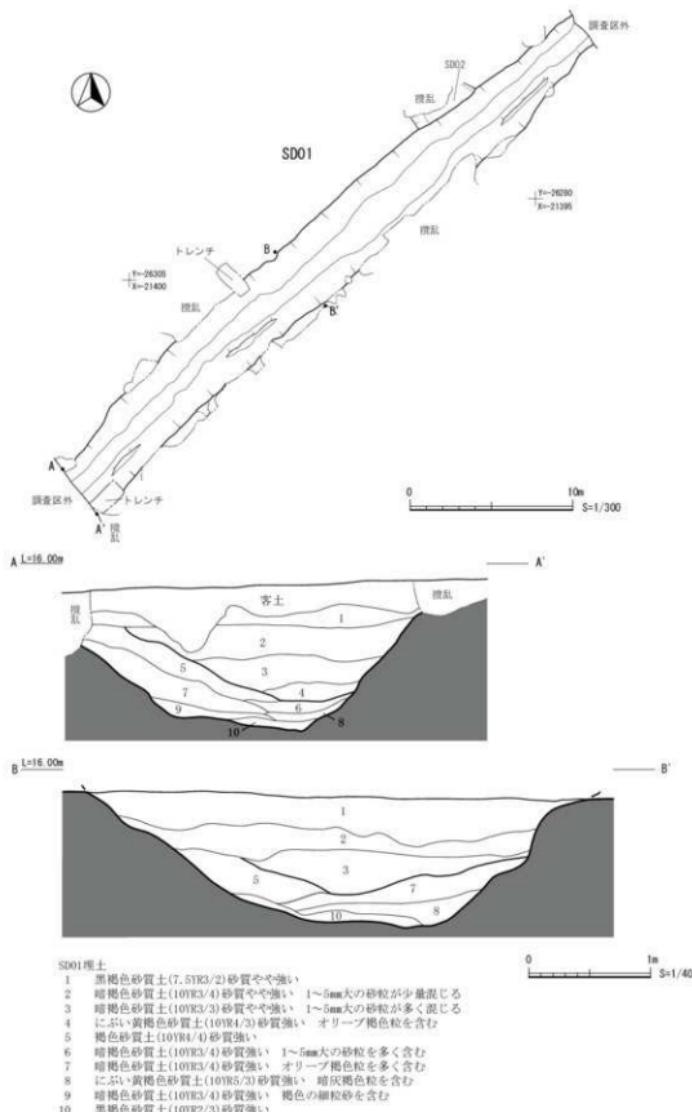


Fig. 9 8区 SD01 平面・断面図

9区

本調査区も他の調査区同様、擾乱が多く、現時点では多くの遺構が掘削により消滅していることも考えられた。遺構は古代から近代のものまで、遺物は縄文時代後期のものまで確認しているが、遺物の出土状況等から年代を決定できているものは少ない。土層は、南東壁で詳細を確認している。

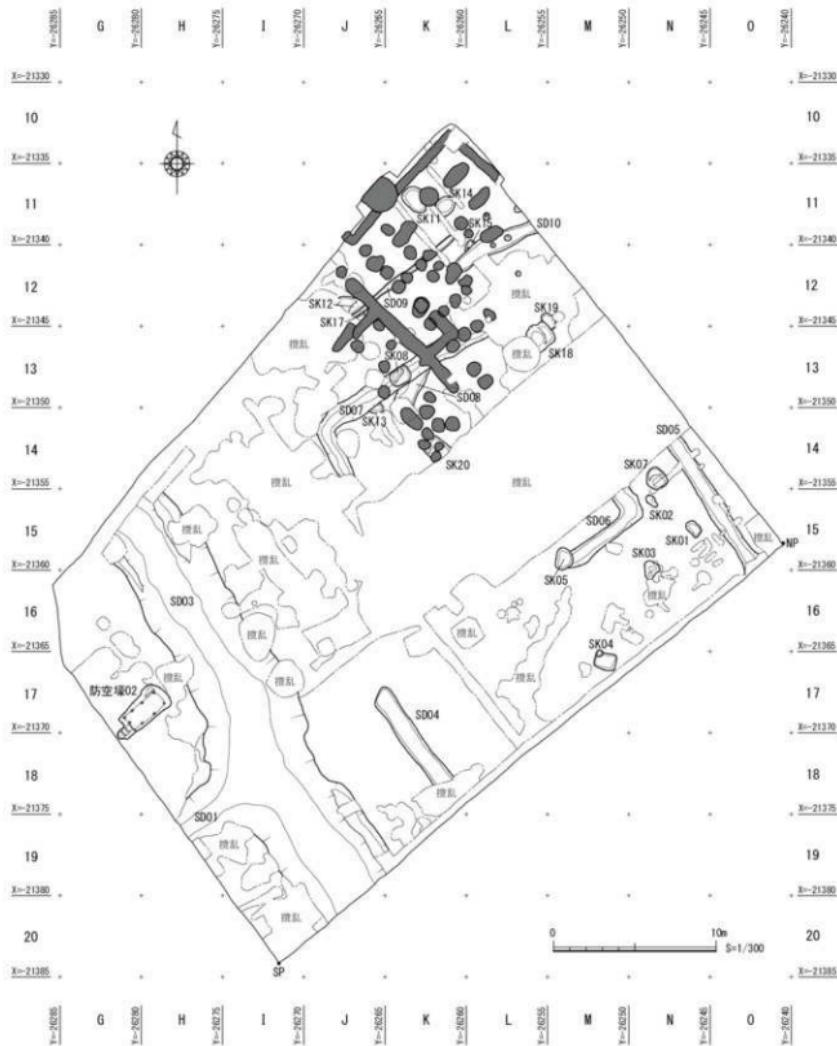


Fig.10 9区遺構配置図

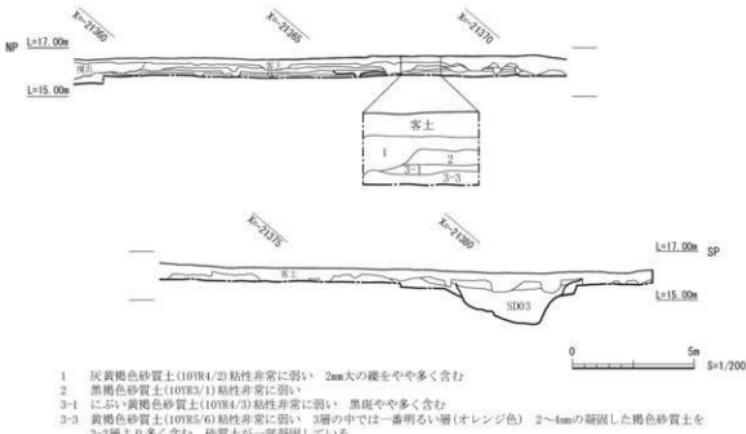


Fig.11 9区南東壁土層断面図

古代

溝 SD05 (Fig.12)

N・O・14・15 グリッド上に位置する。遺構規模は検出長 8.70m、幅 1.08m、主軸は N-35°-W を測る。溝底のレベルが北側に向かい 10.0cm 程深くなることが確認されている。

溝 SD06・SD07 (Fig.12)

調査時には別の遺構として確認していたが、整理時点の解釈として一辺約 16.5m の方形区画遺構として報告する。溝幅は 0.8 ~ 1.4m を測り、深度は現状で 10.0 ~ 20.0cm 程度である。遺構は多数の擾乱により切られ、方形区画内の遺構等は確認できない。区画の南東隅、北西隅のみ直角に折れる箇所を確認することができる。

溝 SD08 (Fig.12)

先に報告した方形区画としたうち、SD07 により切られた遺構。K-13 グリッド上に位置する。遺構の両端を擾乱により切られているため遺構の性格までは不明である。

溝 SD05 から溝 SD08 までは、埋土の残存状況が地山に近い暗褐色土から黒褐色土のため、遺物が出土している訳ではないが、他の古代の時期に比定できる遺構埋土に近いことから古代の遺構と判断した。

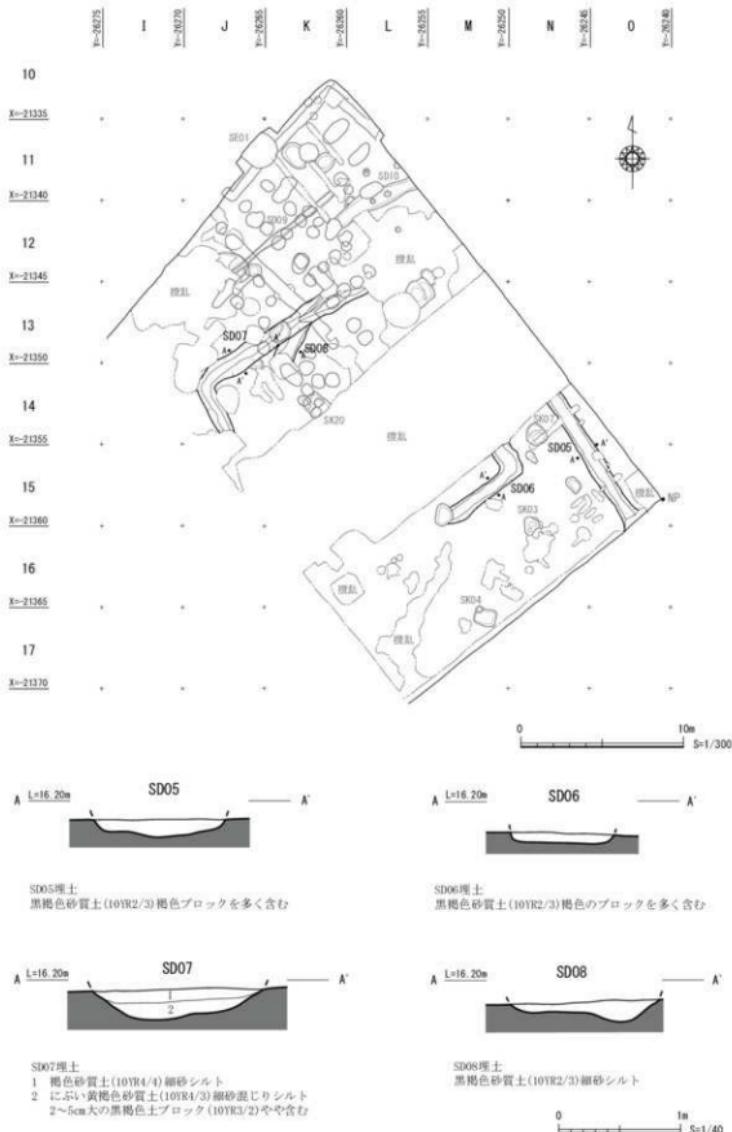


Fig.12 9区 SD05・06・07・08 平面・断面図

近世

溝 SD01・SD03 (Fig.13・14, PL.11)

調査区南西側において検出した遺構。調査時点では別の遺構として認識していたが、埋土の堆積状況、堆積している土の状況及びSD01がSD03に対して直角に西側に延びていることから、本来は同時期に掘削され同一の使用目的を持った遺構と判断した。断面形は全体に直角であるが一部に逆台形を呈することから、本形状を意識した掘削であったと考える。SD03とした遺構の全長は調査区全体に跨り、遺構規模は検出長27.0m、幅5.0～6.5m、深度1.0～1.3m、主軸はN-30°Wを測る。

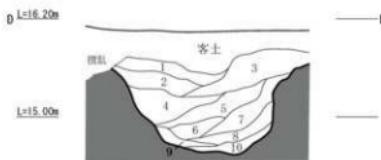
出土している遺物に近世の陶器・磁器片が多く含まれることから、江戸時代後期から幕末頃の遺構であると考えられる。

近代

防空壕 02 (Fig.15)

G・H-17グリッドで検出した遺構。全長3.2m、幅1.5mを測る。長方形の本体部に対して直線状に階段が取り付く。階段は南側壁に沿って作り付けられ3段を呈する。本体、下端壁際溝には長辺に3間、入り口側にのみ2間の柱穴を残す。遺構は、近現代の遺構及び搅乱を避け、安定した地盤上に掘り込まれる。

SD01



SD01埋土

- 1 褐褐色色砂質土(10YR3/3)細砂シルト ブロックを少量含む
- 2 黒褐色砂質土(7.5YR3/2)細砂シルト 極小粒を少量含む
- 3 褐褐色色砂質土(10YR3/4)細砂シルト 極小粒をより多く含む 黒色の混じりが多い
- 4 褐褐色色砂質土(10YR3/4)細砂シルト 小粒を少量含む
- 5 褐褐色色質土(10YR4/4)細砂シルト 2~3cm大の砂肩を多く含む
- 6 黑褐色色砂質土(10YR2/3)細砂シルト
- 7 暗オーラープ褐色色砂質土(2.5Y3/3)細砂シルト 粒を少量含む
- 8 暗オーラープ褐色色砂質土(2.5Y3/3)細砂シルト
- 9 黑褐色色砂質土(10YR2/3)細砂シルト 極小粒を多量に含む
- 10 にぶい黄褐色色砂質土(10YR4/3)

C L=16.00m

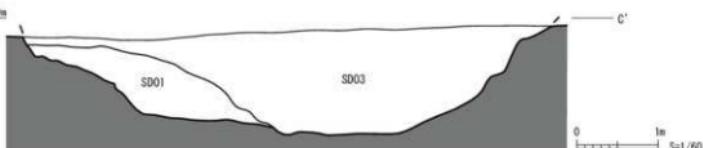


Fig.13 9区 SD01・03 平面・断面図-①

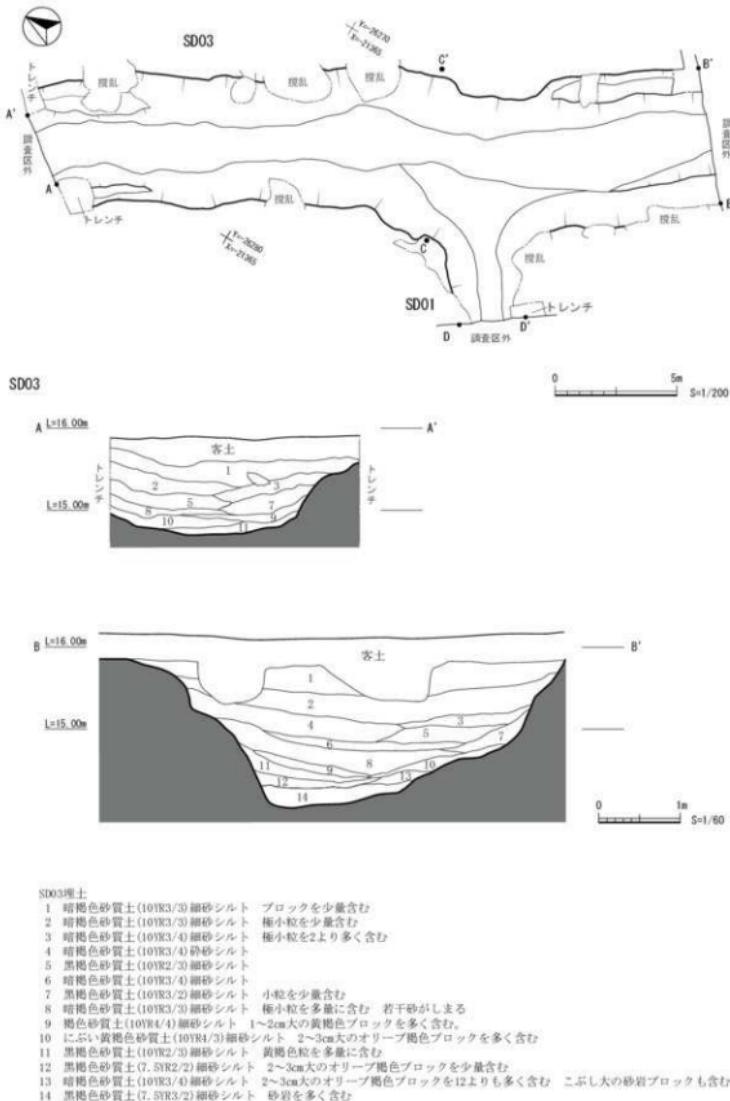


Fig.14 9区 SD01・03 平面・断面図-②

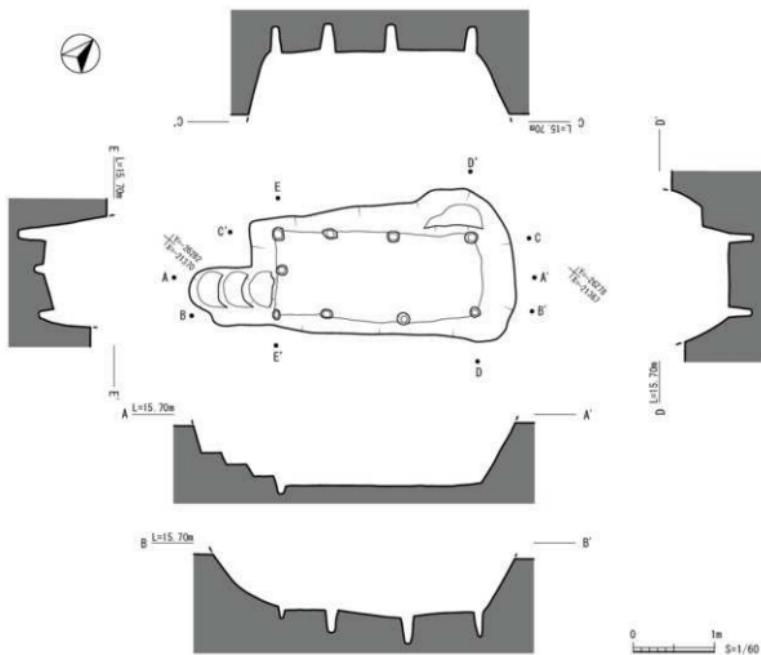


Fig.15 9区防空壕02 平面・断面図

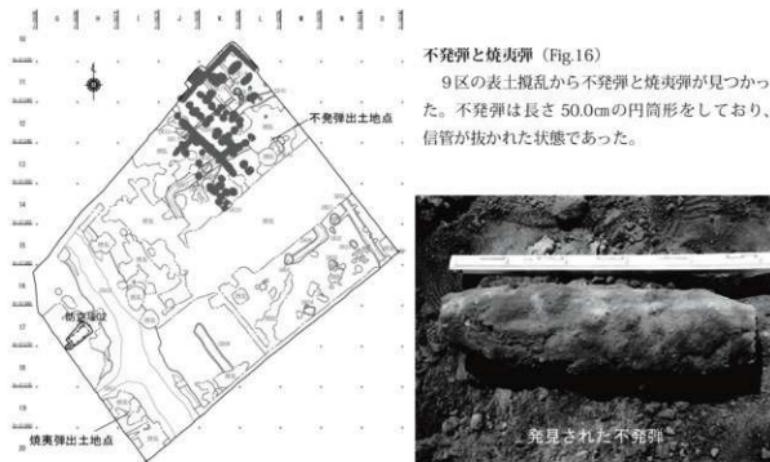


Fig.16 9区不発弾出土地点

10区

本調査区も、これまでの調査区同様、周囲を道路により削平を受け、調査区が周囲より一段高く残る。周囲四壁には一部に近代の石垣が組まれており、住宅地であった時分には、道路に面する範囲を中心に石垣が巡っていたものと推測される。当該地でも表土剥ぎ後の遺構検出では、多数の擾乱があり、遺構の残り具合は良くないと判断された。当調査区の特筆すべきものは、縄文時代後期の遺構が検出されたことである。遺物は擾乱及び縄文以降の遺構から多数出土している。

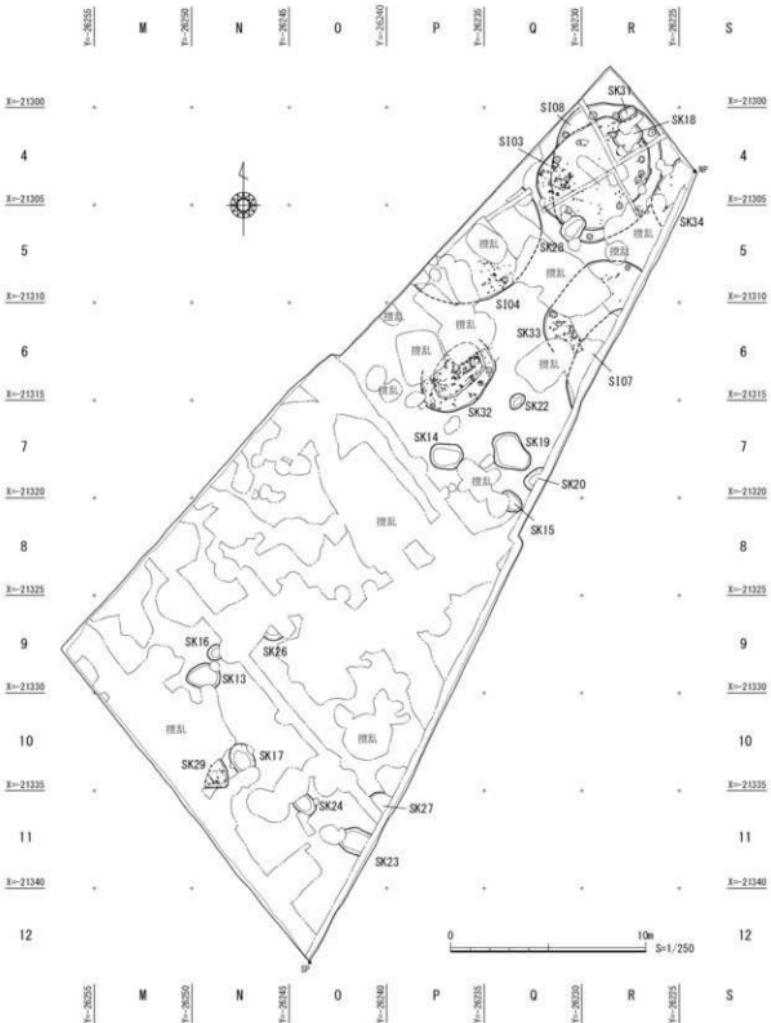


Fig.17 10区遺構配置図(縄文)

縄文

竪穴建物 S103 (Fig.18, PL.13)

Q・R-4・5グリッド上に位置する遺構。平面形は楕円を呈し、壁面に沿い柱穴を8基検出している。柱穴間の距離は約2.0m程度とみられ、ほぼ全周する。一部に間隔が近いところも見受けられるが、本遺構に伴う遺構として考える。遺構中心部にあったとみられる炉は搅乱及びその他の遺構により削平を受けているものと考えられる。床面においては硬化面及び炉に伴う焼土等の広がりは確認できていない。

竪穴建物 S104 (Fig.19, PL.13)

P・Q-4・5グリッド上に位置する遺構。遺構の約半分が調査区外にあることと、多数の搅乱及び後世の遺構が重複しているということから、全容がわかる遺構ではない。しかし、ここでは調査時の所見を参考に竪穴建物として報告している。残存する遺構の平面形からは、円形の掘方を呈するものと考えられる。本遺跡で検出されている楕円形を中心とする竪穴建物遺構群中においては、異質な感は否めない。炉等の遺構は確認されていない。出土遺物も床面から浮いたものが多く、時代の認定に耐えうる遺物ではない。

竪穴建物 S107 (Fig.17)

Q・R-6グリッドで検出した遺構。土坑SK33との重複から遺構の残りは少ない。また、後世の遺構により削平を受けていることからさらには残りが少ない。

調査時の所見では、SK33との埋土の違い、角度の違う壁面の立ち上がりを確認しているということから別遺構と認識していることを参考に、竪穴建物として報告している。遺構の残りが悪いことから積極的に竪穴建物と認定できる条件は少ない。

竪穴建物 S108 (Fig.20)

Q・R-4・5グリッド上に位置する遺構。竪穴建物S103により遺構の大半が切られており、残存状態は悪い。周壁に沿い、小柱穴が約2.0mの間隔を持ち配置される。いずれも柱穴深度は深くはないが、ほぼ一定の深度を示す。本遺構に伴う炉等の残存はない。

土坑 SK32 (Fig.21, PL.12)

調査当時は竪穴建物と判断してあったが、整理段階で積極的に竪穴建物とみることができなかつたことより土坑として報告する。

P・Q-6・7グリッド上に位置する。平面形は楕円形を成していたと考えられるが、西側1/3が搅乱により削平を受け、全体像をみるとすることはできない。遺構本来の掘方は現状より深かったと考えられるが、現状では20.0cm程度の深さしか残されていない。遺構は上端の下段に70.0cm程度のテラス状の平坦部を持ち、中央部に長径3.0m、深さ6.0cmの掘方を有する。テラス状の面上に柱穴状の遺構掘方を見ることができるが、本遺構に伴うものは検証できていない。出土遺物は流れ込みのものが多く、床面直上の遺物は確認されていない。

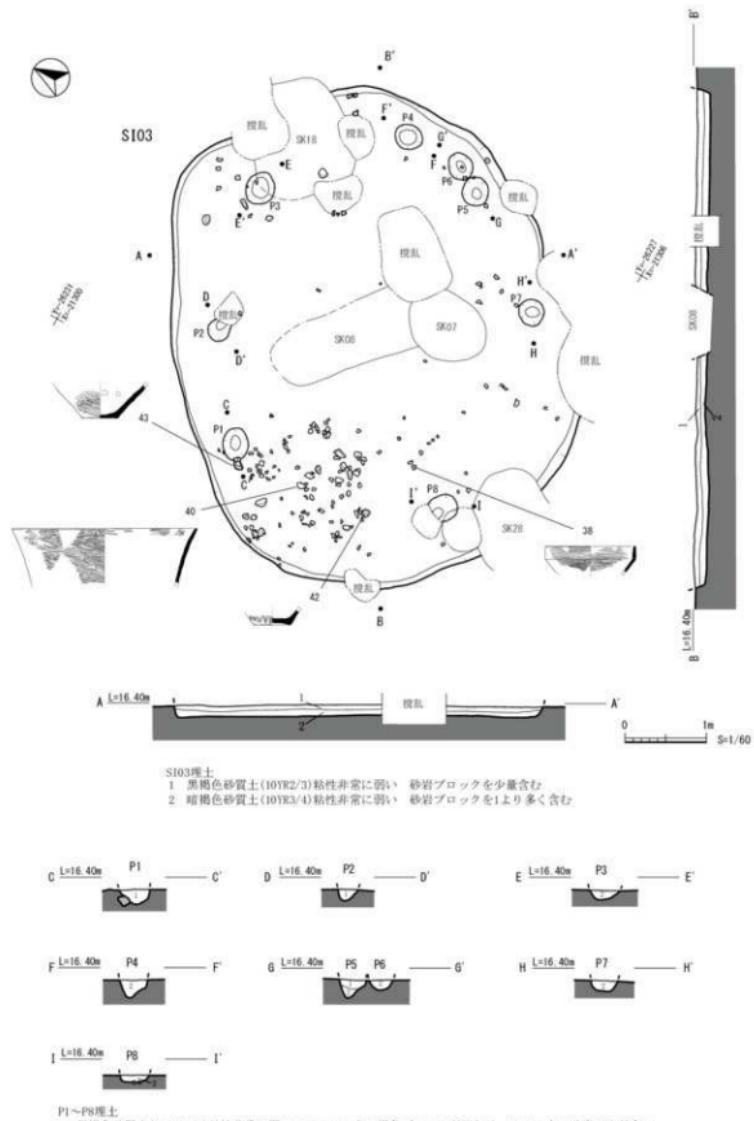


Fig.18 10区 SJ03 平面·断面图

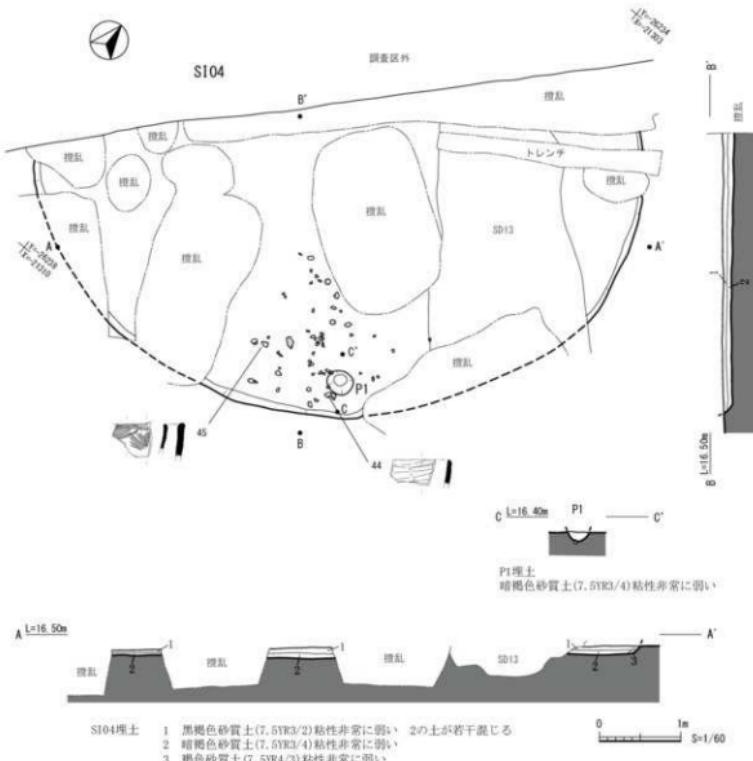


Fig.19 10区 SI04 平面・断面図

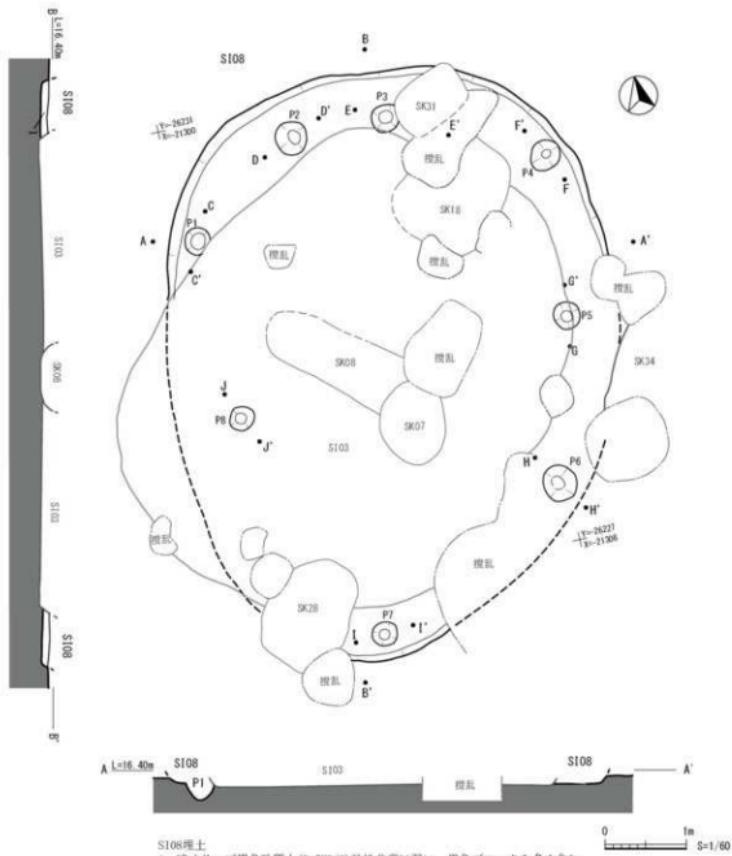
土坑 SK33 (Fig.22)

Q・R・5・6グリッド上に位置する遺構。本遺構も先述したSK32同様、調査時に竪穴建物の認識であったものだが、竪穴建物としての要素が確認できなかったことから土坑として報告する。

遺構規模は長径5.85mを測るが、短径は遺構の1/3が調査区外にあたることから、詳細は不明である。遺構中央部に近世の遺構並びに搅乱があることから、柱等の検出はできていない。床面での硬化面等の遺構は検出できていない。柱穴は壁面に沿い2基検出されているが、遺構の時代認定に不明な点があり、同遺構に伴うものは判断できない。

土坑 SK34 (Fig.22)

R・S・4・5グリッドにて検出した遺構。遺構の大半が調査区外に出るため、全容は不明である。遺構掘方は他の同時期の遺構に比べやや深く掘り込まれる。出土遺物は、床面より浮いた状態であるため時代を認定できる条件は備えていない。ここでは、調査時の時期判断や埋土の状況を勘案し、縄文期の遺構として報告する。



- P1~P8埋土
 1 黒褐色砂質土(10HR2/3)粘性非常に弱い 黒色ブロックを多く含む
 2 暗オリーブ褐色砂質土(2.5Y3/3)粘性非常に弱い
 3 暗オリーブ褐色砂質土(2.5Y3/3)粘性非常に弱い 黒褐色土を少量含む

Fig.20 10区 SI08 平面・断面図

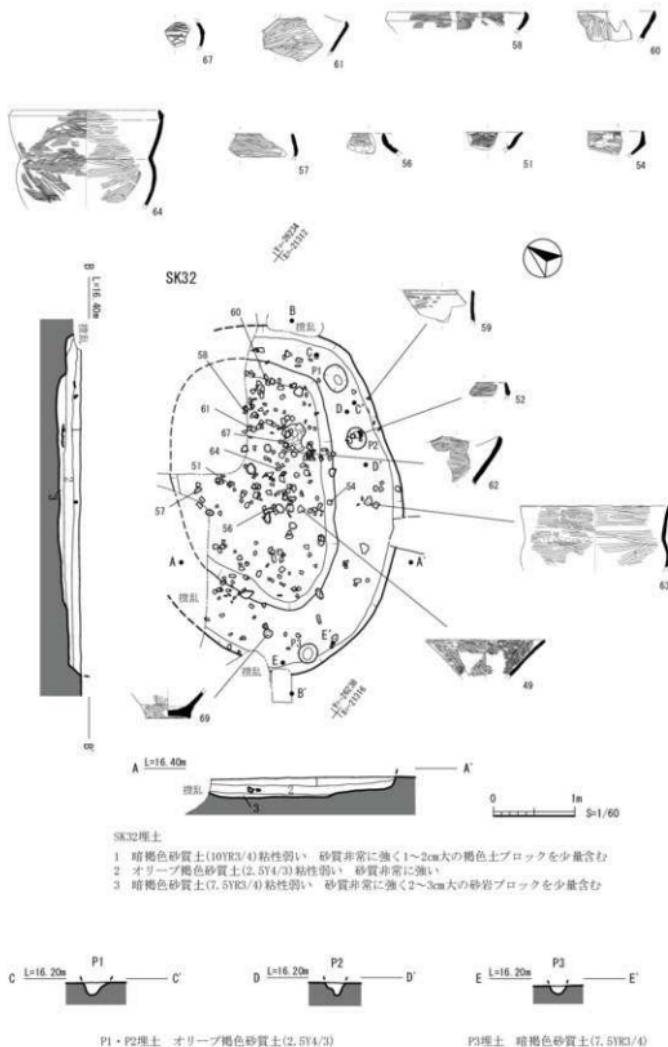


Fig.21 10区 SK32 平面・断面図

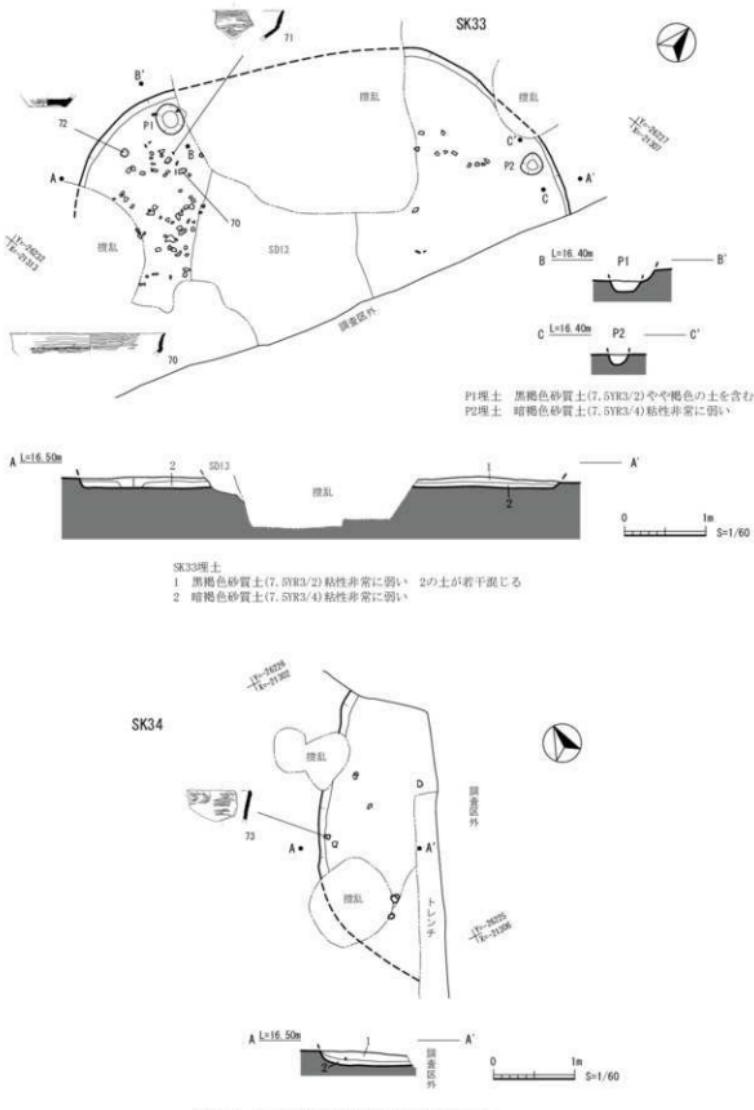


Fig.22 10区 SK33・34 平面・断面図

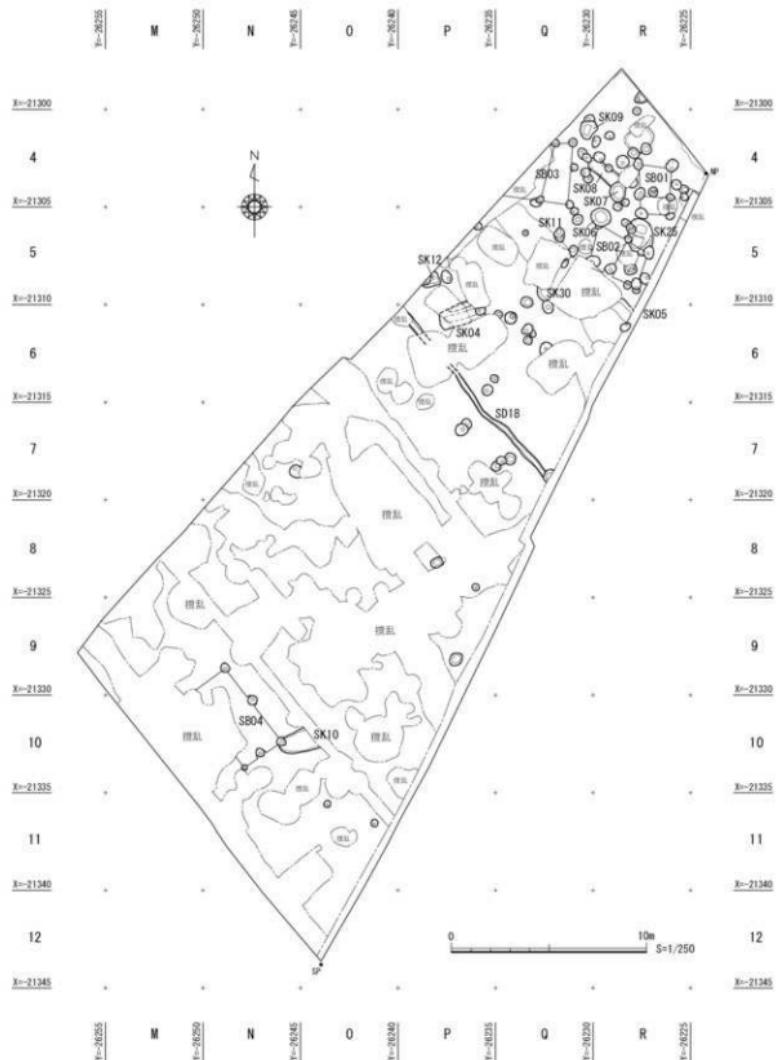
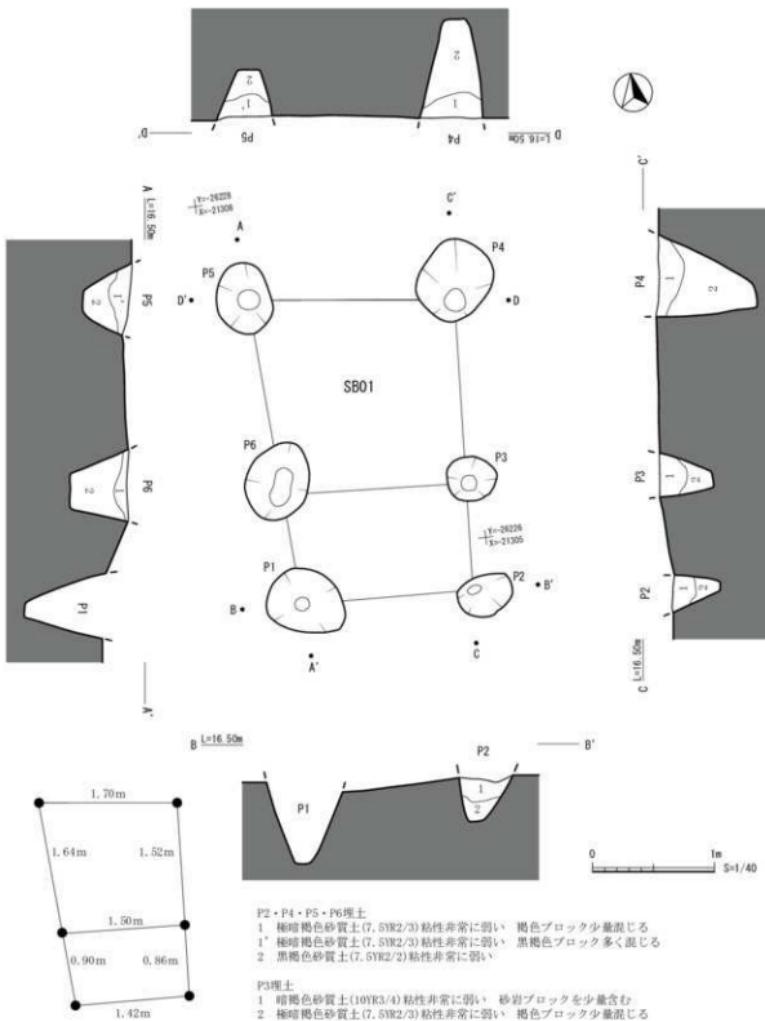


Fig.23 10区遺構配置図（古代）

古代

掘立柱建物 SBO1 (Fig.24)

R・4・5 グリッド上で検出した遺構。桁行2間×梁行1間であり、柱穴間がやや異なる。柱穴はいずれも平面形が円形で、柱根等の痕跡はみられない。主軸はほぼ真北に近く。



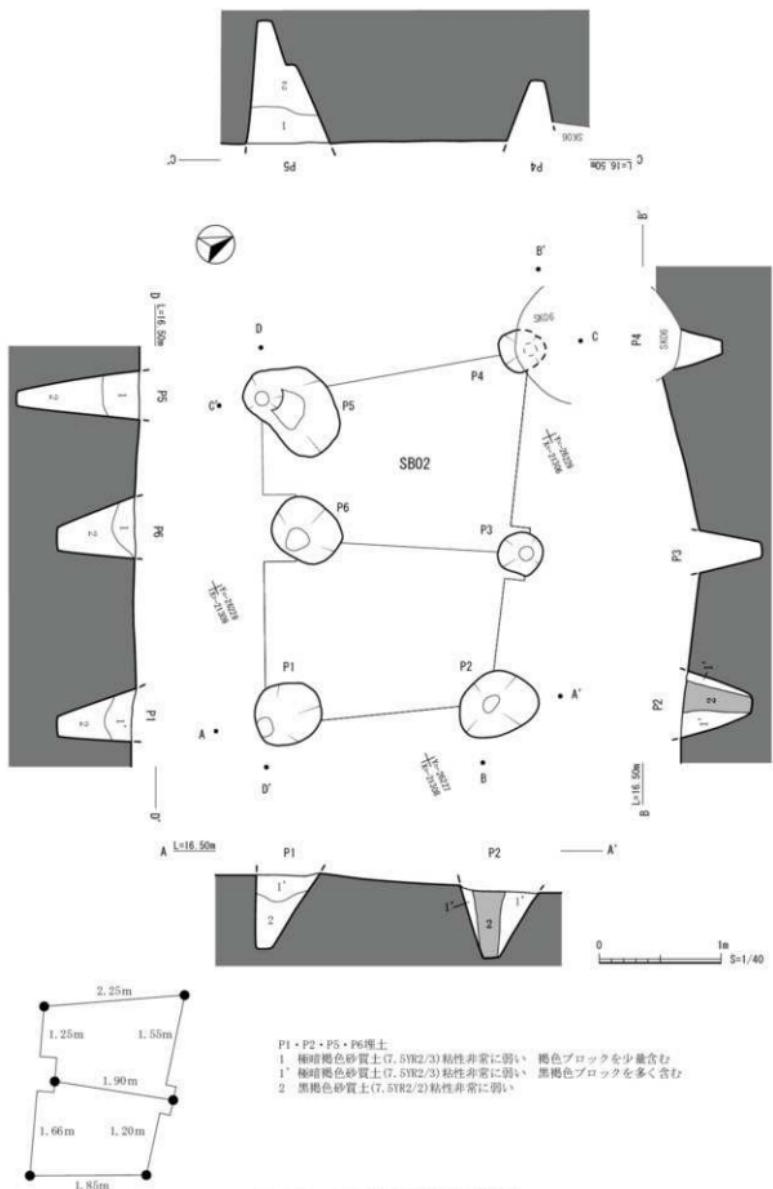


Fig.25 10区SB02平面・断面図

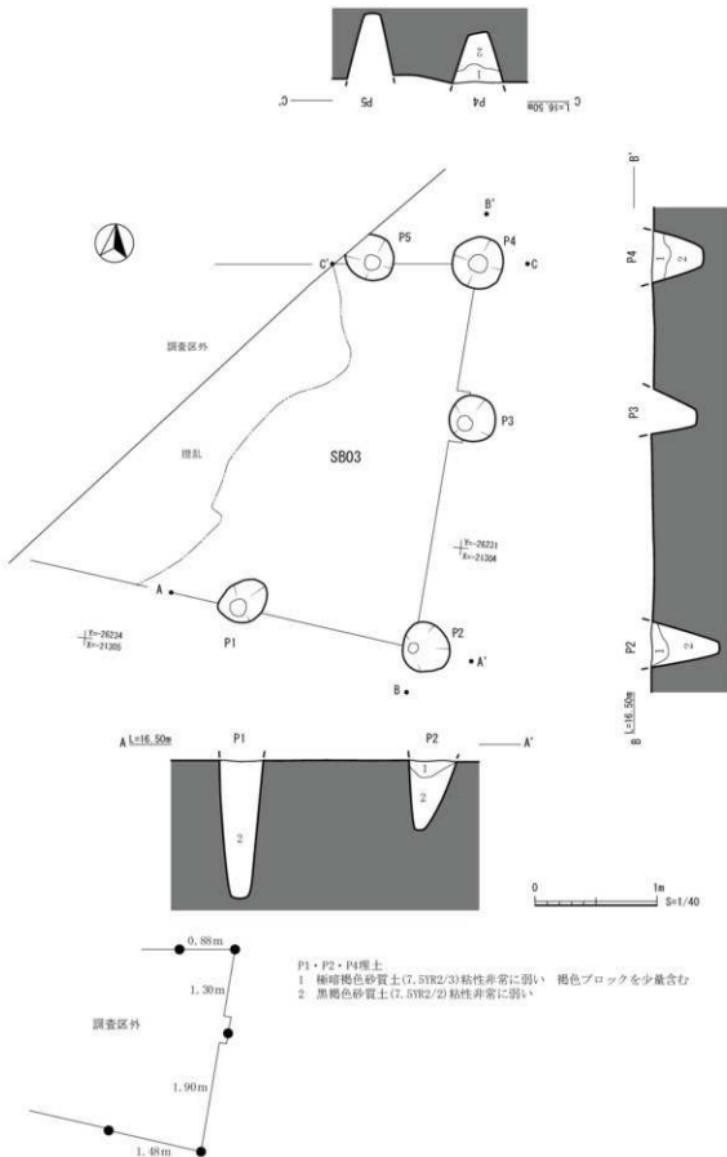


Fig.26 10区SB03平面·断面图

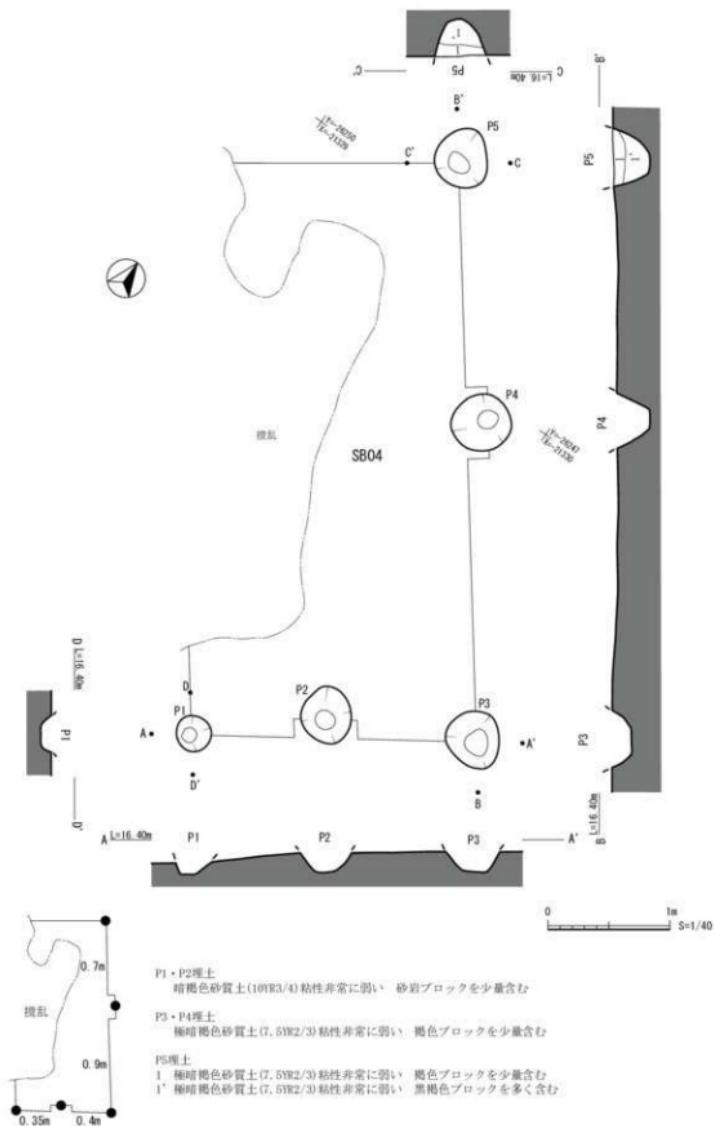


Fig.27 10区 SBO4 平面・断面図

掘立柱建物 SB02 (Fig.25)

R - 5 グリッド上で検出した遺構。ほかの掘立柱建物に比べ柱穴の掘方が深い。桁行 2 間 × 梁行 1 間であり、主軸は N - 62° - W を測る。

掘立柱建物 SB03 (Fig.26)

Q - 4 グリッド上で検出した遺構。柱穴間の距離及び配置に整合がとれない部分もあるが、調査時点で掘立柱建物と積極的に評価し調査を実施していることから、同遺構として報告する。桁行 2 間 × 梁行 2 間であるが、柱穴間がやや異なる。遺構が調査区間にあること、搅乱が多いことから、調査区外に遺構が延びるか若しくは搅乱により遺構が削平を受け消滅している可能性もある。

掘立柱建物 SB04 (Fig.27)

N - 9・10 グリッド上で検出した遺構。本遺構は柱穴の一部が搅乱により消滅しているが、桁行 2 間 × 梁行 2 間の規模を有するものと考えられる。主軸は N - 38° - W を測る。

溝 SD18 (Fig.28)

P・Q - 6・7 グリッド上で検出した遺構。本調査区のほぼ中央を南東方向から北西方向へと横断している。遺構深度は浅く、断面は逆台形を呈する。

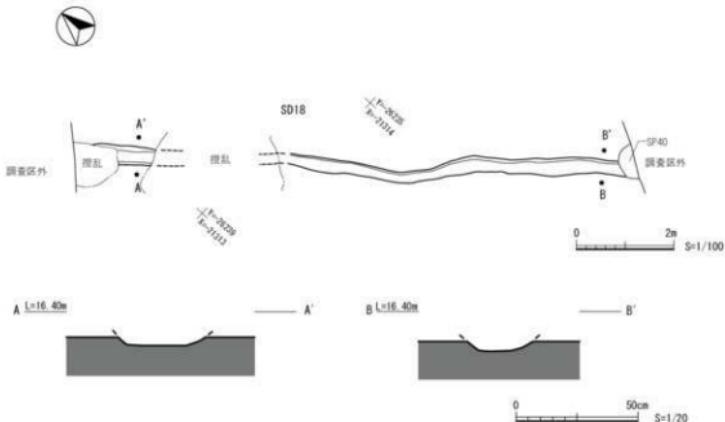


Fig.28 10区 SD18 平面・断面図

近世

溝 SD07 (Fig.29)

N～P・10・11 グリッド上で検出した遺構。北側は SD12 と合流し、南側は SD11 と合流する。基底面はほぼ平坦であるが、レベルから 3 cm～5 cm の高低差があり、北東から南西へ流れている可能性が高い。

溝 SD10 (Fig.29)

N～Q・8～10 グリッドから検出した遺構。調査区北東から南西方向に直し、南側で SD11 と交差する可能性があったが、搅乱により切り合い関係は不明である。遺構中位ほどで SD12 とも交差するが、調査時には切り合い関係は断面等で確認されておらず不明である。

溝 SD11 (Fig.30)

L～O・9～12 グリッドで検出した遺構。本遺構は現道と並行していること、隣接する白川と直行することから近代の遺構と判断される。埋土の状況も新しい状況を呈している。

溝 SD12 (Fig.30)

O・P・9・10 グリッド上で検出した遺構。西側で SD10 と交差する遺構。先述したが切り合い関係は不明である。本遺構は本調査区の他の遺構と比べ掘削深度が深く、掘方が逆台形に整形されている。北側に位置する SD17 が本遺構の残穴と考えられる。しかし、本稿では別遺構として報告している。

溝 SD13 (Fig.30)

Q・R・5・6 グリッド上で検出した遺構。SD12 とほぼ平行に検出している。遺構両端は調査区外に直進しており、全体規模は不明である。遺構断面は逆三角形で、中心部がやや狹まる。

溝 SD14 (Fig.29)

Q・R・4・5 グリッド上で検出した遺構。本調査区では SD10 と並行して検出された遺構。遺構北東部は調査区外に直進しており、全長は不明である。近世の栗石が敷かれた布基礎により切られている。

溝 SD15 (Fig.30)

R・5 グリッド上で検出した遺構。SD14 に隣接する。本調査区で検出した溝状の遺構と比べると幅が広く浅い。全体が検出されたわけではないことから、土坑となる可能性もある。

溝 SD16 (Fig.30)

R・5 グリッド上で検出した遺構。SD15 に切られ、わずかながら検出した遺構である。遺構両端が検出できている訳ではないことから土坑の可能性もあるが、調査時の所見で溝として報告する。SD14 と並行にであること、埋土が同じ状況であることから、同時期の遺構とも考えられる。断面形は残りが悪いせいか、やや不整形である。

溝 SD17 (Fig.29)

O・7・8 グリッド上で検出した遺構。本遺構の下端レベルが北に向かって低くなり、SD12 の下端レベルも同様状態を示していることから、先述したとおり SD12 を延長した位置上にあたる部分と考えられる。

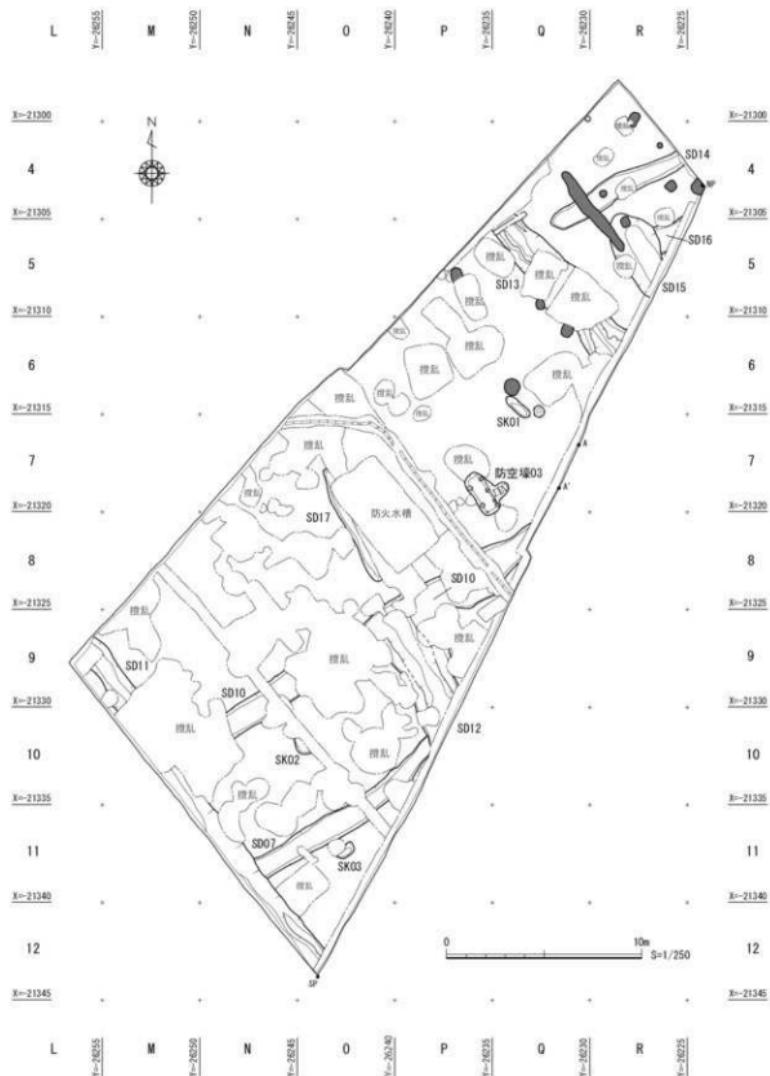


Fig.29 10区遺構配置図(近世・近代)

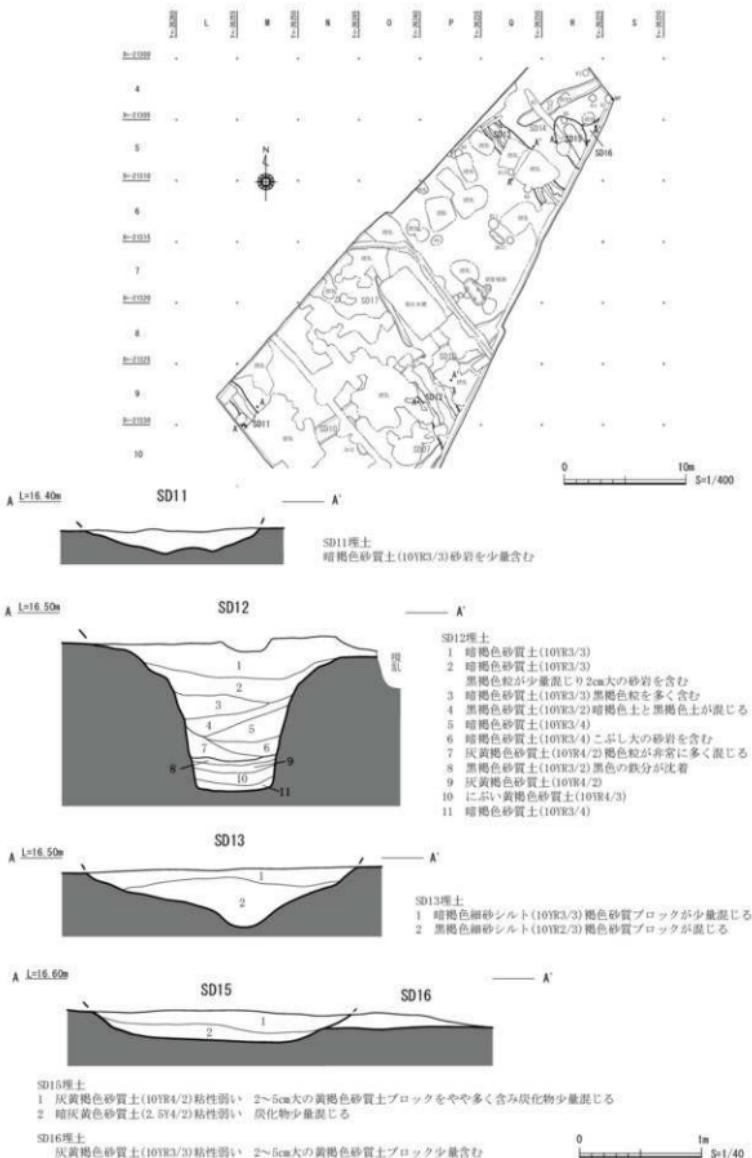


Fig.30 10区 SD11・12・13・15・16 平面・断面図

防空壕 03 (Fig.31)

P・Q・7・8 グリッド上で検出した遺構。近代の防空壕である。平面形は壕本体に対して、直角に三段からなる階段が取り付き、下端壁面際に小柱穴が並ぶ。下端は平坦。当該遺跡で検出した壕と比べるとやや小規模である。

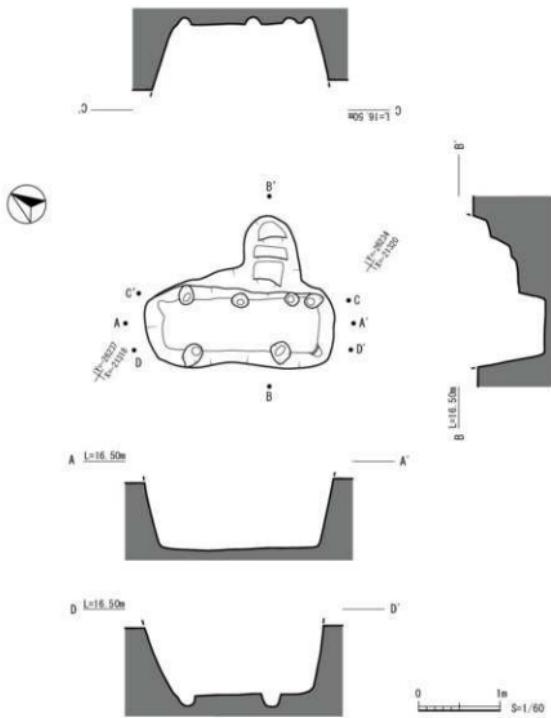


Fig.31 10区防空壕 03 平面・断面図

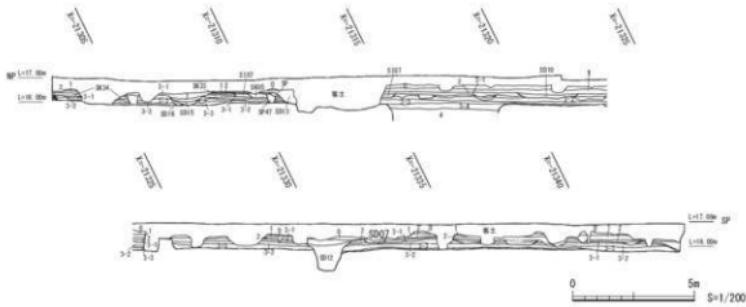


Fig.32 10区下層確認トレンチ土層断面図

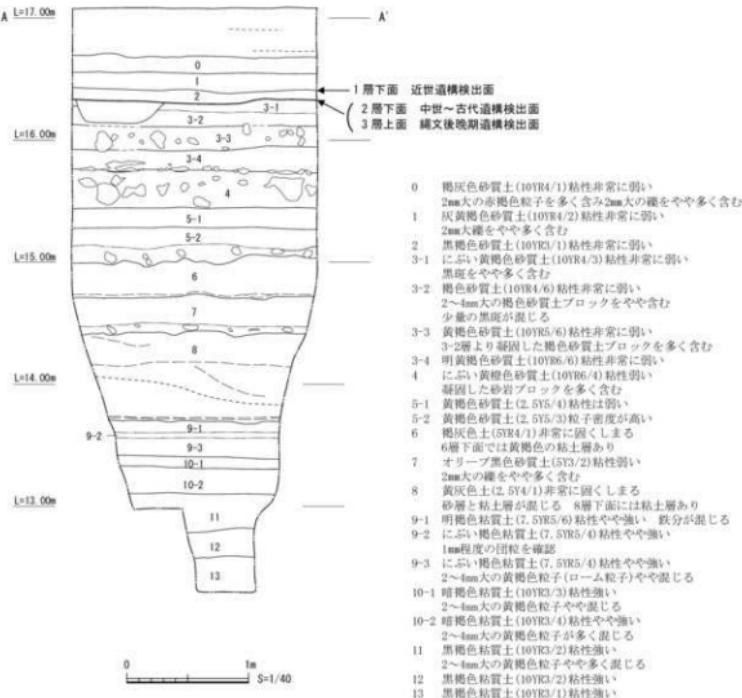


Fig.33 10区東壁土層断面図

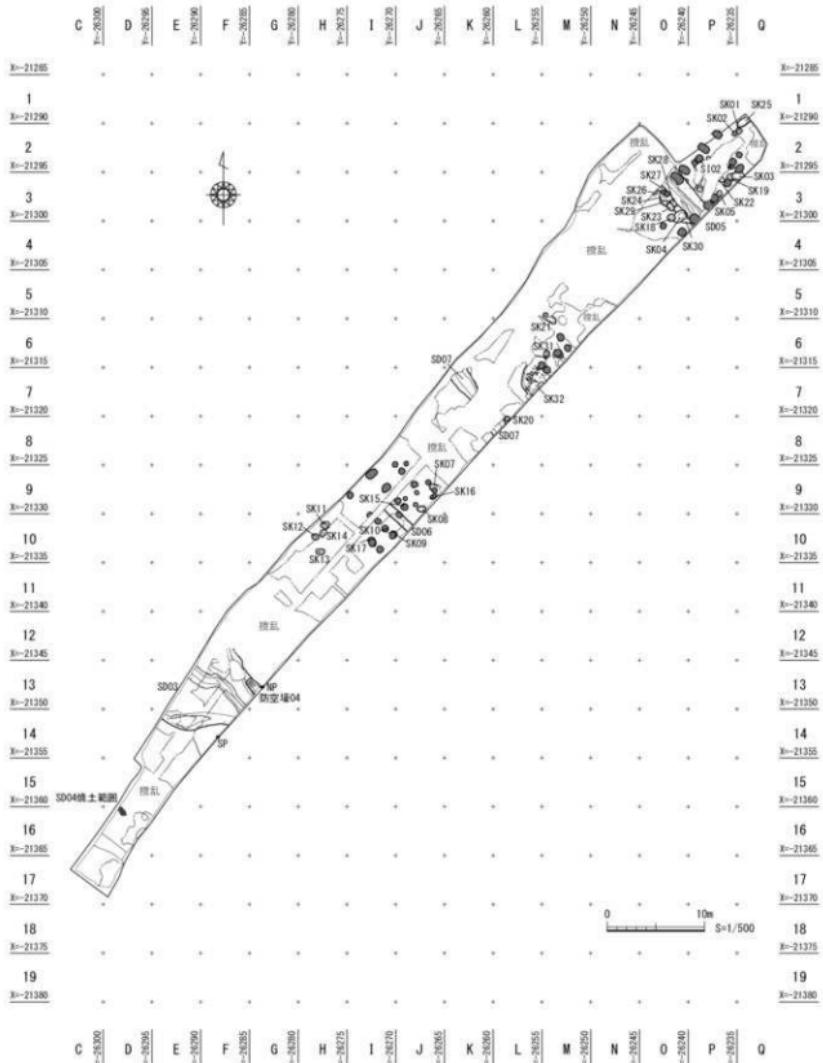


Fig.34 11 区 遺構配置図

11区

本調査区は、白川に沿って南北に調査を実施した調査区である。全長102.0mからなる細長い調査区であつた。調査区中央に国土交通省が設置した光ケーブルがあり切断している。検出した遺構は古代のものから近現代のものまであるが、縄文時代後期の遺物も多数出土している。しかし、搅乱等により元位置を保っているものは少ない。

縄文

土坑 SK32 (Fig.35, PL.14)

L・M・6・7グリッド上に位置する遺構。調査区のほぼ中央部に位置し、遺構の南東側は調査区外に位置する。

また、上端の1/3を搅乱により削平されていることから遺構の性格を分かりづらくしている。遺構壁は緩やかな弧を描き立ち上がることから、土坑と判断した。遺構内に炉等、焼土の分布も見られないことから、土坑としての位置づけで良いと判断した。出土遺物は床面直上よりものではないが、埋土中から縄文晩期の粗製土器の一部が出土している。

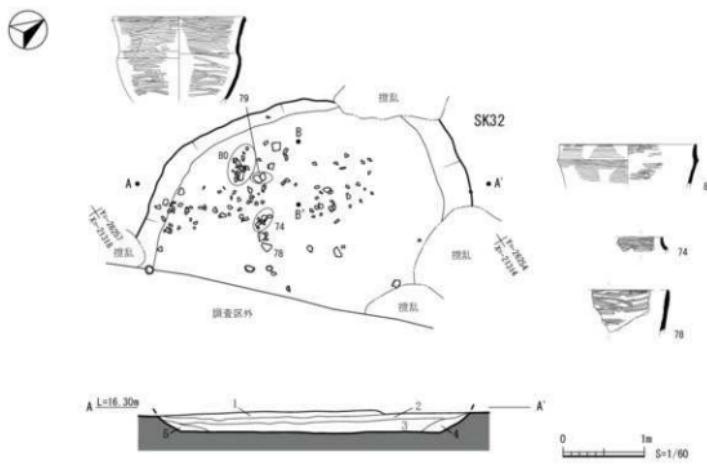


Fig.35 11区 SK32 平面・断面図

古代

竪穴建物 S102 (Fig.36)

O・P-3・4 グリッド上に位置する遺構。方形を呈する竪穴建物であるが、中央を SD05 に、周囲を多数の柱穴・土坑・擾乱により切られ、全体形を復元することはできない。遺構の南東端は、調査区の外に延びる。下端からは柱穴を 2 基検出している。遺構隅に位置することから、古代末頃の小型竪穴建物と判断した。柱穴以外の施設は確認できていない。

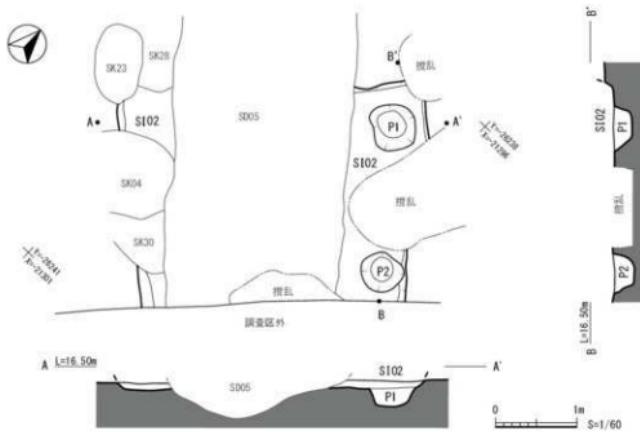


Fig.36 11区 S102 平面・断面図

近世

溝 SD03 (Fig.37, PL.15)

E・F-13・14 グリッド上に位置する遺構。平面形からは小規模な遺構の集合とも見て取れるが、土層断面からは規模の大きな 1 本の溝である。土層は水平堆積による堆積状況を呈しており、人為的に埋められた痕跡は見て取れない。北西に向かい広がることから、溝状の遺構としての性格は不明である。

溝 SD05 (Fig.38)

O・P-3・4 グリッド上で検出した遺構。10 区の SD13 と同一遺構と考えられる。検出当初は近世の遺構として調査したが、古代の遺物しか出土しないこと、埋土が古代の遺構埋土と類似することから古代の溝と判断した。

溝 SD06 (Fig.34)

I・J-9・10 グリッド上で検出した遺構。調査区内で検出した長さは 3.2 m、幅は 0.85 m のみである。検出面からの深さは 7.0 cm で遺構深度も浅く、遺構の性格を抑えるまでには至っていない。遺構の上端と下端との間には差がなく、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。断面から観察される土からは排水路等を示すような土が検出されていないことから、区画溝の一つであった可能性が高い。

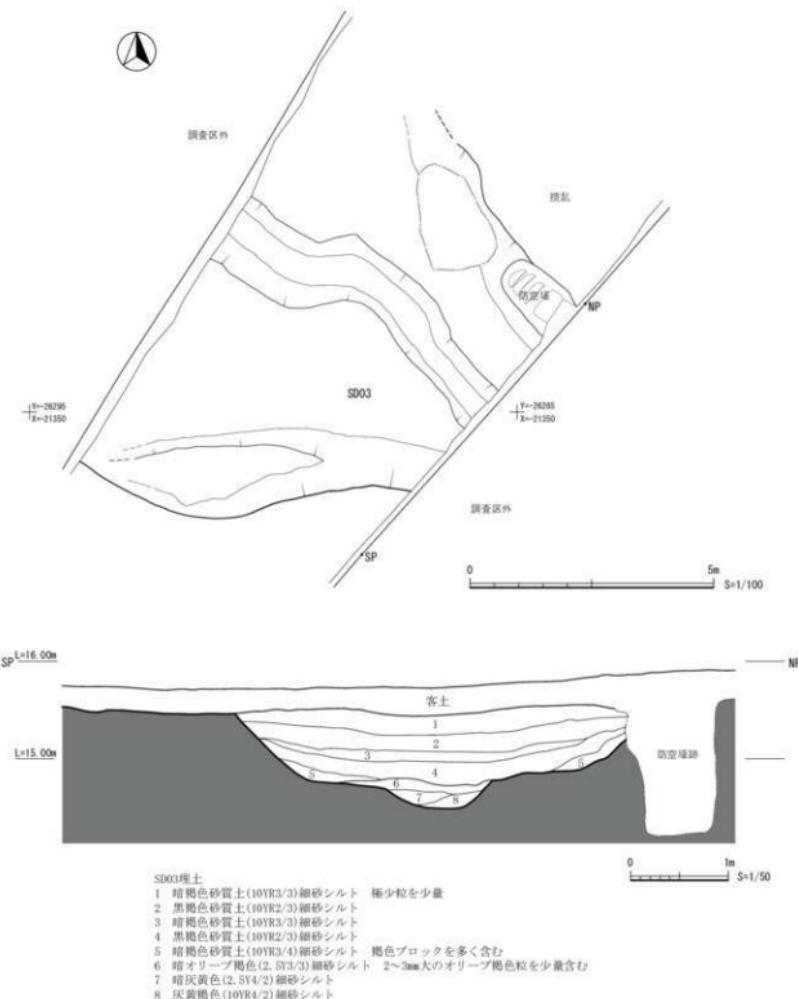


Fig.37 11区 SD03 平面・断面図

溝 SD07 (Fig.38)

K・L・7・8グリッドで検出した遺構。10区SD11から続いている遺構と判断される。本調査区では遺構の中央部を擾乱により切られているが、壁際溝まで続いている。遺構規模は検出長7.0m、幅1.8m、検出面からの深度は平均40.0cmで、下端付近は平坦である。下端で露出している岩盤は、砂岩質のキメの細かな岩質であり、風化が著しく、当該地付近では一般的に河川段丘上に見られるものである。

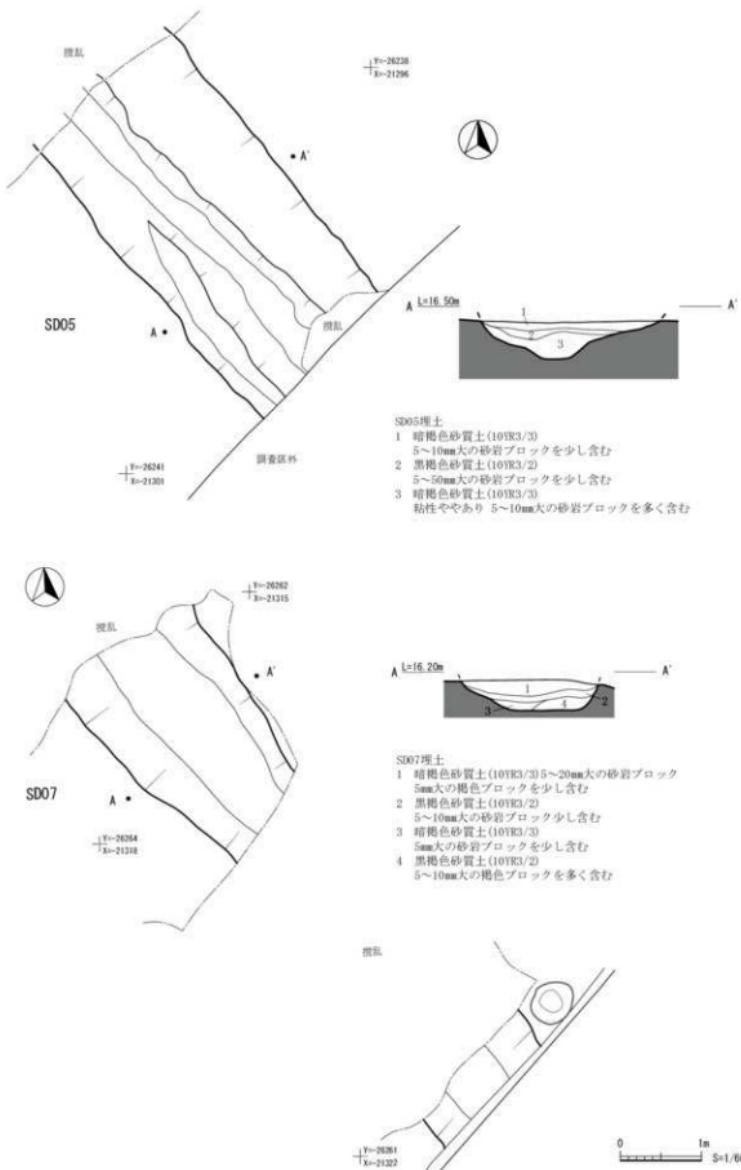


Fig.38 11区 SD05・07 平面・断面図

近代

防空壕 04 (Fig.39)

F・G - 13 グリッド上で検出した遺構。遺構は SD03 を切る状態で検出している。壕本体は調査区外にあり、調査区内では階段部のみの検出となった。よって、壕の形態は直線状に入るタイプか、直角に取り付くものかは不明である。

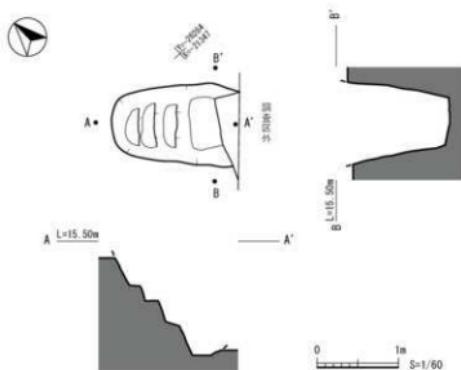


Fig.39 11 区防空壕 04 平面・断面図

12 区

本調査区は、標高 16.0m 上に位置する。他の調査区同様近現代の搅乱が多く、検出した遺構はその多くが遺構上部の削平、若しくは一部が切られている状態で検出した。

古代

竪穴建物 SI01 (Fig.41, PL.15)

H・I - 23 グリッド上で検出した遺構。四方を搅乱により切られるが、遺構の規模等は確認できた。遺構の北西、南東部に壁面の立ち上がりがあり、残された土層においても他の竪穴建物と同様の埋土が確認されたことから、古代の竪穴建物遺構と判断した。

この地域の古代の竪穴建物に付属するカマドは、北側に作り付けられることが多いが、本遺構では、壁面近くの残存状況が悪いことから、確認できていない。遺構の主軸は、N - 6° - E を測る。

竪穴建物 SI02 (Fig.41)

G・H - 22・23 グリッドで検出した遺構。南側を SD01 により切られていることから遺構の残存状態は非常に悪く、平面形から竪穴建物として確認することは困難であったが、残された土層が SD01 同様古代の遺構と同じであったことから、古代の竪穴建物と判断した。残存状態が悪いため主軸等は確認できていない。

溝 SD01 (Fig.42)

G～I - 22・23 グリッド上で検出した遺構。調査区の北側に位置し、南東から北西にかけて検出した。検出長は 12.6m を測る。遺構下端は平坦を成すが、やや北西側に向かい傾斜する。

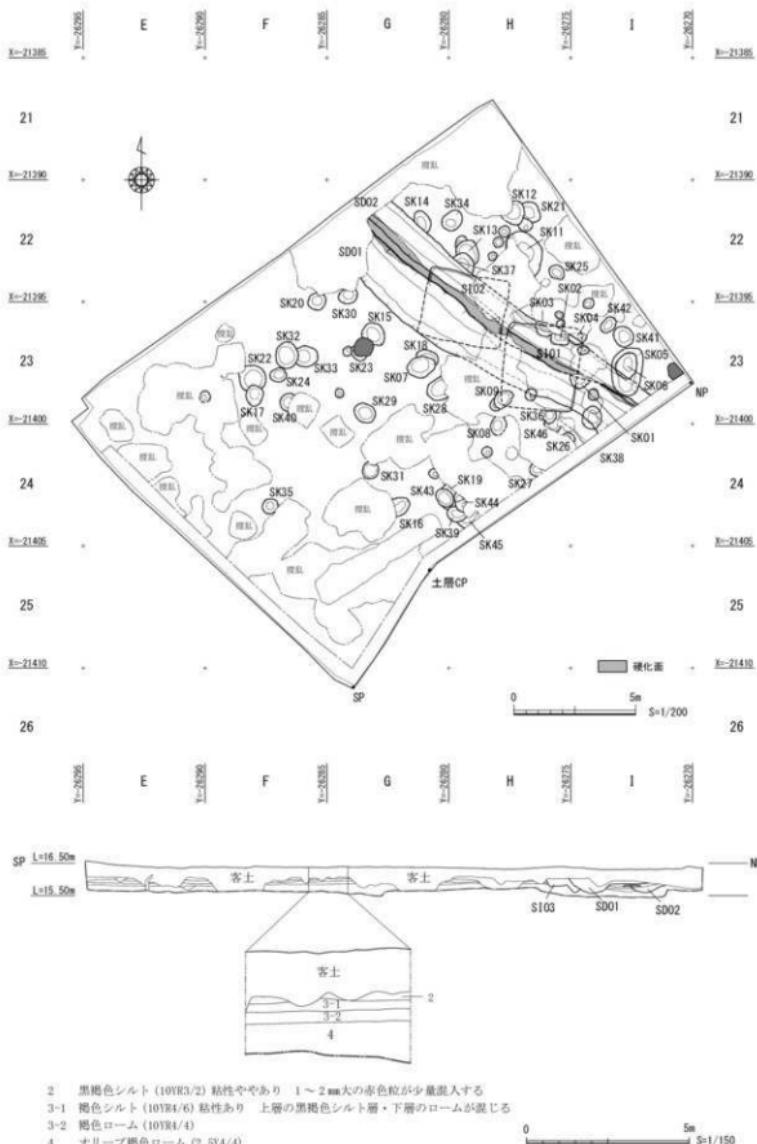
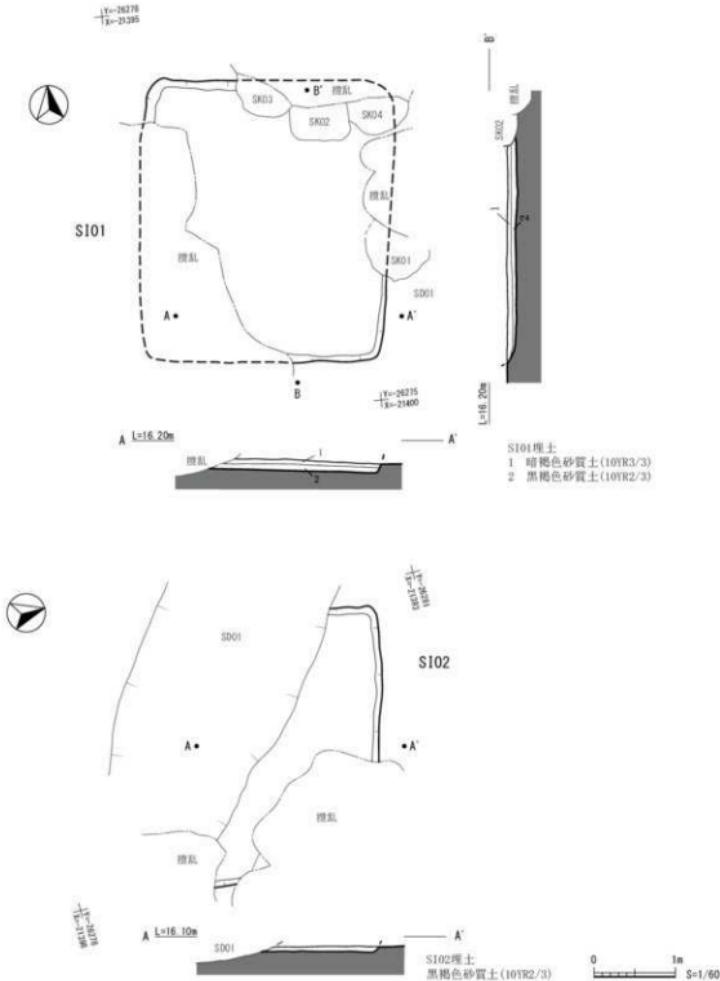


Fig.40 12区遺構配置図・調査区南壁土層断面図

溝 SD02 (Fig.42)

G ~ 1 - 22・23 グリッドで検出した遺構。調査区の南東から北西にわたり検出した。溝端部は両端とも検出できとはいえない。溝 SD01、道路状遺構 SF01 と並行して検出している。特に道路状遺構 SF01 は本遺構と掘方を共有している可能性が高い。SD01 によって切られていることから SF01 及び SD02 の本来の幅が分からぬが、当時の姿を復元すると SF01 を中心に SD02 が側溝部であった可能性もある。残されている土層断面及び調査の成果からはこれ以上観察することはできなかった。本遺構埋土からは、9世紀第一四半期の土師器梶（94）が出土している。



道路状遺構 SF01 (Fig.42)

G～I - 12・22・23 グリッド上に位置する遺構。調査区の南東から北西に向かい検出した。上端の一部を先述する SD01 により切られる。本遺構内からは、硬化面が確認されていることから、遺構が埋まる過程で一時的に道路として二次使用されていたことが窺える。硬化面の一面目は溝状遺構の最下部、その後、1層の間層を挟み、もう一面確認している。硬化面の確認の状態から、小規模なもので、官道等の幹線道路としての遺構ではない。

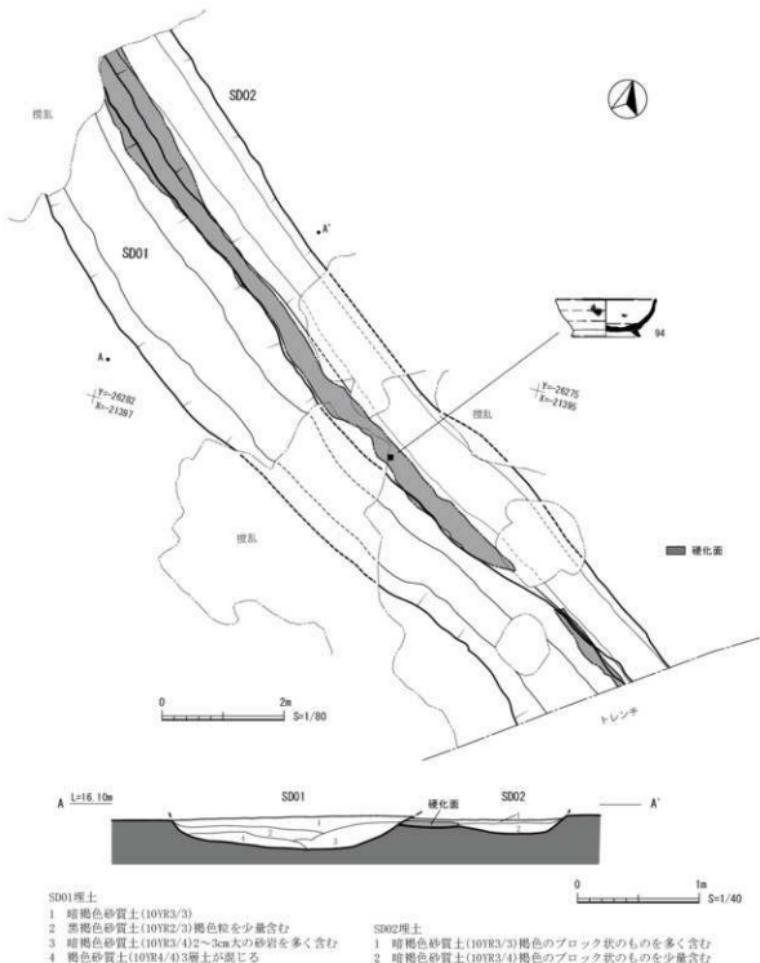


Fig.42 12区 SD01・02 平面・断面図

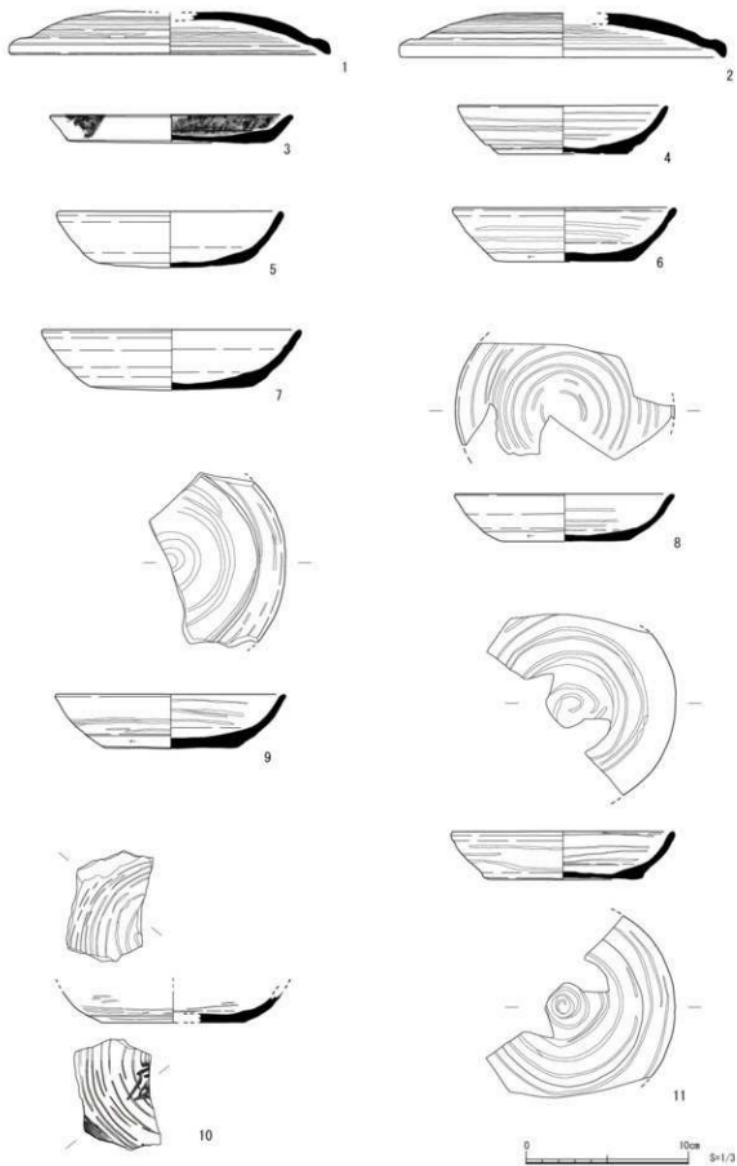


Fig.43 8区 SI01 出土遺物実測図-①

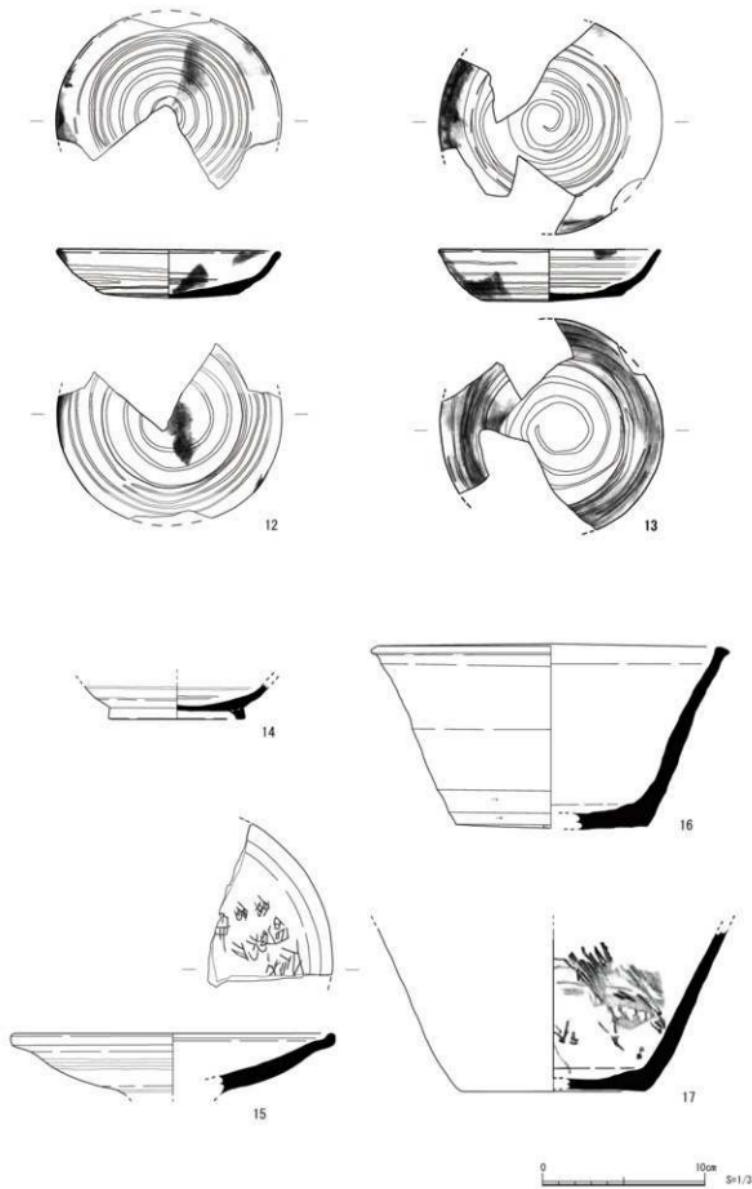


Fig.44 8区 S101 出土遺物実測図-②

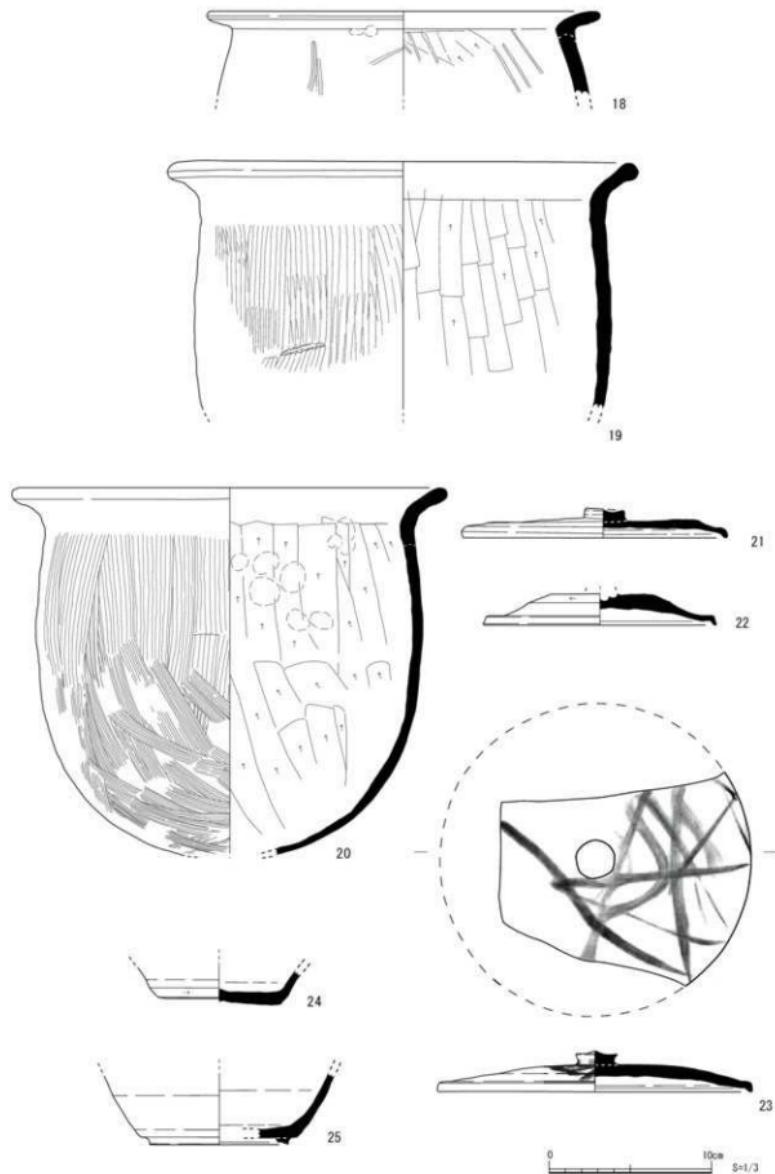


Fig.45 8区 SI01 出土遺物実測図-③

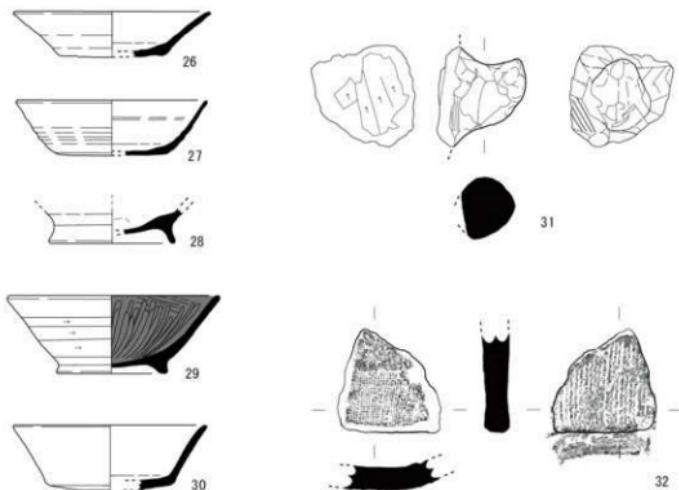


Fig.46 8区 SD02 出土遺物実測図(古代)

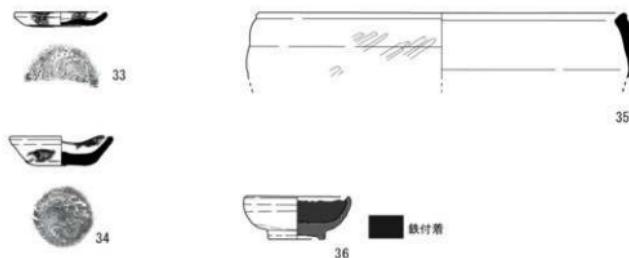


Fig.47 8区 SD01 出土遺物実測図(近世)



Fig.48 9区 SD03 出土遺物実測図

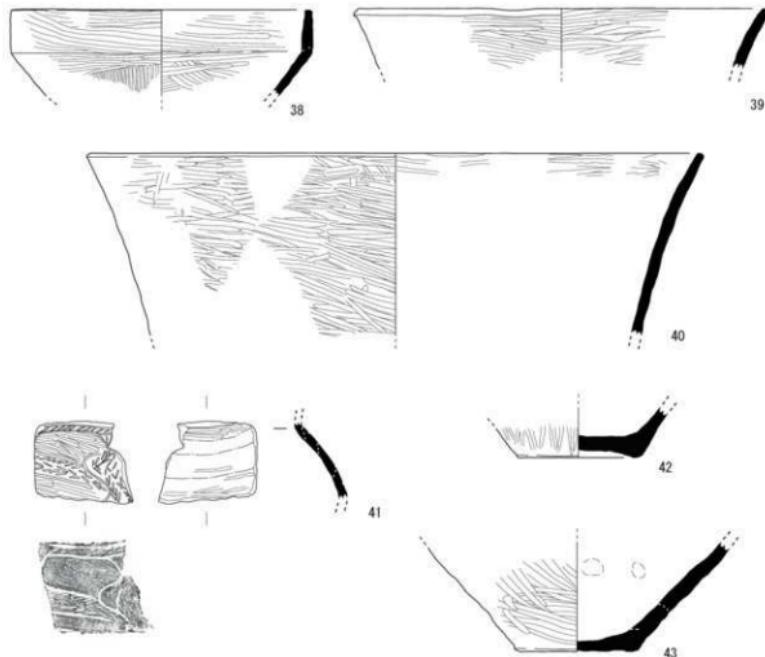


Fig.49 10区S103出土遺物実測図

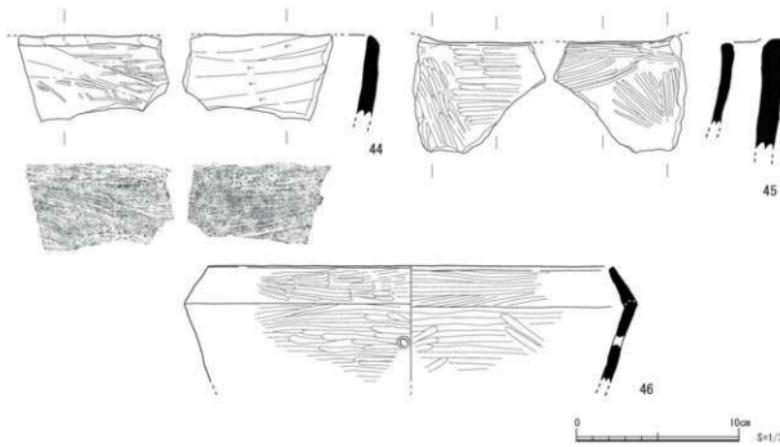


Fig.50 10区S104出土遺物実測図

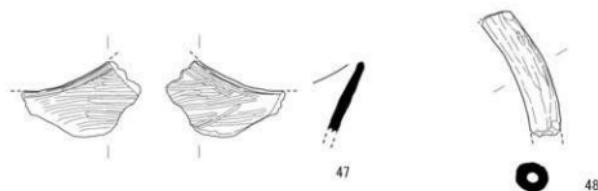
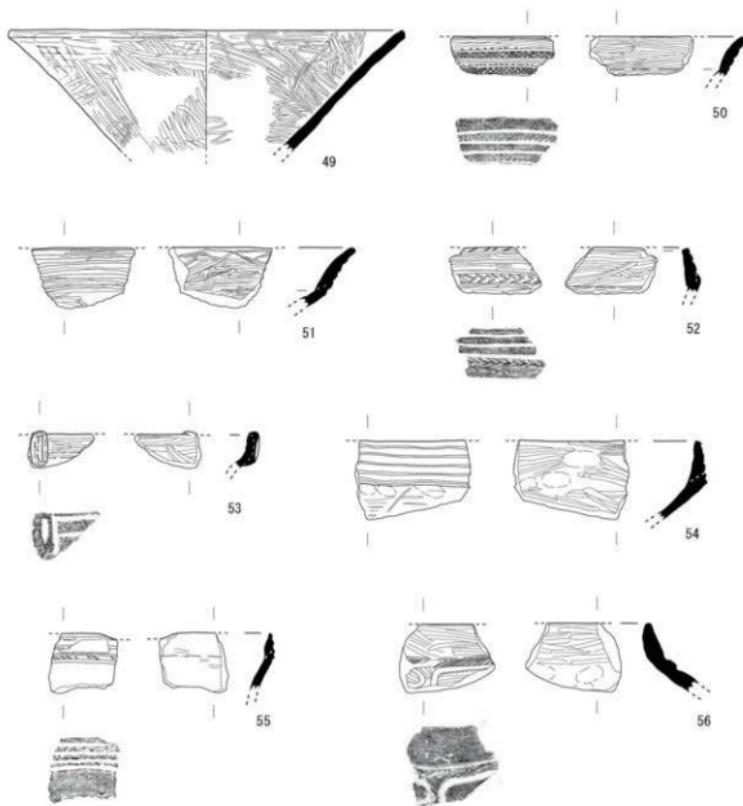


Fig.51 10区 SI08 出土遺物実測図



0 10cm 5:1/3

Fig.52 10区 SK32 出土遺物実測図-①

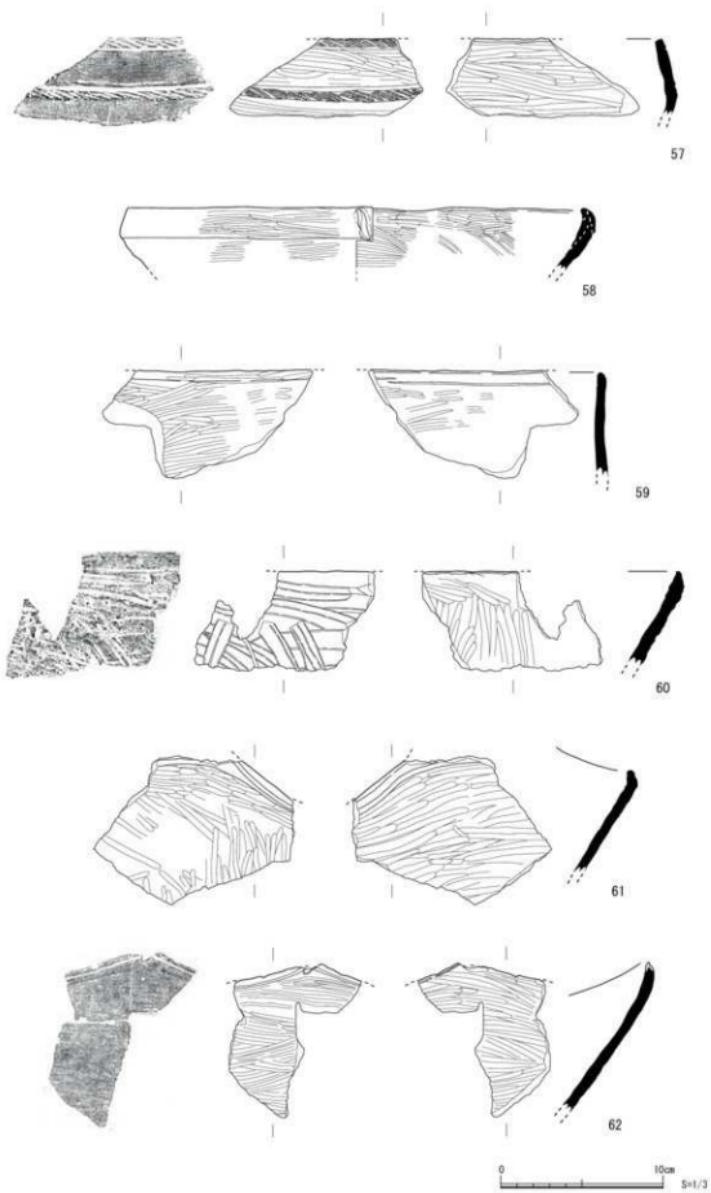


Fig.53 10区SK32出土遺物実測図-②

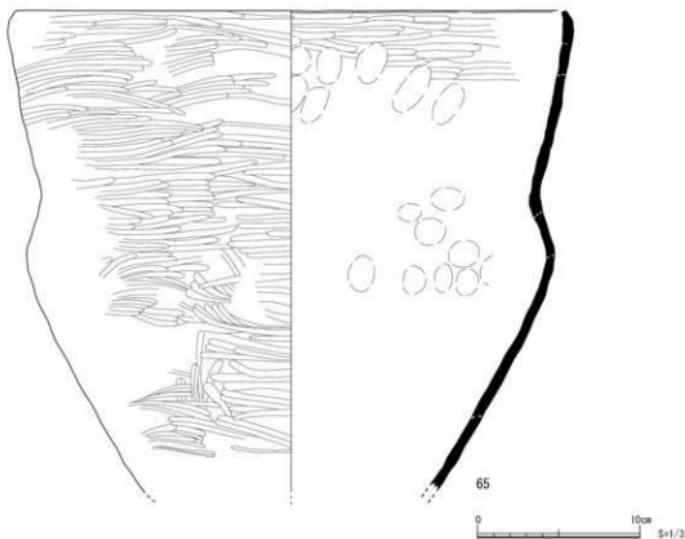
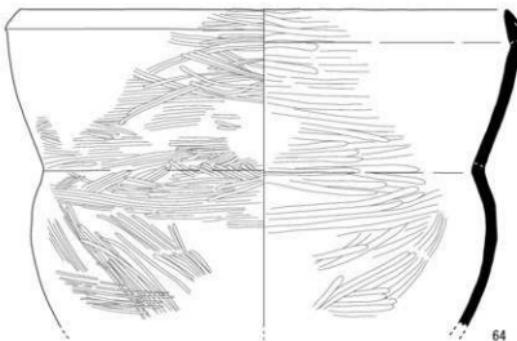
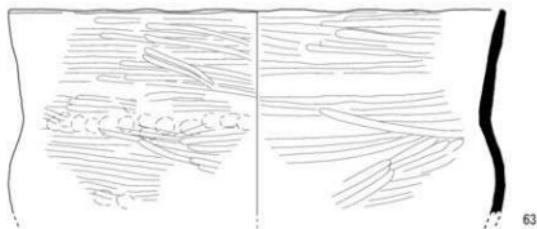


Fig.54 10区 SK32 出土遺物実測図-③

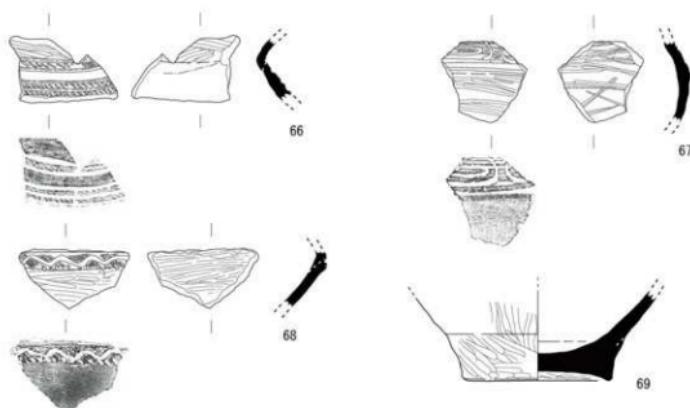
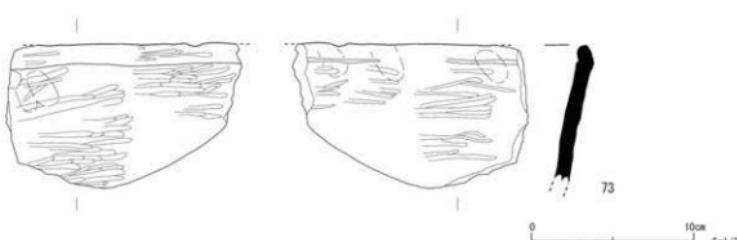
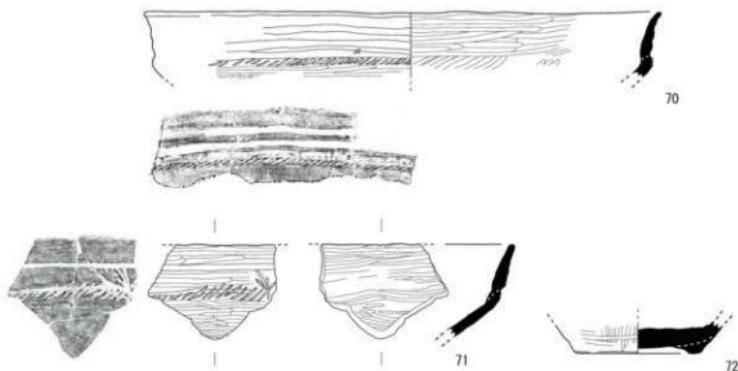


Fig.55 10区 SK32出土遺物実測図-④



0 10cm 5=1/3

Fig.57 10区 SK34出土遺物実測図

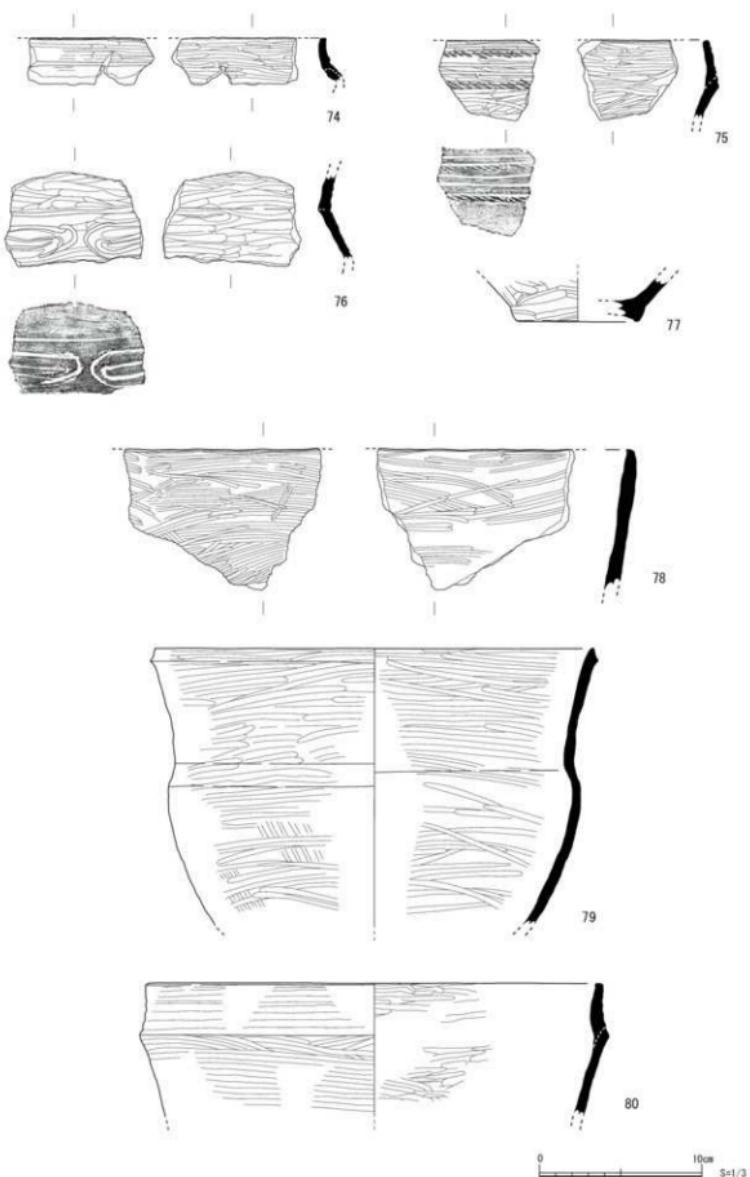


Fig.58 11区 SK32 出土遺物実測図

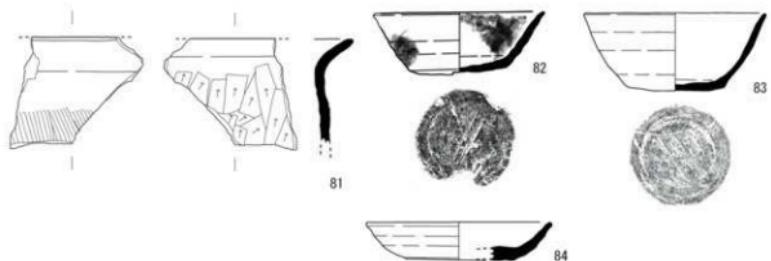


Fig.59 11区 SI02 出土遺物実測図

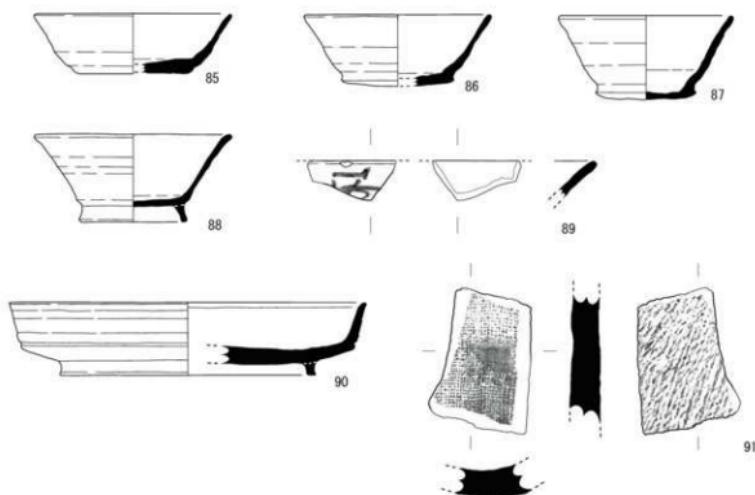


Fig.60 11区 SD04 出土遺物実測図

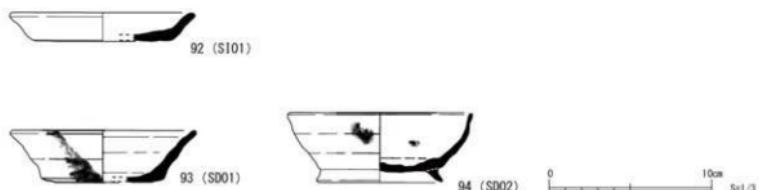


Fig.61 12区 SI01、SD01・02 出土遺物実測図

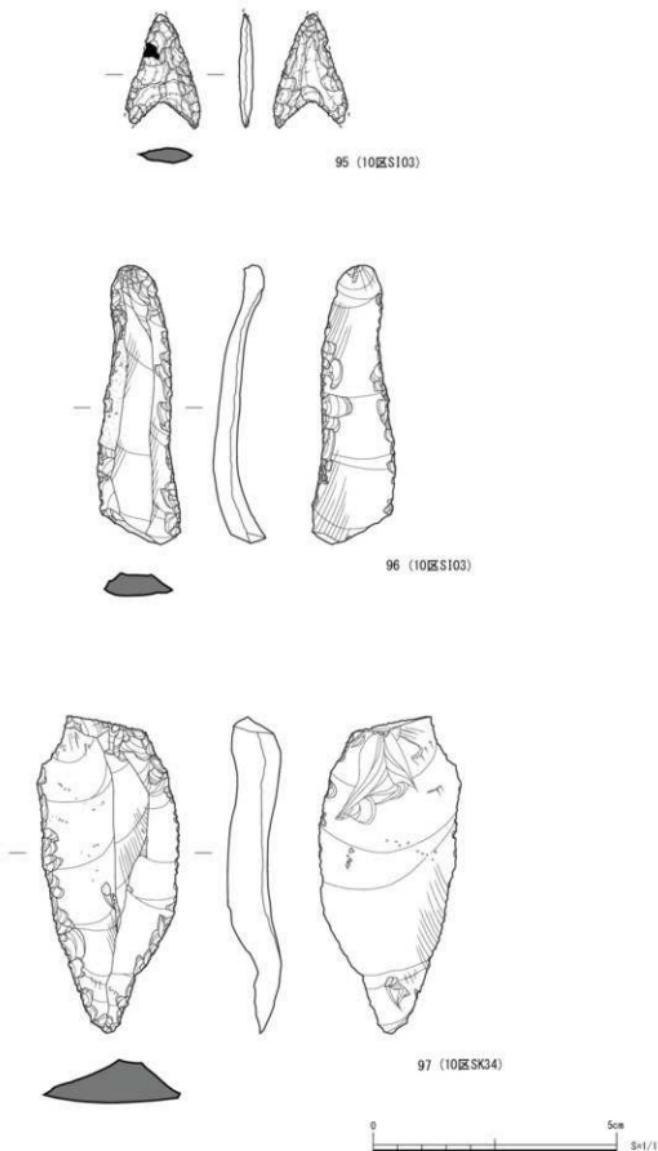


Fig.62 石器実測図一①

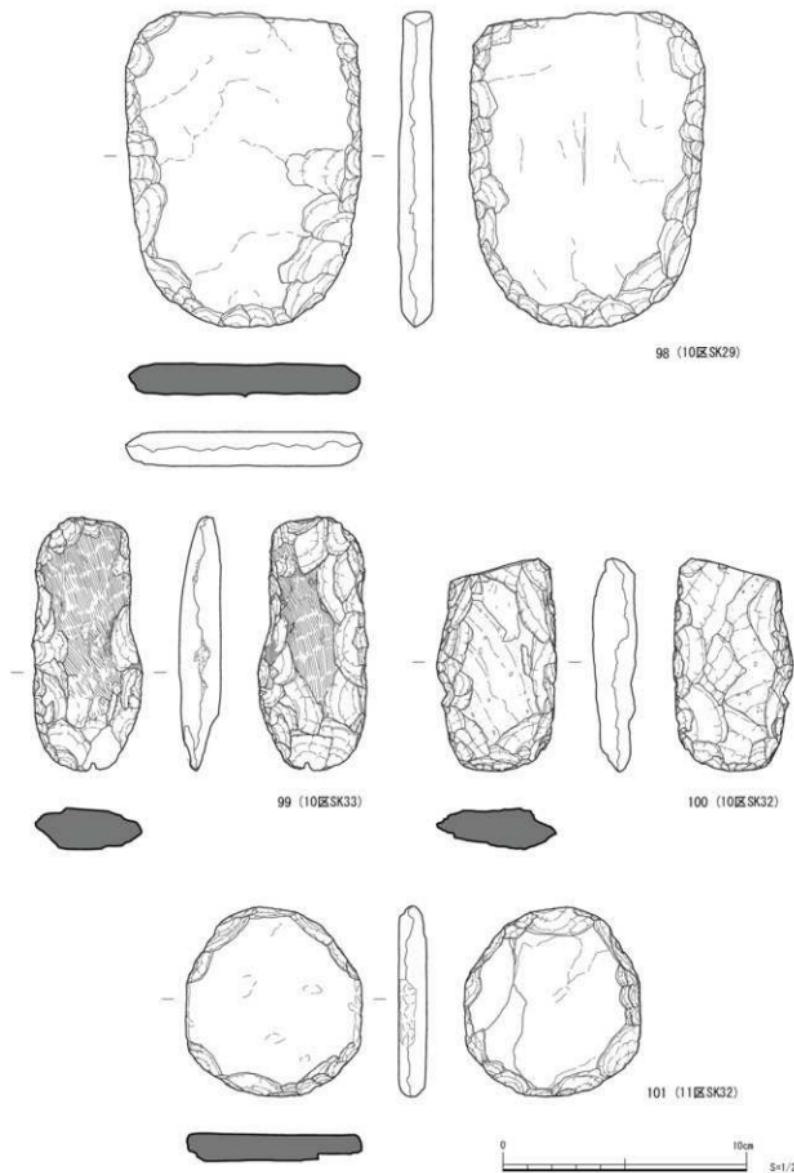


Fig.63 石器実測図-②

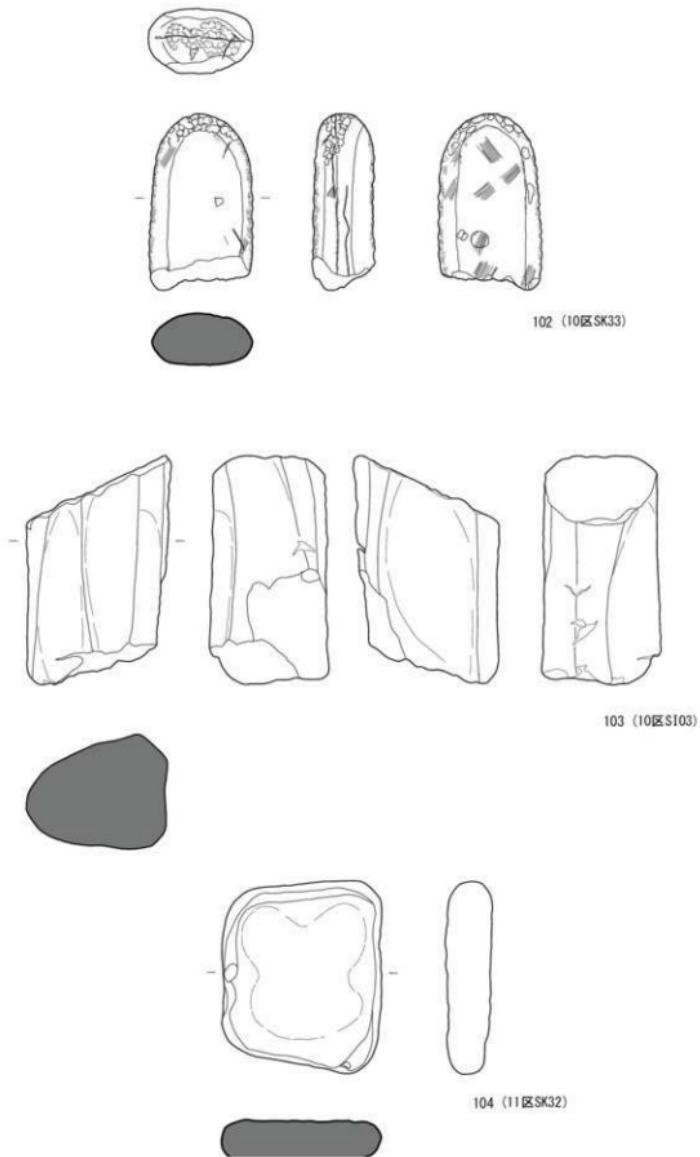


Fig.64 石器実測図-③

遺物 番号	堆団 番号	写真 番号	遺構番号	種別	基種	法量 (cm)				色調		胎土		
						口径	底径	最大 胴径	器高	外面	内面			
8区														
1		4	SI01	土師器	蓋	(19.8)	-	-	(2.7)	橙 2.5YR6/6	橙 2.5YR6/6	微細砂粒		
2	16	SI01	土師器	蓋	(20.2)	-	-	(2.7)	橙 5YR6/6	明赤褐色 2.5YR5/6	長石、角閃石			
3	17	SI01	土師器	皿	15.0	12.7	-	1.8	にぶい褐色 7.5YR5/3	灰褐色 7.5YR4/2	雲母、砂粒			
4	4	SI01	土師器	杯	(13.0)	(8.0)	-	3.0	橙 5YR6/6	橙 7.5YR7/6	長石、赤褐色粒、砂粒			
5	16	SI01	土師器	杯	(14.0)	(9.0)	-	3.5	にぶい橙 5YR7/4	橙 7.5YR7/6	微細砂粒			
6	43	18	SI01	土師器	杯	(13.8)	(8.6)	-	3.4	にぶい橙 7.5YR7/4	橙 5YR6/6	長石、角閃石		
7	4	SI01	土師器	杯	(16.0)	(10.0)	-	3.7	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	角閃石、赤褐色粒 砂粒			
8	16・17	4	SI01	土師器	杯	13.6	8.0	-	2.9	にぶい橙 7.5YR7/4	橙 2.5YR6/6	長石、雲母、砂粒 褐色粒		
9		16・18	SI01	土師器	杯	(14.2)	(8.2)	-	3.4	にぶい黃橙 10YR7/4	にぶい黃橙 10YR7/4	長石、石英、角閃石 雲母、砂粒		
10	16・17	4	SI01	土師器	杯	-	(8.8)	-	(1.9)	橙 2.5YR7/6	橙 2.5YR6/6	長石、砂粒、白色粒		
11	16・18	4	SI01	土師器	杯	(13.8)	(9.9)	-	3.0	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	雲母、砂粒、黑色粒		
12		4・16	SI01	土師器	杯	13.8	8.3	-	3.1	橙 2.5YR6/6	橙 2.5YR6/6	砂粒、黑色粒		
13		17・18	SI01	土師器	杯	13.7	8.3	-	3.2	にぶい橙 5YR6/4	にぶい橙 5YR7/4	長石、砂粒		
14		-	SI01	土師器	椀	-	(8.4)	-	(2.2)	橙 5YR6/6	黃橙 7.5YR7/6	長石、砂粒、白色粒		
15		44	SI01	土師器	高杯	(20.0)	-	-	(3.8)	橙 5YR6/6	にぶい黃橙 10YR6/4	長石、角閃石、輝石 砂粒		
16		16	SI01	土師器	鉢	22.0	(11.8)	-	11.4	にぶい橙 7.5YR7/3	にぶい橙 7.5YR7/6	角閃石、砂粒		
17		18	SI01	土師器	鉢	-	(11.2)	-	(10.0)	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	雲母、砂粒		
18			SI01	土師器	甕	(24.2)	-	-	(5.2)	にぶい黃橙 10YR6/4	にぶい黃橙 10YR6/4	長石、石英、角閃石 砂粒		
19			SI01	土師器	甕	(29.0)	-	-	(15.3)	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/3	石英、角閃石、砂粒		
20		4	SI01	土師器	甕	(26.8)	-	(23.7)	(22.6)	浅黃橙 7.5YR8/4	橙 7.5YR7/4	長石、角閃石、雲母 砂粒、小石粒		
21		16	SI01	須恵器	蓋	16.4	-	-	1.8	灰オリーブ 5Y6/2	灰オリーブ 5Y6/2	微細砂粒		
22		19	SI01	須恵器	蓋	14.4	-	-	(1.9)	黄灰 2.5Y5/1	灰黄 2.5Y6/2	角閃石、砂粒		
23			SI01	須恵器	蓋	(19.4)	-	-	2.5	灰黄 2.5Y6/2	灰黄 2.5Y6/2	微細砂粒		
24			SI01	須恵器	杯		(7.6)	-	(2.2)	灰 7.5Y6/1	灰 5Y6/1	角閃石、小石粒 白色粒		
25			SI01	須恵器	杯	-	(8.6)	-	(4.4)	灰 10Y5/1	灰 10Y5/1	砂粒、白色粒		
26		20	SD02	土師器	杯	(12.2)	(6.4)	-	2.8	にぶい橙 7.5YR8/4	にぶい橙 7.5YR6/6	砂粒、黑色粒		
27			SD02	土師器	杯	(11.8)	(7.0)	-	3.5	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	角閃石、雲母、砂粒		
28		-	SD02	土師器	椀	-	7.8	-	(2.2)	にぶい黃橙 10YR6/3	橙 5YR6/6	雲母、赤色酸化粒 小石粒		
29		20	SD02	黒色土器	椀	13.1	6.9	-	4.8	にぶい黃橙 10YR7/3	黑 5Y2/1	長石、雲母、砂粒		
30			SD02	須恵器	杯	(12.0)	(8.0)	-	4.0	灰オリーブ 5Y6/2	灰オリーブ 5Y6/2	微細砂粒、白色粒		
31		-	SD02	土師器	甕	-	-	-	(6.1)	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	長石、石英、角閃石 雲母、赤色酸化粒 白色粒、小石粒		
32		20	SD01	土師器	小皿	5.7	4.3	-	0.9	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	微細砂粒		
33		47	SD01	土師器	小皿	(6.4)	(3.6)	-	1.8	にぶい黃橙 10YR7/3	にぶい黃橙 10YR7/3	長石、雲母、砂粒		
34		-	SD01	土師器	鉢	(22.8)	-	(24.0)	(4.1)	にぶい黃橙 10YR6/4	にぶい黃橙 10YR7/4	微細砂粒		
35		20	SD01	陶器	杯	6.3	3.5	-	2.7	(胎)	(胎)	胎土		
36			SD03	土師器	小皿	(9.4)	(5.2)	-	2.1	にぶい黃橙 10YR7/4	明黃褐 10YR6/2	微細砂粒		
9区														
37	48	20	SD03	土師器	小皿	(9.4)	(5.2)	-	2.1	にぶい黃橙 10YR7/4	にぶい黃橙 10YR7/4	石英、雲母、砂粒 赤色粒		

Tab. 3 遺物觀察表-①

調整				備考	遺物 番号
外器面	内器面	外底面	内底面		
横ナデ、回転ヘラ磨き	横ナデ、回転ヘラ磨き	-	-	内・外面口縁端墨付着	1
横ナデ、回転ヘラ磨き	横ナデ、回転ヘラ磨き	-	-	内・外面赤彩	2
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	(灯明皿) 内・外面に油煙 内・外面赤彩	3
横ナデ、回転ヘラ磨き	横ナデ、回転ヘラ磨き	ヘラ切り	ナデ	外底面を除き赤彩	4
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	内・外面赤彩	5
横ナデ、回転ヘラ磨き	横ナデ、回転ヘラ磨き	回転ヘラ磨き	横ナデ、回転ヘラ磨き	内・外面赤彩 (外底面を除く)	6
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ		7
横ナデ	横ナデ、回転ヘラ磨き	ヘラ切り	回転ヘラ磨き	内・外面赤彩	8
横ナデ、回転ヘラ磨き	回転ヘラ磨き	回転ヘラ磨き	ナデ	内・外面赤彩 (外底面除く)	9
回転ヘラ削り 回転ヘラ磨き	横ナデ、回転ヘラ磨き	回転ヘラ削り 回転ヘラ磨き	横ナデ、回転ヘラ磨き	内・外面赤彩 外底面墨書き (削)	10
横ナデ、回転ヘラ磨き	横ナデ、回転ヘラ磨き	回転ヘラ磨き	横ナデ、回転ヘラ磨き	内・外面赤彩	11
横ナデ、回転ヘラ磨き	横ナデ、回転ヘラ磨き	回転ヘラ磨き	横ナデ、回転ヘラ磨き (灯明皿)	内・外面に油煙	12
横ナデ、回転ヘラ磨き	横ナデ、回転ヘラ磨き	回転ヘラ磨き	横ナデ、回転ヘラ磨き (灯明皿)	内・外面に油煙 全面赤彩	13
横ナデ、回転ヘラ磨き	横ナデ、回転ヘラ磨き	回転ヘラ磨き	ナデ	(高台付椀) 赤彩	14
横ナデ	横ナデ	-	-	内・外面赤彩 内面線刻あり (文字としては不明確)	15
回転ヘラ削り、横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	内・外面赤彩	16
回転ヘラ削り、横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	内・外面赤彩 内面墨筆跡	17
横ナデ、工具痕 指頭圧痕	横ナデ、工具痕 ヘラ削り	-	-	内・外面煤付着	18
横ナデ、ハケ目	横ナデ、ヘラ削り	-	-	内・外面煤付着	19
横ナデ、ハケ目	横ナデ、ヘラ削り 指頭圧痕	-	-	内・外面煤付着	20
回転ヘラ削り、横ナデ	横ナデ、ナデ	-	-		21
横ナデ、回転ヘラ削り	横ナデ	-	-	外面自然釉 砂粒付着 内面焼き彫れ	22
横ナデ、回転ヘラ削り	横ナデ	-	-	外面火燐	23
横ナデ、回転ヘラ削り	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ		24
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	(高台付杯)	25
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ	内・外面赤彩	26
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ	内・外面赤彩 (外底面除く)	27
-	-	横ナデ、ナデ	横ナデ、ナデ 指頭圧痕	(高台付椀) 内・外面赤彩	28
横ナデ、回転ヘラ削り	磨き	ナデ	磨き	(高台付椀) 黒色土器 A類	29
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	横ナデ		30
ハケ目、工具ナデ ナデ	ヘラ削り	-	-	(把手)	31
横ナデ	横ナデ	糸切り後ナデ	ナデ	(灯明皿) 内・外面油煙	33
横ナデ	横ナデ	糸切り、指頭圧痕	ナデ、工具痕	(灯明皿) 焼き歪み	34
横ナデ、ナデ、タタキ	横ナデ	-	-	外面煤付着	35
施釉	施釉	露胎	施釉	(高台付椀) 内面鉄付着物	36
横ナデ	ナデ	糸切り	ナデ		37

遺物番号	堆団番号	写真番号	遺構番号	種別	器種	法量 (cm)				色調		胎土		
						口径	底径	最大胴径	器高	外面	内面			
10区														
38	49	SI03	縄文土器	浅鉢	(18.4)	-	-	(5.3)	黒 N2/0	黒 2.5Y2/1	角閃石、砂粒			
39			縄文土器	鉢	(25.6)	-	-	(3.7)	灰黄 2.5Y7/2	灰黄 2.5Y7/2	角閃石、雲母、砂粒			
40			縄文土器	鉢	(38.0)	-	-	(11.2)	にふい黄 2.5Y6/4	にふい黄橙 10YR6/4	長石、角閃石、雲母、砂粒			
41			縄文土器	注口土器	-	-	-	(4.8)	灰黄褐 10YR4/2	黒褐 10YR3/1	角閃石、雲母、小石粒、白色粒、砂粒			
42			縄文土器	鉢	-	7.7	-	(3.1)	にふい黄橙 10YR7/3	灰黄褐 10YR6/2	長石、雲母、砂粒			
43			縄文土器	鉢	-	7.5	-	(6.8)	にふい赤褐 5YR5/4	灰黄 2.5Y6/2	角閃石、雲母、小石粒、砂粒			
44	50	SI04	縄文土器	鉢	-	-	-	(5.3)	灰黄 2.5Y6/2	にふい黄橙 10YR7/4	角閃石、雲母、白色砂粒、砂粒			
45			縄文土器	鉢	-	-	-	(7.1)	にふい黄橙 10YR7/2	灰黄褐 10YR5/2	角閃石、砂粒			
46			縄文土器	深鉢	(24.8)	-	-	(7.1)	灰黄褐 10YR6/2	にふい黄橙 10YR7/4	角閃石、雲母、砂粒			
47			縄文土器	鉢	-	-	-	(4.6)	にふい褐 7.5YR5/3	にふい褐 7.5YR5/3	角閃石、雲母、砂粒			
48			縄文土器	注口土器 (注口徑) 2.0	-	-	-	(7.7)	にふい黄橙 10YR6/3	-	角閃石、雲母、白色砂粒、砂粒			
49	52	SK32	縄文土器	浅鉢	(24.4)	-	-	(7.4)	灰黄褐 10YR5/2	黒 N2/0	角閃石、砂粒			
50			縄文土器	鉢	-	-	-	(2.4)	黒 N2/0	黒 N2/0	角閃石、雲母、砂粒			
51			縄文土器	鉢	-	-	-	(3.7)	黒 7.5Y2/1	黒 7.5Y2/1	角閃石、雲母、砂粒			
52			縄文土器	鉢	-	-	-	(2.9)	褐灰 10YR5/1	褐灰 10YR5/1	角閃石、雲母、白色粒、砂粒			
53			縄文土器	鉢	-	-	-	(2.2)	黒褐 7.5YR3/1	黒褐 7.5YR3/1	角閃石、雲母、白色砂粒、砂粒			
54			縄文土器	浅鉢	-	-	-	(4.8)	灰黄褐 10YR5/2	褐灰 7.5YR4/1	雲母、白色砂粒、砂粒			
55	53	SK32	縄文土器	鉢	-	-	-	(3.6)	にふい黄橙 10YR7/3	にふい黄 2.5Y6/3	雲母、白色粒、砂粒			
56			縄文土器	鉢	-	-	-	(6.7)	灰黄褐 10YR5/2	にふい黄 2.5Y6/3	角閃石、雲母、白色粒、砂粒			
57			縄文土器	鉢	-	-	-	(5.8)	褐灰 10YR4/1	にふい黄橙 10YR6/3	角閃石、雲母、白色粒、砂粒			
58			縄文土器	鉢	(28.2)	-	-	(6.3)	黒 2.5Y2/1	黒褐 2.5Y3/1	角閃石、雲母、砂粒			
59			縄文土器	鉢	-	-	-	(9.2)	黒 N2/0	褐灰 10YR4/1	角閃石、雲母、白色粒、砂粒			
60			縄文土器	鉢	-	-	-	(12.8)	暗灰黄 2.5Y4/2	浅黄 2.5Y7/3	角閃石、雲母、砂粒			
61	54	SK32	縄文土器	深鉢	-	-	-	(20.2)	にふい黄橙 10YR7/4	にふい黄 2.5Y6/2	石英、角閃石、雲母、砂粒			
62			縄文土器	鉢	-	-	-	(29.5)	灰褐 7.5YR5/2	灰褐 7.5YR5/2	角閃石、雲母、砂粒			
63			縄文土器	深鉢	(30.6)	-	(30.6)	(12.8)	灰黄褐 10YR4/2	にふい黄 2.5Y6/4	長石、角閃石、雲母、白色粒、微細砂粒			
64			縄文土器	深鉢	(30.0)	-	(28.7)	(20.2)	灰黄褐 10YR4/2	にふい黄 2.5Y6/4	角閃石、雲母、白色粒、砂粒			
65			縄文土器	深鉢	(34.0)	-	(32.6)	(29.5)	にふい黄橙 10YR7/3	にふい黄 10YR7/4	角閃石、雲母、赤褐色粒、砂粒			
66			縄文土器	鉢	-	-	-	(4.0)	黒褐 10YR3/1	褐灰 10YR4/1	雲母、白色粒、砂粒			
67	55	SK32	縄文土器	鉢	-	-	-	(5.0)	褐灰 10YR4/1	褐灰 10YR4/1	角閃石、雲母、砂粒			
68			縄文土器	鉢	-	-	-	(3.7)	褐 5YR6/6	明赤褐 2.5YR5/6	長石、黑色粒、砂粒			
69			縄文土器	鉢	-	9.2	-	(5.5)	褐 7.5YR6/6	暗灰黄 2.5Y4/2	角閃石、雲母、白色粒、砂粒			
70			SK33	縄文土器	鉢	(31.8)	-	-	(4.1)	黒褐 10YR3/2	黒 N2/0	角閃石、雲母、砂粒		
71			SK33	縄文土器	鉢	-	-	-	(5.8)	にふい黄褐 10YR4/3	にふい黄褐 10YR5/3	角閃石、雲母、白色砂粒、砂粒		
72	56	SK33	縄文土器	鉢	-	7.8	-	(1.9)	にふい黄褐 10YR7/4	浅黄 2.5Y7/3	雲母、白色砂粒、砂粒			
73	57	24	SK34	縄文土器	深鉢	-	-	-	(8.5)	褐 10YR4/4	にふい黄 7.5YR6/4	角閃石、黑色粒		

Tab. 4 遺物觀察表-②

外器面	内器面	調整		備考	遺物 番号
		外底面	内底面		
ヘラ磨き	ヘラ磨き	-	-		38
ヘラ磨き	ヘラ磨き	-	-		39
ヘラ磨き	ヘラ磨き	-	-		40
ヘラ磨き	ヘラ磨き	-	-	注口欠損 縹衫文 沈線文	41
ヘラ磨き	ナデ	ナデ	ナデ		42
ヘラ磨き, 工具ナデ	ナデ, 指頭圧痕	ナデ	ナデ		43
工具ナデ, ヘラ磨き 指頭圧痕	工具ナデ, ナデ	-	-		44
ヘラ磨き	ヘラ磨き	-	-	口縁部山形突起	45
ヘラ磨き	ヘラ磨き	-	-	口縁下部穿孔	46
ヘラ磨き	ヘラ磨き	-	-	波状口縁	47
工具ナデ	-	-	-	(注口部)	48
ヘラ磨き	ヘラ磨き	-	-	外面煤付着	49
ヘラ磨き	ヘラ磨き	-	-	羽状文 沈線文	50
ヘラ磨き	ヘラ磨き	-	-	縹文後晚期 凹線文	51
ヘラ磨き	ヘラ磨き	-	-	縹衫文 沈線文	52
ヘラ磨き	ヘラ磨き	-	-	貼付輪状浮文	53
ヘラ磨き, 指頭圧痕	ヘラ磨き, 指頭圧痕	-	-	縹文後晚期 沈線文	54
ナデ, 施文	ヘラ磨き, ナデ	-	-	内面摩耗 爪形文 沈線文	55
ヘラ磨き	ヘラ磨き, 指頭圧痕	-	-	細稼文 沈線文	56
ヘラ磨き	ヘラ磨き	-	-	内・外面煤付着 磨消縹文	57
ヘラ磨き	ヘラ磨き, 指頭圧痕	-	-	貼付文	58
ヘラ磨き	ヘラ磨き	-	-		59
ナデ, 条痕	ヘラ磨き	-	-		60
ヘラ磨き	ヘラ磨き	-	-	波状口縁頂部欠損	61
ヘラ磨き	ヘラ磨き	-	-	波状口縁頂部欠損 外面煤付着 沈線文	62
ヘラ磨き, 指頭圧痕	ヘラ磨き	-	-	内・外面煤付着	63
ヘラ磨き	ヘラ磨き	-	-	内面煤付着	64
ヘラ磨き	ヘラ磨き, 指頭圧痕	-	-		65
ヘラ磨き	ヘラ磨き, ナデ	-	-	磨消縹文 短斜線文	66
ヘラ磨き	ヘラ磨き	-	-	沈線文	67
ヘラ磨き	ヘラ磨き	-	-	磨消縹文	68
ヘラ磨き	ナデ	ヘラ磨き, ナデ	ナデ	内・外面煤付着	69
ヘラ磨き	ヘラ磨き	-	-	爪形文 沈線文	70
ヘラ磨き	ヘラ磨き	-	-	爪形文 沈線文	71
ヘラ磨き	ナデ	ナデ, 工具ナデ	ナデ		72
ヘラ磨き, 指頭圧痕	ヘラ磨き, 指頭圧痕	-	-		73

遺物番号	持団番号	写真番号	造構造番号	種別	器種	法量 (cm)				色調		胎土	
						口径	底径	最大 肩径	器高	外面	内面		
11区													
74	58	-	SK32	縄文土器	鉢	-	-	-	(2.9)	黒褐 10YR3/1	黒褐 2.5Y3/1	角閃石、雲母、砂粒	
75		24	SK32	縄文土器	鉢	-	-	-	(5.0)	黒褐 7.5YR3/1	黒褐 7.5YR3/1	雲母、砂粒	
76		SK32	縄文土器	鉢	-	-	-	(5.3)	灰黄褐 10YR5/2	にぶい黄橙 10YR6/4	角閃石、雲母、砂粒		
77		-	SK32	縄文土器	鉢	-	(7.6)	-	(2.7)	にぶい黄橙 10YR7/3	黒 5Y2/1	角閃石、雲母、白色砂粒、砂粒	
78		24	SK32	縄文土器	鉢	-	-	-	(8.7)	褐灰 10YR4/1	にぶい黄橙 10YR6/3	長石、角閃石、雲母、砂粒	
79		SK32	縄文土器	鉢	(27.0)	-	(25.4)	(17.0)	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/4	雲母、茶褐色粒、砂粒		
80		SK32	縄文土器	鉢	(28.2)	-	-	(8.2)	橙 5YR6/6	灰褐 7.5YR4/2	角閃石、雲母、茶褐色粒 微細～1.5mmの砂粒		
81	59	-	SI02	土師器	皿	-	-	-	(6.5)	にぶい橙 5YR6/4	にぶい橙 5YR6/4	長石、角閃石、雲母、砂粒	
82		SI02	土師器	杯	(10.6)	6.0	-	3.9	にぶい橙 7.5YR7/4	橙 7.5YR7/6	長石、赤褐色粒、砂粒		
83		SI02	土師器	杯	(11.3)	6.1	-	4.6	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	雲母、砂粒		
84		SI02	土師器	杯	(11.4)	(6.7)	-	2.4	にぶい黄橙 10YR6/3	浅黄 2.5Y7/3	角閃石、雲母、砂粒		
85		SD04	土師器	杯	(12.2)	(6.6)	-	3.7	橙 2.5YR6/6	橙 2.5YR6/6	白色砂粒、砂粒		
86		SD04	土師器	杯	(11.6)	(6.8)	-	4.4	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	白色砂粒、砂粒		
87	60	SD04	土師器	杯	(10.8)	(6.2)	-	5.2	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	角閃石、白色砂粒、砂粒		
88		SD04	土師器	椀	(12.2)	(6.6)	-	5.4	にぶい橙 5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	長石、雲母、砂粒		
89		SD04	土師器	皿	-	-	-	(2.4)	明赤褐 2.5YR5/6	明赤褐 2.5YR5/6	雲母、明赤褐、砂粒		
90		SD04	須恵器	皿	22.0	15.8	-	4.5	灰赤 7.5R6/2	にぶい赤橙 10Y6/3	黒色、赤色粒、砂粒		
12区													
92	61	25	SI01	土師器	皿	(11.4)	(8.6)	-	1.8	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	角閃石、赤褐色粒、白色砂粒、砂粒	
93			SD01	土師器	杯	(11.4)	(7.6)	-	3.2	橙 2.5YR6/6	明赤褐 2.5YR5/6	砂粒	
94			SD02	土師器	椀	(11.4)	7.9	-	4.3	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	雲母、赤褐色粒、砂粒	

Tab. 6 遺物観察表(石器)

実測番号	持団番号	写真番号	区	造構造番号	器種	石材	法量			重量 (g)	備考	
							長	幅	厚			
95	62	10	SI03	石鏟	安山岩	(2.3)	(1.5)	0.3	0.7	抉りは全長の約 1/5 に達する (V字状) 裏面に素材剥離面を残す		
96		10	SI03	二次加工のある剥片	黒曜石	5.7	1.7	0.7	5.0	両側縁とも裏・裏面からの調整削離が施される。先端部裏面に調整削離が施される。表面に自然面を残す		
97		10	SK34	二次加工のある剥片	黒曜石	6.5	2.8	1.0	14.0	縦長剥片姿勢。表面左側縁と右側縁上・下位に同様削離が施される。右側中～上位にかけ小剝離痕が観察される。不純物多く含む		
98		10	SK29	打製石斧	安山岩	12.9	9.6	1.4	302.2	扁平の短冊型石斧。両側縁中～上位にかけて刃部の一部が摩滅。装着痕と推測。刃部先端部に欠損		
99		10	SK33	打製石斧	頁岩	10.4	4.5	1.7	103.8	短冊型石斧。表・裏面とも剝離後研磨。側面のつぶれた部分が装着痕と推測。刃部先端部一部欠損		
100		10	SK32	打製石斧	安山岩	8.7	4.9	1.8	100.0	短冊型石斧。両側縁の中位下に切り込みの形状が観察され装着痕と推測		
101	63	11	SK32	打製石斧	片岩	7.8	7.2	1.1	94.8	両側縁に摩滅部分が観察され装着痕と推定		
102		10	SK33	磨石	安山岩	(10.5)	6.2	3.5	369.0	磨石は一部欠損。先端部と側面に使用痕		
103		10	SI03	砾石	砂岩	13.5	8.4	6.8	1100.0	全面に使用痕あり		
104		11	SK32	石皿	安山岩	11.5	10.0	2.4	585.0			

Tab. 5 遺物觀察表-③

調整				備考	遺物 番号
外器面	内器面	外底面	内底面		
ヘラ磨き	ヘラ磨き	-	-		74
ヘラ磨き	ヘラ磨き	-	-	沈線文 矩斜線文	75
ヘラ磨き	ヘラ磨き	-	-	三万田式 沈線文 内・外面煤付着	76
ヘラ磨き	ナデ	ナデ	ナデ		77
ヘラ磨き	ヘラ磨き	-	-		78
ヘラ磨き	ヘラ磨き	-	-		79
ヘラ磨き	ヘラ磨き	-	-		80
横ナデ、ハケ目	横ナデ、ヘラ削り	-	-		81
横ナデ、ナデ	横ナデ	ヘラ切り	横ナデ	板状圧痕	82
横ナデ 回転ヘラ削り	横ナデ	ヘラ切り	ナデ		83
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	(灯明皿) 内・外面煤付着 板状圧痕	84
横ナデ	横ナデ	ナデ	ナデ	赤彩(外底面除く)	85
横ナデ	横ナデ	ナデ	-	内・外底面を除き赤彩	86
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り、ナデ	ナデ	板状圧痕	87
横ナデ	横ナデ	ナデ	ナデ	(高台付楕)	88
横ナデ	横ナデ	-	-	外面墨書き 内・外面赤彩	89
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り	ナデ	(高台付皿)	90
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り、ナデ	横ナデ		92
横ナデ	横ナデ	ナデ	ナデ	(灯明皿) 内・外面赤彩 外面油煙	93
横ナデ	横ナデ	ナデ	ナデ	外面一部黒斑	94

Tab. 7 遺物觀察表(五)

実測 番号	掉図 番号	写真 番号	遺構番号	器種	法面			色調		崩土	調査		備考
					長	幅	厚	凹面	凸面		凹面	凸面	
32	46	20	8区 SD02	平瓦	(6.1)	(6.3)	(1.7)	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/4	長石・磁石粒	ナデ 布目痕	調目 (タタキ)	
91	60	25	11区 SD04	平瓦	(7.9)	(4.7)	(1.9)	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR6/3	茶褐色粒・砂粒	布目痕	調目 (タタキ)	

遺物番号	写真番号	区	種別	器種	法量			色調		胎土		
					口径	底径	最大幅	高さ	外面	内面		
301		8	土師器	杯	-	(8.0)		(2.0)	にぶい黄橙 10YR6/4	橙 2.5YR6/6	長石、角閃石	
302			土師器	杯	(13.5)	(8.0)		(3.0)	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい橙 5YR6/4	長石、角閃石、雲母、砂粒	
303			土師器	杯	-	8.2		1.9	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	長石、雲母、砂粒	
304			土師器	杯	-	(8.4)		(2.4)	橙 7.5YR6/6	にぶい赤褐 2.5YR6/6	赤色粒	
305			土師器	杯	-	(10.2)		(1.7)	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい橙 7.5YR7/4	長石、小石粒、赤色粒	

Tab. 9 遺物観察表（写真のみ）-②

遺物番号	写真番号	区	遺構番号	種別	器種	法量			色調		時代	備考
						口径	底径	高さ	種	胎土		
306		8	SD02	綠釉	不明	-	幅 4.3	長さ 2.3	C168 杣ち葉色	C98 クリーム色		
307			SD04	綠釉	不明	-	幅 4.1	長さ 2.8	C95 鹿皮色	C97 緑絹色		
308			SD03	染付	碗	-	-	(2.3)	C282 雪の灰白	C164 亜鉛華の白	16C末～ 17C前半	銀徳鎮窯
309			SD02	白磁	不明	-	幅 3.2	長さ 1.7	C103 薄白茶	C140 胡椒色	11C	
310			SD02	青磁	碗	-	-	(2.5)	C134 黒茶色	C135 白茶	13C～14C	中国 高台内無釉
311			SD03	白磁	皿	-	幅 6.2	(1.6)	C282 雪の灰白	C164 亜鉛華の白	16C	
312			SD03	白磁	皿	-	-	(2.3)	C282 雪の灰白	C164 亜鉛華の白	17C前半	見込みに青緑色の付着物
313			S801	青磁	皿	-	-	(3.4)	C143 銀灰色	C135 白茶	18C	中国
314			SD01	染付	皿	-	幅 4.2	長さ 8.3	C282 雪の灰白	C282 雪の灰白	16C末～ 17C前半	漳州窯 白化粧
315			SD01	染付	皿	(12.4)	(6.8)	2.8	C211 鉛の灰色	C163 具の白	16C末～ 17C前半	漳州窯 着付～高台内無釉
316		27	SD01	染付	皿	-	幅 6.5	長さ 4.2	蘇州の緑色	亜鉛華の白	16C	漳州窯 生がけ
317			SD03	染付	皿か碗	-	幅 3.1	長さ 3.0	C282 雪の灰白	C103 薄白茶	16C末	漳州窯 白化粧
318			SD03	染付	皿	-	幅 3.6	長さ 4.2	C143 銀灰色	C77 薫の茶	不明	漳州窯 白化粧
319			SD03	染付	皿	10.1	6.1	2.7	C211 鉛の灰色	C211 鉛の灰色	17C末	広東碗
320			SD03	染付	碗	-	6.2	(3.1)	C282 雪の灰白	C282 雪の灰白	17C末～ 18C前半	広東碗 見込みに花文様 高台内漢字 2文字
321			SD01	陶器	碗	-	5.4	(2.5)	C107 白茶	C106 かもしか色	1590年～ 1600年	肥前
322			SD01	陶器	碗	-	5.0	(2.2)	C141 白茶	C106 かもしか色	1590年～ 1600年	肥前
323			SD03	陶器	皿	-	9.2	(4.8)	C144 灰白	C81 肉桂色	1590年～ 1600年	肥前 胎土目標
324			SD01	青磁	碗	-	5.0	(3.7)	C225 飛天の羽衣の色	C144 灰白	17C後半	肥前
325			SD01	青磁	鉢	-	-	(2.8)	C215 大理石色	C164 亜鉛華の白	17C中～ 17C後半	肥前
326			SD01	青磁	鉢	-	-	(2.3)	C215 大理石色	C164 亜鉛華の白	17C中～ 17C後半	肥前
327			SD03	青磁	皿	-	24.2	(3.3)	C201 薄い灰緑	C164 亜鉛華の白	17C中	肥前 内面、型押し成形
328			SD01	陶器	碗	-	6.0	(2.4)	C179 オリーブ色	C81 肉桂色	17C後半	肥前 緑釉
329			SD01	陶器	碗	-	-	(1.7)	C179 オリーブ色	C143 銀灰色	17C後半	肥前 緑釉

Tab. 8 遺物観察表 (写真のみ) -①

外器皿	内器皿	外底面	内底面	備考	遺物番号
横ナデ 回転ヘラ削き	回転ヘラ削き	回転ヘラ削り	回転ヘラ削き	内・外面、外底面一部赤彩 底部一部焼付着	301
横ナデ	横ナデ	回転ヘラケズリ削り ヘラの後ナデ		横ナデ後 回転ヘラ削き	外面赤彩痕が認められる 全体的に磨耗 内・外器皿一部焼付着
横ナデ後 回転ヘラ削き	横ナデ後 回転ヘラ削き	切り離し後 回転ヘラ削き		横ナデ後 回転ヘラ削き	内・外面に赤彩
横ナデ後 回転ヘラ削き	横ナデ後 回転ヘラ削き	回転ヘラ削り後 回転ヘラ削き		横ナデ後 回転ヘラ削き	内・外面に赤彩 (外底面除く)
横ナデ、ヘラ削き 回転ヘラ削り	横ナデ後 回転ヘラ削き	回転ヘラ削り		横ナデ後 回転ヘラ削き	内面全面に赤彩 外面一部赤彩
					305

Tab.10 遺物観察表 (写真のみ) -③

遺物番号	写真番号	区	遺構番号	種別	器種	法量			色調		時代	備考
						口径	底径	高さ	種	胎土		
330		8	SD01	陶器	壺	-	幅 4.6	長さ 6.2	C230 鉄の緑	C110 コーピー色	17C 後半	肥前 緑釉
331	28	8	SD01	陶器	不明	-	幅 2.8	長さ 5.3	C178 深緑	C110 コーピー色	17C 後半	肥前 緑釉
332		9	SD03	陶器	壺	-	幅 2.9	長さ 2.9	C213 芦の灰緑	C120 ゆうろ色	17C 後半	肥前 緑釉
333		8	SD01	染付	碗	-	-	(3.6)	C293 瓦の鼠茶	C153 白茶	17C 末～ 18C 前半	肥前 とう帯染付
334		8	SD01	染付	碗	-	-	(4.1)	C292 鼠色	C291 鉛色	17C 末～ 18C 前半	肥前 とう帯染付
335		8	SD01	染付	碗	-	-	(2.0)	C292 鼠色	C293 瓦の鼠茶	17C 末～ 18C 前半	肥前 とう帯染付
336		9	SD03	染付	皿	-	4.7	(1.7)	C244 ミンクの灰色	C144 白灰	17C 前半	肥前
337		9	SD03	染付	皿	8.4	2.8	2.8	C211 鉛の灰色	C163 貝の白	17C	肥前 外面下部に砂粒付着 見込み文様
338		9	SD03	染付	皿	-	8.6	(1.8)	C282 雪の灰白	C163 貝の白	17C 後半	肥前 内面、草花文様
339		9	SD03	青磁染付	皿か碗	-	5.4	(1.6)	C232 カーキー色	C135 白茶	17C 後半	高台付の皿か碗 焼成不良
340		9	SD03	染付	碗	-	4.2	(3.3)	C241 雲の灰色	C163 貝の白	17C 前半	外面、型押しし成形 と置付へ高台内に砂粒付着
341		11	SD03	染付	壺	-	幅 3.0	長さ 3.2	C164 垂鉛華の白	C162 鉛の白	17C 半	油壺
342		11	SD04	染付	碗	-	-	(3.5)	C164 垂鉛華の白	C162 鉛の白	17C 末～ 18C 前半	
343	29	8	SD01	陶器	小鉢	-	幅 4.4	長さ 2.1	C77 薄の茶	C104 薄香色	17C 末～ 18C 前半	内野山 波状口縁
344		8	SD01	陶器	碗	-	4.7	(1.9)	C76 カーキー色	C104 薄香色	17C 末～ 18C 前半	内野山 見込み蛇の目釉割
345		8	SD02	陶器	碗	-	-	(2.4)	C311 黒の皮色	C311 黒の皮色	17C 後半	
346		8	SD02	陶器	碗	-	-	(2.8)	C138 カーキー色	C311 黒の皮色	17C 後半	
347		9	SD03	陶器	小鉢	-	6.8	(5.9)	C144 黒白	C106 かもしか色	17C 後半～ 18C	焼成不良
348		9	SD03	陶器	鉢	11.4	-	(5.1)	C133 栗皮色	C75 猫足	17C 末～ 18C 前半	唐津
349		9	SD03	陶器	碗	-	-	(3.1)	C126 枯葉色	C127 枯葉	17C 末～ 18C 前半	現川
350		9	SD03	陶器	碗	-	4.3	(2.0)	C157 枯芽色	C106 かもしか色	17C 前半	肥前 1600～1630年
351		9	SD03	陶器	仏花器	-	6.2	(4.6)	C106 かもしか色	C77 薄の茶	17C 末～ 18C 前半	肥前 置付鉢割ぎ
352		11	SD03	陶器	皿	-	5.0	(1.7)	C103 薄白茶	C106 かもしか色	17C 前半	肥前 1610～1630年 見込み、置付とも砂目
353		11	SD03	陶器	皿か碗	-	5.0	(1.6)	C319 海藻鼠	C311 黒の皮色	17C 前半	肥前 1610～1630年 見込み、置付とも砂目

Tab.11 遺物観察表（写真のみ）一④

番号 番号	写真 番号	区	遺構番号	種別	器種	法量			色調		時代	備考
						口径	底径	器高	種	胎土		
354	29	11	SD03	陶器	鉢	10.4	-	(2.6)	C110 コーヒー色	C74 代緋色	17C 後半～ 18C 前半	肥前 ハケ目 口縁折り曲げ
355		11	SD03	陶器	碗	-	6.0	(2.5)	C98 クリーム色	C106 かもしか色	17C 後半	宗焼風 1660年～1680年
356		11	SD03	陶器	壺	-	-	(3.8)	C128 褐色	C74 代緋色	17C 後半～ 18C 前半	肥前 内面ハケ目、外面波状文様
357		11	SD03	陶器	小壺	-	幅 6.2	長さ 2.9	C99 真珠色	C71 めのう色	17C 後半～ 18C 前半	肥前 外面に鉄継
358		11	SD03	陶器	不明	-	幅 3.7	長さ 2.7	C143 銀灰色	C110 コーヒー色	17C 後半～ 18C 前半	肥前 ハケ目 口縁～頸部
359		11	SD03	陶器	不明	-	幅 3.2	長さ 1.9	C293 瓦の鼠茶	C135 白茶	17C 後半～ 18C 前半	肥前 ハケ目
360		11	SD04	陶器	不明	-	幅 3.0	長さ 6.1	C112 梅草色	C127 黄栗色	17C 後半～ 18C 前半	肥前 ハケ目
361		8	SD01	陶器	擂鉢	-	10.0	(4.2)	C133 東皮色	C71 めのう色	17C 中～ 17C 後半	肥前 底部糸切り離し
362		8	SD01	陶器	擂鉢	-	11.4	(2.2)	C133 東皮色	C81 肉桂色	18C 前半	肥前 高台付の底部 全体に稚
363		9	SD03	染付	碗	7.0	3.6	5.4	C103 薄白茶	C282 雪の灰白	18C 末～ 19C 前半	肥前 外面、草花文
364		9	SD04	染付	蓋	-	摘み径 3.8	2.7	C282 雪の灰白	C164 垂鉢華の白	18C 後半～ 19C 前半	肥前 内外面、草花文 高台付、梯形文
365		8	SD01	染付	極小碗	2.4	1.0	1.6	C282 雪の灰白	C164 垂鉢華の白	19C	肥前 離道具
366		9	SD03	染付	蓋	-	摘み径 3.8	3.1	C164 垂鉢華の白	C164 垂鉢華の白	1820年～ 1860年	肥前
367		9	SD03	染付	皿	-	8.0	(1.9)	C282 雪の灰白	C164 垂鉢華の白	17C 後半	有田 内面；風景文
368	30	9	SD03	染付	皿	-	(8.8)	(1.0)	C282 雪の灰白	C164 垂鉢華の白	17C 後半	有田
369		9	SD03	染付	皿	-	-	2.6	C282 雪の灰白	C164 垂鉢華の白	1640年～ 1650年	有田
370		9	SD03	染付	鉢	-	幅 5.5	長さ 3.8	C282 雪の灰白	C164 垂鉢華の白	1640年～ 1650年	有田 内面、口縁に楊柳文 様押し成形
371		9	SD03	染付	碗	-	6.8	(2.1)	C211 鉛の灰色	C164 垂鉢華の白	17C 後半	有田 売弾き
372		9	SD03	白磁	蓋(意須)	5.4	返し径 4.3	2.0	C209 月の白色	C163 目の白	17C 末～ 18C 前半	有田 菊花形のつまみ (焼成時にずれ)
373		9	SD03	染付	碗	-	4.4	(4.6)	C282 雪の灰白	C282 雪の灰白	18C 後半	有田 こんなにやく判
374		9	SD03	染付	碗	9.0	-	4.1	C282 雪の灰白	C282 雪の灰白	18C 後半	有田 こんなにやく判
375		9	SD03	染付	碗	-	幅 4.1	長さ 3.7	C282 雪の灰白	C282 雪の灰白	18C 後半	有田 こんなにやく判
376		9	SD03	磁器	蓋(子)	-	幅 2.9	長さ 4.0	C164 垂鉢華の白	C163 目の白	1690年～ 1730年	有田 菊花文様 捺み欠落痕
377		9	SD03	磁器	蓋(子)	5.8	-	1.5	C282 雪の灰白	C163 目の白	1670年～ 1690年	有田 外面、細かい菊花と 流水文様
378		9	SD03	磁器	蓋(子)	6.8	返し径 6.2	1.2	C164 垂鉢華の白	C163 目の白	18C	有田 受部に捻紗付着 中央につまみ痕
379		9	SD03	磁器	蓋(子)	6.8	-	(0.9)	C144 灰白	C103 薄白茶	18C	有田 外面、鼓の絵
380	31	9	SD03	磁器	合子	4.8	2.3	2.4	C103 薄白茶	C164 垂鉢華の白	18C	有田 外面、内面口縁付近のみ露 胎
381		9	SD03	磁器	合子	5.0	2.8	2.6	C282 雪の灰白	C164 垂鉢華の白	18C	有田
382		9	SD03	磁器	鉢	21.0	-	(5.9)	C282 雪の灰白	C164 垂鉢華の白	18C 中～後	有田 金泥使用
383		9	SD03	磁器	蓋	-	幅 3.2	長さ 3.8	C164 垂鉢華の白	C163 目の白	18C 前半	有田 お油黒用うがい瓶 内面、色絵
384		9	SD03	磁器	皿か碗	-	4.6	(2.3)	C282 雪の灰白	C162 鉛の白	18C 前半	有田 細い目袖剥ぎ後、 色塗り うがい瓶か
385		9	SD03	白磁	紅皿	2.0	1.8	(1.7)	C211 鉛の灰色	C164 垂鉢華の白	18C 末～ 19C 前半	肥前 型押し成形 (外側に貝殻状の筋文)
386		9	SD03	白磁	紅皿	-	1.5	(0.7)	C164 垂鉢華の白	C163 目の白	18C 末～ 19C 前半	肥前
387		8	SD01	陶器	擂鉢	-	幅 6.5	長さ 7.4	-	C76 カーキー色	-	-
388	32	9	SD03	染付	皿	-	5.4	(1.4)	C211 鉛の灰色	C103 薄白茶	17C 前半	初期伊万里 高台付

Tab.12 遺物観察表（写真のみ）—⑤

遺物番号	写真番号	区	遺構番号	種別	器種	法量			色調		時代	備考
						口径	底径	器高	種	胎土		
389		9	SD03	染付	蓋	-	2.6 (2.3)	C282 雪の灰白	C164 亜鉛華の白	17C 前半	初期伊万里 見込みに砂目	
390		9	SD03	染付	蓋	-	2.6 (2.3)	C282 雪の灰白	C164 亜鉛華の白	17C 前半	初期伊万里	
391		9	SD03	染付	蓋	-	2.5 (1.6)	C282 雪の灰白	C164 亜鉛華の白	17C 前半	初期伊万里 見込みに砂目	
392		9	SD03	陶器	碗	-	4.8 (2.7)	C144 灰白	C140 胡椒色		唐津	
393		9	SD03	陶器	皿か盤	-	4.6 (1.9)	C143 銀灰色	C140 胡椒色		唐津	
394	32	9	SD03	陶器	碗	11.0	3.4 (3.4)	C293 瓦の鼠茶	C110 コーヒー色		唐津	
395		9	SD03	陶器	皿か盤	-	4.0 (1.1)	C140 胡椒色	C106 かもしか色		唐津	
396		8	SD01	陶器	碗	-	2.2	C228 焦茶色	C276 くり色		高田焼	
397		9	SD03	陶器	皿 (急須)	5.6 4.2	返し深 1.6	C232 カーキー色	C110 コーヒー色		松尾焼 外面、象嵌	
398		11	SD04	陶器	碗	(10.2)	- (3.0)	C228 焦茶色	C232 カーキー色		熊本 外面、象嵌	
399		11	SD04	染付	蓋	9.1	3.6	2.5 C282 雪の灰白	C163 白の白		肥前（畠野）	
400		9	SD03	陶器	急須	-	-	6.6 C143 銀灰色	C74 代赭色	19C	薩摩焼	

Tab.13 遺物観察表（鉄製品・写真のみ）—⑥

遺物番号	写真番号	区	遺構番号	器種	法量			備考
					長さ(cm)	幅(cm)	重量(g)	
401		9	SB01	釘	3.6	0.3	1.5	
402	26	9	SB01	釘	3.3	0.7	0.7	
		9	SB01	釘	7.5	1.2	4.9	頭頂部は筒状～U字状
403								

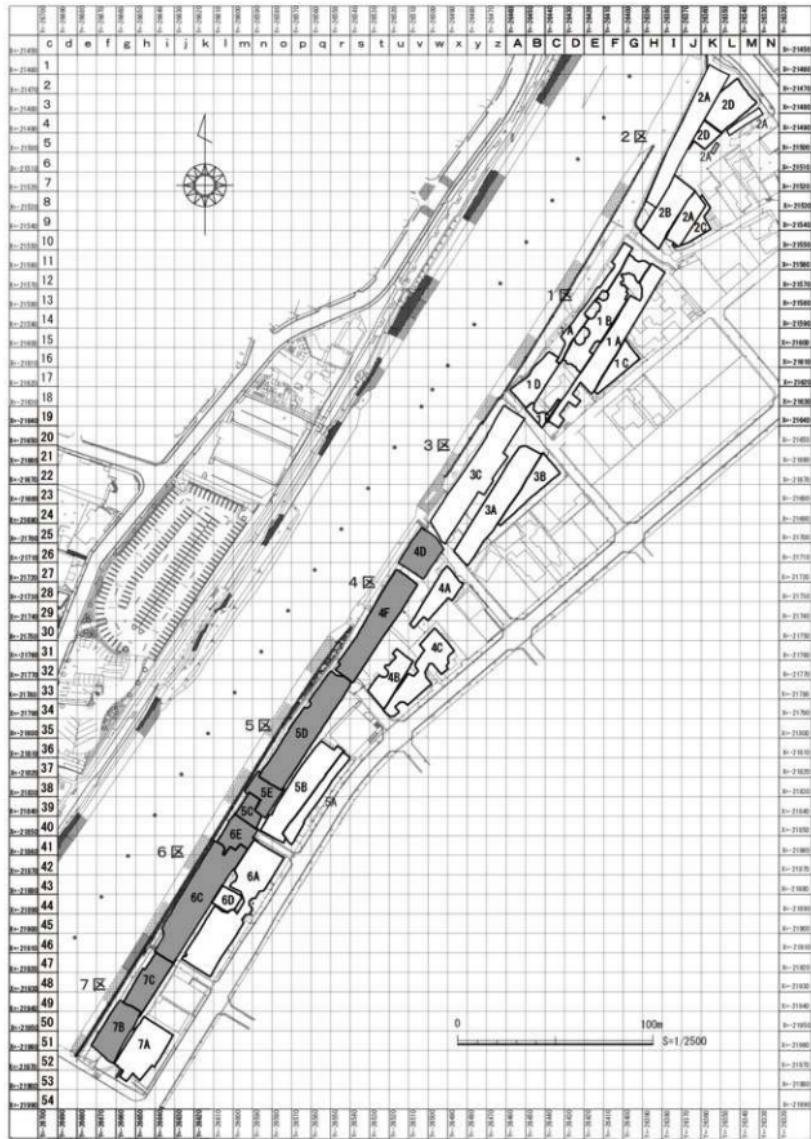


Fig.65 4~7区位置図

4D区

4D区は、平成19年（2007）の4A区に隣接する260m²の調査区である。4A区を調査した時点では工事工程の違いから調査着手時期が異なる。

当該調査地は樹木による擾乱が多く、基本層序の土層等も、樹木間でわずかに見ることができるのみで、平成19年の調査で確認された竪穴建物遺構の延長分は調査できなかった。本調査区では、古代の遺構としては、調査区北側において、北西から南東に延びる溝状遺構と土坑、柱穴遺構を検出したのみである。

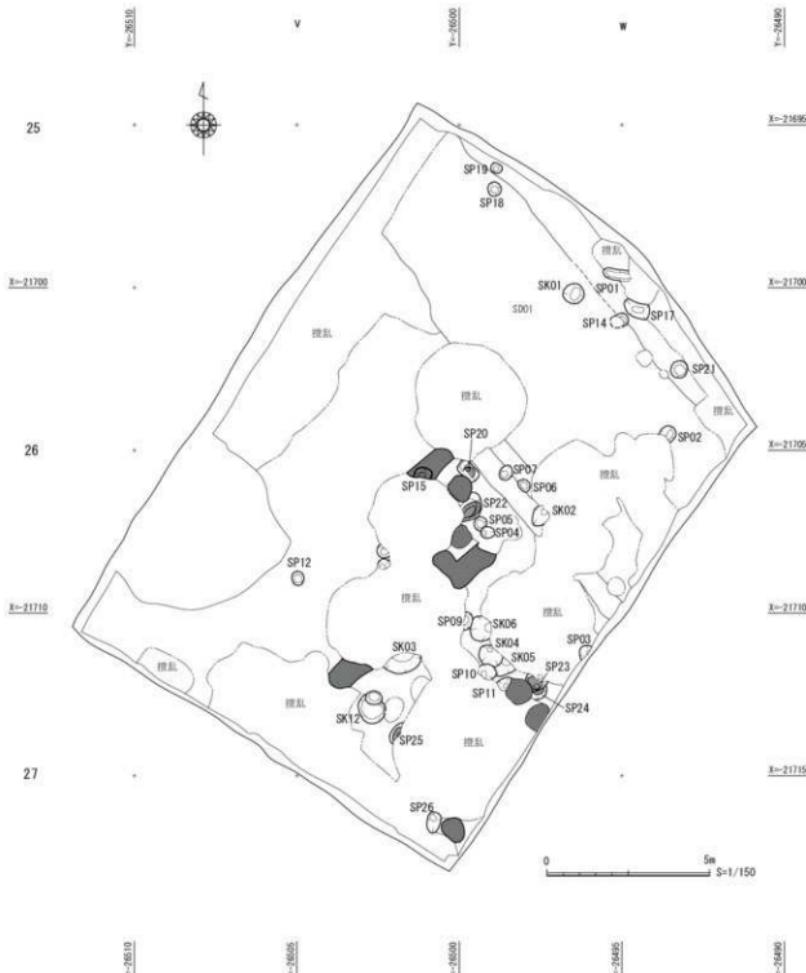


Fig.66 4D区遺構配置図（古代）

古代

土坑 SK02 (Fig. 67)

本調査区のほぼ中央部で検出した遺構。近現代の建物基礎下から検出したことから上部の一部が削平を受ける。また、遺構の東半分は搅乱により消滅する。遺構規模は長径 0.59m、短径 0.50m、深度 35.0cm、主軸は N - 39° - E を測る。

埋土は上下 2 層からなり、埋土中から土師器杯（1）が 1 点出土している。出土層位は不明。

柱穴 SP20 (Fig. 67)

w - 26 グリッドで検出した遺構。上部包含層を大きく掘り込んだ状態で検出。掘方平面形は方形で、南側に中間端があり、北側に柱座を有する。柱根は 1 層で、上部で V 字状に広がることから抜き取り痕である可能性が高い。遺構規模は長径 73.0cm、短径 46.0cm、主軸を N - 37° - W を測る。

柱穴 SP22 (Fig. 67)

w - 26 グリッドで検出した遺構。平面形がやや方形を呈することから、長方形平面であった可能性が高い。断面形は方形掘り込みで、柱根を中心には 3 層の埋土からなる。1 层は柱根を示すが、上部がやや広がることから、抜き取り痕である可能性もある。遺構規模は現況で長径 70.0cm、短径 68.0cm を示す。しかし、短径としている方向で断面を切ることから、本来の長径は逆である。主軸は現況の長軸で N - 13° - W を測る。1 層柱根から土師器杯（2）が 1 点出土している。

柱穴 SP23 (Fig. 67)

w - 27 グリッドで検出した遺構。遺構の平面形は円形を呈するものと見られる。搅乱が遺構上部を削平するが、柱座は搅乱にも拘わらず、下端付近に残る。1 层に柱根を有するが、上部が大きく開くことから抜き取り痕である可能性もある。残存状況が悪く遺構規模は計測できない。

柱穴 SP24 (Fig. 67)

w - 27 グリッドで検出した遺構。遺構の大半が搅乱により削平を受ける。遺構の 2 割程度の残存状況である。しかし、柱座は搅乱の下部にわずかに残る。1 层柱根は遺構下端付近まで延び、掘立柱建物跡であったならば、最初に柱座をきめる隅柱であった可能性が高い。遺構規模は不明である。

柱穴 SP25 (Fig. 67)

v - 27 グリッドで検出した遺構。本遺構も残存状況が非常に悪く遺構規模等のデータは取れない。断面では 1 层柱根が中心に残り、上部に向かい広がりが見られないことから柱が立ったまま放棄されたものと見られる。根固めの土は 2 層からなる。1 层柱根の土から土師器杯（3）が 1 点出土している。

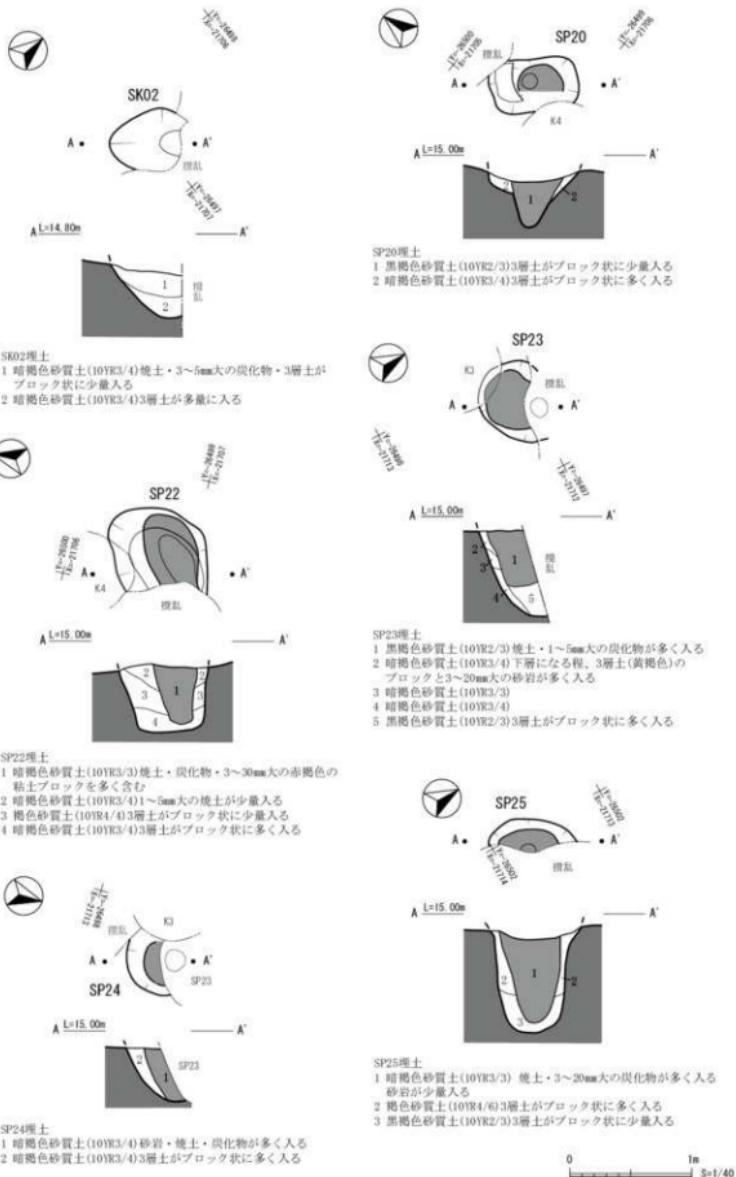


Fig.67 4D区 SK02、SP20・22・23・24・25 平面・断面図

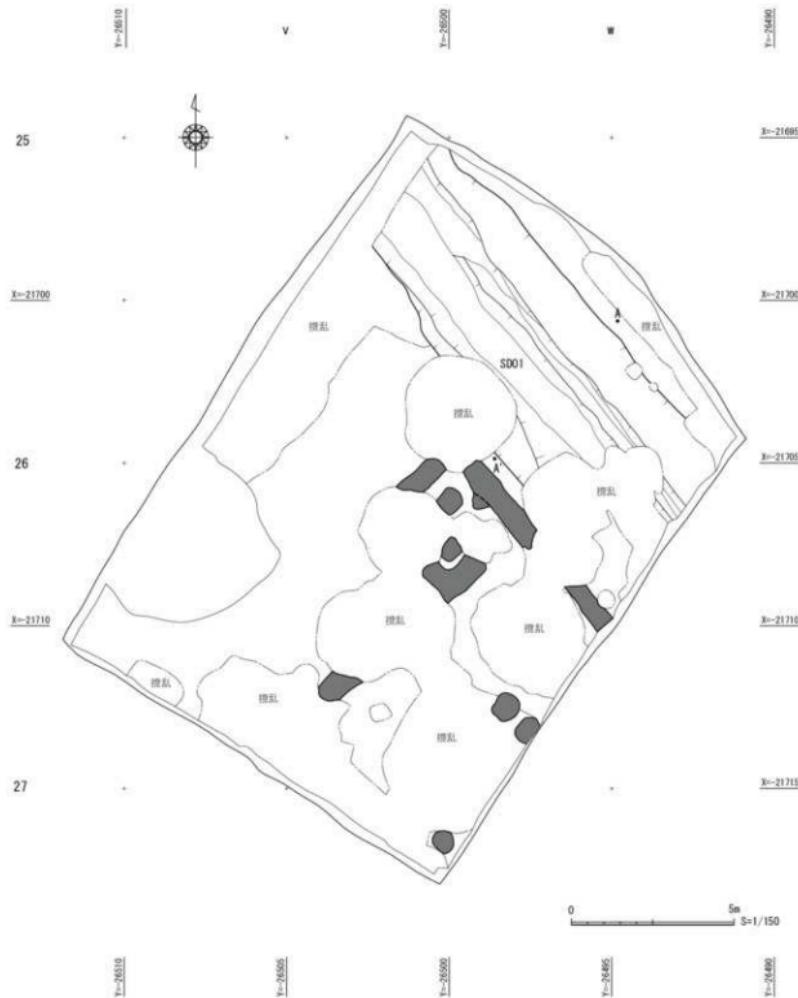


Fig.68 4D区遺構配置図(近世)

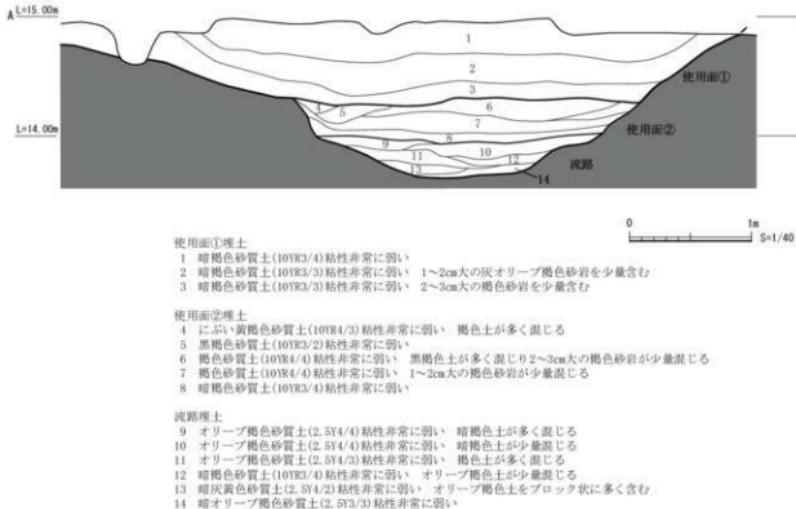


Fig.69 4D区 SD01 土壌断面図

近世

溝 SD01 (Fig.69)

調査区北側に位置し、調査区を横断するように検出した。遺構両端は検出できていない。遺構規模は検出長 14.8m、幅 5.5m、主軸は N - 43°W を測る。

下端付近のレベルは一様で、傾斜は見られない。溝が埋没する過程で掘り直し等の利用が2度確認されるが、溝状に掘削されている以外には他の遺構として利用していた痕跡はない。埋土の状況等から近世の遺構として語ることが適切と判断する。新屋敷の地に、宅地が広がるにあたり、区画溝としての利用があったものと考えられる。

4F区

当該調査区は4D区の南に位置する760mの調査区である。調査区西側は、自然の谷地形により地形の落ちが見られていた土地を近世になって盛土整地され、土地の利用がなされている。現代層は調査対象としていないことから、本整地層での遺構はここには報告しない。また、残る東側の範囲についても擾乱が激しく、調査対象とする土層の残りは非常に悪い。

古代

豊穴建物 S101 (Fig.71)

本調査区のほぼ中央で検出した遺構。北側のライン部を擾乱により大きく削平を受け、東側は調査区の外にあたることから調査ができる範囲は狭い。また、近現代の溝と位置付けるSD01が更なる削平を及ぼす。

遺構の規模等は不明である。しかし、遺構深度のみは15.0cmを測る。残存する遺構範囲からはカマドや明確な柱穴等は確認できていない。不整形ながらも掘り込みを検出したが、遺構の性格を考える上では、調査時のデータ不足から判断できない。埋土の色調等から古代の豊穴建物と判断した。

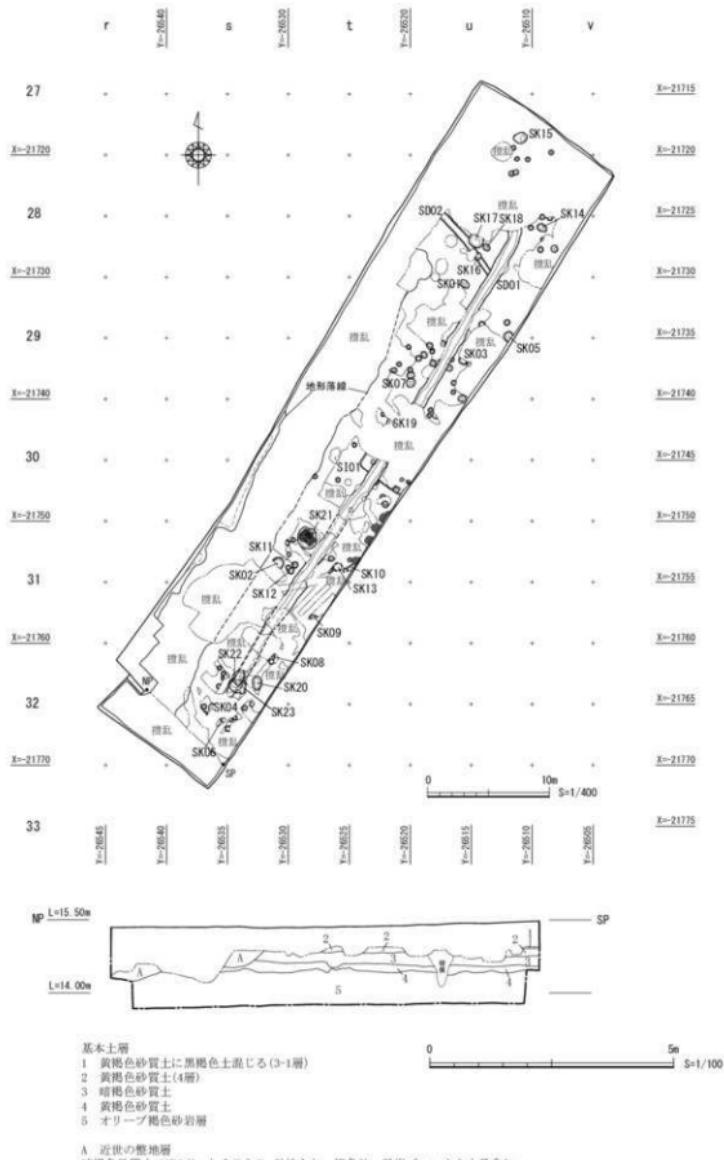


Fig. 70 A-E区遺構配置図・調査区南壁土層断面図

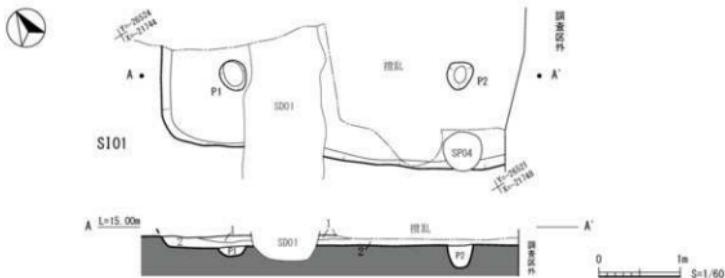


Fig. 71 4 F 区 SI01 平面・断面図

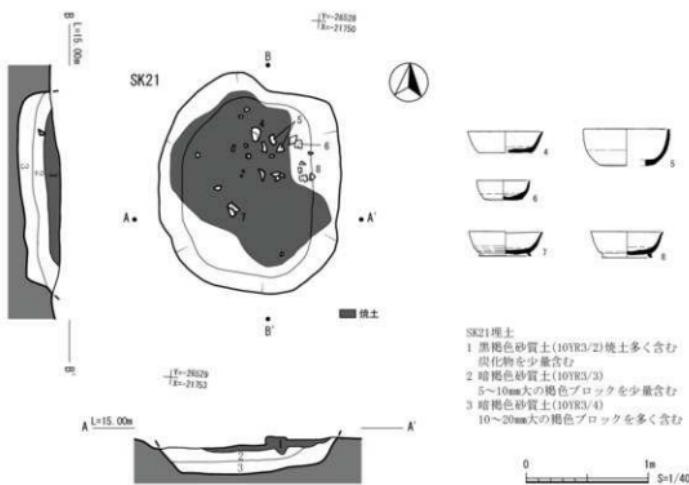


Fig. 72 4 F 区 SK21 平面・断面図

土坑 SK21 (Fig. 72)

溝 SD01に隣接し、t - 31 グリッドで検出した遺構。平面形は隅丸方形を呈し、遺構掘方はほぼ垂直に掘削され下端に至る。遺構規模は長径 1.8m、短径 1.5m、主軸は N - 4° - W を測る。

土層は 3 層を検出し、1 層からは焼土、炭化物等が高い密度で検出され、2・3 層からはこれに類するものは出土していない。このことから、2 層までは自然堆積したものが、3 層が露出している時点で焼土土坑として使用されたものと考えられる。1 層中からは二次的に赤化した土師器が出土していることから、遺構の時期は古代と判断する。

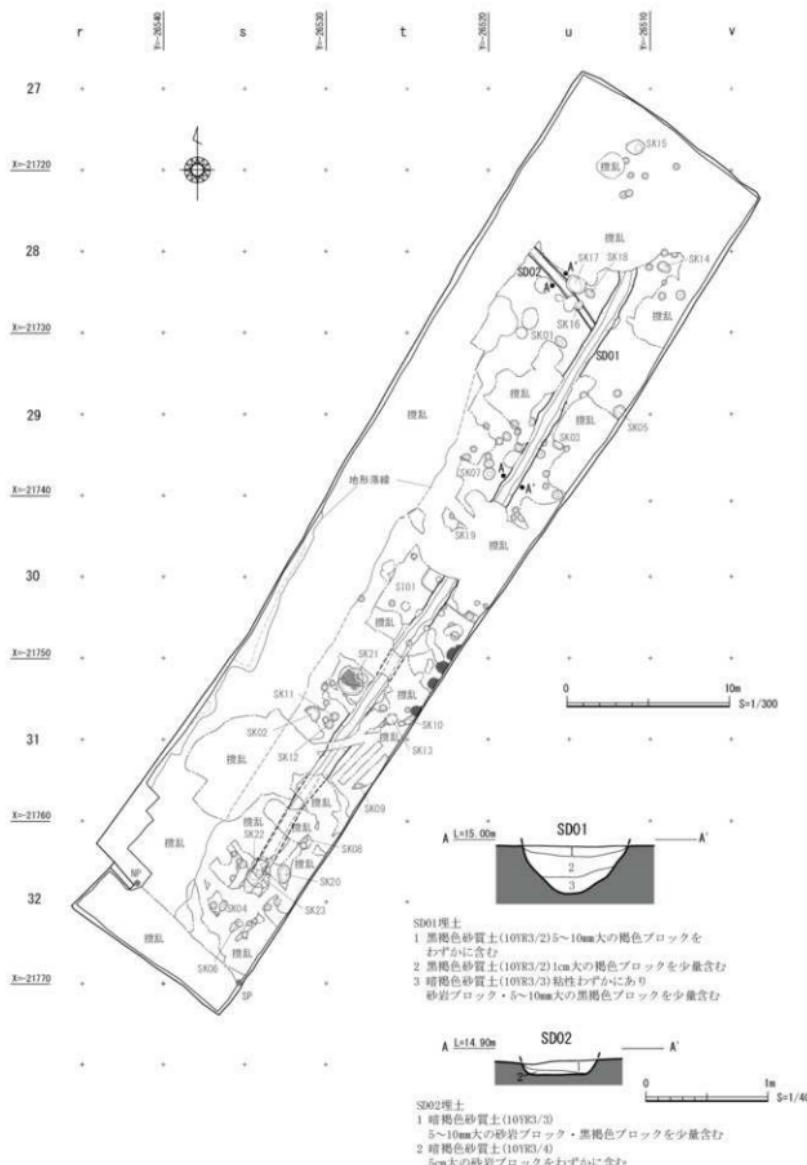


Fig.73 4 F区 SD01・02 平面・断面図

溝 SDO1 (Fig.73, PL.34)

調査区の長軸方向に沿い、谷地形の際を直線状に延びる。遺構規模は検出長 45.0m、幅は最大 0.9m、主軸は N - 31° - E を測る。断面は U 字型を呈し、土層は 3 層からなる。基本水平堆積を見せており、3 層上面での堆積が地形の落ちとは逆方向からの流れ込みの様相を呈することから、地形の高い東側から西側に向かって埋没したことが窺える。

溝 SDO2 (Fig.73)

u - 28 グリッドで検出した遺構。SDO1 に直行し切られる。遺構規模は検出長 6.0m、幅 0.65m、主軸は N - 39° - W を測る。東側に遺構端部が検出できることから、同時期の遺構の可能性が高い。

5C 区

本調査区は、道路建設事業に伴う排水用樋管の設置場所にあたることから周囲の調査区より先行して調査に着手した。調査面積は 150m²である。遺構検出の結果、調査区の大半を近世の自然流路が占めており、5B 区より続いていると見られる NRO1 を確認した。

近世

自然流路 NRO1 (Fig.74・82)

近世整地面を掘り下げた時点で検出した遺構。この自然流路は調査区の南東側から北西部へ抜けており、全容は調査区外にまで上端が外れていることから確認できていない。調査は深さ 2.0m まで実施したが、シルト質と砂粒が混土する状態であったことから自然流路と判断し、調査を終えた。

5D 区

4F 区の南側に位置し 890m²を測る。平成 20 年度に調査を実施した 5B 区に隣接した調査区である。調査区の北西側の範囲は後世の削平により、遺構は残存していない。調査区南東側は遺構の残存状態もよく、各種の遺構を確認した。

古代

竪穴建物 S101 (Fig.76, PL.35)

p - 36 グリッドで検出した遺構。残りは良くないが 3 軒の竪穴建物が切り合っているうちの最も新しい遺構に当たる。遺構規模は南北に 2.4m、東西に 2.5m、主軸は N - 8° - E を測る。土層は大まかに 2 層からなり、遺構立ち上がりに三角堆積となる流れ込み層をわずかに確認した。調査の結果、カマド、柱穴等は確認できていない。

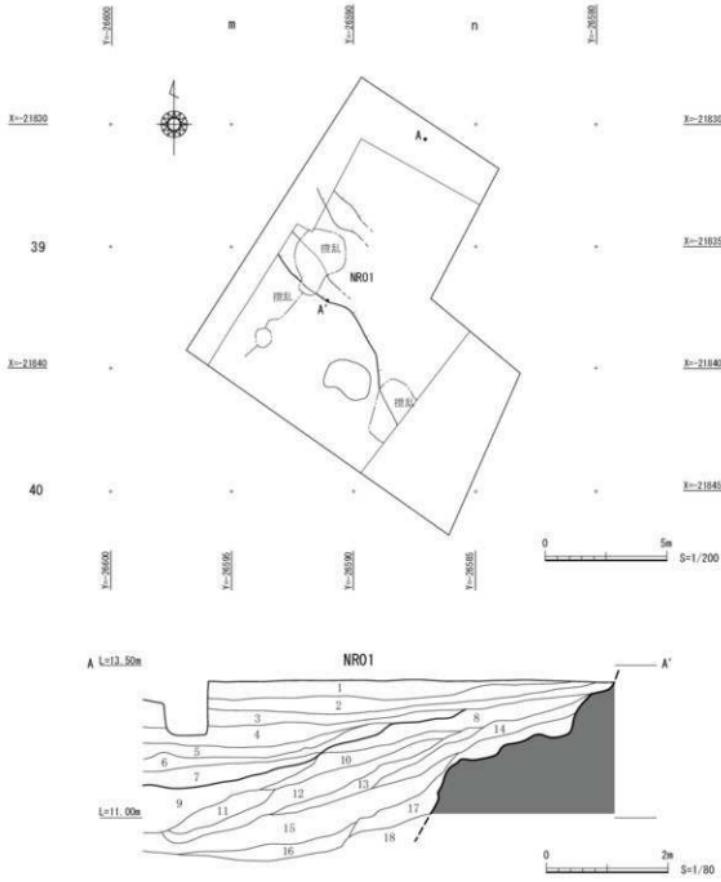
埋土 1 層から土師器杯（10）が 1 点出土している。

竪穴建物 S102 (Fig.76)

S101 の東に位置し、大半を当該遺構に切られている。S103 とは切り合い関係がないことから、前後関係は不明である。遺構規模は南北に 2.1m、東西は不明である。遺構深度は浅く、2 層を確認している。下端付近で三角堆積をしている場所も見受けられる。1 層から土師器杯（11）が 1 点出土している。

竪穴建物 S103 (Fig.76, PL.36)

前遺構と隣接して検出した遺構。この後に報告する S104 を切る形で検出した。遺構規模は、南北で削平により消滅していることから不明だが、東西は 2.4m を測る。埋土は 1、2 層であり、3 層上面で硬化面を検出している。しかし、硬化面は全面には広がらず、北側においてのみ検出している。柱穴は 4 本柱になるものと考えられるが、全体を検出しているものではなく全容はわからない。作り付けカマドは確認できていない。



- NR01地帯上
 1 黒褐色土(10YR2/3)粘性弱い
 2 硫酸色土(10YR3/3)粘性弱い
 3 黑褐色土(10YR3/2)粘性弱い
 4 黑褐色土(10YR3/2)粘性弱い
 5 黑褐色土(10YR3/2)粘性弱い
 6 硫酸色土(10YR3/3)粘性弱い
 7 黑褐色土(10YR3/2)粘性弱い
 8 黑褐色土(10YR2/2)粘性弱い
 9 黑褐色土(10YR2/2)粘性弱い
 10 硫酸色土(10YR3/3)粘性弱い
 11 硫酸色土(10YR2/2)粘性弱い
 12 硫酸色土(10YR2/2)粘性弱い
 13 硫酸色土(10YR3/2)粘性弱い
 14 黑褐色土(10YR2/3)粘性弱い
 15 黑褐色土(10YR3/2)粘性弱い
 16 黑褐色土(10YR3/2)粘性弱い
 17 黑褐色土(10YR2/2)粘性弱い
 18 硫酸色土(10YR3/2)粘性弱い
- 細い砂層 1mm~1cmの砂利・1mm以下の焼土を含む
 1mm~3cm大の砂岩ブロックをやや多く含む
 1mm~3cmの砂岩ブロックをやや多く含む
 1mm~3cm大の砂岩ブロック・1~3mm大の粗砂を含む
 1mm~3cm大の砂岩ブロックを含む 1mm~1cm大の粗砂を多く含む
 1mm~3cm大の砂岩ブロック・1~5mm大の粗砂を含む
 1mm~1cm大の砂岩ブロックを少數含む
 1mm~1cm大の砂岩ブロックを少數含む
 1mm~3cm大の粗砂を多く含む 5mm大の石を少量含む 1mm~3cm大の砂岩ブロックを含む
 1~3mm大の粗砂・1mm以下の焼土を含む
 1~3mm大の粗砂・1mm以下の焼土を含む
 1~3mm大の砂岩ブロック・5mm以下の粗砂を多く含む
 1~3mm大の砂岩ブロック・1mm~1cm大の黄褐色ブロックを含む
 1~3mm大の砂岩ブロック・1mm~1cm大の砂岩ブロックを含む
 1~5mm粗砂・1mm~1cm大の砂利・1mm~1cm大の砂岩ブロックを含む
 1~5mm粗砂・1mm~1cm大の砂利・1mm~1cm大の砂岩ブロックを含む
 1~5mm大の砂利・1mm~3cm大の砂岩ブロックを含む
 1mm以下の大砂粒・1~3cm大の砂岩ブロックを含む
 1mm以下の大砂粒・1mm~3cm大の砂岩ブロック・1~5mm大の黄褐色ブロックを含む
 1mm~3cm大の砂岩ブロックを少數含む 1~3mm大の黄褐色ブロックをやや多く含む
 1mm~1cm大の黄褐色土ブロック・1~5mm大の粗砂を多く含む
 1~3mm大の黄褐色土ブロックを少數含む

Fig. 74 5 C 区遺構配置図(近世)

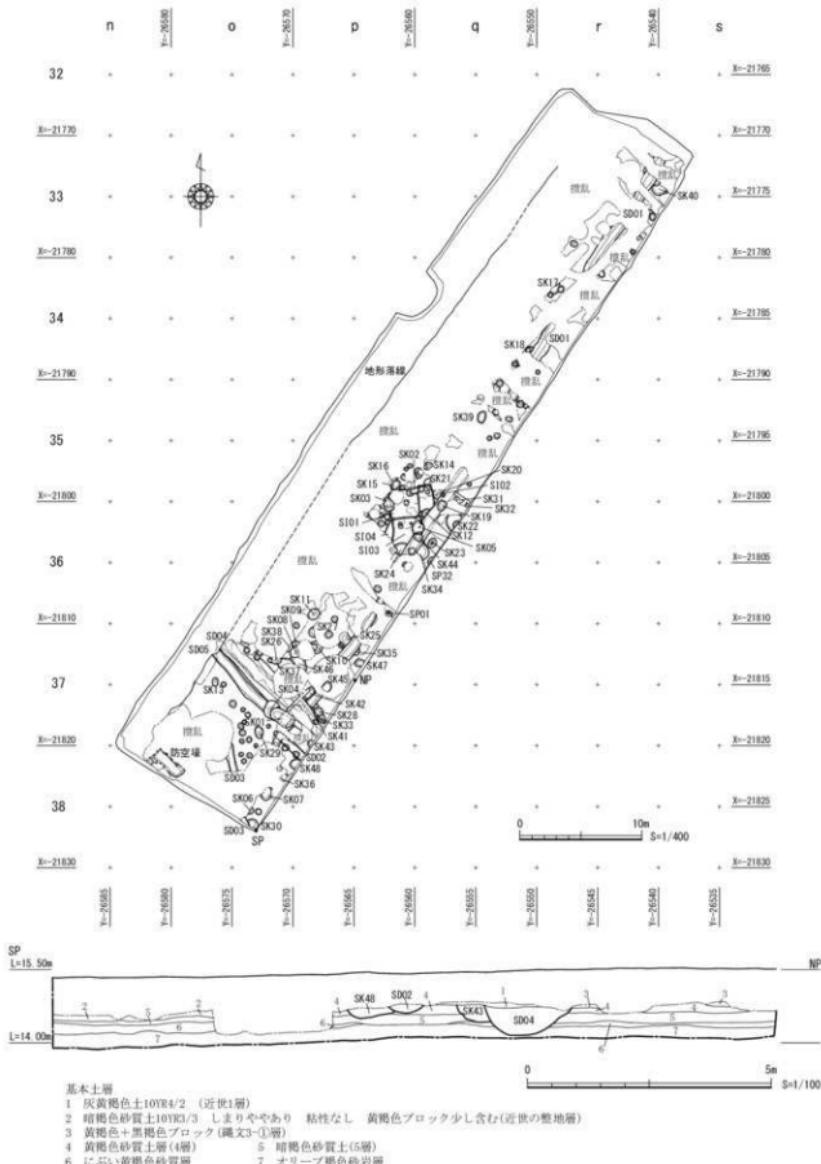


Fig. 75 5D区遺構配置図・調査区南壁土層断面図

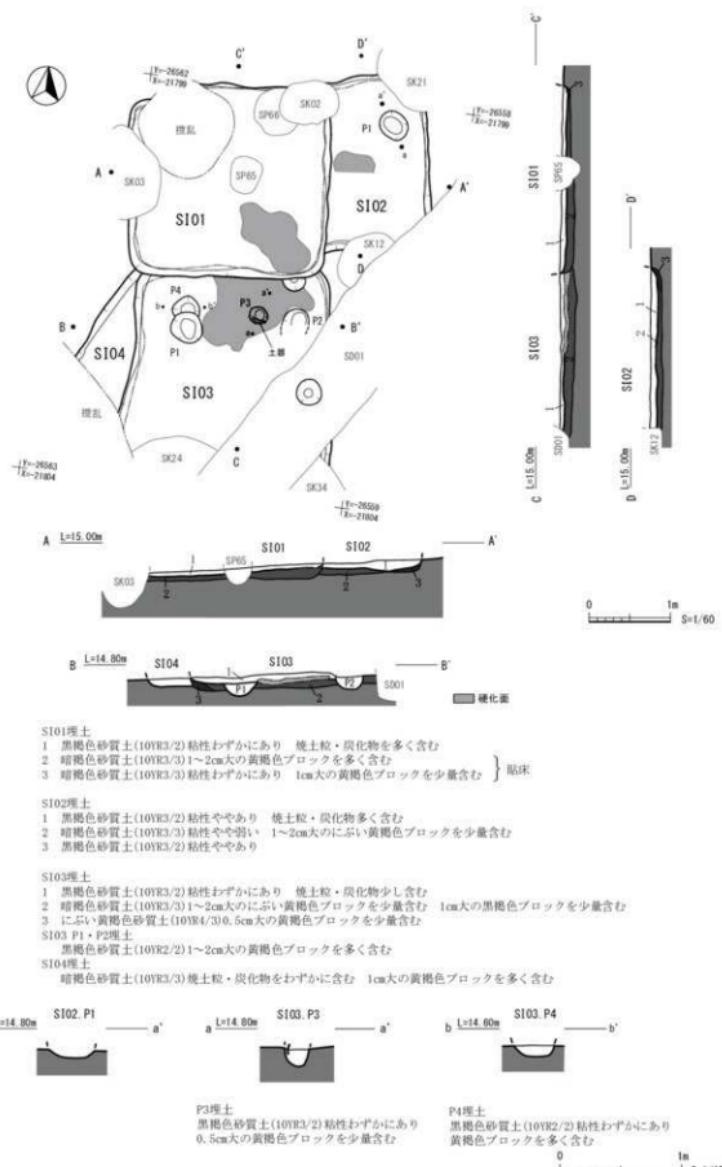
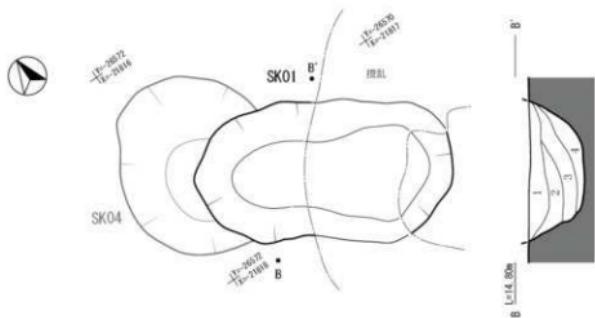


Fig. 76 5 D区 S101・02・03・04 平面・断面図

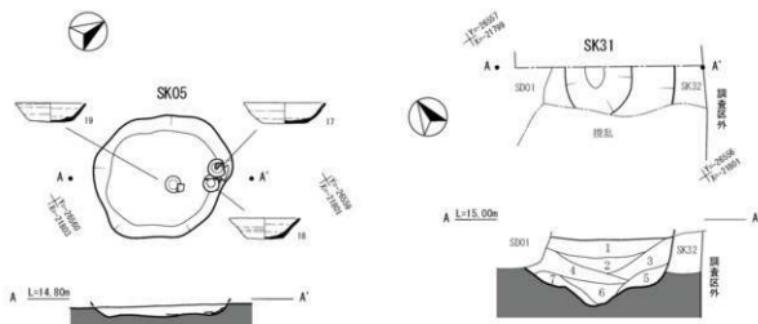
竪穴建物 SI04 (Fig.76)

p-36 グリッドで検出した遺構。一連の竪穴建物群の調査の中で最も残存状態が良好ない遺構にあたる。西側で竪穴建物と見られる1辺を確認したに留まる。SI03により切られている。カマド、柱穴等は確認していない。



SK04堆土

- 1 黒褐色砂質土(10YR3/2)粘性わざかにあり 1~2cmの大い黄褐色ブロックを多く含む
- 2 黒褐色砂質土(10YR2/2)粘性わざかにあり 1~2cmの大い黄褐色ブロックを少數含む
- 3 黑褐色砂質土(10YR3/2)粘性わざかにあり 1cm大のにがい黄褐色ブロックを少數含む
- 4 黄褐色砂質土(10YR3/3)粘性わざかにあり 1~2cmの大い黄褐色ブロックを多く含む



SK05堆土

- 暗褐色砂質土(10YR3/3)粘性ややあり
燒土粒・炭化物を少量含む
1~3cm大の粘土ブロックを多く含む

SK31堆土

- 1 黒褐色砂質土(10YR3/2)粘性わざかに含む 炭化物をわざかに含む
- 2 黒褐色砂質土(10YR2/2)粘性ややあり
- 3 暗褐色砂質土(10YR3/3)粘性わざかにあり 1cm大のにがい黄褐色ブロックを少數含む
- 4 黑褐色砂質土(10YR2/2)粘性わざかにあり
- 5 暗褐色砂質土(10YR2/2)粘性わざかにあり 1cm大の黄褐色ブロックを多く含む
- 6 黑褐色砂質土(10YR2/2)粘性わざかにあり 1cm大の黄褐色ブロックを少數含む
- 7 にがい黄褐色砂質土(10YR3/3)粘性わざかにあり 1cm大の黄褐色ブロックを多く含む

0 1m
S=1/40

Fig.77 5 D区 SK01・05・31 平面・断面図

土坑 SK01 (Fig.77)

o - 37 グリッドで検出した遺構。長椭円の形状を呈する。遺構規模は、長径 2.12m、短径 1.14m、主軸は N - 56° - W を測る。遺構深度は削平を受けているにも関わらず、他の遺構に比べ深く 45.0cm を測る。土層の堆積状況からは自然堆積による埋没と考えられる。埋土中から土師器皿 (16) が 1 点出土している。

土坑 SK05 (Fig.77)

p * q - 36 グリッドで検出した遺構。円形の形状を呈する。遺構規模は、長径 1.10m、短径 1.0m、主軸は N - 32° - E を測る。遺構深度は浅かったが、下端の立ち上がり部で土師器皿 (17) を 1 点、須恵器皿 (18, 19) が 2 点出土している。

土坑 SK31 (Fig.77)

q - 35 グリッドで検出した遺構。遺構周囲を擾乱により囲まれ、SK32 を切り、SD01 に切られる状態で検出した。のことより遺構平面形は不明であり、規模等も不明である。埋土中より土師器皿 (20) が 1 点出土しているが、出土層位は不明。

溝 SD01 (Fig.78)

調査区に沿い検出した遺構。現況で検出長 58.0m 残る。幅は 1.0m を測り、すべての遺構を切る形で検出している。主軸は N - 32° - E を測る。前に調査した 4F 区から延びてくる溝と考えられる。

溝 SD02 (Fig.78)

o * p - 37 * 38 グリッドで検出した遺構。調査区の北西端は丸く検出したが、南東端は調査区外に延びる。SD01 と交差すると考えられるが、その他の遺構及び擾乱により詳細は不明。遺構規模は検出長 3.1m、幅 0.4m、主軸は N - 48° - W を測る。SD01 同様にすべての遺構を切る形で検出している。

溝 SD03 (Fig.79)

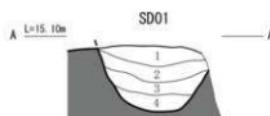
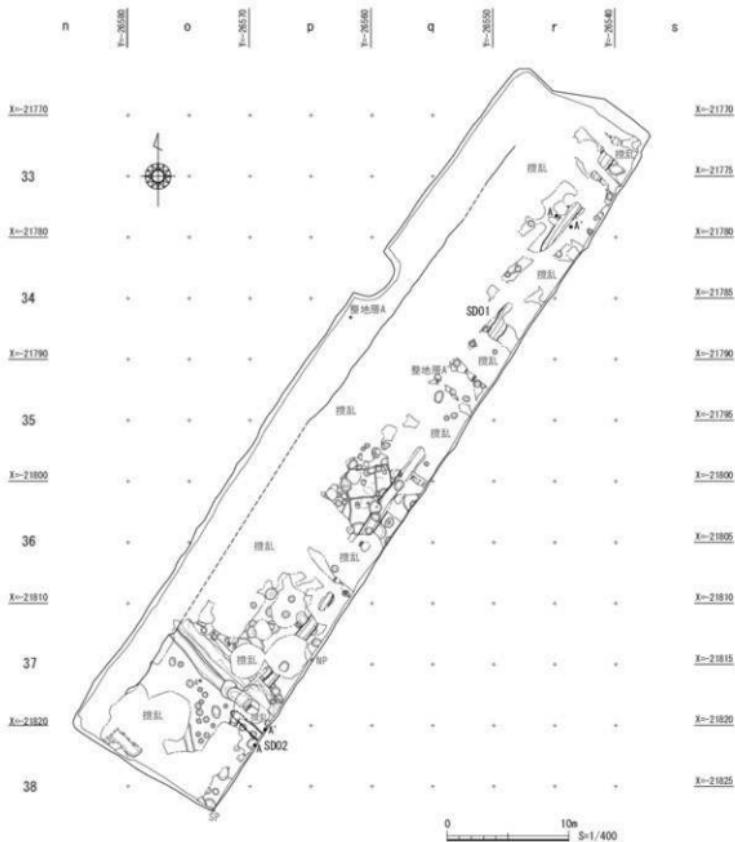
o - 38 グリッドで検出した遺構。溝状遺構と考えられるが両端が擾乱により削平を受けるため詳細は不明。本稿では当調査区検出溝と幅、深度及び埋土の状況が類似することから溝状の遺構と判断した。遺構規模は、検出長 7.0m、幅 0.6m、主軸は N - 10° - W を測る。

溝 SD04 (Fig.79)

調査区を o * p - 37 グリッド付近で横断する。遺構規模は検出長 11.0m、幅 2.2m、主軸は N - 48° - W を測る。5B 区で検出されている溝 SD08 の延長上に当たる遺構である可能性が高い。

溝 SD05 (Fig.79)

上記、SD04 に南側で切られる状態で検出した遺構。遺構規模は、実測した土層断面図には他の遺構及び擾乱により表出しないが、平面形では SD04 に切られる状態で検出している。遺構規模は、検出長 11.0m、幅 1.0m、主軸は N - 44° - W を測る。遺構は、現況で西側に位置する白川方面にやや落ち、上端も浅くなる。5B 区で報告している SD06 に接続する溝と考えられる。



SD01埋土

- 1 黄褐色砂質土 (10YR3/3)
- 2 黒褐色砂質土 (10YR3/2) 黏性わずかにあり
1~2cm大の黄褐色ブロックを少數含む
- 3 黒褐色砂質土 (10YR2/2) 黏性わずかにあり
1~2cm大の黄褐色ブロックを少數含む
- 4 黄褐色砂質土 (10YR3/3) 黏性わずかにあり
2~3cm大の黄褐色ブロックを多く含む
1~2cm大の黒褐色ブロックを少數含む

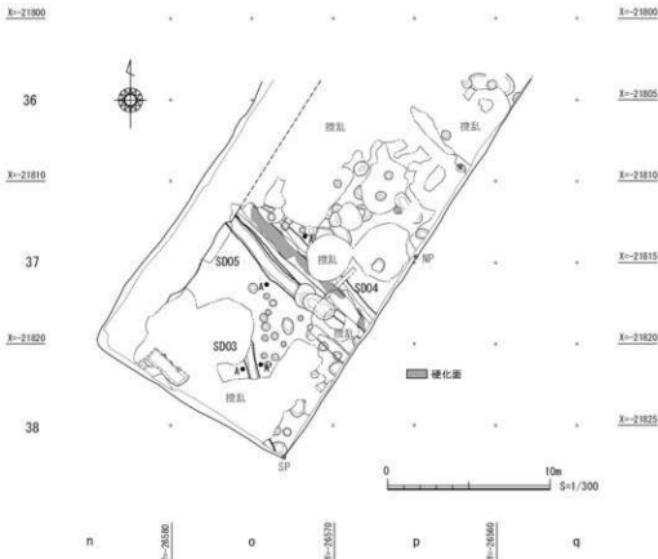


SD02埋土

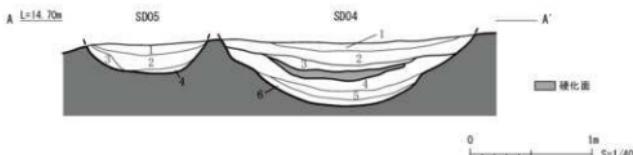
- 1 黄褐色砂質土 (10YR4/2) 黏性わずかにあり
炭化物わずかに含む
- 2 0.5cm大の黄褐色ブロックを少數含む

0 1m
S=1/40

Fig.78 5D区 SD01・02 平面・断面図



SD03埋土
1 暗褐色砂質土(10YR3/3)粘性ややあり 橙色粒わざかに含む
2 黒褐色砂質土(10YR3/2)粘性ややあり 1~2cm大的褐色ブロックを多く含む
3 褐色砂質土(10YR4/4)粘性わざかに含む



SD04堆土
1 黒褐色砂質土(10YR3/2)粘性わざかにあり 塵土粒わざかに含む
2 にぶい黒褐色砂質土(10YR4/3)粘性わざかにあり 1~2cm大的黄褐色ブロック・1cm大的黒褐色ブロックを少量含む
3 暗褐色砂質土(10YR3/3)粘性ややあり
4 黑褐色砂質土(10YR3/2)粘性ややあり 1cm大的オリーブ褐色ブロックをわざかに含む
5 暗褐色砂質土(10YR3/3)粘性わざかにあり 1cm大的黄褐色ブロックをわざかに含む
6 暗褐色砂質土(10YR3/4)粘性ややあり 1~2cm大的オリーブ褐色ブロックを少量含む

SD05堆土
1 暗褐色砂質土(10YR3/3)粘性わざかにあり
2 黑褐色砂質土(10YR3/2)粘性わざかにあり 1cm大的褐色ブロックを少量含む
3 暗褐色砂質土(10YR3/4)粘性わざかにあり 1cm大的褐色ブロックを少量含む
4 暗褐色砂質土(10YR3/3)粘性ややあり 1cm大的褐色ブロックを少量含む

Fig. 79 5 D区 SD03・04・05 平面・断面図

5E区

本調査区は、5C区と5D区に挟まれた調査区で、調査面積191m²を測る。遺構の主体は5C区で検出したNR01（調査時はSDと表記）を確認した。本遺構の着手時に遺構上面及び隣接する場所で墓STO1（近世）を確認した。

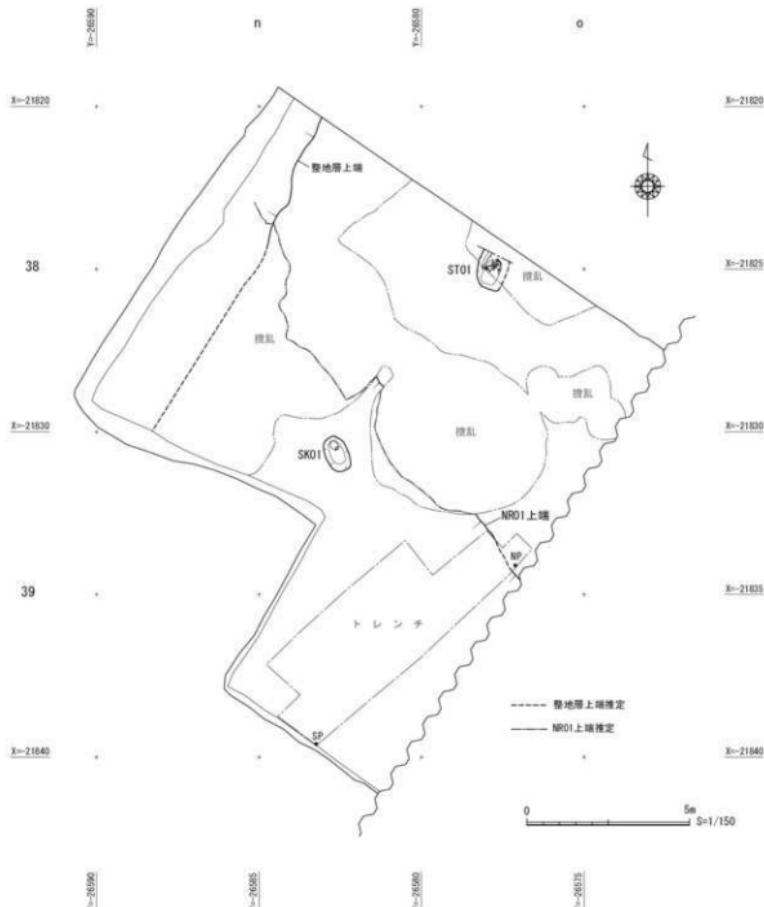
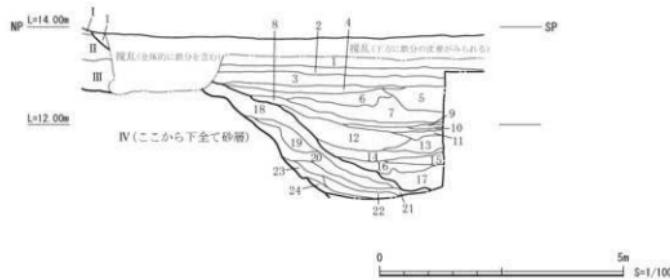


Fig.80 5E区遺構配置図



- 1 暗褐色砂質土(10YR3/4)橙色粒・炭化物を少々含む
- 2 黒褐色砂質土(10YR3/2)粘性わずかにあり 粒子粒・炭化物・1cm大の砂岩ブロックを少々含む
- 3 暗褐色砂質土(10YR3/3)橙色粒・1cm大の砂岩ブロックを少々含む
- 4 にぶい黄褐色砂質土(10YR4/3)1~3cm大の砂岩ブロックを多く含む 1cm大の褐色粘土ブロックをわずかに含む
- 5 にぶい黄褐色砂質土(10YR3/4)1~3cm大のオリーブ黄砂岩ブロック・3~10cm大のオリーブ黒砂岩ブロックを多く含む
- 6 黑褐色砂質土(10YR3/2)1~6cm大の砂岩ブロックを多く含む 1~5mm大の黄褐色の粒を少々含む
- 7 暗褐色砂質土(10YR3/3)粘性わずかにあり 1~20cm大のオリーブ黒砂岩ブロックを多く含む
1~20cm大のオリーブ黄砂岩ブロック・1cm大の黄褐色ブロックを少々含む
- 8 黑褐色砂質土(10YR3/2)1~5cm大の黄褐色粒を多く含む 1cm大の砂岩ブロックを少々含む
- 9 青黒色(10R6/2)1砂・1~2cm大の砂岩ブロックをわずかに含む 黑褐色土が少々混じる
- 10 黑褐色砂質土(10YR2/3)粘性わずかにあり 1~2cm大のにぶい黄褐色ブロック・0.5~1cm大の砂岩ブロックを少々含む
- 11 青黒色(10R6/2)1砂・1~2cm大の砂岩ブロックをわずかに含む 黑褐色土が少々混じる
- 12 黑褐色砂質土(10YR3/2)1cm大の黄褐色ブロック・1~2cm大の砂岩ブロックを少々含む
- 13 青黒色(10R6/2)1砂・0.5~1cm大の小石を多く含む 1~3cm大の砂岩ブロックを少々含む
- 14 黑褐色砂質土(10YR3/3)粘性わずかにあり 1~5mm大の黄褐色粒を少々含む
- 15 青黒色(10R6/2)1砂・5~30cm大の砂岩ブロックを少々含む
- 16 黑褐色砂質土(10YR2/2)粘性ややあり 1cm大の砂岩ブロック・1cm大の褐色ブロックを少々含む
- 17 青黒色(10R6/2)1砂・1~5mm大の黄褐色粒 10~40cm大の砂岩ブロックを少々含む
- 18 暗褐色砂質土(10YR3/3)粘性ややあり 1~5mm大の黄褐色粒・1~2cm大の黄褐色ブロックを多く含む
1~10cm大の砂岩ブロックを少々含む 青黒砂(地山)が少々混じる
- 19 黑褐色砂質土(10YR2/2)粘性ややあり 1cm大の黄褐色ブロック・2~10cm大のオリーブ黒砂岩ブロックを少々含む
- 20 暗褐色砂質土(10YR3/3)粘性ややあり 1~5mm大の黄褐色粒・1~2cm大の黄褐色ブロックを少々含む
- 21 黑褐色砂質土(10YR2/2)粘性ややあり 1~2mm大の黄褐色粒・1~2cm大の黄褐色ブロックを少々含む 1cm大の小石を含む
- 22 暗褐色砂質土(10YR3/3)粘性ややあり 2~3mm大の黄褐色ブロック少々含む 青黒砂が少し混じる
- 23 黑褐色砂質土(10YR3/2)粘性ややあり 青黒砂が少し混じる
- 24 黑褐色砂質土(10YR3/2)粘性ややあり 青黒砂が多く混じる

※ 注記で「砂岩ブロック」と表記しているものはIIのオリーブ黄砂岩層のブロックが入ったものである。
ⅡとⅢ両方の色の砂岩ブロックが入っているものには別々の色で注記を書いている。

基本上層(近世・古代・縄文の包含層はカクランや整地層により削平される)

I にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土層 しまり弱く粘性なし

II オリーブ黄色(5Y6/3)砂岩層 岩質 しまりかなり強い オリーブ褐色の地山ブロック

III オリーブ黒色(10Y)砂岩層

IV 青黒色(10R6/2/1)砂層 サラサラの砂層 しまりなく粘性なし 溜の最下層や立ち上がり部分によく混入する

Fig.81 5 E 区旧河川土層断面図

近世

自然流路 NR01 (Fig.81・82)

m~o - 38~40 グリッドで検出した自然流路。自然流路のため全調査区で検出し、報告した内容と同じである。



Fig.82 5C・5E区 NR01 平面図

墓 ST01 (Fig.83)

o - 38 グリッドで検出した遺構。搅乱等の遺構掘り下げ時に検出した遺構である。調査区北端は調査区外に当たるため、遺構全体の平面形態は不明である。残存状況での遺構規模は長径 1.05m、短径 0.96m、主軸は N - 27° - E を測る。

人骨は遺構下端に集中していることから屈葬し埋葬されたものと見られる。副葬品等は出土していない。

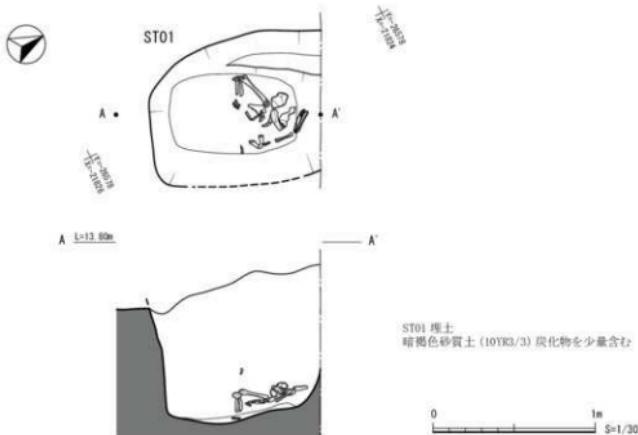


Fig.83 5 E 区 ST01 平面・断面図

土坑 SK01 (Fig.84, PL.37)

n - 39 グリッド上で検出した遺構。表土剥ぎ後、遺構の検出を行った時点で検出と同時に遺物も出土した。遺物は近世の醤油甕と見られる壺で、出土状態は横倒しの状態である。下端に張り付き横倒しになっていたため、埋められたものと判断した。遺構規模は長径 1.12m、短径 0.70m、主軸は N - 33° - W、深度は 20.0 cmを測る。

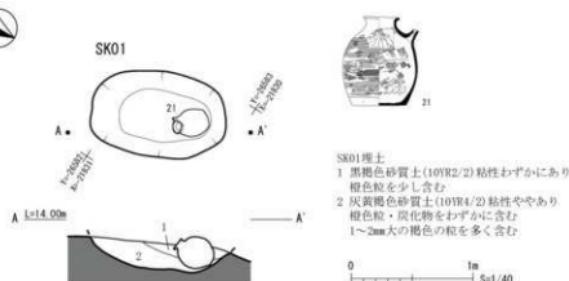


Fig.84 5 E 区 SK01 平面・断面図

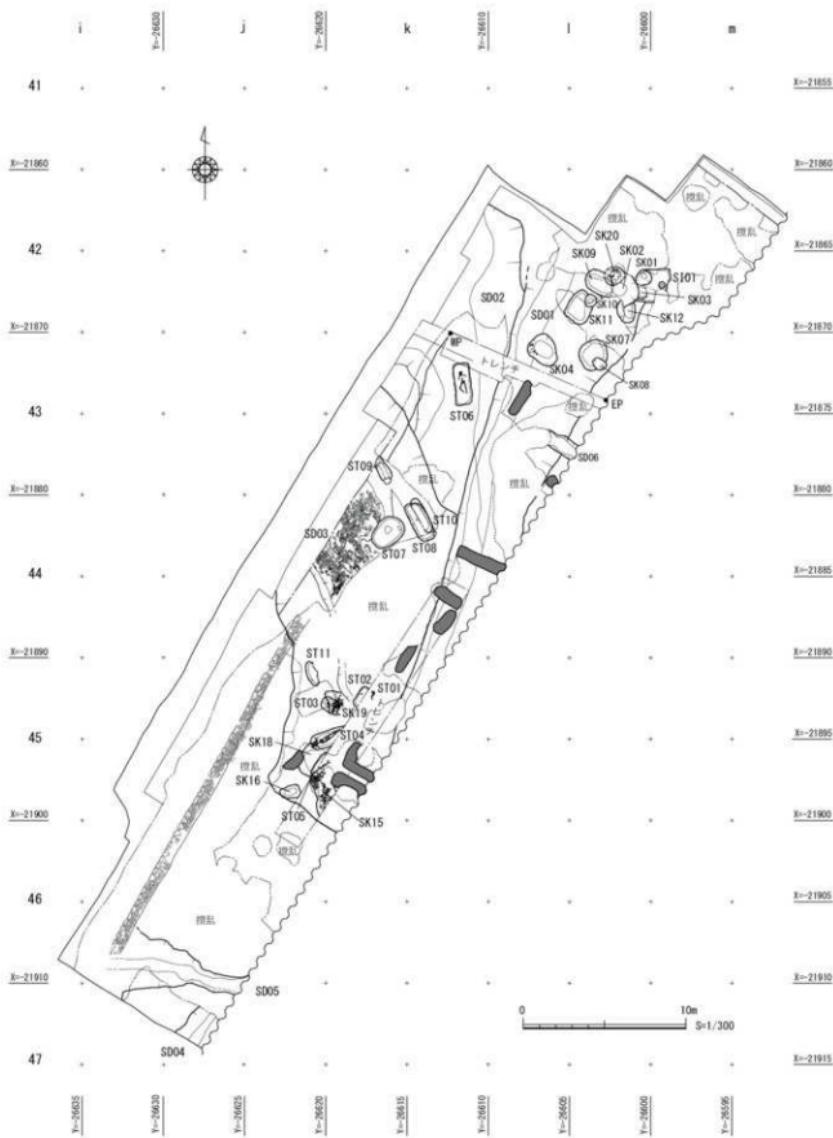


Fig.85 6C区構造配置図

6C IX

本調査区は、他の調査区に比べ比較的大きな樹木が近年まで多数移植されていた調査区にあたり、また、この度の河川改修事業に伴い、削平を受ける川側に植栽されていた楠等の樹木数本を切り倒すのではなく、「立曳」という植栽事業で削平を受けない場所へ移動させるため、事前に発掘調査を実施した場所にある。平成23年度は樹木等の移動前の場所、平成24年度は樹木等が移動した後の調査区の発掘調査を実施した。

調査面積は平成23・24年度併せて6haとし、990m²の調査を実施した。また、樹木等の移動後の平成24年7月には、九州北部大水害によって調査区が水没する事態が生じた。調査区内に最大75.0cmの河川堆積物が流れ込んだため調査を一時中断し、除去作業を実施した。

古代

堅穴建物 SI01 (Fig.86, PL.37)

1・m-42 グリッドで検出した遺構。近現代の搅乱に多数切られており、わずかに検出できた。現況での遺構規模は、長軸 2.33m、短軸 2.05m、主軸は長径側で計測し N 87° -W を測る。

遺構埋土は7層からなり、硬化が検出された面は6層に当たる。本遺構に伴うカマドは検出できていない。柱穴は硬化面上で検出されたが明確な遺構は確認できていない。

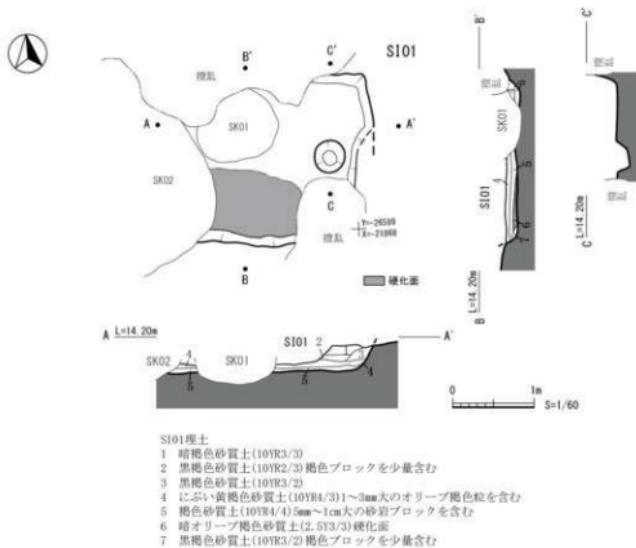


Fig.86 6C区SI01平面・断面図

土坑 SK02 (Fig.87)

I - 42 グリッドで検出した遺構。周囲を多数の遺構に切られ、また、北側は調査区外に当たることから全容を把握した遺構ではない。平面形は隅丸方形を呈す。遺構規模は、長径 2.34m、短径 2.34m、主軸は N- 24°- W を測る。断面は中央部が深く、土層の堆積は最下層を除き、レンズ状堆積の自然堆積土層を呈する。最下層は、掘削後埋め戻した土か、同色・同質の土が入る。一時的に放棄されていた土が掘り返され、その後、放棄されたものともされる。出土遺物は、須恵器高台付杯（141、142）、土師器杯（139、140）、紡錘車（199）が出土しており、同遺跡に含まれる繩文期の石器等を古代において同時に含む。

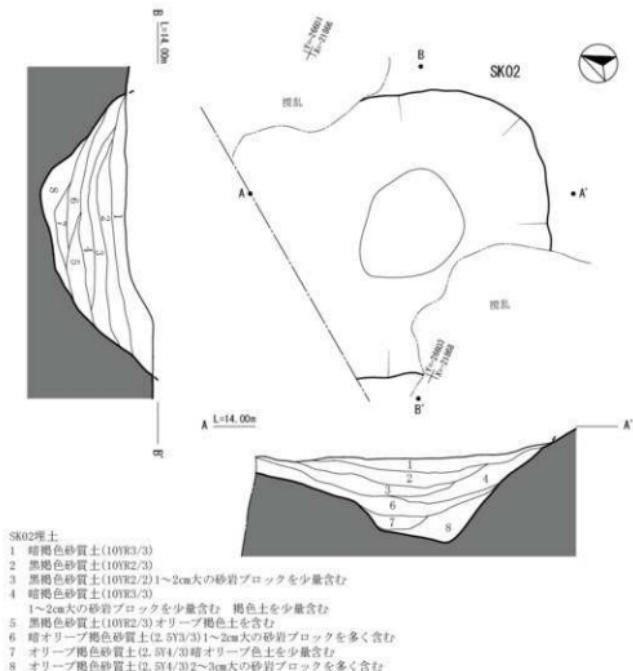
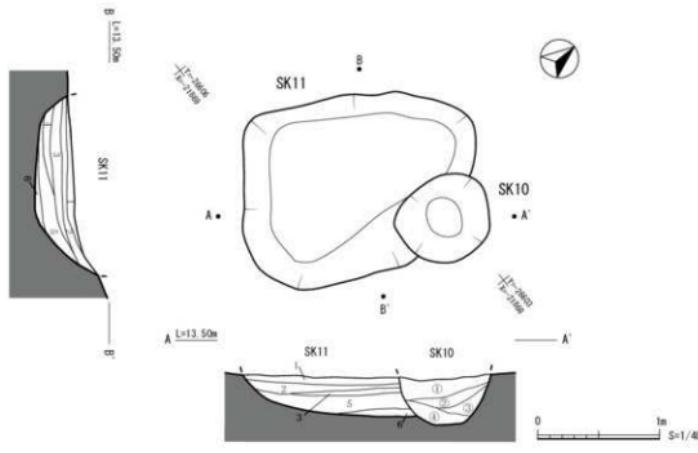


Fig.87 6C区 SK02・04 平面・断面図



- SK10埋土**
- ① 黒褐色砂質土(10YR2/2)粘性やや弱い 废化物・5mm大の砂岩ブロックを少量含む
 - ② 暗褐色砂質土(10YR3/3)粘性やや弱い 0.5~1cm大の砂岩ブロックを少量含む
 - ③ 黒褐色砂質土(10YR2/2)粘性やや弱い 1cm大の砂岩ブロックをわずかに含む
 - ④ 暗褐色砂質土(10YR3/3)粘性やや弱い 1cm大の砂岩ブロックをわずかに含む
- SK11埋土**
- 1 黒褐色砂質土(10YR3/2)粘性やや弱い 1cm大の黄褐色ブロック・橙色粒・炭化物・5mm大の砂岩ブロックを少し含む
 - 2 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/4)粘性やや弱い 0.5~1cm大の砂岩ブロックを多く含む
 - 3 暗褐色砂質土(10YR3/3)粘性やや弱い 0.5~2cm大の砂岩ブロックを少量含む
 - 4 にぶい黄褐色砂質土(10YR4/3)粘性やや弱い 0.5~1cm大の砂岩ブロックを多く含む
 - 5 黑褐色砂質土(10YR3/2)粘性やや弱い 1~2cm大の砂岩ブロックを少量含む 1cm大の黄褐色ブロックをわずかに含む
 - 6 暗褐色砂質土(10YR3/3)粘性やや弱い 1cm大の砂岩ブロックを少量含む

Fig.88 6C区SK10・11平面・断面図

土坑SK04 (Fig.87)

1 - 42 グリッドで検出した遺構。不定形の平面を呈している。遺構規模は長径 2.0m、短径 1.6m、主軸は N - 53° - W を測る。遺構埋土は 4 層からなり、レンズ状の堆積から自然堆積による埋没が考えられる。遺構完掘時に遺物が下端近くからまとまって出土していることから、古代における良好な一括資料である。須恵器皿 (146)、土師器皿 (143・144)、土師器高杯 (145) が 3 ~ 4 層で出土している。

土坑SK10 (Fig.88)

1 - 42 グリッドで検出した遺構。土坑 SK11 の東側上端を切り掘り込まれる。平面形は円形で一部不整形の部分を有する。土層堆積は、レンズ状堆積を呈することから、自然埋没による堆積と考えられる。遺構規模は長径 79.0cm、短径 71.0cm、主軸を N - 38° - E を測る。出土遺物はない。

土坑SK11 (Fig.88)

1 - 42 グリッドから検出した遺構。方形の平面形を呈し、東側を土坑 SK10 により切られる。遺構平面は SK04 に類似する。遺構規模は長径 1.90m、短径 1.54m、主軸は N - 38° - E を測る。埋土は薄いレンズ状堆積を呈し、4 層から土師器皿 (147) が 1 点出土している。

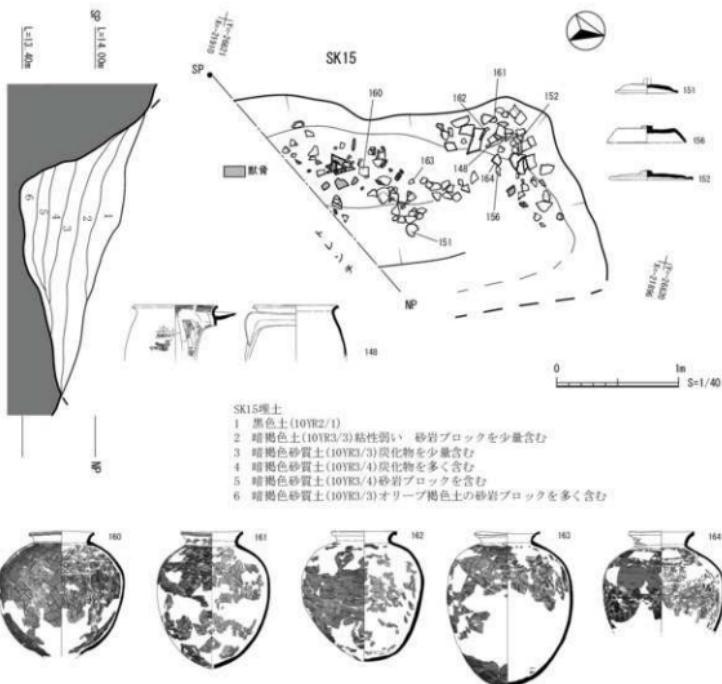


Fig.89 6 C 区 SK15 平面・断面図

土坑 SK15 (Fig.89)

j・k-45 グリッドで検出した遺構。調査区の南側をトレンチにより失う。遺構は傾斜した斜面に穿たれており、検出面は一様ではない。遺構規模は、長径 2.02m、短径 1.70m、主軸は N - 21° - W を測る。埋土は西側に高位を持ち、水平に堆積を見せる。本遺構からは多数の遺物が出土しており、廐棄土坑の可能性も考えられる。また、獸骨も出土しており遺物廐棄を裏付ける資料ともなりうる。

土坑 SK18 (Fig.90)

j - 45 グリッドで検出した遺構。平面形は不定形である。遺構規模は、長径 3.08m、短径 1.70m、主軸は N - 35° - E を測る。本遺構も傾斜した面に位置することから南側から北側に落ちる。土層堆積状況も同様の様子を呈することから、遺構が埋没する過程においては調査時と同様の地形をしていたものと考えられる。出土遺物は土師器甕 (165)、須恵器蓋 (166)、刀子 (206)、獸骨が出土している。

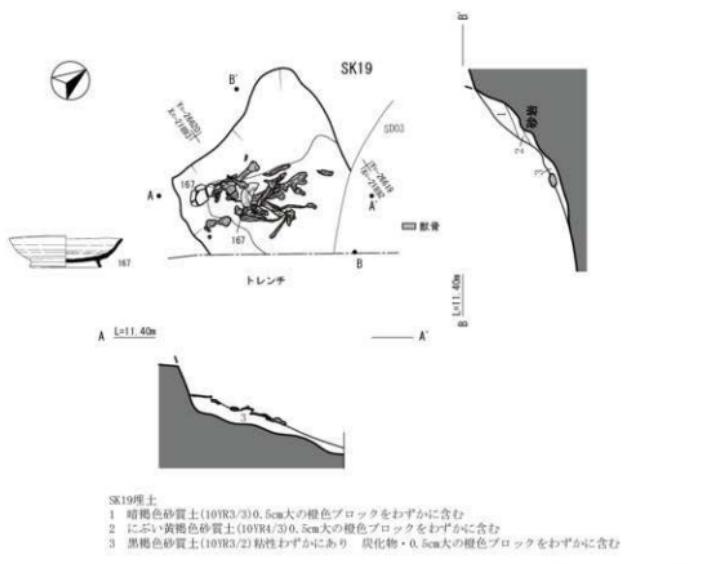
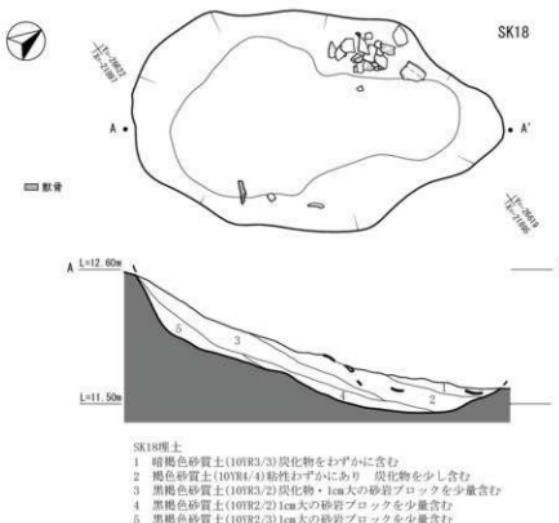


Fig.90 6 C区 SK18・19 平面・断面図

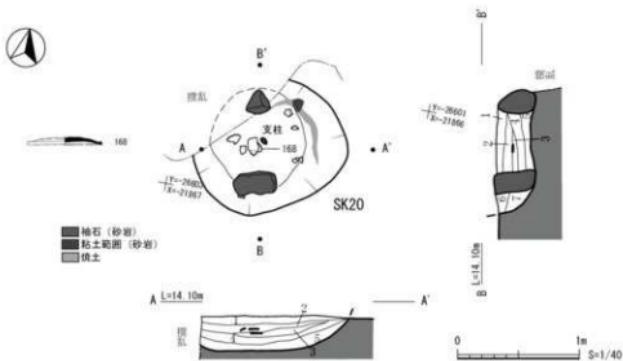


Fig.91 6C区 SK20 平面・断面図

土坑SK19 (Fig.90, PL.38)

k~45グリッドで検出した遺構。平面形は一部を搅乱により削られていること、遺構検出時点で遺構の一部を掘り下げていたことから正確な形状を確認することはできない。現状では不定形の土坑として報告する。先述した同区の土坑同様に斜面上に位置している。主軸は遺構の現状での残存状態の良い部位を中心と測り、遺構規模は長径1.44m、短径1.30m、主軸はN~35°~Eを測る。遺構埋土は3層からなるが検出時には2層までを掘削し終えていたため3層からの出土遺物のみ報告する。土師器高台付大杯(167)及び獸骨が出土している。

土坑SK20 (Fig.91)

l~42グリッドで検出した遺構。一見すると竪穴建物に付属する作り付けカマド窯体部及び燃焼部の一部であると考えられる。しかし、本遺構の周辺からは竪穴建物遺構が検出されていないため現状では単体のカマド遺構であると認識する。カマド遺構とする根拠は、B~B'断面において、通常作り付けカマドに多用される袖部の石材が立った状態で検出されていること、また、両袖に挟まれた内部にわずかであるが2~3層に焼土・炭化物を含むことである。以上の事より、一時的に作り付けカマドと同様の使用事例があったことが確認される。遺構東側がやや外に広がっていることと、3層面の立ち上がりが見られることから燃焼部前面に当たることも想定される。遺構規模は推定にはなるが、長径1.3m、短径0.88m、主軸はN~78°~Eを測る。

出土遺物は、主に2層若しくは3層の燃焼面相当層より須恵器蓋(168)及び須恵器壺(169)が、二次的に火を受けた状態で出土している。

墓 ST01 (Fig.92、PL.38)

k - 45 グリッドで検出した遺構。SD03 の遺構掘削中に人骨が出土した状態で遺構の存在に気が付いたことから、遺構プランは確認できていない。頭部はやや北側に向き、頸椎、鎖骨等がわずかに出土するが、下半身の部位は未検出であったことから SD03 掘削中に掘りぬいた可能性が高い。

墓 ST02 (Fig.92、PL.39)

k - 45 グリッドで検出した遺構。ST01 の西側に位置する。遺構規模は長径 1.4m で、短径部は約半分近くが調査区外にあたることから詳細な法量は不明。主軸は N - 33° - E を測る。出土した部位は、脛骨及び腓骨の一部と考えられる。その他の部位は確認されていない。遺構の立地が南に向かいやや下がるため上層部は削平され残っていないものと考えられる。

墓 ST03 (Fig.92、PL.39)

j + k - 45 グリッドで検出した遺構。遺構の南東側半分を削平により失う。遺構規模は長径 0.96m、短径 0.84m、主軸は N - 60° - W を測る。人骨は床面から 10.0cm ほど浮いた状態で検出した。墓壙掘削後、下端レベルを決める際に埋め戻された土の可能性も考えられる。出土部位は頭部を含め、上半身部のみである。

墓 ST04 (Fig.93)

j + k - 45 グリッドで検出した遺構。本遺構でも人骨が出土したことで墓と認識したが、土層断面等の基本情報の記録はない。遺構規模は、遺構東側がトレンチにより切られていることから消滅しているため、正確ではないが長径 2.3m 以上、短径 0.96m、主軸は N - 108° - W を測る。人骨は本調査区で検出した人骨の中では、ST06 と同じく残存状態が最もよく、ほぼ全身像が残る。

墓 ST05 (Fig.93)

j - 45 グリッドで検出した遺構。本遺構も東側約 1/3 をトレンチにより切られている。本遺構も検出時には一部遺構の掘削が及んでおり、埋土の基本情報は失われている。遺構規模は長径 1.70m、短径 0.84m、主軸は N - 146° - W を測る。埋土中からは骨片が 1 点出土しているのみである。

墓 ST06 (Fig.93、PL.40)

k - 43 グリッドで検出した遺構。遺構規模は長径 2.58m、短径 1.04m、主軸は N - 4° - W を測る。頭部は一部が削平され失われているが、ほぼ全身の部位を確認することができた。人骨周囲からは土師器杯、釘等が多数出土しているが、その出土地点からは、土師器杯は供獻目的であるか、釘は木棺の留め具であるかは判別することができなかった。

墓 ST07 (Fig.94)

k - 44 グリッドで検出した遺構。本遺構は他の墓 (ST) と違い不定形ながらも楕円形を呈する。遺構規模は長径 1.64m、短径 1.20m、主軸は N - 49° - E、遺構深度は浅く、10.0cm で明確な立ち上がりを見せない。調査時には墓と報告しているが、埋土が地山と同じであること、遺構の立ち上がりが明確ではないことから遺構とは判断できない。調査時に遺構と認識した理由は、中央部に炭化物の集中があることから遺構とし、また、墓として認識していたようである。本遺構としているものは土地の傾斜にあたり、層位が傾斜している一部であり、炭化物は層以上に存在した焚火程度の燃焼面であると判断した。

墓 ST08 (Fig.94)

k - 44 グリッドで検出した遺構である。遺構規模は長径 2.56m、短径 1.16m、主軸は N - 26° - W を測る。ST04、ST06 同様の規模を有していることから墓であることは間違いない。しかし、本遺構では他の遺構に比べ遺構深度の残りが浅く、推測するに、削平を受け人骨自体は消滅したものと考えられる。

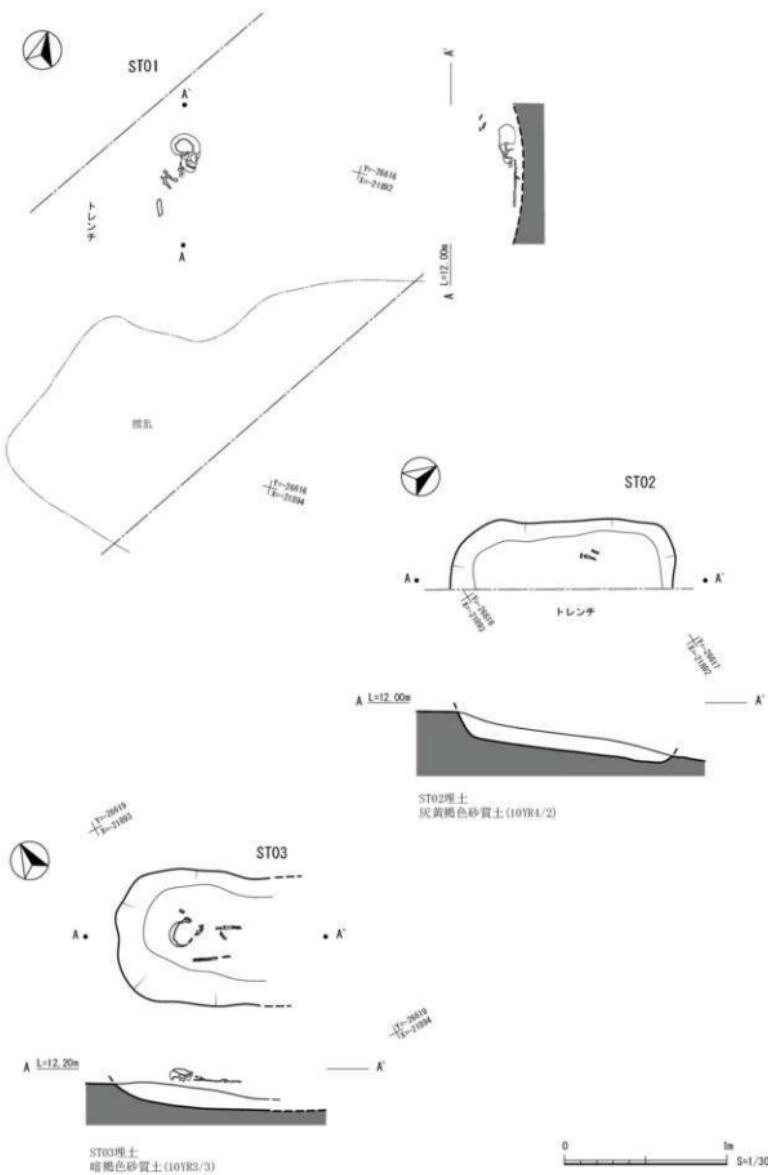


Fig.92 6 C区 ST01・02・03 平面・断面図

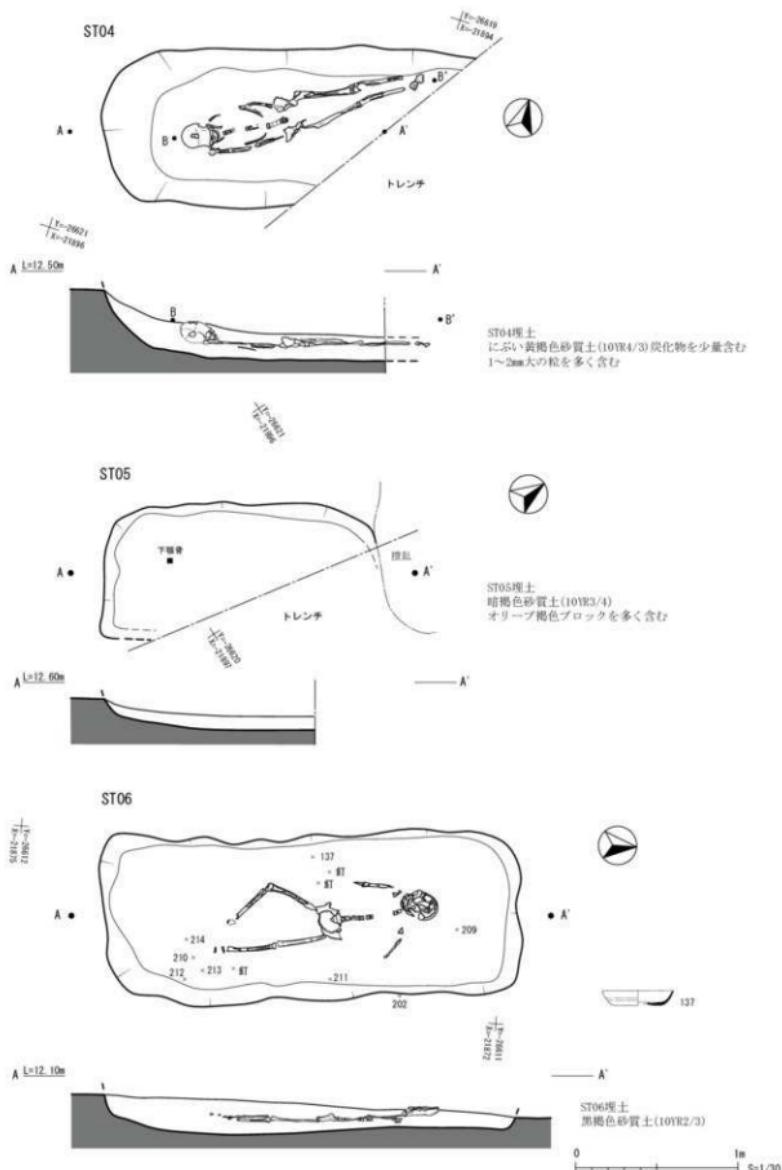


Fig.93 6 C 区 ST04・05・06 平面・断面図

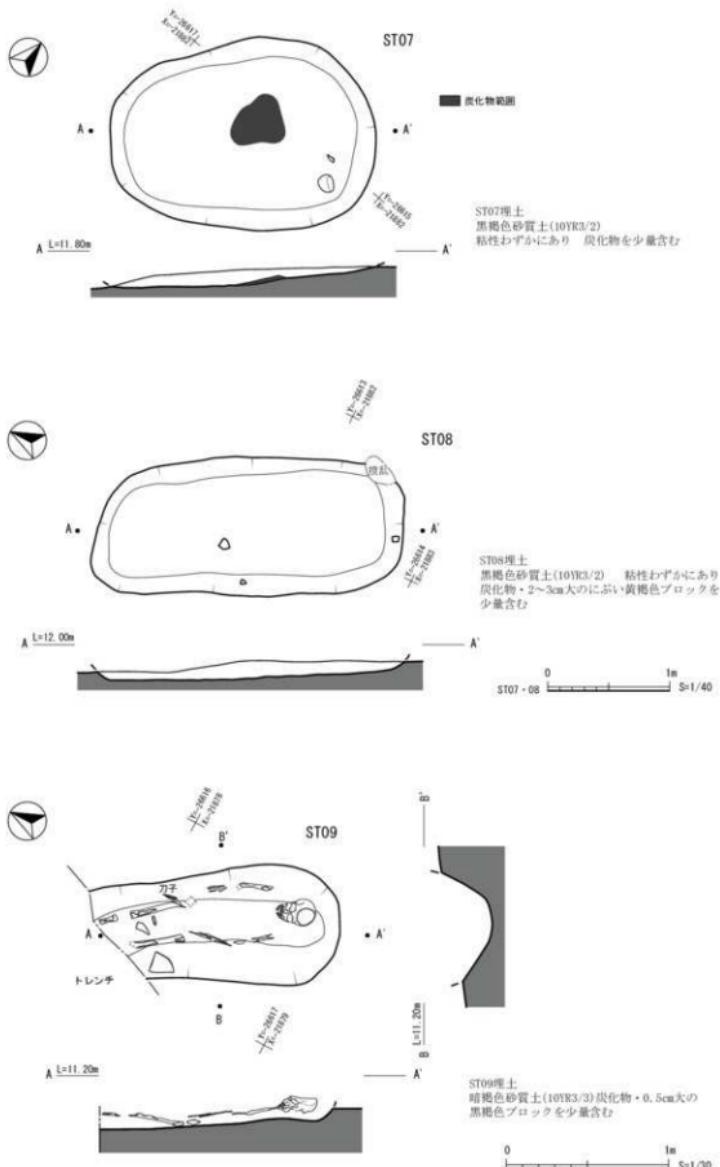


Fig.94 6 C 区 ST07・08・09 平面・断面図

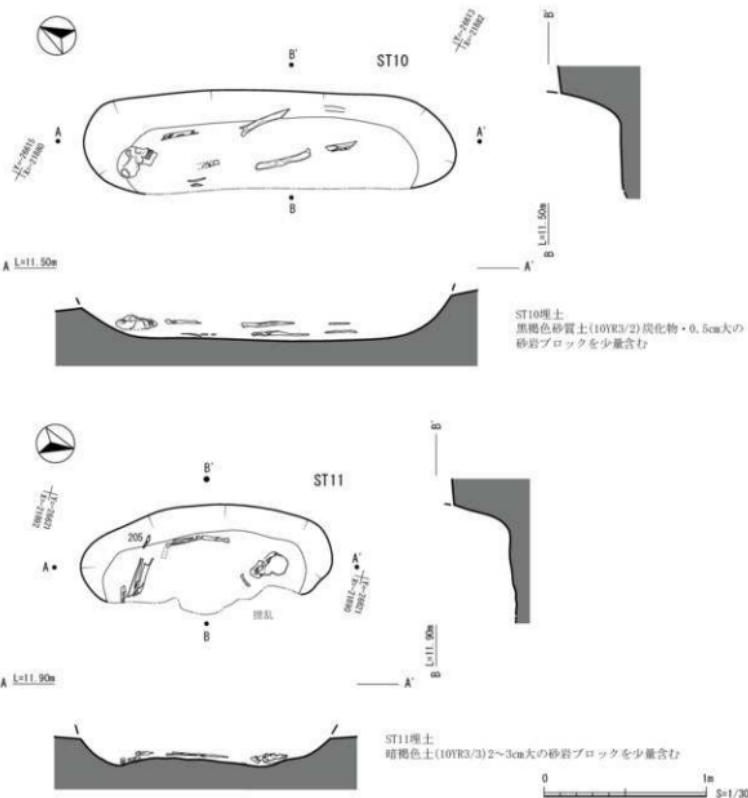


Fig.95 6 C区 ST10・11 平面・断面図

墓 ST09 (Fig.94)

k - 43 グリッドで検出した遺構。本遺構は、北西部をトレンチにより削平されており全体規模を確認することができない。残存する遺構規模は長径 1.46m 以上、短径 0.72m、主軸は N - 152° - E を測る。人骨の残りは頭部から大腿骨付近まであり、比較的の残存状態は良い。

墓 ST10 (Fig.95、PL.40)

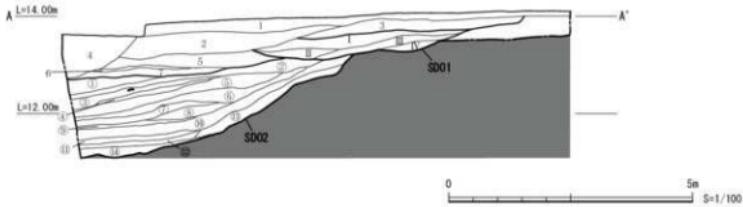
k - 44 グリッドで検出した遺構。本遺構は ST08 により切られている。主軸は N - 28° - W を測る。

墓 ST11 (Fig.95)

j - 45 グリッドで検出した遺構。東側を地形の落ち側に持ち、大きく削平を受け、下端の一部まで消滅する。人骨の残存状態は非常に悪く、一部は遺構とともに失われている。遺構規模は長径 1.54m、短径 0.68m、主軸は N - 14° - W を測る。人骨の足元からは刀子 (205) が 1 本出土している。



Fig.96 6 C区 SD01・02・03・04・05 平面図



トレンチ土剖面図

- 1 にぶい黄褐色砂質土(10VR4/3)近世の整地層
- 2 棕灰色砂質土(10VS/1)近世～古代の洪积層
- 3 増褐色砂質土(10VC/3)古代の整地層
- 4 灰黃褐色砂質土(10VR4/2)灰の砂を少量含む (田堤)

歴2の整地層

- 5 黒褐色砂質土(10VR2/3)
- 6 黒褐色砂質土(10VR3/2)
- 7 増褐色砂質土(10VR4/3)粘性非常に弱い。沈殿粘土を少量含む

SD01埋土

- I 増褐色砂質土(10VR3/3)1～2mmの大オーリーブ褐色粒を少量含む
- II 増褐色砂質土(10VR3/3)
- 5mm～1cmの大オーリーブ褐色粒を少量含む
- III 棕色砂質土(10VB4/4)～3cmの大オーリーブ褐色ブロックを多く含む
- IV にぶい黄褐色砂質土(10VR4/3)
- 3～5cmの大オーリーブ褐色ブロックを多く含む

SD02埋土

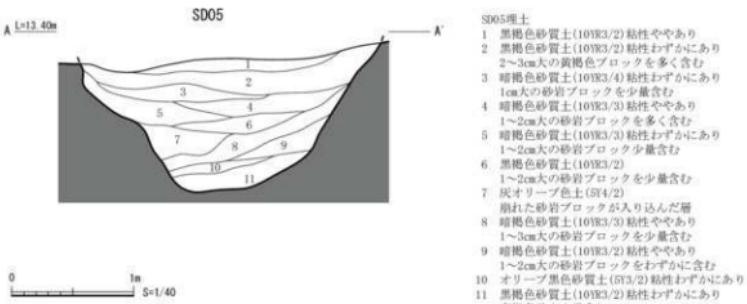
- ① 黑褐色砂質土(7.5YR3/2)粘性弱い
沈殿粘土を多く含む
- ② にぶい黄褐色砂質土(10VR4/3)炭化物を少量含む
- ③ 增褐色砂質土(10VC/3)粘性非常に弱い
炭化物・粘土を多く含む・土塊が多く出土する
- ④ 增褐色砂質土(10VR3/3)炭化物を少量含む
- ⑤ 增褐色砂質土(10VR3/3)炭化物を少量含む
- ⑥ 黑褐色砂質土(10VR2/3)
- 1～2mmの大オーリーブ褐色粒を少量含む
- ⑦ 增オリーブ褐色砂質土(2.5YR3/3)粘性やや強い
1～2cmの大粒粘土ロックを多く含む
- ⑧ 黑褐色砂質土(10VR3/2)粘性弱い
1～2mmの大オーリーブ褐色粒・炭化物を少量含む
- ⑨ 灰黃褐色砂質土(10VR4/2)1～2mmの大褐色粒を多く含む
- ⑩ 增褐色砂質土(7.5YR2/3)粘性やや弱い
- ⑪ にぶい黄褐色砂質土(10VR4/3)
- ⑫ 黑褐色砂質土(7.5YR2/2)
- ⑬ オーリーブ褐色砂質土(2.5YR3/3)
- ⑭ 黑褐色砂質土(10VR2/3)

Fig.97 6 C 区 SD01・02 断面図



SD04埋土

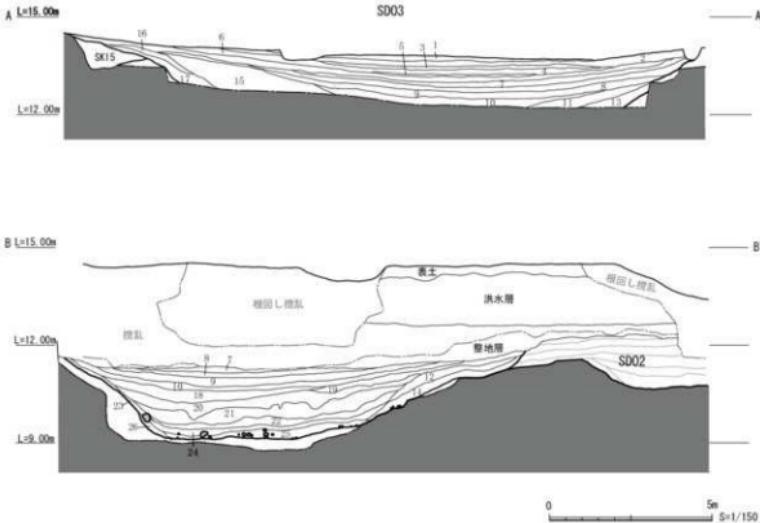
- 1 黑褐色砂質土(10VC/2)粘性ややあり
1～2mmの大褐色ブロックを少量含む
- 2 黑褐色砂質土(10VR2/2)粘性ややあり
1cmの大褐色ブロックを少量含む
- 3 黑褐色砂質土(10VR2/2)粘性わざわざなしにあり
暗褐色砂質土(10VR3/3)粘性わざわざなしにあり
- 4 1cmの大砂岩ブロックを少量含む
- 5 黑褐色砂質土(10VR3/2)粘性ややあり
- 6 増褐色砂質土(10VR3/4)粘性わざわざなしにあり
7 増褐色砂質土(10VR3/3)1～2cmの大砂岩ブロックを多く含む



SD05埋土

- 1 黑褐色砂質土(10VC/2)粘性ややあり
- 2 黑褐色砂質土(10VR3/2)粘性わざわざなしにあり
2～3cmの大黄色色ブロックを多く含む
- 3 増褐色砂質土(10VR3/4)粘性わざわざなしにあり
1cmの大砂岩ブロックを少量含む
- 4 増褐色砂質土(10VR3/3)粘性ややあり
1～2cmの大砂岩ブロックを多く含む
- 5 増褐色砂質土(10VR3/3)粘性わざわざなしにあり
1～2cmの大砂岩ブロックを多く含む
- 6 黑褐色砂質土(10VR3/2)
1～2cmの大砂岩ブロックを少含む
- 7 尾オーリーブ色土(5YR4/2)
崩れた砂岩ブロックが入り込んだ層
- 8 増褐色砂質土(10VR3/3)粘性ややあり
1～3cmの大砂岩ブロックを少含む
- 9 増褐色砂質土(10VR3/2)粘性ややあり
1～2cmの大砂岩ブロックをわざわざなしに含む
- 10 オーリーブ黒色砂質土(5YR3/2)粘性わざわざなしにあり
- 11 黑褐色砂質土(10VR3/2)粘性わざわざなしにあり
青黒色砂を少量含む

Fig.98 6 C 区 SD04・05 断面図



SD03埋土:

- 1 黒褐色砂質土(10YR2/3)
- 2 喀褐色砂質土(10YR3/3)～2mmの大粒の褐色粒を少量含む
- 3 褐色砂質土(10YR4/4)褐色色土を多く含む
- 4 喀褐色砂質土(10YR3/3)5mm～1cmの大粒の褐色ブロックを多く含む
- 5 喀褐色土(10YR3/4)
- 6 にぶい黄褐色砂質土(10YR4/3)土壤化の影響で5の土を多く含む
- 7 褐色砂質土(10YR4/4)粘性弱い
- 8 黑褐色土を多く含む(沈殿で堆積した層と思われる)
- 9 黑褐色砂質土(10YR3/2)粘性非常に弱い
- 10 2～3mmの大粒状のものを多く含む
- 11 喀褐色砂質土(10YR3/3)粘性非常に弱い
- 12 3～5mmの大粒のものを多く含む
- 13 黄ナリーブ褐色砂質土(2.5YR3/2)粘性やや強い
- 14 黑褐色砂質土(17.5YR3/2)粘性やや強い
- 15 5mm～1cmの大粒の砂岩(オリーブ褐色)を少く含む
- 16 黑褐色砂質土(10YR3/2)例化石を少く含む 物事が多く出土
- 17 喀褐色土(10YR3/4)1～2mmの大粒を多く含む
- 18 1cm大の砂岩(オリーブ褐色)を少く含む
- 19 喀褐色砂質土(10YR3/3)褐色粒と炭化物をわずかに含む
- 20 にじみ、黄褐色砂質土(10YR4/3)粘性あり
- 21 にじみ、黄褐色砂質土(10YR3/3)粘性あり 砂を少く含む
- 22 にじみ、黄褐色砂質土(10YR4/4)砂を多く含む
- 23 黑褐色砂質土(10YR1/4)～3cmの大粒砂岩ブロック・黒砂を少く含む
- 24 黑褐色砂質土(7.5YR3/2)粘性あり
- 25 黑褐色砂質土(7.5YR3/2)粘性あり 砂を少く含む
- 26 黑褐色砂質土(10YR4/1)粘性あり 砂を少く含む

- 15 静灰黄色砂質土(2.5Y4/2)粘性非常に強い
- 16 難積したとは考えづらく人為的に作られていると思われる
- 17 にじみ、黄褐色砂質土(10YR4/3) 1cm大の砂岩(オリーブ褐色)を少く含む
- 18 にじみ、黄褐色砂質土(10YR5/3)1～3cm大の砂岩ブロックを含む
- 19 黄褐色土(10YR3/3)粘性あり
- 20 にじみ、黄褐色砂質土(10YR4/3)粘性あり
- 21 にじみ、黄褐色砂質土(10YR3/3)粘性あり 砂を少く含む
- 22 にじみ、黄褐色砂質土(10YR4/4)砂を多く含む
- 23 黑褐色砂質土(10YR1/4)～3cmの大粒砂岩ブロック・黒砂を少く含む
- 24 黑褐色砂質土(7.5YR3/2)粘性あり
- 25 黑褐色砂質土(10YR5/1)粘性ややあり 6.5cm大の褐色ブロックを多く含む 骨格が多く出土
- 26 黑褐色砂質土(10YR4/1)粘性あり 砂を少く含む

Fig.99 6 C 区 SD03 断面図

溝 SD01、SD02、SD03、SD04、SD05 (Fig.96 ~ 100)

本落ち込みは、溝状の遺構と言うより自然流路(NR)と呼ぶべき落ち込みと判断する。埋土に見られる土層は多くが砂質土を含み、埋没過程で流れ込みの中に当該地域で遺構が形成されるべき堆積土等が含まれず、自然によるもの若しくは自然災害により埋没した様相を呈する。

また、各層に骨格、炭化物及び角が磨滅した土器片を多く含み、時期は不明でありながらも古いものではない鉄釘が出土するなど脈絡のないものである。よって、調査時の見解は修正するものの、遺構番号の取り扱い等に顧慮がでるため、調査時の遺構番号を継承し記す。

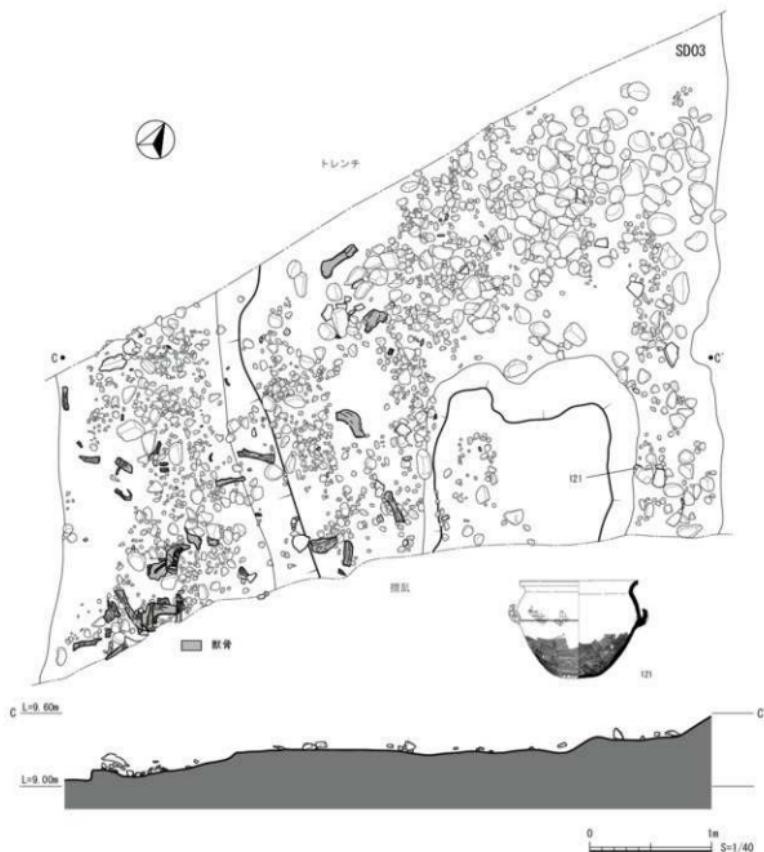


Fig. 100 6 C 区 SD03 磚検出状況平面・断面図

6E区

本調査区は、遺構の大半を自然流路（NR）により占められており、さらにその上部から多数の攪乱が入るなど遺構の残存状態が非常に悪い調査区である。近世の自然流路に伴う自然堤防状の高まりが残るなど、それを裏付ける資料の一つとも考えられる。

近世

溝 SD01、溝 SD02 (Fig.102)

調査時において本掘り込み以外にも自然流路として報告されているラインもあるが、記録を見る限り本遺構としているものもその流路の中の一つとして見てよいものと考える。

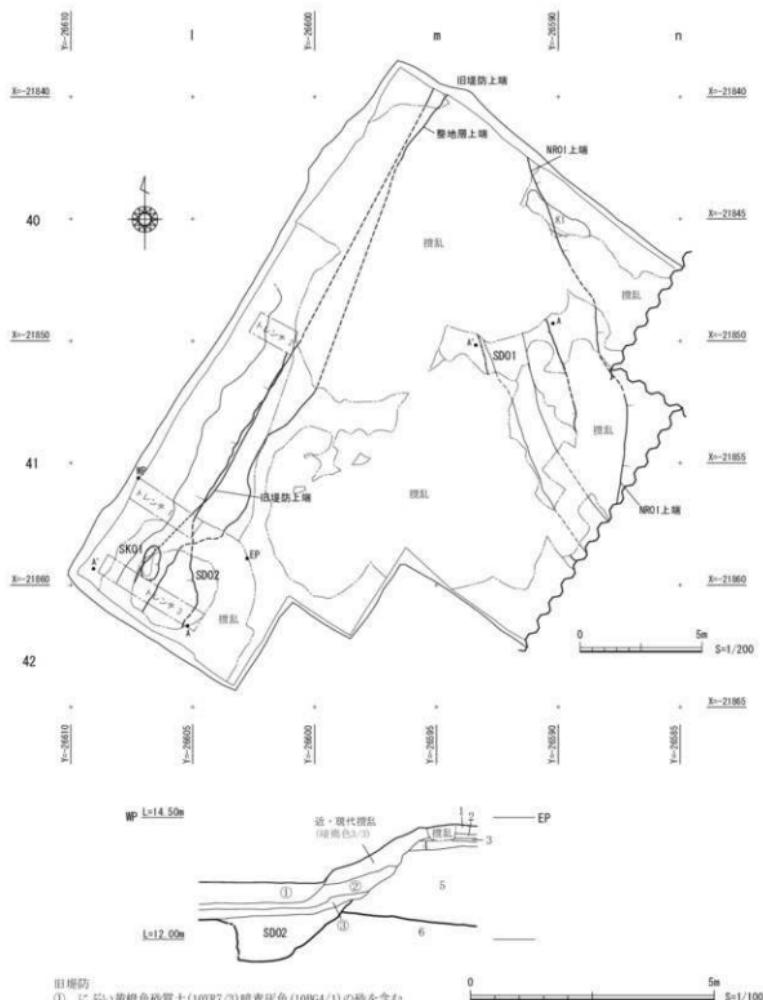


Fig.101 6 E 区遺構配置図・トレンチ1 土層断面図

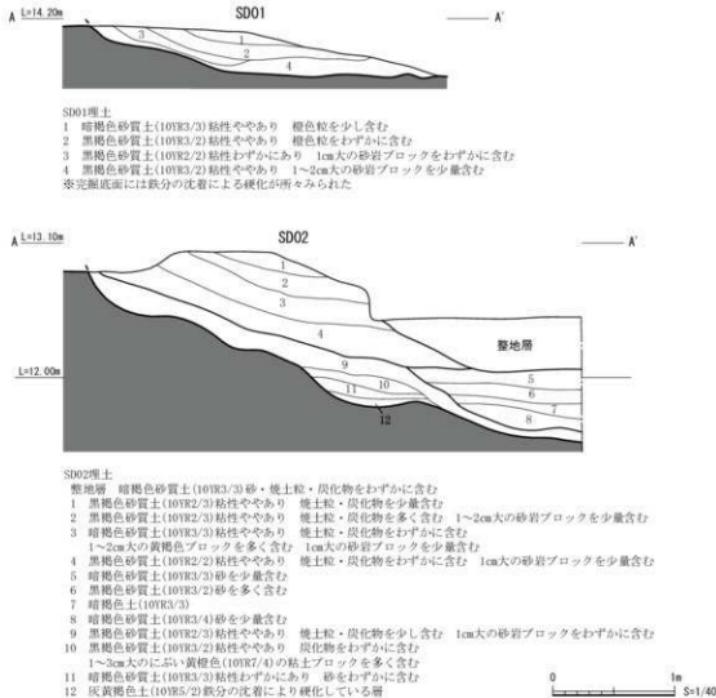


Fig. 102 6 E区 SD01・02断面図

理由としては、SD01の土層断面とする断面図(Fig.102上段)の注記を見る限り、河川堆積物の砂質土と鉄分の沈殿の一部をみるとことができる。また、同じくSD02とする土層断面及び注記(Fig.102下段)においても、砂質層の連続する堆積が幾重にも細かな重なりを呈し、掘削し埋没していったものとは判断されないことから結論付けた。

7B区

調査区の大半は近代の住宅の整地により古代の遺物包含層相当層が無くなっている。また、建物の礫石及び切石による基礎等により削られている部分も少なくない。本調査区と他の調査区を比べての大きな違いは、近現代の層を除去しても古代以前の遺構が検出されていないことである。よって、本調査区の報告はこれで終える。

7C区

本調査区も表土剥ぎ直後から、自然流路(NR)が調査区のほぼ全域で検出され、遺構の残りは非常に悪いものであった。調査時に検出した溝SD01としている落ち込みは、自然流路が埋没した後に形成された自然地形上からなるものと考えられ、幅が一定せず落ち込みライン等が不整形であることから、遺構と認定することはできなかった。

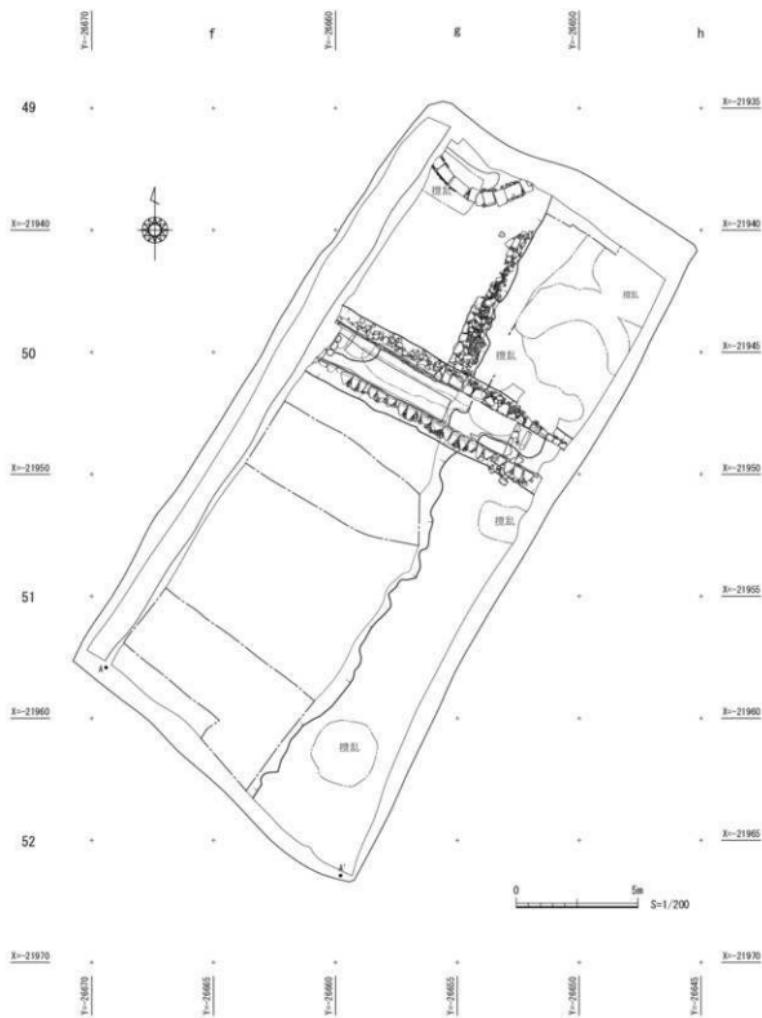


Fig.103 7B区遺構配置図(近世)

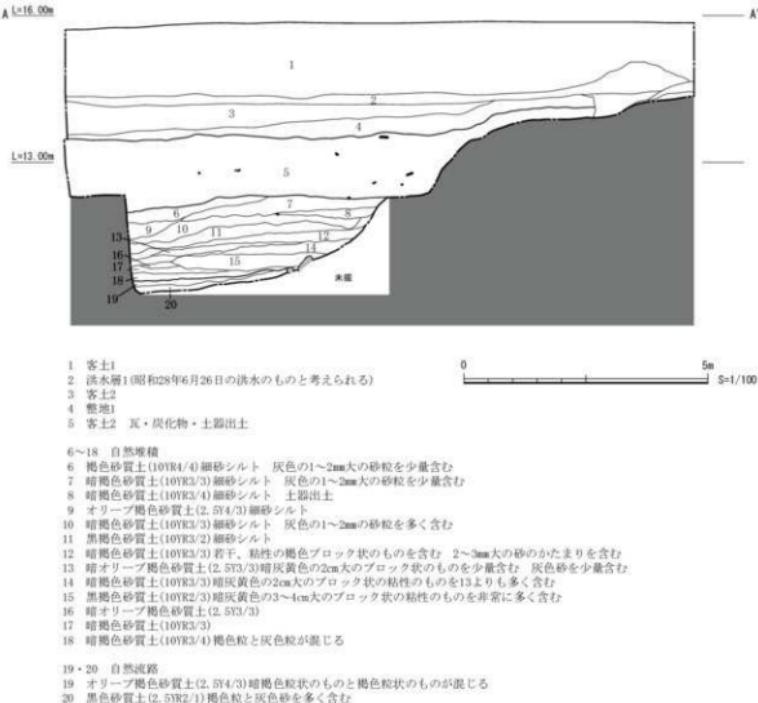


Fig.104 7 B 区南壁土層断面図

近世

土坑 SK01 (Fig.105)

i - 48 グリッド上で検出した遺構。遺構規模は長径 1.38m、短径 0.88m、主軸は N - 28° - E を測る。遺構内からは土器片、碟に混じり、獸骨下頸骨の一部とその他不明な骨が出土している。当初は墓として報告してあったが、人骨の出土がないこと、獸骨等が多数混じることから土坑として修正して報告する。

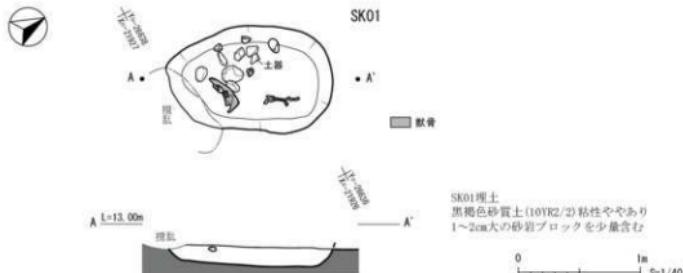


Fig.105 7 C 区 SK01 平面・断面図

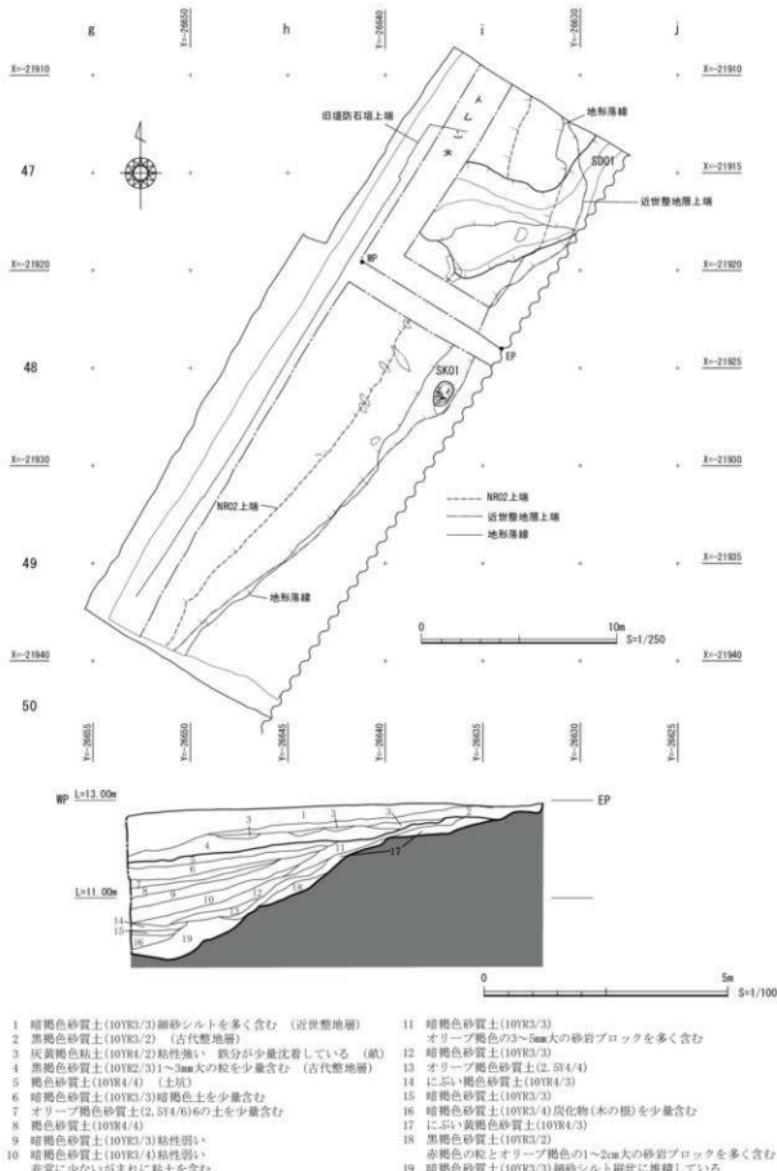


Fig.106 7C区遺構配置図・トレンチ2南壁土層断面図

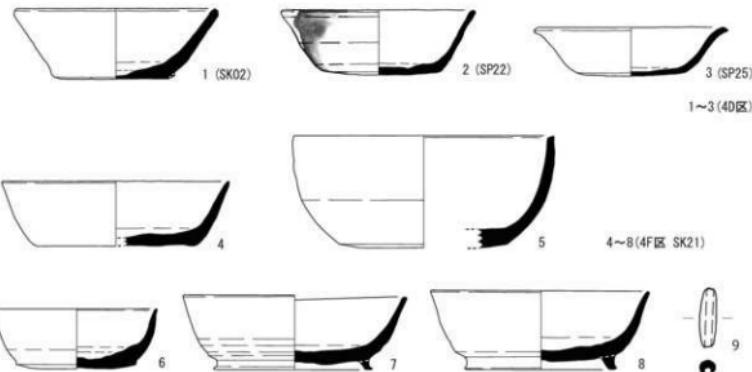


Fig.107 4 D、4 F 区遺構内出土遺物実測図

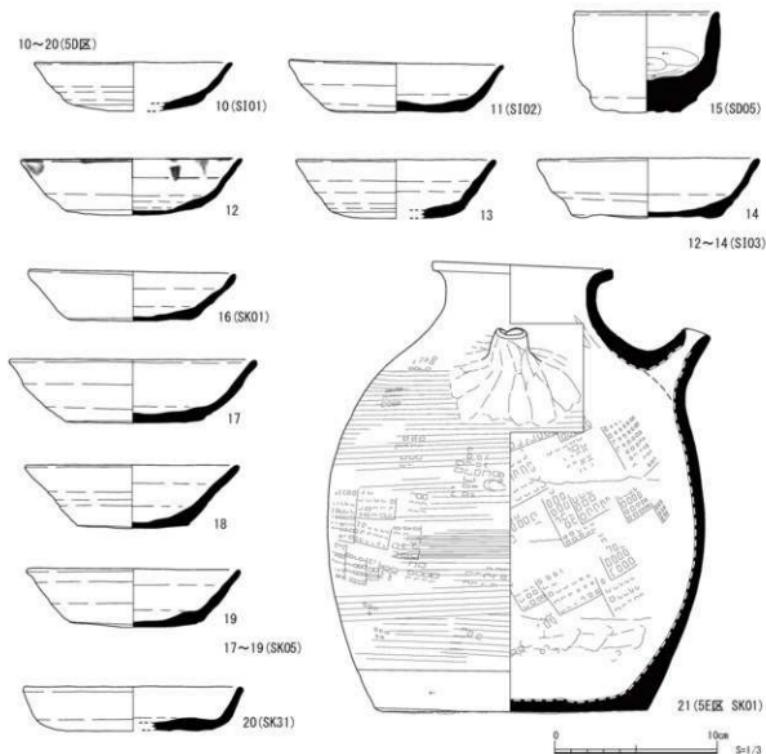


Fig.108 5 D、5 E 区遺構内出土遺物実測図

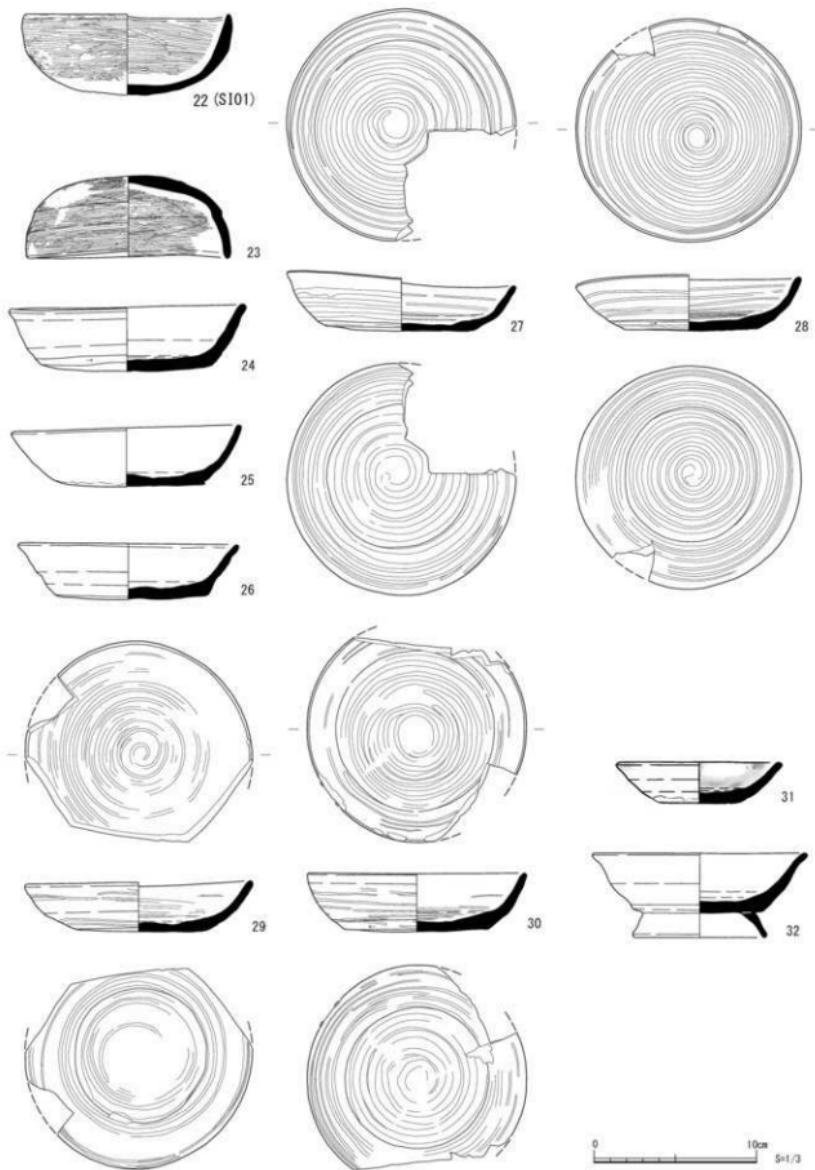


Fig.109 6C区 S101出土遺物実測図、SDO1出土遺物実測図一①

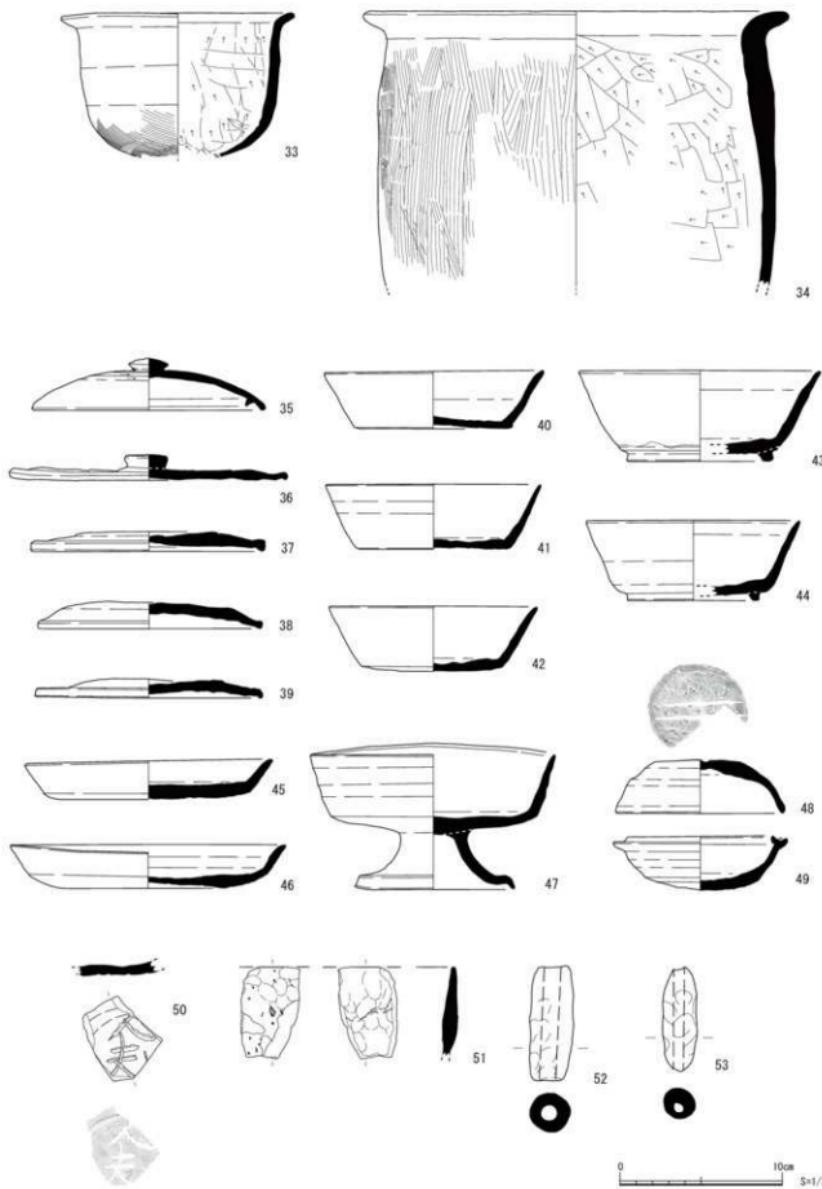


Fig.110 6C区SD01出土遺物実測図-②

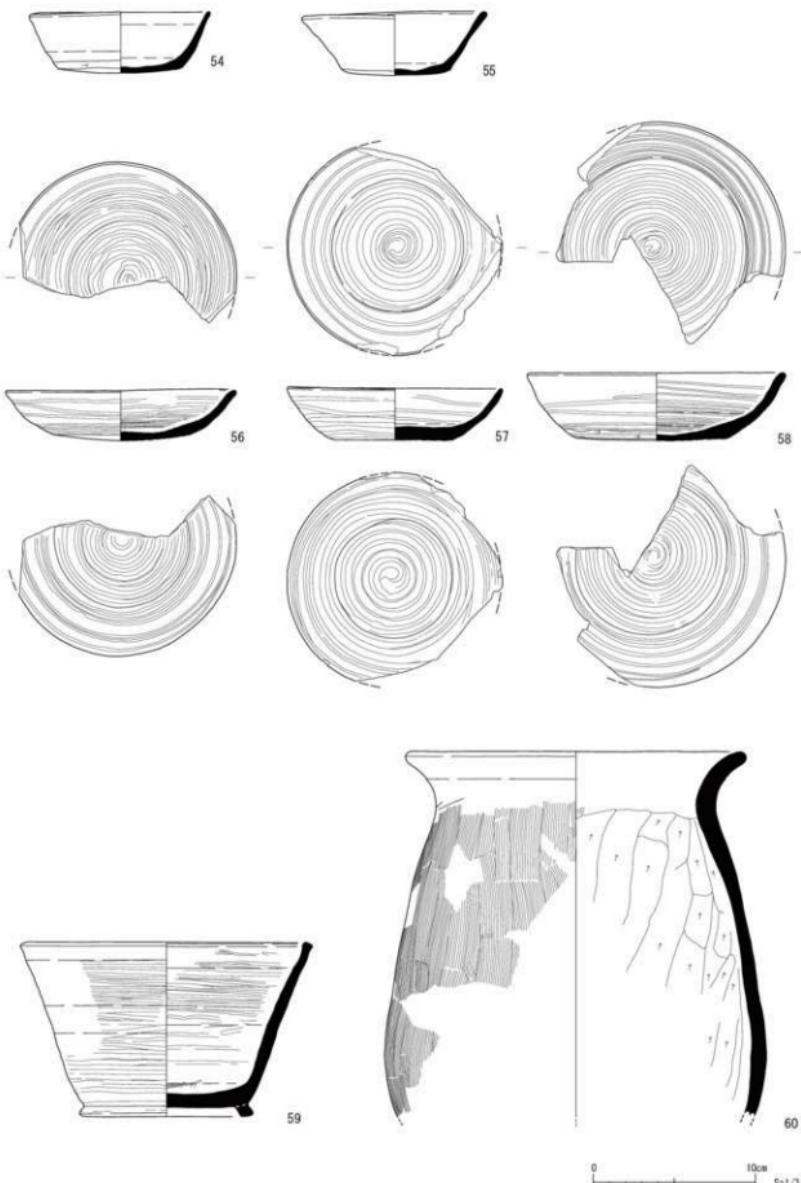


Fig.111 6C区 SD02出土遺物実測図-①

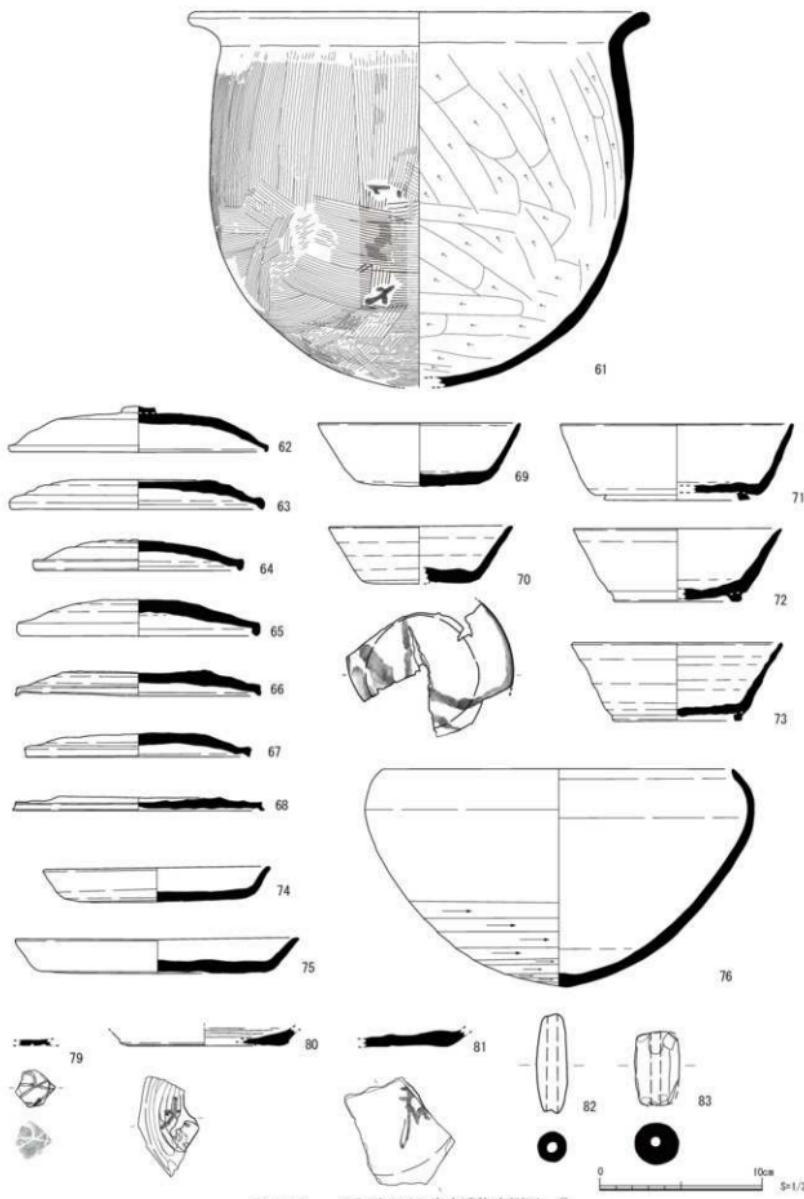
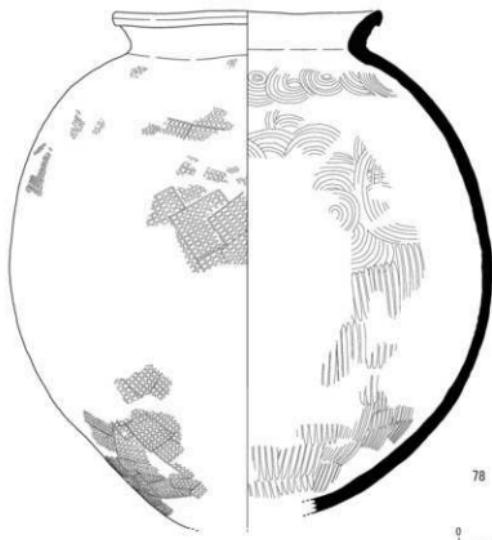
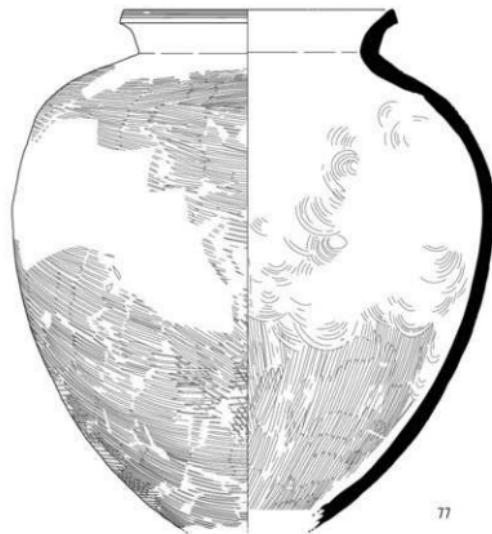


Fig.112 6C区 SD02 出土遺物実測図-②



0 10cm Scale 1/4

Fig.113 6C区 SD02 出土遺物実測図—③

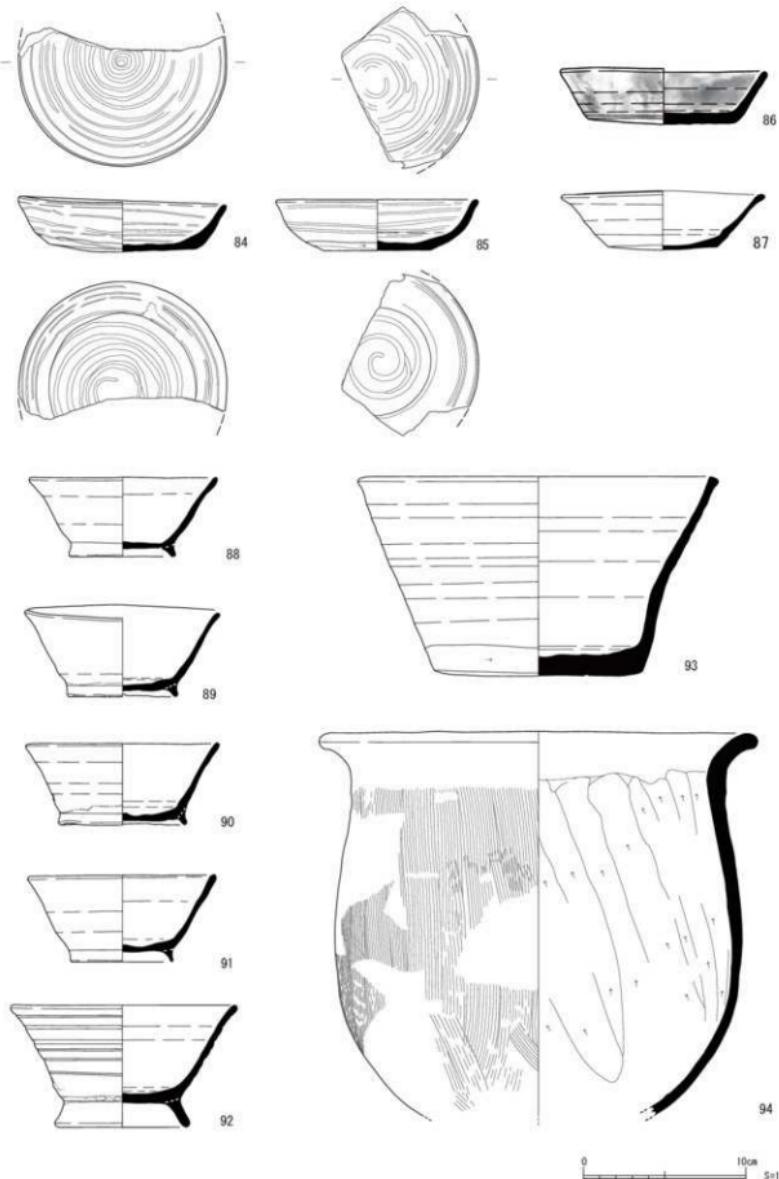


Fig.114 6C区 SD03出土遺物実測図—①

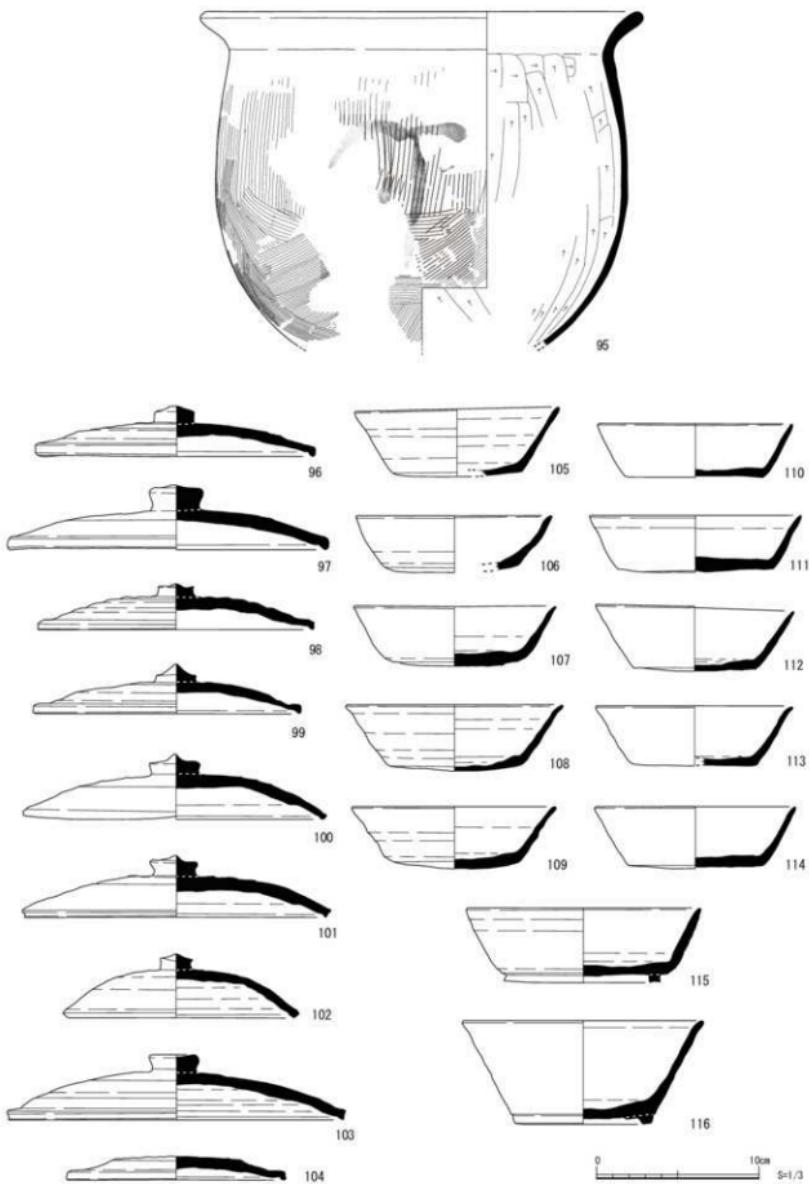


Fig.115 6C区 SD03 出土遺物実測図-②

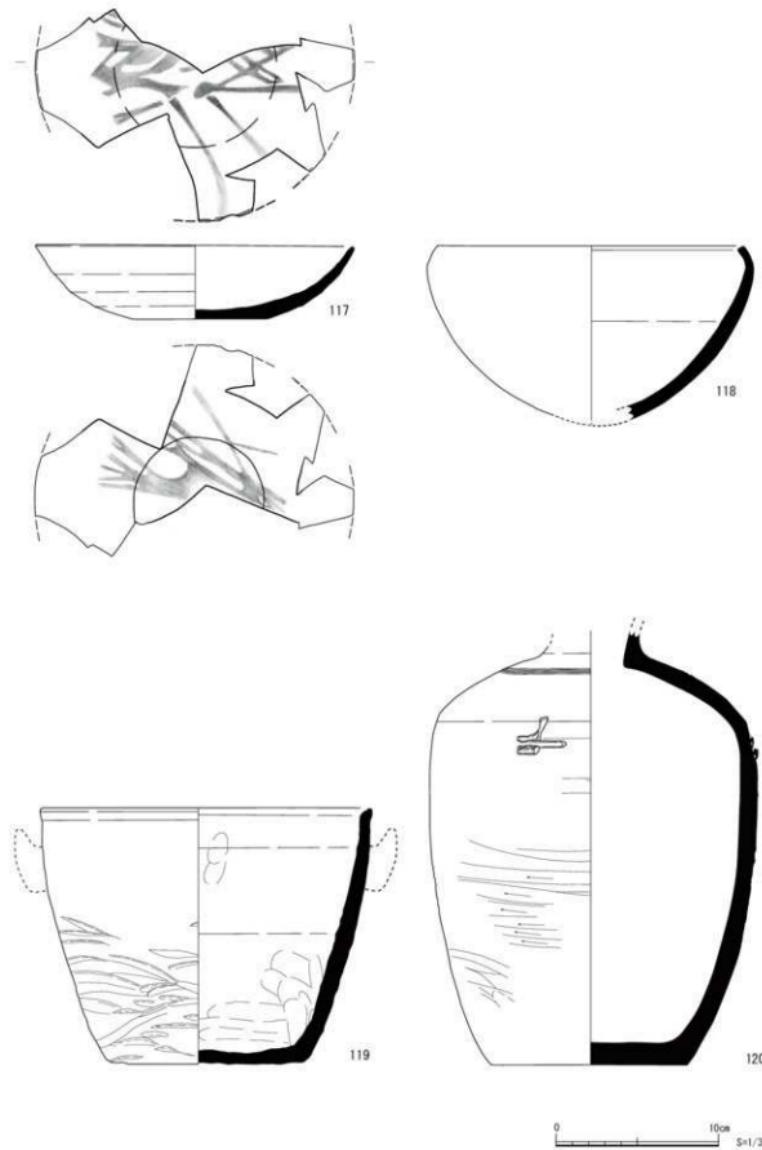


Fig.116 6C区SD03出土遺物実測図-③

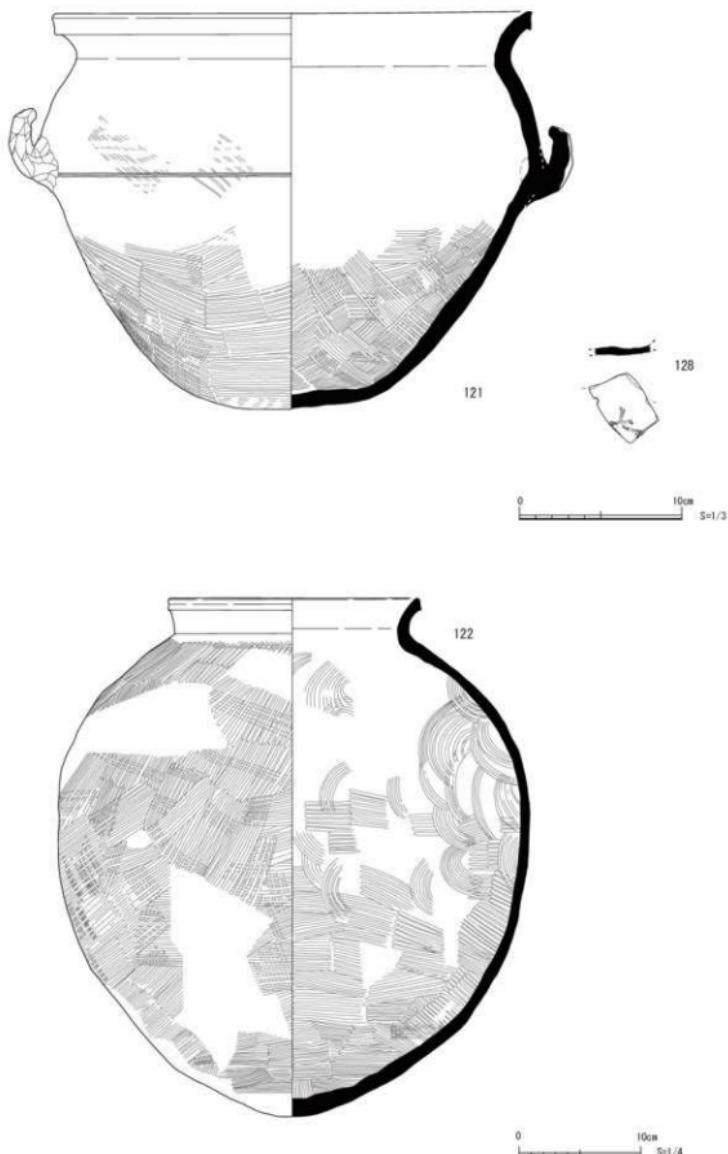


Fig.117 6C区 SD03 出土遺物実測図—④

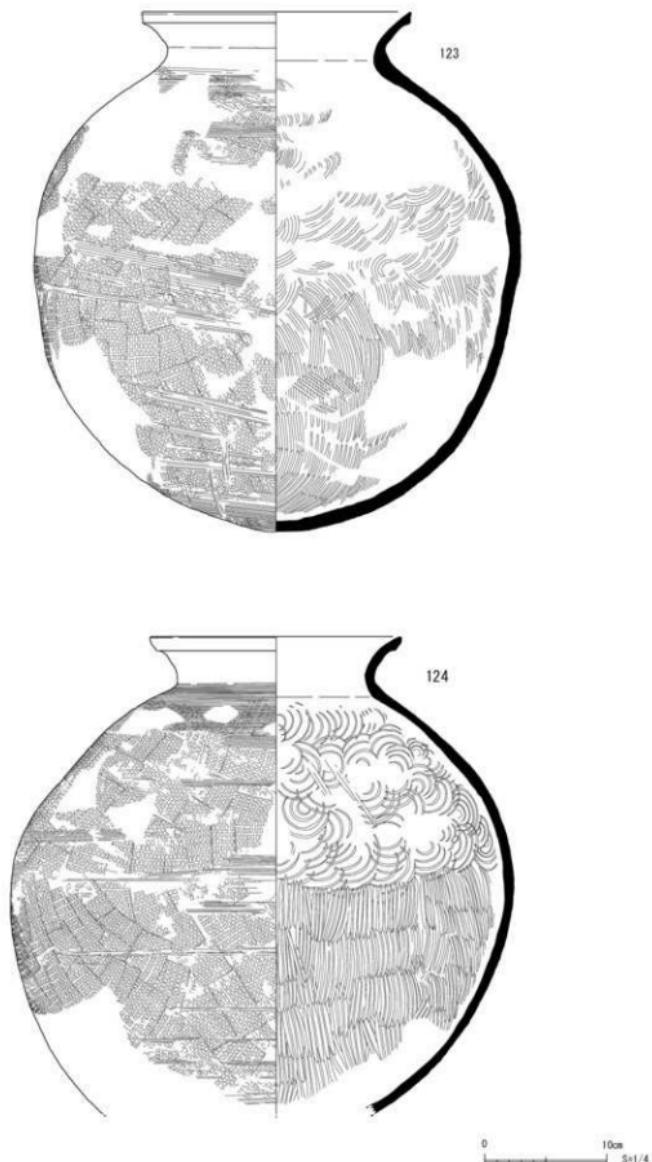
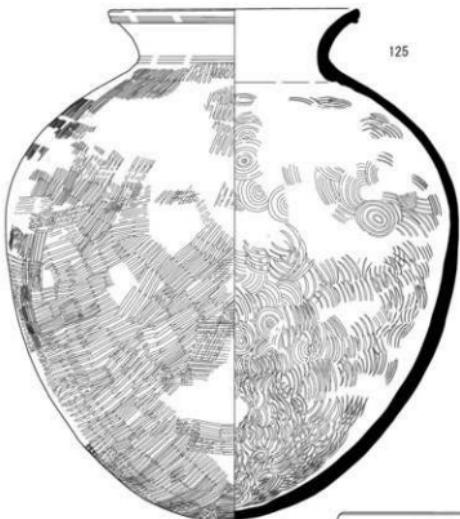
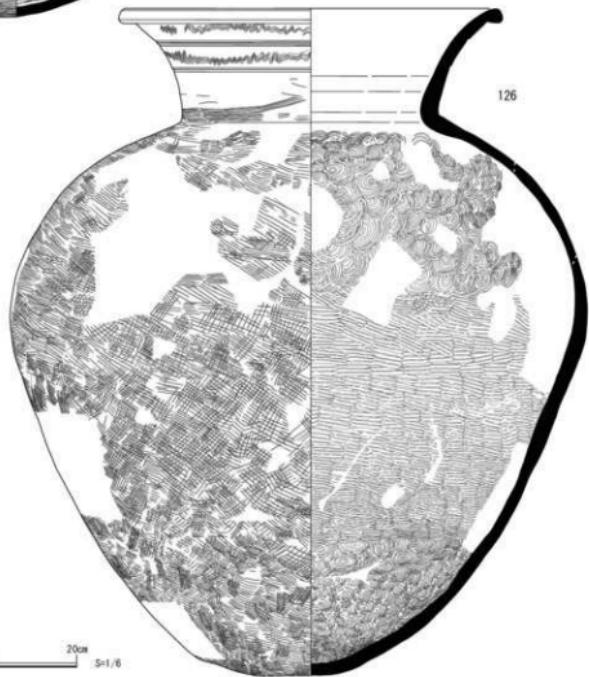


Fig.118 6C区 SD03 出土遺物実測図一⑤



0 10cm
S=1/4



0 20cm
S=1/6

Fig.119 6C区 SD03 出土遺物実測図一⑥

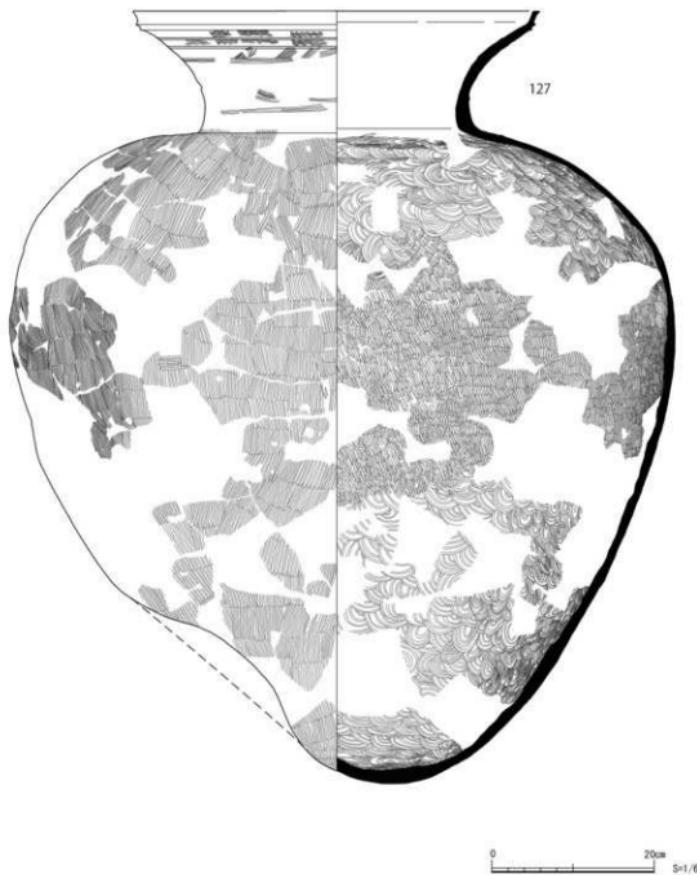


Fig.120 6C区SD03出土遺物実測図-⑦

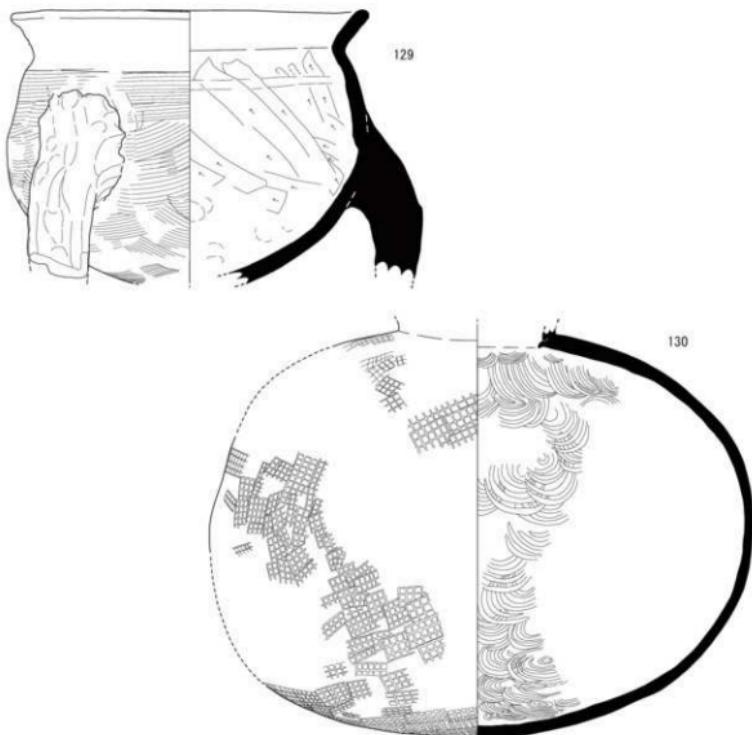


Fig.121 6C区 SD04 出土遺物実測図

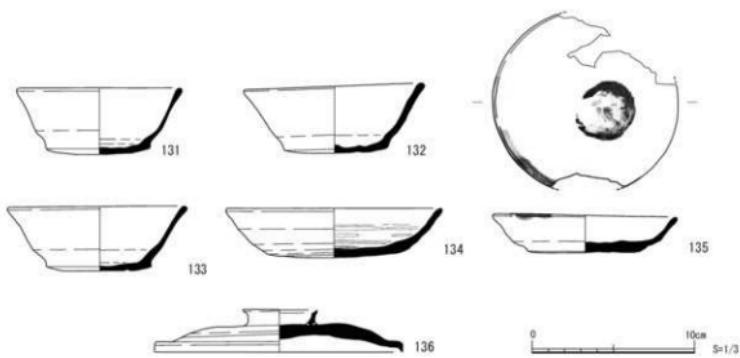


Fig.122 6C区 SD05 出土遺物実測図

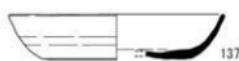


Fig.123

6C区 ST06 出土遺物実測図



138



139



140



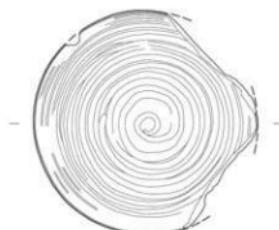
141



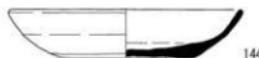
142

Fig.124

6C区 SK02 出土遺物実測図



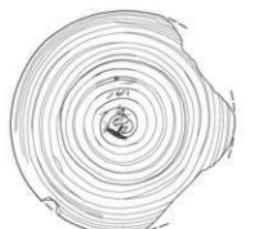
143



144



145



146

Fig.125

6C区 SK04 出土遺物実測図



147



Fig.126

6C区 SK11 出土遺物実測図

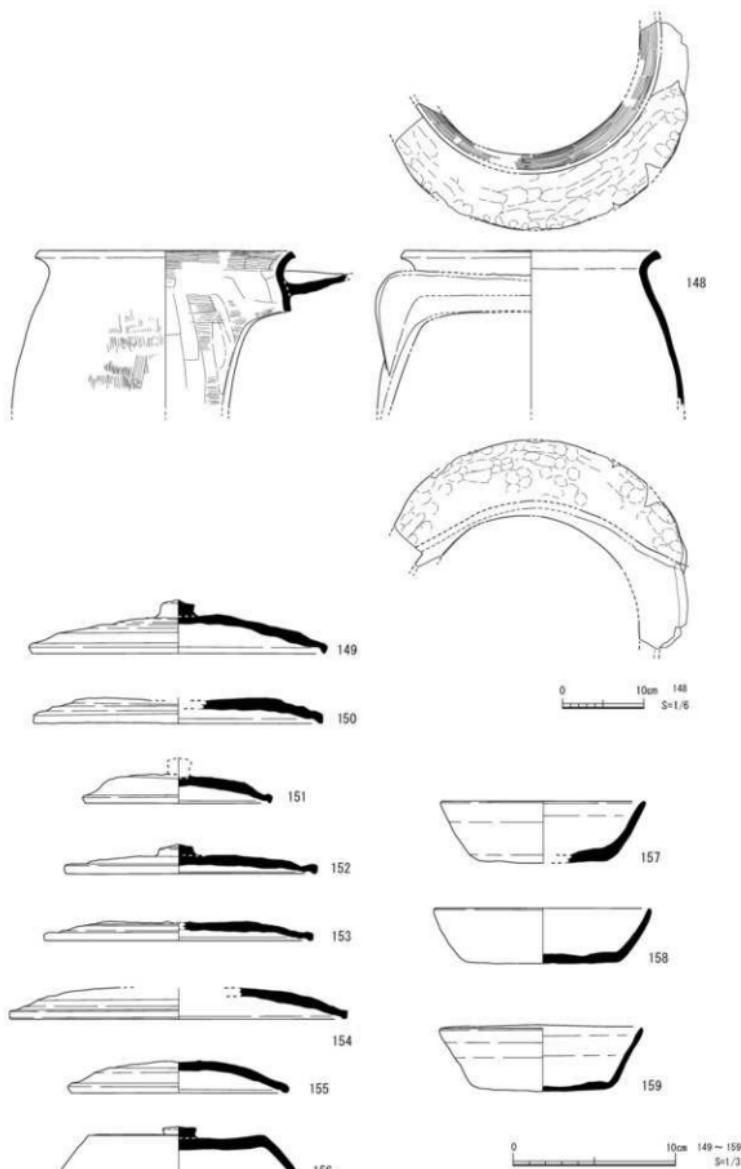


Fig.127 6C区 SK15 出土遺物実測図-①

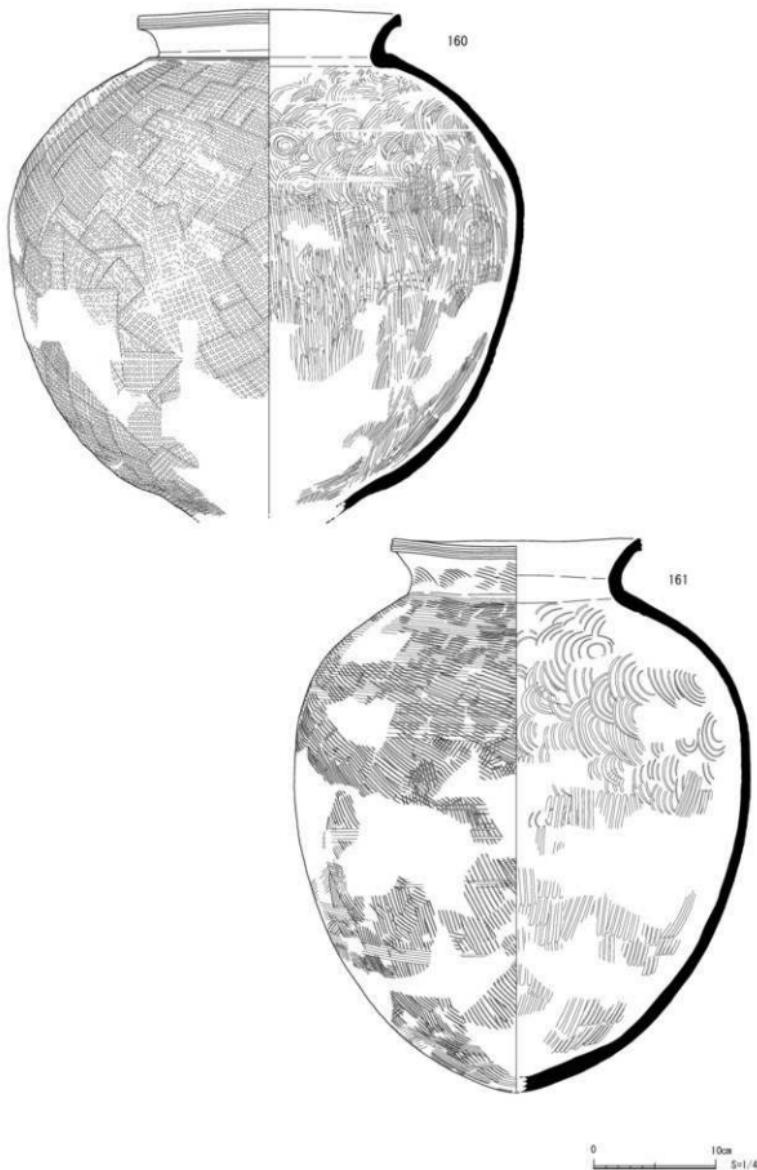


Fig.128 6C区SK15出土遺物実測図-②

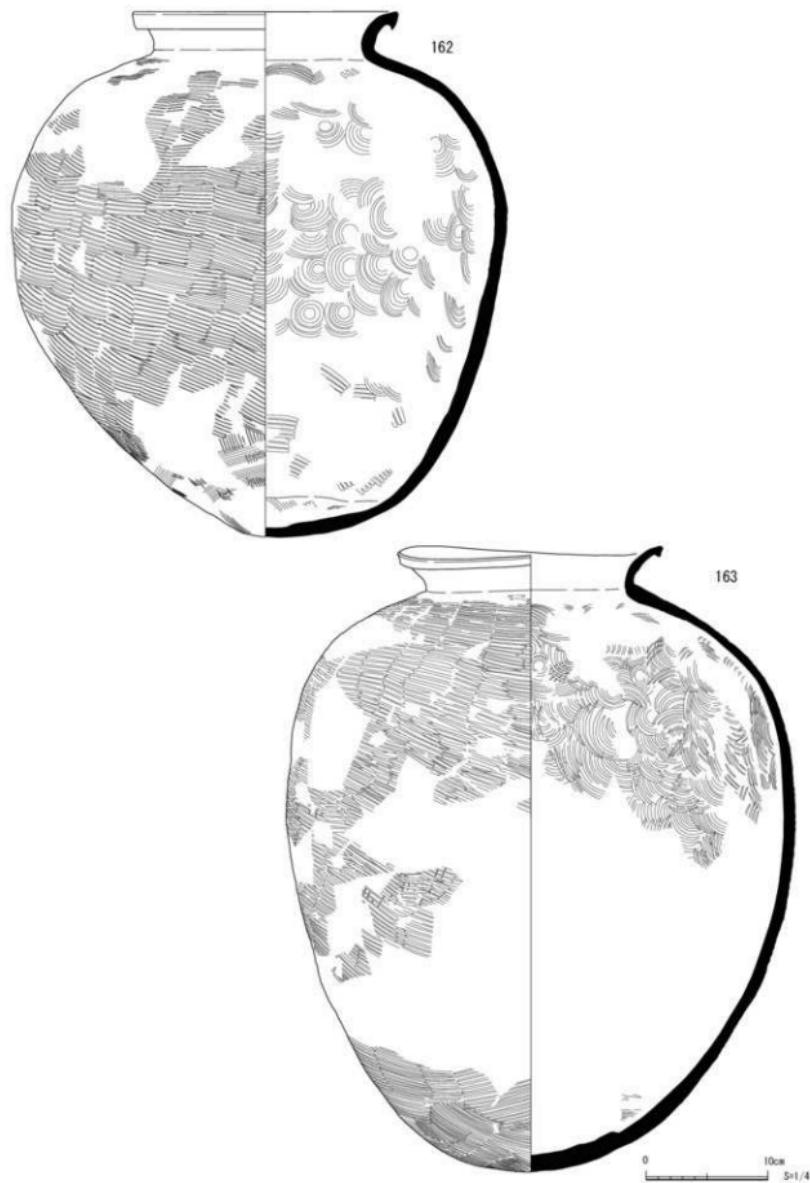


Fig.129 6C区 SK15 出土遺物実測図-③

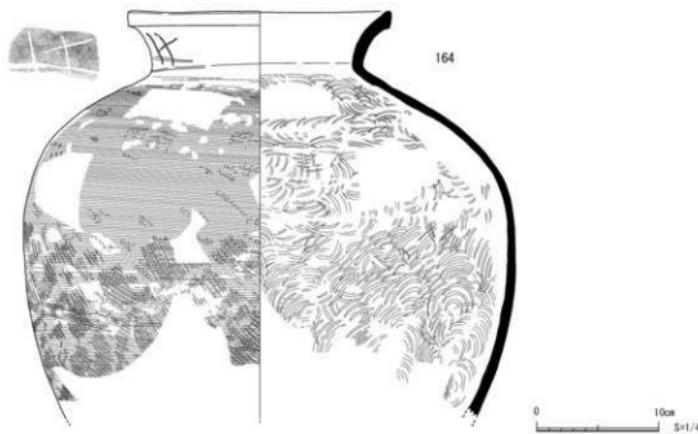


Fig.130 6C区SK15出土遺物実測図-④

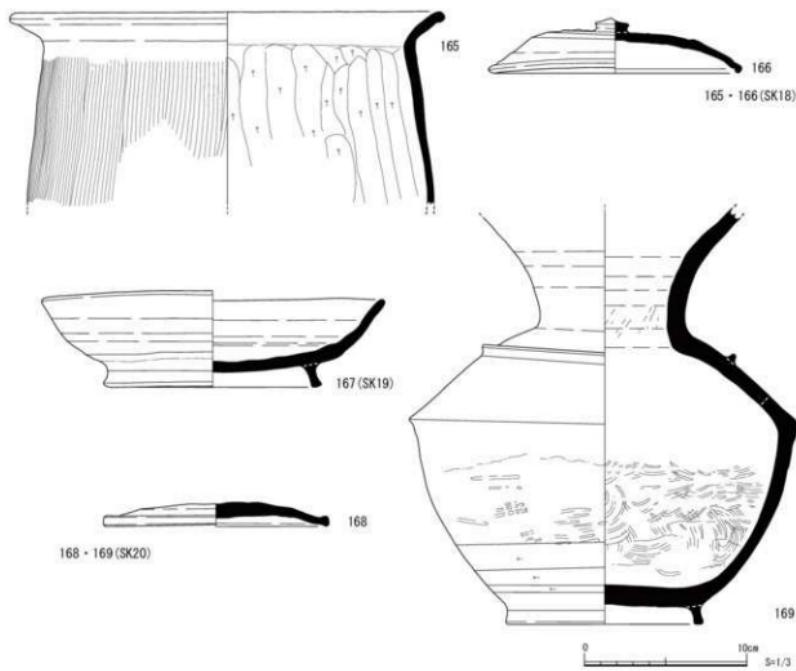


Fig.131 6C区SK18・19・20出土遺物実測図

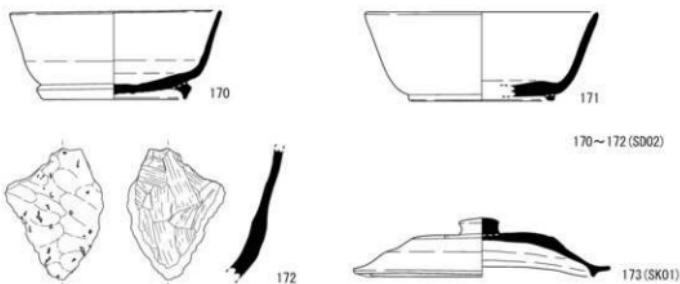


Fig. 132 6 E 区 遺構内出土遺物実測図



Fig. 133 7 C 区 SD01 出土遺物実測図

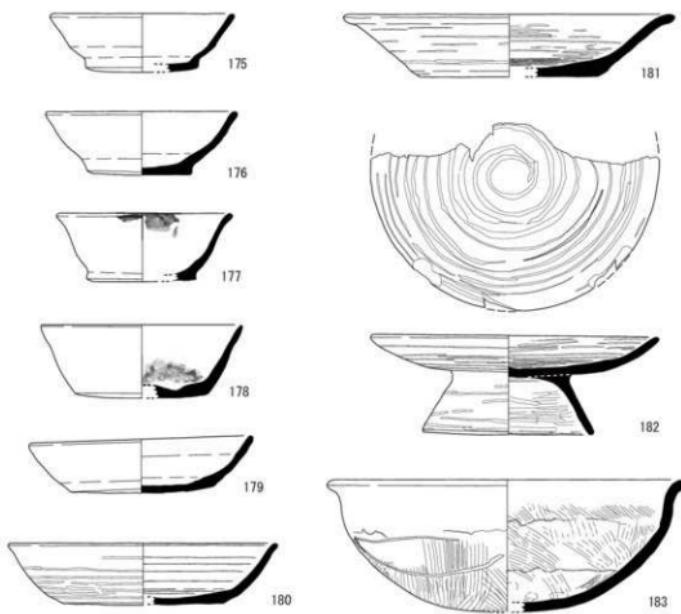


Fig. 134 7 C 区 NR02 出土遺物実測図-①

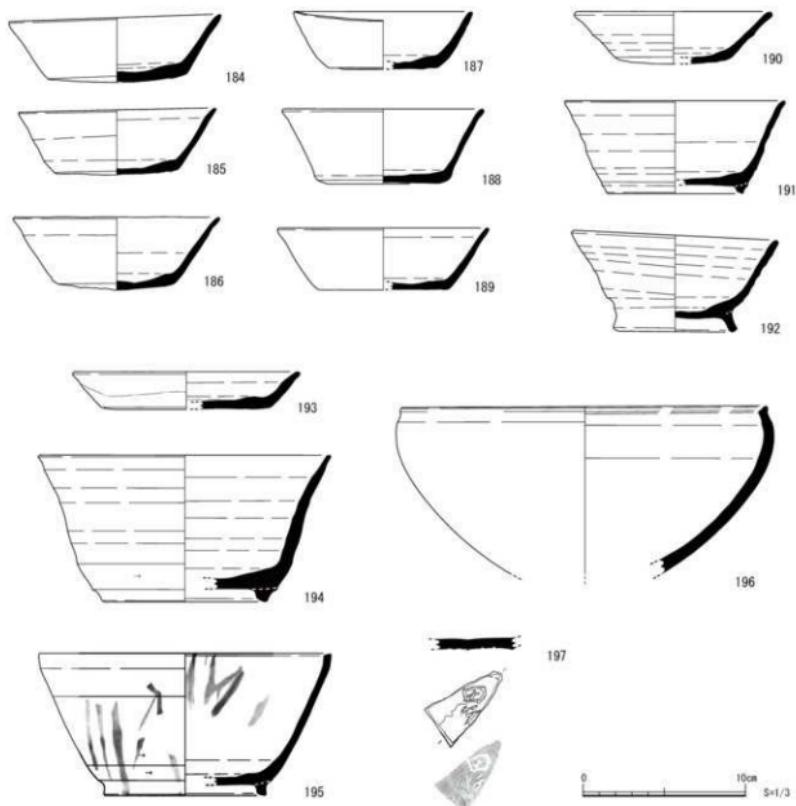


Fig.135 7C区NRO2出土遺物実測図-②

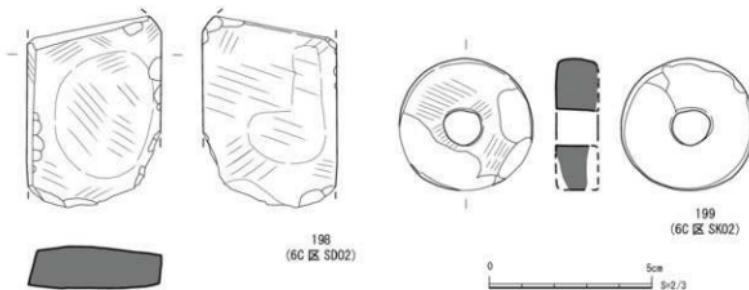


Fig.136 石器実測図

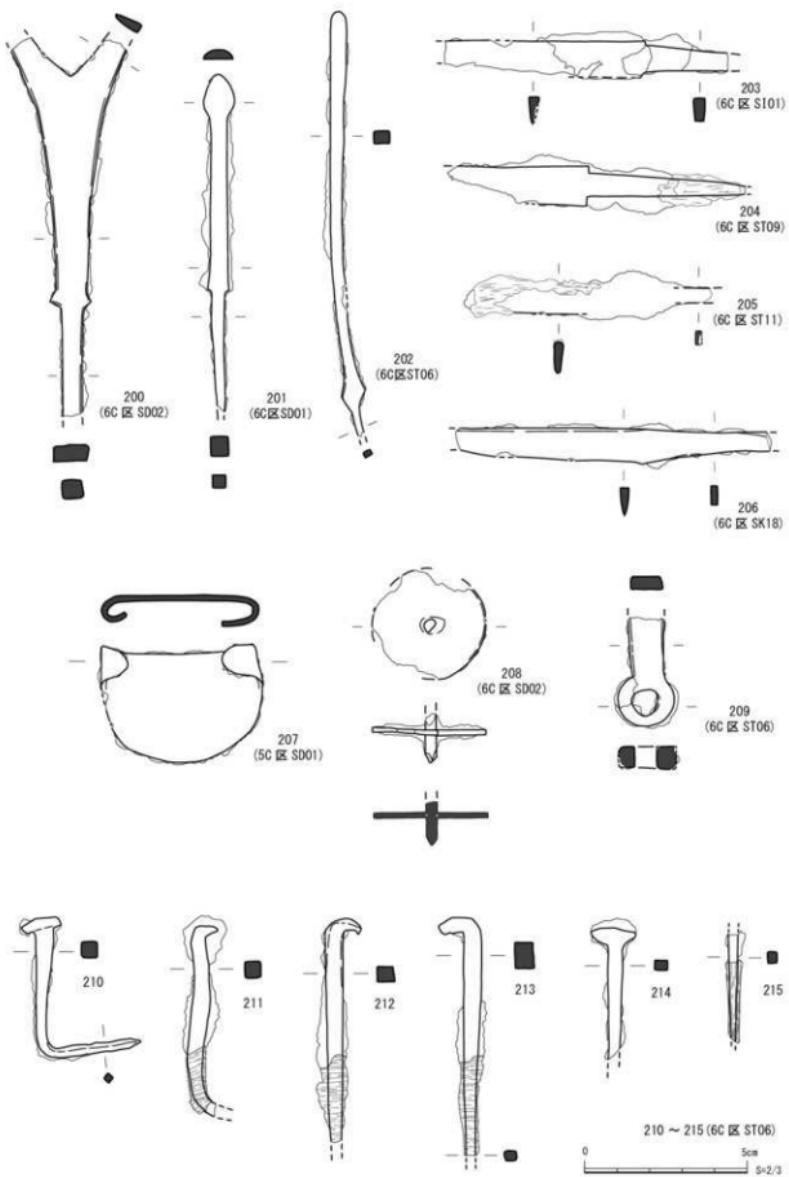


Fig.137 鉄器実測図

遺物番号	堆団番号	写真番号	遺構番号	種別	器種	法量 (cm)				色調		胎土	
						口径	底径	最大胴径	器高	外面	内面		
4D区													
1			SK02	土師器	杯	(12.6)	(7.0)	-	4.4	にふい黄橙 10YR6/4	明黄褐 10YR6/6	長石、石英、角閃石	
2	107	41	SP22	土師器	杯	12.0	7.1	-	4.0	にふい黄 7.5YR6/4	橙 7.5YR6/6	長石、石英、角閃石 白色粒	
3			SP25	土師器	杯	(12.0)	(6.8)	-	3.0	橙 7.5YR7/6	浅黄 2.5Y7/4	長石、石英	
4F区													
4			SK21	土師器	杯	(14.0)	(10.0)	-	4.0	にふい黄橙 10YR6/4	にふい黄橙 10YR6/4	長石、石英、白色粒	
5			SK21	土師器	鉢	16.0	(10.4)	-	6.9	にふい黄 10YR7/4	砂粒		
6	107	41	SK21	須恵器	杯	(10.0)	(7.4)	-	3.7	にふい黄橙 10YR6/4	にふい黄橙 10YR6/4	長石、角閃石	
7			SK21	須恵器	高台付杯	13.8	9.8	-	4.5	にふい黄 2.5Y6/3	浅黄 2.5Y7/4	長石、石英 赤色酸化粒	
8			SK21	須恵器	高台付杯	13.5	(9.4)	-	4.9	にふい黄橙 10YR6/4	にふい黄橙 10YR6/4	長石、角閃石	
5D区													
10			SI01	土師器	杯	(12.2)	(7.5)	-	(2.9)	にふい黄橙 10YR6/4	橙 7.5YR6/6	長石、石英、角閃石 雲母	
11			SI02	土師器	杯	13.2	8.8	-	3.3	にふい橙 7.5YR6/4	にふい橙 7.5YR6/4	長石、角閃石	
12		41	SI03	土師器	杯	13.7	8.2	-	3.5	にふい黄橙 10YR6/4	にふい黄橙 10YR6/4	長石、角閃石	
13			SI03	土師器	杯	(12.4)	(8.2)	-	3.6	にふい橙 7.5YR6/4	にふい橙 7.5YR6/3	長石、石英、角閃石 赤色酸化粒	
14			SI03	土師器	杯	13.7	9.2	-	3.7	橙 SYR6/6	橙 SYR6/6	長石、角閃石	
15	108		SD05	土師器	鉢	(9.0)	3.7	-	6.2	にふい橙 7.5YR6/4	橙 SYR6/6	長石、石英、角閃石	
16			SK01	土師器	杯	12.6	7.8	-	3.2	にふい橙 7.5YR6/4	にふい橙 7.5YR6/4	長石、角閃石、雲母	
17		42	SK05	土師器	杯	15.3	8.4	-	3.9	明赤褐 5YR5/6	明赤褐 5YR5/6	石英、雲母、砂粒 赤色酸化粒	
18			SK05	須恵器	杯	13.2	6.9	-	3.9	灰黄 2.5Y6/2	灰黄 2.5Y7/2	石英、雲母、砂粒	
19			SK05	須恵器	杯	13.2	8.2	-	3.6	黄褐 2.5Y5/3	灰 5Y6/1	長石、石英、雲母	
20			SK31	土師器	皿	(13.6)	(9.6)	-	2.7	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR6/6	長石、石英、角閃石	
5E区													
21	108	42	SK01	陶器	壺	(11.1)	16.8	23.2	27.7	種：焦げ茶 8YR2.5/1.5	素地：キャメル 4YR5.5/6.5	砂粒	
6C区													
22		8	SI01	土師器	杯	12.9	-	-	5.0	明赤褐 5YR5/8	明赤褐 5YR5/8	長石、石英、角閃石 雲母、砂粒、赤色酸化粒	
23		42	SD01	土師器	蓋	12.6	-	-	5.2	赤褐 5YR4/6	明褐 7.5YR5/6	長石、角閃石 砂粒、赤色酸化粒	
24			SD01	土師器	杯	14.6	10.5	-	4.1	橙 SYR6/8	橙 SYR6/8	長石、石英、雲母 砂粒、赤色酸化粒	
25			SD01	土師器	杯	(14.2)	9.4	-	3.8	橙 2.5YR6/6	橙 2.5YR6/6	長石、雲母、砂粒 赤色酸化粒	
26			SD01	土師器	杯	13.6	9.4	-	3.5	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	長石、雲母、砂粒	
27	109	43	SD01	土師器	杯	14.1	8.8	-	3.7	橙 SYR6/6	橙 SYR6/6	長石、雲母、砂粒 赤色酸化粒	
28			SD01	土師器	杯	13.9	8.1	-	3.5	橙 SYR6/6	橙 2.5YR6/6	長石、雲母、砂粒 赤色酸化粒	
29		44	SD01	土師器	杯	14.0	8.1	-	3.1	にふい橙 7.5YR7/4	にふい黄橙 10YR7/4	長石、石英、雲母 砂粒、赤色酸化粒	
30			SD01	土師器	杯	13.5	8.8	-	3.6	橙 2.5YR6/6	橙 2.5YR6/6 7.5YR7/6	長石、角閃石、雲母 砂粒、赤色酸化粒	
31			SD01	土師器	杯	(10.2)	(5.1)	-	2.5	にふい黄橙 10YR7/4	にふい黄橙 10YR7/4	長石、石英、角閃石 雲母、砂粒、赤色酸化粒	
32			SD01	土師器	高台付杯	(13.2)	8.2	-	5.2	にふい黄橙 10YR6/4	にふい黄橙 10YR7/4	石英、角閃石 雲母、砂粒、赤色酸化粒	
33	110	43	SD01	土師器	小盤	14.4	-	12.3	(8.8)	にふい黄橙 10YR6/4	橙 7.5YR7/6	長石、石英、雲母 砂粒、赤色酸化粒	
34			SD01	土師器	甕	(26.2)	-	-	(16.9)	にふい黄橙 10YR6/4	灰黄褐 10YR4/2	長石、石英、角閃石、雲母	

Tab.14 遺物觀察表一①

調整				備考	遺物番号
外器面	内器面	外底面	内底面		
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り離し後ナデ	横ナデ、ナデ		1
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り離し後未調整	横ナデ、ナデ	内外面に煤付着 内外面赤彩	2
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り離し後未調整	横ナデ、ナデ	全面赤彩	3
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り離し後ナデ	横ナデ、ナデ		4
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り離し後ナデ	横ナデ、ナデ		5
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り離し後ナデ	横ナデ、ナデ		6
横ナデ、回転ヘラ削り	横ナデ	回転ヘラ切り離し高台貼付後ナデ	横ナデ、ナデ		7
横ナデ、回転ヘラ削り	横ナデ	回転ヘラ切り離し高台貼付後ナデ	横ナデ、ナデ	全面赤彩	8
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り離し後ナデ	横ナデ、ナデ	内外面赤彩	10
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り離し後未調整	横ナデ、ナデ	内外面赤彩	11
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り離し後未調整	横ナデ、ナデ	内外口縁端部に油煙 内面赤彩痕	12
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り離し後未調整	横ナデ、ナデ	全面赤彩	13
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り離し後未調整	横ナデ、ナデ	全面赤彩	14
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り後ナデ	ナデ、指頭圧痕	全面赤彩	15
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り離し後ナデ	横ナデ	内外面口縁部 赤彩	16
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り離し後未調整	横ナデ、ナデ	外面煤付着	17
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り離し後ナデ	横ナデ、ナデ		18
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り離し後ナデ	横ナデ、ナデ	板状圧痕	19
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り離し後未調整	横ナデ		20
ロクロナデ 格子目文タキ後力キメ	ロクロナデ 格子目文当具痕、ナデ	ヘラ切り離し	格子目文当具痕	肥前 片口 外底面付着物	21
横ナデ後ヘラ磨き	横ナデ後ヘラ磨き	手持ちヘラ削り後磨き	横ナデ後ヘラ磨き	全面赤彩 外底面黒班	22
横ナデ後手持ちヘラ削り	横ナデ後手持ちヘラ削り	-	-	全面赤彩	23
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り離し後ナデ	横ナデ、ナデ	全面赤彩	24
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り離し後未調整	横ナデ、ナデ	全面赤彩	25
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り離し後未調整	横ナデ、ナデ	内外面赤彩	26
横ナデ後回転ヘラ磨き	横ナデ後回転ヘラ磨き	回転ヘラ切り離し後回転ヘラ磨き	横ナデ後回転ヘラ磨き		27
横ナデ後回転ヘラ磨き	横ナデ後回転ヘラ磨き	回転ヘラ切り離し後回転ヘラ磨き	横ナデ後回転ヘラ磨き	全面赤彩	28
横ナデ後回転ヘラ磨き	横ナデ後回転ヘラ磨き	回転ヘラ切り離し後回転ヘラ磨き	横ナデ後回転ヘラ磨き	内面、外面体部下部赤彩	29
横ナデ後回転ヘラ磨き	横ナデ後回転ヘラ磨き	回転ヘラ切り離し後回転ヘラ磨き	横ナデ後回転ヘラ磨き	全面赤彩	30
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り離し後未調整	横ナデ	内外面油煙	31
横ナデ	横ナデ	ナデ、高台貼付	横ナデ後ナデ		32
ナデ、ハケメ	ケズリ、指ナデ	-	-	内外面煤付着	33
横ナデ、ハケメ	横ナデ、ケズリ	-	-		34

遺物番号	堆団番号	写真番号	遺構番号	種別	基準	法量 (cm)				色調		胎土	
						口径	底径	最大胴径	器高	外面	内面		
35			SD01	須恵器	蓋	(14.4)	-	-	3.2	暗灰青 2.5Y4/2	灰オリーブ 5Y5/2	長石、角閃石	
36			SD01	須恵器	蓋	17.2	-	-	1.6	灰 5Y6/1	灰 5Y6/1	長石、角閃石 赤色酸化粒	
37			SD01	須恵器	蓋	14.4	-	-	1.2	灰 5Y5/1	灰 N4/0	長石、石英 角閃石	
38			SD01	須恵器	蓋	13.9	-	-	1.7	灰 7.5Y6/1	灰 7.5Y5/1	長石、石英 角閃石	
39			SD01	須恵器	蓋	14.0	-	-	1.2	褐灰 10YR5/1	灰 10Y6/1	長石、角閃石	
40	43		SD01	須恵器	杯	13.6	9.8	-	3.6	灰 5Y5/1	灰 5Y5/1	長石、角閃石 雲母	
41		44	SD01	須恵器	杯	(13.2)	(9.1)	-	4.0	灰 5Y5/1	灰 5Y5/1	長石、角閃石 輝石	
42			SD01	須恵器	杯	12.7	8.7	-	4.0	灰黄 2.5Y7/2	灰白 5Y7/1	角閃石、褐色粒	
43		110	SD01	須恵器	高台付杯	(15.0)	9.0	-	5.6	灰 N5/0	灰 N4/0	長石、石英	
44			SD01	須恵器	高台付杯	(13.2)	(8.2)	-	4.9	灰 10Y5/1	オリーブ灰 N5/1	長石	
45			SD01	須恵器	皿	15.2	12.6	-	2.5	灰 7.5Y6/1	灰 7.5Y6/1	長石、角閃石	
46			SD01	須恵器	皿	(17.0)	11.8	-	2.7	黄灰 2.5Y6/1	灰黄 2.5Y7/2	長石、角閃石	
47			SD01	須恵器	高杯	(15.1)	9.8	-	9.0	灰 7.5Y4/1	灰 7.5Y4/1	長石、砂粒	
48			SD01	須恵器	杯蓋	(10.4)	-	-	3.3	灰 5Y6/1	黄灰 2.5Y6/1	長石、角閃石	
49			SD01	須恵器	杯身	10.8	7.0	-	3.4	灰 N4/0	灰 N5/0	長石、角閃石、砂粒	
50	62		SD01	土師器	杯(刻文)	-	-	-	1.0	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	長石、石英 赤色酸化粒	
51			SD01	土製品	製壇土器	-	-	-	5.5	にぶい橙 7.5YR7/3	にぶい橙 7.5YR7/3	長石、石英、黒色粒 赤色酸化粒	
54			SD02	土師器	杯	11.2	7.7	-	3.8	橙 5YR7/6	橙 5YR7/6	長石、石英、角閃石 雲母、砂粒、赤色酸化粒	
55			SD02	土師器	杯	11.4	6.7	-	4.0	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	長石、石英 砂粒、赤色酸化粒	
56	45		SD02	土師器	杯	(14.2)	8.3	-	3.2	明赤褐 2.5YR5/6	明赤褐 2.5YR5/6	長石、石英、雲母 砂粒、赤色酸化粒	
57		46	SD02	土師器	杯	13.3	7.2	-	3.3	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	長石、石英、角閃石 雲母、砂粒、赤色酸化粒	
58			SD02	土師器	杯	(15.9)	9.3	-	4.2	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	長石、石英、角閃石 雲母、砂粒、赤色酸化粒	
59			SD02	土師器	深鉢	(18.0)	10.7	-	10.8	明赤褐 5YR5/6	明赤褐 5YR5/6	長石、雲母、砂粒 赤色酸化粒	
60	45		SD02	土師器	甌	(21.0)	-	(23.5)	(22.5)	橙 5YR6/6	明赤褐 5YR5/6	長石、石英、雲母	
61	45 - 47		SD02	土師器	甌	28.4	-	26.0	(23.1)	橙 5YR7/6	橙 5YR7/6	長石、石英、角閃石	
62			SD02	須恵器	蓋	(16.0)	-	-	2.8	灰 5Y6/1	灰 5Y6/1	長石、角閃石	
63			SD02	須恵器	蓋	15.8	-	-	1.8	灰 7.5Y5/1	灰 7.5Y6/1	長石、角閃石	
64			SD02	須恵器	蓋	13.0	-	-	1.9	褐灰 10YR6/1	褐灰 10YR6/1	長石、角閃石	
65			SD02	須恵器	蓋	(15.0)	-	-	2.2	灰 7.5Y4/1	灰白 10YR7/1	長石、角閃石	
66			SD02	須恵器	蓋	15.2	-	-	1.7	灰 7.5Y5/1	灰 7.5Y5/1	長石、角閃石	
67		45	SD02	須恵器	蓋	14.0	-	-	1.5	灰 5Y5/1	灰 7.5Y4/1	長石、角閃石	
68		46	SD02	須恵器	蓋	(15.6)	-	-	0.8	灰 7.5Y5/1	灰 7.5Y5/1	長石、雲母	
69			SD02	須恵器	杯	(12.4)	8.0	-	4.0	暗灰青 2.5Y5/2	黄灰 2.5Y4/1	長石、角閃石、砂粒	
70			SD02	須恵器	杯	(11.4)	7.1	-	3.6	灰 5Y5/1	灰 5Y5/1	精緻	
71			SD02	須恵器	高台付杯	(14.4)	(9.0)	-	4.7	灰 N4/0	灰 N4/0	長石、石英、角閃石	
72			SD02	須恵器	高台付杯	(12.8)	(7.9)	-	4.5	灰 7.5Y4/1	灰 7.5Y5/1	長石、石英	
73			SD02	須恵器	高台付杯	(13.0)	(8.0)	-	4.8	灰 5Y5/1	灰 5Y6/1	長石、石英、角閃石	

Tab.15 遺物觀察表一(2)

調査				備考	遺物番号
外器面	内器面	外底面	内底面		
回転ヘラ削り、横ナデ	横ナデ、ナデ	-	-	擬宝珠つまみ	35
回転ヘラ削り、横ナデ	横ナデ、ナデ	-	-	擬宝珠つまみ	36
回転ヘラ削り、横ナデ	横ナデ、ナデ	-	-	内面自然釉	37
回転ヘラ削り、横ナデ	横ナデ、ナデ	-	-		38
回転ヘラ削り、横ナデ	横ナデ、ナデ	-	-		39
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り離し後ナデ 板状压痕	横ナデ、ナデ		40
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り離し後ナデ 板状压痕	横ナデ、ナデ		41
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り離し後 未調整	横ナデ、ナデ		42
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り離し後ナデ 高台貼付後ナデ	横ナデ、ナデ		43
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り離し後ナデ 高台貼付後ナデ	横ナデ、ナデ		44
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り離し後 未調整	横ナデ、ナデ		45
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り離し後 未調整	横ナデ、ナデ		46
横ナデ	横ナデ	横ナデ、ナデ	ナデ		47
回転ヘラ削り、ナデ	横ナデ	-	-	ヘラ描き 別遺構の可能性あり	48
回転ヘラ削り、横ナデ	横ナデ	-	-	別遺構の可能性あり	49
-	-	回転ヘラ切り離し	ナデ	刻畫『人夫』	50
ナデ、指頭圧痕	ナデ、指頭圧痕	-	-		51
横ナデ、回転ヘラ削り	横ナデ	回転ヘラ切り離し後ナデ	横ナデ後ナデ		54
横ナデ	横ナデ	切り離し後板状工具に よるナデ、ナデ	横ナデ後ナデ	外面煤付着	55
横ナデ後回転ヘラ磨き 回転ヘラ削り後 回転ヘラ磨き	横ナデ後回転ヘラ磨き	回転ヘラ切り離し後 回転ヘラ磨き	横ナデ後回転ヘラ磨き	全面赤彩	56
横ナデ後回転ヘラ磨き 回転ヘラ削り後 回転ヘラ磨き	横ナデ後回転ヘラ磨き	回転ヘラ切り離し後 回転ヘラ磨き	横ナデ後回転ヘラ磨き	全面赤彩	57
横ナデ後回転ヘラ磨き 回転ヘラ削り後 回転ヘラ磨き	横ナデ後回転ヘラ磨き	回転ヘラ切り離し後 回転ヘラ磨き	横ナデ後回転ヘラ磨き		58
横ナデ後回転ヘラ磨き	横ナデ後回転ヘラ磨き	回転ヘラ切り離し後 高台貼付後ナデ	横ナデ後回転ヘラ磨き	全面赤彩	59
横ナデ、ハケメ	横ナデ、ケズリ	-	-		60
横ナデ、ハケメ	横ナデ、ケズリ	ナデ、ハケメ	ナデ、ケズリ	外面墨書き	61
回転ヘラ削り、横ナデ	横ナデ、ナデ	-	-	擬宝珠つまみ	62
回転ヘラ削り、横ナデ	横ナデ、ナデ	-	-		63
回転ヘラ削り、横ナデ	横ナデ、ナデ	-	-		64
横ナデ	横ナデ、ナデ	-	-	外面自然釉付着	65
回転ヘラ削り、横ナデ	横ナデ、ナデ	-	-		66
回転ヘラ削り、横ナデ	横ナデ、ナデ	-	-		67
回転ヘラ削り、横ナデ	横ナデ、ナデ	-	-		68
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り離し後ナデ	横ナデ、ナデ		69
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り離し後 未調整	横ナデ、ナデ	火澤	70
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り離し後ナデ 高台貼付後ナデ	横ナデ、ナデ		71
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り離し後ナデ 高台貼付後ナデ	横ナデ、ナデ		72
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り離し後ナデ 高台貼付後ナデ	横ナデ、ナデ		73

遺物番号	堆団番号	写真番号	遺構番号	種別	器種	法量 (cm)				色調		胎土			
						口径	底径	最大胴径	器高	外面	内面				
74		45	SD02	須恵器	皿	(14.0)	11.7	-	2.1	灰 7.5Y6/1	灰白 5Y7/2	長石、石英			
75	112	46	SD02	須恵器	皿	17.5	14.3	-	2.1	灰 5Y6/1	黄灰 2.5Y5/1	長石、角閃石			
76		45-47	SD02	須恵器	鉢	21.6	-	-	13.4	灰 7.5Y4/1	灰 5Y4/1	砂粒			
77	113	47	SD02	須恵器	甌	22.2	-	(39.5) (42.5)	にぶい赤褐 5YR4/3	にぶい赤褐 5YR4/3	長石、石英、細砂粒				
78			SD02	須恵器	甌	22.1	-	(39.7) (42.4)	灰 N5/0	暗赤褐 5YR3/3	長石、砂粒				
79			SD02	土師器	杯 (へら描)	-	-	-	0.5	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	長石、石英、黒色粒			
80	112	62	SD02	土師器	杯 (墨書き)	-	(10.4)	-	1.1	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 5YR7/4	長石、石英			
81			SD02	土師器	杯 (墨書き)	-	-	-	1.1	浅黄褐 10YR8/3	浅黄褐 10YR8/3	長石、石英、角閃石			
84			SD03	土師器	杯	12.8	9.0	-	3.4	にぶい橙 7.5YR7/4	橙 2.5YR6/6	長石、雲母、砂粒			
85			SD03	土師器	杯	(12.5) (6.6)	-	3.2	橙 7.5YR7/6	橙 5YR6/6	長石、石英、雲母、砂粒 赤色顔化程				
86		7	SD03	土師器	杯	12.8	9.1	-	3.5	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR6/6	長石、石英、雲母、砂粒 赤色顔化程			
87		*	SD03	土師器	杯	12.6	6.7	-	3.7	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	長石、石英、雲母、砂粒 赤色顔化程			
88		48	SD03	土師器	高台付杯	11.6	6.6	-	4.9	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	長石、石英、角閃石、砂粒			
89		114	49	SD03	土師器	高台付杯	12.0	6.8	-	5.7	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	長石、石英、砂粒 赤色顔化程		
90			SD03	土師器	高台付杯	11.9	7.9	-	5.1	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	長石、石英、雲母、砂粒 赤色顔化程			
91			SD03	土師器	高台付杯	11.6	6.3	-	5.4	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	長石、角閃石、砂粒			
92			SD03	土師器	高台付杯	(14.0)	8.3	-	7.5	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	長石、石英、雲母、砂粒 赤色顔化程			
93		7・48	SD03	土師器	深鉢	(22.2)	12.8	-	12.3	明赤褐 5YR5/6	明赤褐 5YR5/6	長石、石英、雲母、砂粒 赤色顔化程			
94		50	7・48	SD03	土師器	甌	(27.0)	-	(25.1) (23.7)	浅黄褐 10YR8/4	明褐灰 7.5YR7/1	角閃石、砂粒			
95		7・48	50	SD03	土師器	甌	(27.3)	-	(25.3) (20.6)	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	長石、石英、角閃石			
96			SD03	須恵器	蓋	17.3	-	-	3.1	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/3	長石、石英、角閃石			
97			SD03	須恵器	蓋	(19.8)	-	-	4.0	灰白 5Y8/2	灰オリーブ 5Y6/2	長石、角閃石、輝石			
98			SD03	須恵器	蓋	(17.0)	-	-	2.8	灰 10Y5/1	灰 7.5Y6/1	長石、角閃石、雲母			
99			SD03	須恵器	蓋	(16.6)	-	-	3.0	灰 5Y6/1	灰 5Y6/1	長石、角閃石			
100			SD03	須恵器	蓋	18.6	-	-	4.0	灰 7.5Y5/1	灰白 5Y7/2	長石、角閃石			
101			SD03	須恵器	蓋	19.0	-	-	3.8	灰 7.5Y5/1	灰 7.5Y5/1	長石、角閃石			
102			SD03	須恵器	蓋	(14.6)	-	-	3.9	灰 N4/0	灰 N4/0	長石、角閃石			
103		7	SD03	須恵器	蓋	20.8	-	-	4.0	灰黄 2.5Y7/2	灰黄 2.5Y7/2	長石、角閃石、輝石			
104		48	SD03	須恵器	蓋	(13.6)	-	-	1.5	灰 5Y6/1	灰 5Y6/1	長石、角閃石			
105		*	SD03	須恵器	杯	(12.6) (8.0)	-	(4.3)	灰白 10Y7/1	オリーブ 2.5Y6/1	長石、石英				
106			SD03	須恵器	杯	(12.0) (8.2)	-	(3.5)	灰 5Y6/1	灰 5Y5/1	長石、石英、角閃石				
107			SD03	須恵器	杯	(12.6) (8.7)	-	3.7	灰白 5Y7/1	灰白 5Y7/2	長石、石英、角閃石				
108			SD03	須恵器	杯	(13.4)	8.3	-	4.1	灰オリーブ 5Y6/2	灰白 5Y7/2	長石、角閃石、雲母			
109			SD03	須恵器	杯	12.5	7.8	-	3.9	灰黄 2.5Y7/2	灰黄 2.5Y6/2	長石、角閃石			
110			SD03	須恵器	杯	(12.0) (8.4)	-	3.3	灰 7.5Y4/1	灰 5Y4/1	長石				
111			SD03	須恵器	杯	(13.0) (9.5)	-	3.5	灰 5Y5/1	灰黄 2.5Y5/1	長石、石英				
112			SD03	須恵器	杯	12.2	7.6	-	4.1	灰 N6/0	灰 N5/0	長石、角閃石			

Tab.16 遺物觀察表-③

調整				備考	遺物番号
外器面	内器面	外底面	内底面		
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り離し後未調整	横ナデ、ナデ		74
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り離し後未調整	横ナデ、ナデ		75
横ナデ、回転ヘラ削り	横ナデ、ナデ	-	-		76
横ナデ、平行文タタキ	横ナデ 同心円文当具痕後 ナデ削り 平行文当具痕	-	-	口縁 2条沈線	77
横ナデ、格子目文タタキ	横ナデ、同心円文当具痕 平行文タタキ	-	-	内外面自然釉	78
-	-	ヘラ切り離し	ナデ	ヘラ描き	79
-	-	ヘラ切り離し後磨き	ナデ後磨き	墨書き『大』 全面赤彩	80
横ナデ	-	回転ヘラ切り離し後未調整	ナデ	墨書き 全面赤彩	81
横ナデ後回転ヘラ磨き 回転ヘラ削り後 回転ヘラ磨き	横ナデ後回転ヘラ磨き	回転ヘラ削り後 回転ヘラ磨き	横ナデ後回転ヘラ磨き	内面、外面体部下部赤彩	84
横ナデ後回転ヘラ磨き 回転ヘラ削り後 回転ヘラ磨き	横ナデ後回転ヘラ磨き	回転ヘラ削り後 回転ヘラ磨き	横ナデ後回転ヘラ磨き	内面、外面体部下部赤彩	85
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り離し後未調整	横ナデ、ナデ	内外面油煙	86
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り離し後ナデ	横ナデ、ナデ	全面赤彩	87
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り離し 高台貼付後ナデ	横ナデ、ナデ		88
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り離し後板状 工具によるナデ（ハケメ） 高台貼付後ナデ	横ナデ、ナデ		89
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り離し後未調整 高台貼付後ナデ	横ナデ		90
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り離し後ナデ	横ナデ、ナデ		91
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り離し後ナデ	横ナデ、ナデ	外面沈線	92
横ナデ、回転ヘラ削り	横ナデ	回転ヘラ切り離し後ナデ	横ナデ、ナデ	全面赤彩	93
横ナデ、ハケメ	横ナデ、ヘラ削り	-	-		94
横ナデ、ハケメ	横ナデ、ヘラ削り	-	-	外面墨痕	95
回転ヘラ削り、横ナデ	横ナデ、ナデ	-	-	擬宝珠つまみ	96
回転ヘラ削り、横ナデ	横ナデ、ナデ	-	-	擬宝珠つまみ	97
回転ヘラ削り、横ナデ	横ナデ、ナデ	-	-	擬宝珠つまみ	98
回転ヘラ削り、横ナデ	横ナデ、ナデ	-	-	擬宝珠つまみ	99
回転ヘラ削り、横ナデ	横ナデ、ナデ	-	-	擬宝珠つまみ	100
回転ヘラ削り、横ナデ	横ナデ、ナデ	-	-	擬宝珠つまみ	101
回転ヘラ削り、横ナデ	横ナデ、ナデ	-	-	擬宝珠つまみ	102
回転ヘラ削り、横ナデ	横ナデ、ナデ	-	-	擬宝珠つまみ	103
回転ヘラ削り、横ナデ	横ナデ、ナデ	-	-		104
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り離し後未調整	横ナデ、ナデ		105
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り離し後ナデ	-		106
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り離し後未調整	横ナデ		107
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り離し後未調整	横ナデ、ナデ		108
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り離し後ナデ	横ナデ、ナデ		109
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り離し後ナデ	横ナデ、ナデ		110
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り離し後ナデ	横ナデ、ナデ		111
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り離し後ナデ	横ナデ、ナデ		112

遺物番号	堆団番号	写真番号	遺構番号	種別	器種	法量 (cm)				色調		胎土	
						口径	底径	最大胴径	器高	外面	内面		
113		7	SD03	須恵器	杯	(12.2)	(7.6)	-	3.7	灰 10Y5/1	灰 10Y4/1	長石、角閃石	
114		*	SD03	須恵器	杯	12.4	8.3	-	3.8	灰 7.5Y5/1	灰 7.5Y5/1	長石、石英、角閃石	
115	115	48	SD03	須恵器	高台付杯	14.4	9.6	-	4.6	灰 N6/0	灰 5Y6/1	長石、角閃石、砂粒	
116		*	SD03	須恵器	高台付杯	(14.8)	(8.4)	-	6.4	灰 7.5Y4/1	灰 5Y5/1	精緻、白色粒	
117		49	SD03	須恵器	大杯	19.5	8.0	-	4.6	灰 7.5Y5/1	灰 7.5Y5/1	長石、角閃石	
118		7	SD03	須恵器	鉢	(18.9)	-	-	10.8	灰白 2.5Y7/1	黄灰 2.5Y4/1	長石、石英	
119	116	48	SD03	須恵器	深鉢	(20.4)	(12.0)	-	15.7	黄灰 2.5Y4/1	オーリーブ黒 SY3/1	長石、石英、砂粒	
120		*	SD03	須恵器	壺	-	12.1	(20.2)	(26.7)	黒褐 10YR3/1	黒褐 10YR3/2	長石、石英	
121		50	SD03	須恵器	壺	29.5	12.2	-	24.4	オーリーブ黒 10Y4/1	オーリーブ黒 10Y5/1	長石、石英、角閃石	
122	117		SD03	須恵器	甕	20.8	-	38.6	42.5	柳暗赤褐 5YR2/4	暗赤褐 5YR3/2	微細	
123	118	51	SD03	須恵器	甕	22.1	-	40.0	42.6	暗赤褐 5Y3/3	暗赤褐 5Y3/3	微細砂粒	
124		52	SD03	須恵器	甕	(20.7)	-	41.3	(39.2)	褐 7.5YRA/3 灰 5Y5/1	褐 7.5YRA/3 灰 5Y5/1	長石、微細砂粒	
125	119		SD03	須恵器	甕	20.6	-	37.2	42.0	オーリーブ 2.5G6/1	灰 N5/0	長石、石英	
126		51	SD03	須恵器	大甕	(47.4)	-	71.1	(82.1)	灰 N6/0	灰 N6/0	石英、砂粒	
127	120	53	SD03	須恵器	大甕	50.1	-	81.9	95.0	灰 N5/0	灰 N5/0	白色粒	
128	117	62	SD03	土師器	杯(墨書き)	-	-	-	0.8	橙 SYR6/6	橙 SYR6/6	長石、石英、赤色酸化粒	
129		121	SD04	土師器	三足土器	22.0	-	-	(16.8)	橙 SYR6/6	にぶい黄橙 10YR7/4	長石、角閃石、雲母 砂粒、赤色酸化粒	
130			SD04	須恵器	横瓶	-	-	-	(25.4)	灰 N4/0	灰 N4/0	精緻	
131			SD05	土師器	杯	(10.2)	6.4	-	4.1	橙 SYR6/6	橙 SYR6/6	長石、石英、赤色酸化粒	
132			SD05	土師器	杯	11.2	6.4	-	4.4	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	長石、石英、赤色酸化粒	
133		54	SD05	土師器	杯	11.1	6.5	-	4.0	にぶい橙 7.5YR7/4	橙 SYR7/6	長石、石英、赤色酸化粒	
134	122		SD05	土師器	杯	(13.4)	8.4	-	3.1	にぶい黄 10YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	長石、石英、赤色酸化粒	
135			SD05	土師器	皿	11.4	6.9	-	2.4	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	長石、石英、赤色酸化粒	
136			SD05	須恵器	蓋	15.3	-	-	2.6	褐灰 10YR5/1	黄灰 2.5Y5/1	角閃石	
137	123	*	ST06	土師器	杯	(13.4)	(9.2)	-	2.8	橙 2.5YR6/6	橙 2.5YR6/6	長石、石英、赤色酸化粒	
138			ST06	土師器	杯	(14.4)	(9.0)	-	3.2	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	長石、石英、赤色酸化粒	
139		8 42-55	SK02	土師器	杯	(12.5)	-	-	(5.2)	明赤褐 2.5YR5/6	明赤褐 SYR5/6	長石、石英、角閃石、砂粒	
140		124	SK02	土師器	杯	10.8	6.7	-	3.7	橙 SYR6/6	橙 SYR6/6	長石、角閃石	
141			SK02	須恵器	高台付杯	(15.1)	(7.7)	-	5.1	灰 N6/0	灰 N6/0	長石、角閃石、砂粒	
142			SK02	須恵器	高台付杯	(14.8)	(10.4)	-	5.0	灰 N4/0	灰 5Y6/1	微細砂粒	
143		55	SK04	土師器	杯	13.8	7.7	-	3.3	橙 SYR6/6 7.5YR7/6	橙 SYR6/6	長石、雲母 砂粒、赤色酸化粒	
144	125		SK04	土師器	杯	(14.4)	8.1	-	3.0	橙 SYR6/8	にぶい黄 10YR7/4	長石、石英、角閃石 雲母、砂粒、赤色酸化粒	
145			SK04	土師器	高杯	-	13.2	-	(15.4)	橙 SYR6/6	橙 SYR6/6	砂粒、赤色酸化粒	
146			SK04	須恵器	皿	(14.2)	(11.8)	-	1.9	灰 7.5Y5/1	灰 10Y5/1	長石、石英、角閃石	
147	126	8-42	SK11	土師器	杯	15.0	8.0	-	5.7	明赤褐 2.5YR5/8 SYR5/6	明赤褐 2.5YR5/8	長石、石英、角閃石 雲母、黑曜石、砂粒	
148		56	SK15	土師器	移動式壺	(32.1)	-	-	(19.6)	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	長石、石英	
149	127	56	SK15	須恵器	蓋	(18.4)	-	-	3.3	灰 7.5Y5/1	灰 7.5Y5/1	長石、石英	
150			SK15	須恵器	蓋	(17.8)	-	-	1.6	灰オーリーブ SYR6/2	灰オーリーブ SYR6/2	長石、角閃石	

Tab.17 遺物觀察表一(4)

調整				備考	遺物 番号
外器面	内器面	外底面	内底面		
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り離し後ナデ	横ナデ、ナデ		113
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り離し後ナデ	横ナデ、ナデ		114
横ナデ、回転ヘラ磨き	回転ヘラ磨き	回転ヘラ切り離し後ナデ 高台貼付後ナデ	横ナデ、ナデ		115
回転ヘラ削り 回転ヘラ磨き	横ナデ、回転ヘラ磨き	回転ヘラ切り離し後 未調整	横ナデ、ナデ		116
横ナデ、回転ヘラ削り	横ナデ	回転ヘラ切り離し後ナデ	横ナデ、ナデ	内外面に火漆	117
横ナデ	横ナデ	-	-		118
横ナデ、回転ヘラ削り	横ナデ、指頭圧痕	ヘラ切り離し後ケズリ	横ナデ、指頭圧痕	把手2か所(剥離) 火漆	119
横ナデ、回転ヘラ削り	横ナデ	回転ヘラ切り離し後 未調整	ヘラ削り	三耳壺	120
横ナデ、平行文タタキ 沈線	横ナデ、平行文当具痕 ナデ	-	-	把手	121
横ナデ、平行文タタキ	横ナデ、同心円文当具痕 平行文当具痕	-	-		122
横ナデ 格子目文タタキ後カキメ	横ナデ、同心円文当具痕 平行文当具痕	-	-		123
横ナデ 格子目文タタキ後カキメ	横ナデ、同心円文当具痕 平行文当具痕	-	-	内外面自然釉	124
横ナデ 平行文タタキ後ナデ	横ナデ、同心円文当具痕 平行文タタキ後ナデ	横ナデ、同心円文当具痕 平行文タタキ後ナデ	横ナデ、同心円文当具痕		125
横ナデ 波状文 平行文タタキ	横ナデ、同心円文当具痕 平行文当具痕	-	-		126
横ナデ 波状文 平行文タタキ	横ナデ、同心円文当具痕 平行文当具痕	平行文タタキ	同心円文当具痕		127
-	-	ヘラ切り離し	ナデ	墨書き『大』 全面赤彩	128
横ナデ、ハケメ、ナデ 工具ナデ、指頭圧痕	横ナデ、横ナデ後削り	横ナデ、ハケメ	横ナデ、横ナデ後削り	内外面煤付着 脚先端すべて欠損	129
横ナデ、格子目文タタキ	横ナデ 同心円文当具痕	格子目文タタキ	同心円文当具痕		130
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り離し後ナデ	横ナデ、ナデ		131
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り離し後ナデ	横ナデ、ナデ		132
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り離し後ナデ	横ナデ、ナデ		133
横ナデ	横ナデ後回転ヘラ磨き	回転ヘラ切り離し後ナデ	横ナデ後回転ヘラ磨き	内外面赤彩	134
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り離し後 未調整	横ナデ、ナデ	内面・口縁端部 油煙付着	135
回転ヘラ削り、横ナデ	横ナデ	-	-	輪状つまみ	136
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り離し後 未調整	横ナデ、ナデ	内外面赤彩	137
横ナデ後回転ヘラ磨き	横ナデ後回転ヘラ磨き	回転ヘラ切り離し後 回転ヘラ磨き	横ナデ後回転ヘラ磨き	口縁内外面 油煙付着	138
手持ちヘラ削り後磨き	横ナデ後ヘラ磨き	手持ちヘラ削り後磨き	横ナデ後ヘラ磨き	全面赤彩	139
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り離し後 未調整	横ナデ、ナデ		140
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り離し後 未調整	横ナデ、ナデ		141
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り離し 高台貼付後ナデ	横ナデ		142
横ナデ後回転ヘラ磨き	横ナデ後回転ヘラ磨き	回転ヘラ切り離し後 回転ヘラ磨き	横ナデ後回転ヘラ磨き	外底面墨書き 全面赤彩	143
横ナデ後回転ヘラ磨き	横ナデ後回転ヘラ磨き	回転ヘラ切り離し後 回転ヘラ磨き	横ナデ後回転ヘラ磨き	全面赤彩 濃滅著しい	144
横ナデ、ケズリ	横ナデ	横ナデ	横ナデ、しぶり痕	全面赤彩	145
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り離し後 未調整	横ナデ、ナデ		146
横ナデ 手持ちヘラ削り後磨き	横ナデ後磨き	手持ちヘラ削り後磨き	ナデ後磨き	全面赤彩 外底面黒斑	147
横ナデ、ナデ、ハケメ	横ナデ、ハケメ後ケズリ 指頭圧痕	-	-	口縁内面 煙付着	148
回転ヘラ削り、横ナデ	横ナデ	-	-	擬宝珠つまみ	149
回転ヘラ削り、横ナデ	横ナデ、ナデ	-	-		150

遺物番号	堆団番号	写真番号	遺構番号	種別	器種	法量 (cm)				色調		胎土	
						口径	底径	最大胴径	器高	外面	内面		
151	56	127	SK15	須恵器	蓋	11.6	-	-	(1.8)	灰 N5/0	灰 N5/0	砂粒、黒色粒	
152			SK15	須恵器	蓋	(15.6)	-	-	1.8	灰 5Y5/1	灰 5Y6/1	長石、石英、角閃石	
153			SK15	須恵器	蓋	(16.6)	-	-	1.2	灰 N5/0	灰 10Y5/1	長石、角閃石	
154			SK15	須恵器	蓋	(20.8)	-	-	(1.9)	灰 7.5Y6/1	灰 7.5Y6/1	長石、角閃石	
155			SK15	須恵器	蓋	13.6	-	-	2.0	灰 5Y6/1	灰オリーブ 5Y6/2	長石、角閃石	
156		55 + 56	SK15	須恵器	蓋	(14.8)	-	-	3.3	灰 N4/0	灰 N4/0	微砂粒	
157			SK15	須恵器	杯	(12.6)	(8.2)	-	3.8	灰 5Y5/1	灰 5Y6/1	長石	
158			SK15	須恵器	杯	(13.4)	(9.3)	-	3.4	灰 5Y5/1	灰 5Y5/1	長石、角閃石	
159			SK15	須恵器	杯	12.5	8.6	-	4.1	灰 7.5Y5/1	灰 7.5Y5/1	長石、角閃石	
160			SK15	須恵器	甕	21.5	-	42.4	(41.6)	灰オリーブ 7.5Y6/2	暗褐色 10YR3/3	長石、微細砂粒	
161	57	128	SK15	須恵器	甕	20.3	-	(37.5)	(45.5)	褐灰 10YR5/1 灰 N5/0	にぶい緑 7.5YR6/4 灰 N5/0	長石、砂粒	
162			SK15	須恵器	甕	(21.8)	-	(40.7)	43.1	灰 N5/0	灰 N4/0 NS/0	長石、砂粒	
163			SK15	須恵器	甕	21.7	-	41.9	51.3	黄灰 2.5YR6/1	黄灰 2.5YR4/1	長石、石英、微細砂粒	
164			SK15	須恵器	甕	21.6	-	40.4	(33.5)	灰 5Y4/1	オリーブ灰 5Y3/1	長石、微細砂粒	
165			SK18	土師器	甕	26.8	-	-	(11.9)	橙 7.5YR6/6	明黄褐色 10YR7/6	長石、石英、角閃石	
166		59	SK18	須恵器	蓋	15.6	-	-	3.3	黄灰 2.5Y6/1	黄灰 2.5Y6/2	長石、角閃石	
167			SK19	土師器	高台付大甕	21.1	13.4	-	5.9	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	長石、石英、雲母 砂粒、赤色酸化粒	
168			SK20	須恵器	蓋	(13.8)	-	-	1.5	灰 7.5Y5/1	灰 7.5Y5/1	長石、角閃石	
169			SK20	須恵器	甕	-	(12.1)	(24.1)	(25.6)	オリーブ黒 5Y3/1	灰 10Y4/1	長石、砂粒、微細砂粒	
6E区													
170	132	59	SD02	須恵器	高台付杯	13.1	9.6	-	5.5	灰 N6/0	黄灰 2.5Y6/1	精緻、砂粒	
171			SD02	須恵器	高台付杯	(14.4)	(9.0)	-	5.5	灰白 7.5Y5/1	灰白 7.5Y5/1	精緻、砂粒	
172		62	SD02	土師器	製壇土器	-	-	-	8.1	にぶい緑 10YR7/4	にぶい緑 10YR7/4	長石、石英	
173			SK01	須恵器	蓋	15.8	-	-	3.7	灰 5Y6/1	灰 5Y6/1	長石、石英、砂粒	
7C区													
174	134	-	SD01	土師器	皿	(15.0)	(12.3)	-	1.8	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	砂粒	
175		60	NR02	土師器	杯	(11.4)	(6.9)	-	3.4	橙 5YR7/6	橙 5YR7/6	長石、石英、角閃石	
176			NR02	土師器	杯	(11.8)	6.5	-	3.9	にぶい緑 7.5YR7/4	にぶい緑 7.5YR7/4	長石、石英、角閃石	
177			NR02	土師器	杯	10.9	6.8	-	4.2	にぶい黄橙 10YR7/4	橙 5YR7/6	長石、石英	
178			NR02	土師器	杯	(12.4)	(8.2)	-	4.5	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	長石、石英、角閃石	
179			NR02	土師器	杯	(13.8)	8.9	-	3.6	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	長石、石英	
180		59 + 60	NR02	土師器	杯	(16.6)	(9.8)	-	3.8	橙 2.5YR6/8	橙 2.5YR6/8	砂粒	
181			NR02	土師器	皿	(20.4)	(10.9)	-	3.9	にぶい緑 7.5YR6/4	橙 5YR6/6	長石、石英 赤色酸化粒	
182			NR02	土師器	托	17.8	10.6	-	6.2	明赤褐 2.5YR5/6	にぶい緑 7.5YR6/4	長石、石英、雲母	
183		60	NR02	土師器	鉢	(22.2)	-	-	8.2	にぶい黄 2.5YR4/4	黒褐 7.5YR3/2	長石、石英	

Tab.18 遺物觀察表—⑤

調整				備考	遺物番号
外器面	内器面	外底面	内底面		
回転ヘラ削り、横ナデ	横ナデ、ナデ	-	-		151
回転ヘラ削り、横ナデ	横ナデ、ナデ	-	-	擬宝珠つまみ	152
回転ヘラ削り、横ナデ	横ナデ、ナデ	-	-		153
回転ヘラ削り、横ナデ	横ナデ、ナデ	-	-		154
回転ヘラ削り、横ナデ	横ナデ、ナデ	-	-		155
自然鉗付着の為、不明	横ナデ、ナデ	-	-	擬宝珠つまみ 透の蓋の可能性あり	156
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り離し後ナデ	横ナデ、ナデ		157
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り離し	横ナデ、ナデ		158
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り離し	横ナデ、ナデ		159
横ナデ、格子目文タタキ	横ナデ 同心円文当具痕 平行文当具痕	-	-	外面自然釉 口縁2条沈線	160
横ナデ 平行文タタキ後横ナデ 平行文タタキ後カキメ	横ナデ 同心円文当具痕 平行文当具痕	-	-	口縁2条沈線	161
横ナデ、平行文タタキ ケズリ	横ナデ 同心円文当具痕後 ナデ消し、ケズリ	-	-	内外面自然釉 平底	162
横ナデ、平行文タタキ	横ナデ 同心円文当具痕 平行文当具痕	-	-	内外面自然釉	163
横ナデ 格子目文タタキ後カキメ	横ナデ 同心円文当具痕	-	-	内外面自然釉 外面頭部にヘラ描き	164
横ナデ、ハケメ	横ナデ、ケズリ	-	-		165
回転ヘラ削り、横ナデ	横ナデ	-	-	擬宝珠つまみ	166
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り離し 高台貼付後ナデ	横ナデ後ナデ	内外面赤彩	167
回転ヘラ削り、横ナデ	横ナデ、ナデ	-	-		168
横ナデ 格子目文タタキ後ナデ 回転ヘラ削り	横ナデ 同心円文当具痕	回転ヘラ切り離し後ナデ 高台貼付後ナデ	同心円文当具痕		169
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り離し後 未調整 高台貼付後ナデ	横ナデ、ナデ	萩尾型 外面自然釉付着	170
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り離し後ナデ 高台貼付後ナデ	横ナデ、ナデ		171
ナデ	工具ナデ、ナデ	-	-		172
回転ヘラ削り、横ナデ	横ナデ、ナデ	-	-	擬宝珠つまみ	173
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り離し後 未調整	横ナデ、ナデ	全面赤彩	174
横ナデ、回転ヘラ削り	横ナデ	ヘラ切り離し後ナデ	横ナデ、ナデ	板状压痕	175
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り離し後 未調整	横ナデ、ナデ		176
横ナデ	横ナデ、ナデ	ヘラ切り離し	横ナデ、ナデ	内外面油煙	177
横ナデ	横ナデ、ナデ	回転ヘラ切り離し後 未調整	横ナデ、ナデ	内外面油煙	178
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り離し後 未調整	横ナデ、ナデ	全面赤彩	179
横ナデ後回転ヘラ磨き	横ナデ後回転ヘラ磨き	回転ヘラ切り離し後ナデ 回転ヘラ磨き	横ナデ、ナデ 回転ヘラ磨き	全面赤彩	180
横ナデ、回転ヘラ削り	横ナデ	回転ヘラ切り離し後ナデ 回転ヘラ磨き	横ナデ、ナデ 回転ヘラ磨き		181
横ナデ後回転ヘラ磨き 回転ヘラ削り	横ナデ後 回転ヘラ磨き	横ナデ後回転ヘラ磨き	横ナデ、ナデ 回転ヘラ磨き		182
横ナデ、ハケメ ヘラ描き文	横ナデ、ハケメ	横ナデ、ハケメ	横ナデ、ハケメ 指謹压痕		183

遺物番号	堆図番号	写真番号	遺構番号	種別	器種	法量(cm)			色調		胎土	
						口径	底径	最大胴径	器高	外面	内面	
184	60 135	NR02	須恵器	杯	(13.1)	8.6	-	4.2	灰 5Y6/1	灰 5Y6/1	長石、石英	
185			須恵器	杯	12.2	7.7	-	4.1	灰 N5/0	灰 N5/0	砂粒	
186			須恵器	杯	(12.7)	7.2	-	4.5	灰 5Y5/1 にぶい橙 7.5YR7/4	灰白 5Y7/1 にぶい橙 7.5YR7/4	長石、石英	
187			須恵器	杯	(11.0)	(6.6)	-	3.6	灰 7.5Y5/1	灰 7.5Y5/1	精緻	
188			須恵器	杯	(12.4)	(8.0)	-	4.6	灰 5Y5/1	灰 5Y5/1	長石、石英	
189			須恵器	杯	(13.0)	(8.1)	-	3.8	灰 5Y5/1	灰 5Y5/1	長石、石英	
190			須恵器	杯	(12.2)	(7.2)	-	3.2	黄灰 2.5Y6/1	黄灰 2.5Y6/1	雲母、砂粒	
191			須恵器	高台付杯	(13.6)	(8.5)	-	5.7	灰 5Y5/1	灰 5Y6/1	精緻、微鉢粒	
192			須恵器	高台付杯	12.7	7.6	-	6.3	灰黄 2.5Y6/2	黄灰 2.5Y6/1	長石、石英	
193			須恵器	皿	(14.0)	(10.4)	-	2.3	オリーブ黒 5Y3/1 灰黄 2.5Y7/2	灰 10Y4/1 灰黄 2.5Y7/2	精緻、微砂粒	
194			須恵器	鉢	(18.0)	(10.2)	-	9.0	灰黄 2.5Y6/2	黄灰 2.5Y7/2	精緻、砂粒	
195			須恵器	鉢	(18.0)	(10.0)	-	8.8	灰黄 2.5Y7/2	黄灰 2.5Y7/2	長石、石英	
196		60・61	須恵器	鉢	22.5	-	-	(10.4)	灰 5Y5/1	灰 5Y5/1	長石、石英	
197			土器	杯(刻畫)	-	-	-	0.8	橙 5YR7/6 にぶい橙 7.5YR7/4	長石、石英、雲母 赤色酸化粒		

Tab.20 遺物観察表(土製品)

遺物番号	堆図番号	写真番号	区	遺構番号	種別	器種	法量(cm)			重量(g)	色調	胎土	備考	
							長	幅	孔径					
9	107	62	4F	SK15	土製品	土鍤	3.6	1.0	0.4	3.2	にぶい橙 7.5YR7/4	長石、赤色酸化粒		
52	110		6C	SD01	土製品	土鍤	7.1	2.7	1.0	34.5	にぶい橙 7.5YR6/4	長石、赤色酸化粒	指頭圧痕	
53			6C	SD01	土製品	土鍤	6.4	2.1	0.6	21.9	にぶい黄橙 10YR7/3	長石、角閃石	指頭圧痕	
82	112		6C	SD02	土製品	土鍤	6.1	1.9	0.6	20.4	淡黄 2.5Y7/4	長石		
83			6C	SD02	土製品	土鍤	4.6	2.8	0.6	28.5	にぶい黄橙 10YR6/3	砂粒、赤色酸化粒	孔の一部に細痕跡	

Tab.21 遺物観察表(石器)

実測番号	堆図番号	写真番号	区	遺構番号	器種	石材	法量(cm)			重量(g)	備考	
							長	幅	厚			
198	136	61	6C	SD02	砥石	凝灰岩	(5.9)	4.2	1.3	42.2		
199			6C	SK02	研磨車	滑石	4.1	4.1	1.3	30.3	孔径 1.2 cm	

Tab.19 遺物觀察表-⑥

調整					備考	遺物番号
外器面	内器面	外底面	内底面			
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り離し後未調整		横ナデ、ナデ		184
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り離し後未調整		横ナデ、ナデ	外面口縁 自然軸	185
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り離し後未調整		横ナデ、ナデ		186
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り離し後未調整		横ナデ、ナデ		187
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り離し後ナデ		横ナデ、ナデ		188
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り離し後ナデ		横ナデ、ナデ		189
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り離し後ナデ		横ナデ、ナデ		190
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り離し後ナデ 高台貼付後ナデ		横ナデ、ナデ		191
横ナデ	横ナデ	回転ヘラ切り離し後ナデ 高台貼付後ナデ		横ナデ、ナデ		192
横ナデ	横ナデ	ヘラ切り離し後未調整		横ナデ、ナデ		193
横ナデ 回転ヘラケズリ	横ナデ	ヘラ切り離し 高台貼付後ナデ		横ナデ、ナデ		194
横ナデ 回転ヘラケズリ	横ナデ	回転ヘラ切り離し後ナデ 高台貼付後ナデ		横ナデ、ナデ	内外面火禪	195
横ナデ	横ナデ	-	-	ナデ	刻畫『田○』	196
-	-	ヘラ切り離し				197

Tab.22 遺物觀察表(鉄製品)

遺物番号	拝図番号	写真番号	区	造柄番号	器種	法量(cm)		重量(g)	備考	
						長	幅			
200				6C	SD02	鉄旗	(11.7)	(3.6)	29.0	複股鉄旗
201				6C	SD01	鉄旗	(10.5)	0.9	11.2	
202				6C	ST06	鉄旗?	(13.2)	0.5	11.2	
203				6C	S101	刀子	(8.7)	1.2	9.0	
204				6C	ST09	刀子	(9.2)	1.2	10.1	木質部残存
205				6C	ST11	刀子	(7.6)	0.9	7.4	木質部残存
206				6C	SK18	刀子	(9.7)	1.1	10.9	
207	137	61		5C	SD01	鎌	3.4	4.9	17.7	
208				6C	SD02	続鍔車	(1.5)	3.5	6.6	
209				6C	ST06	不明製品	(3.4)	1.8	7.1	
210				6C	ST06	釘	(7.0)	1.1	4.2	
211				6C	ST06	釘	(5.9)	0.7	8.4	木質部残存
212				6C	ST06	釘	(6.8)	1.1	12.1	木質部残存
213				6C	ST06	釘	(7.4)	1.4	12.8	木質部残存
214				6C	ST06	釘	(4.2)	1.3	3.6	
215				6C	ST06	釘	(3.4)	0.3	1.4	木質部残存

遺物番号	写真番号	区	遺構番号	種別	器種	法量 (cm)				色調		胎土	
						口径	底径	最大胴径	器高	外面	内面		
301	63	6C	SD03	須恵器	大甕	-	-	(78.5)	(79.5)	暗灰 N3/0	暗灰 N3/0	長石、輝石	
302		6C	SD03	須恵器	大甕	34.2	-	63.0	(73.0)	灰 N4/0	灰 N4/0	長石、輝石	
303		6C	SD03	須恵器	大甕	-	-	-	(34.8)	オリーブ黒 5Y3/1	黒褐 2.5Y3/1	白色粒、黒色粒	
304		6C	SD03	須恵器	甕	(26.3)	-	-	(42.4)	オリーブ黒 5Y3/2	黄灰 2.5Y4/1	白色粒、黒色粒	
305		6C	SD03	須恵器	甕	17.8	-	-	(46.3)	暗灰 N3/0	オリーブ黒 7.5Y3/2	白色粒、黒色粒、砂粒	
306		6C	SD03	須恵器	甕	18.6	-	(36.3)	(26.8)	褐 7.YR4/3	黒褐 10YR3/1	長石、白色粒、黒色粒	
307		6C	SD03	須恵器	甕	19.8	-	-	(34.5)	黄灰 2.5Y5/1	明黄褐 10YR6/6	石英、黒色粒 赤色酸化粒	
308	62	6C	SD01	土製品	製塙土器	-	-	-	(2.5)	にぶい橙 5YR7/4	橙 7.YR6/6	長石、輝石	
309		6C	SD01	土製品	製塙土器	-	-	-	(2.9)	にぶい黄 10YR7/4	にぶい黄 10YR7/4	長石、石英、角閃石	
310		6C	SD01	土製品	製塙土器	-	-	-	(3.7)	にぶい橙 5YR6/4	にぶい橙 5YR6/3	長石、石英、角閃石 赤色酸化粒	
311		6C	SD01	土製品	製塙土器	-	-	-	(6.8)	にぶい黄 10YR7/4	にぶい黄 2.5Y6/3	長石、角閃石 赤色酸化粒	
312		6C	SD02	土製品	製塙土器	-	-	-	(6.1)	橙 5YR6/6	にぶい橙 7.5YR6/3	長石、石英、輝石	
313		6C	SK02	土製品	製塙土器	-	-	-	(3.7)	灰黄 2.5Y7/2	にぶい黄 10YR7/4	長石、輝石 赤色酸化粒	

Tab.24 遺物観察表（土製品・写真のみ）-②

遺物番号	写真番号	区	遺構番号	種別	器種	法量 (cm)			重量 (g)	色調	胎土	備考	
						長	幅	孔径					
314	6C	SD01	土製品	土罐	7.1	1.9	0.7	21.6	にぶい黄橙 10YR5/4	長石、石英 赤色酸化粒			
315	6C	SD01	土製品	土罐	5.4	1.8	0.5	12.1	にぶい黄橙 10YR5/4	長石、輝石			
316	6C	SD01	土製品	土罐	5.5	1.8	0.5	14.2	明黄褐 10YR6/6	長石、輝石			
317	6C	SD02	土製品	土罐	6.1	1.8	0.6	19.9	にぶい黄橙 10YR5/4	長石、輝石			
318	6C	SD02	土製品	土罐	5.7	1.9	0.6~0.8	18.2	にぶい黄橙 10YR7/4	長石、輝石 赤色酸化粒			
319	6C	SD02	土製品	土罐	5.8	2.5	0.5	35.4	浅黄 2.5Y7/4	長石、輝石			
320	62	6C	SD02	土製品	土罐	5.7	1.7	0.6	15.4	にぶい黄 2.5Y6/3	長石、輝石		
321		6C	SD02	土製品	土罐	6.0	2.0	1.0	18.6	浅黄 2.5Y7/3	長石、輝石 赤色酸化粒		
322		6C	SD02	土製品	土罐	7.5	2.6	0.6	43.1	にぶい橙 7.YR5/4	長石、輝石 赤色酸化粒		
323		6C	SD02	土製品	土罐	5.9	2.1	0.6	17.5	黑 10YR2/1	長石		
324		6C	SD03	土製品	土罐	6.2	1.8	0.5	15.7	にぶい黄橙 10YR6/3	長石、角閃石 赤色酸化粒		
325		6C	SD03	土製品	土罐	6.7	1.8	0.6	19.1	にぶい黄 2.5Y6/4	長石、輝石		
326	6C	SD03	土製品	土罐	6.7	2.1	0.6	27.4	橙 7.YR5/3	長石、石英 輝石、角閃石			
327	6C	SD03	土製品	土罐	4.8	1.4	0.4	8.8	にぶい橙 7.YR5/3	長石、赤色酸化粒			

Tab.23 遺物観察表（写真のみ）—①

調整				備考	遺物番号
外器面	内器面	外底面	内底面		
横ナデ、ハケメ 3条沈線文 平行文タタキ後ナデ消し	横ナデ、同心円文当與痕 平行文当與痕	—	—		301
横ナデ、波状文1条 格子目文タタキ	横ナデ、同心円文当與痕 平行文当與痕	—	—	横円を呈する 沈線による波状文	302
横ナデ、波状文2条 格子目文タタキ	横ナデ 同心円文当與痕	—	—	板状工具による波状文	303
横ナデ、格子目文タタキ	横ナデ	—	—		304
横ナデ、平行文タタキ	横ナデ、同心円文当與痕 平行文当與痕	—	—		305
横ナデ、格子目文タタキ	横ナデ、同心円文当與痕 平行文当與痕、ナデ	—	—	外面自然釉	306
横ナデ、平行文タタキ	横ナデ、同心円文当與痕 平行文当與痕	—	—	口縁1条沈線	307
ナデ	ナデ	—	—		308
ナデ、指頭圧痕	ケズリ、ナデ 指頭圧痕	—	—		309
ナデ	ケズリ、ナデ 指頭圧痕	—	—		310
ナデ	ケズリ、ナデ 指頭圧痕	—	—		311
ナデ	ナデ、指頭圧痕	—	—		312
ナデ	ナデ	—	—		313

Tab.25 遺物観察表（瓦・写真のみ）—③

測定番号	写真番号	区	遺構番号	器種	法量 (cm)			色調		胎土	調整		備考
					長	幅	厚	凹面	凸面		凹面	凸面	
328		SD	S102	平瓦	(9.5)	(8.7)	2.4	灰黄 2.5Y7/2	にぶい黄 10YR7/2	長石、輝石 赤色酸化粒	布目痕 ケズリ	綿目痕	
329		6C	SD01	平瓦	(8.0)	(6.9)	1.5	灰黄 2.5Y6/2	灰黄 2.5Y6/2	長石、輝石 赤色酸化粒	布目痕	綿目痕	
330	62	6C	SD03	平瓦	(4.9)	(5.3)	2.1	灰黄 2.5Y6/2	にぶい黄 2.5Y6/3	長石、石英 輝石、角閃石	布目痕	綿目痕	
331		6C	SD02	平瓦	(8.1)	(6.8)	1.8	灰5Y6/1	灰 2.5Y6/2	長石、石英 角閃石	布目痕	ナデ	
332		7C	ST01	平瓦	(7.9)	(8.1)	2.2	灰黄 2.5Y6/2	灰黄 2.5Y6/2	長石、輝石	布目痕	綿目痕	

第5章 自然科学分析調査報告

熊本市新屋敷遺跡出土の古代・近世人骨

松下真実*・松下孝幸**

【キーワード】：熊本県、古代人骨、近世人骨、土壌墓、保存不良、長頭型、高身長、低身長

はじめに

熊本市中心区新屋敷1丁目に所在する新屋敷遺跡の発掘調査が白川の拡幅工事に伴っておこなわれ、2011（平成23）年度と2012（平成24）年度に人骨が出土した。2011年度では6C区から古代に属する人骨が6体とE区から近世人骨が1体出土した。2012年度には古代に属する人骨が3体出土した。

本遺跡からは2009（平成21）年度の発掘調査でも8世紀から9世紀頃の古代に属する人骨（男性）が1体出土している。この男性は、この時代としてはきわめて珍しい超短頭型（頭蓋長幅示数:95.03）であった。また上腕骨は太く、脛骨は扁平で、大腿骨は細いが、骨体中央断面示数が126.09と、繩文人みなみの示数値を示し、柱状性が認められ、推定身長値は165.34cmと、高身長であった（松下・他、2013）。このような特徴は本例の他に二本木遺跡群（さつま荘跡）出土の古代人にもみられた。

新幹線工事と熊本駅周辺整備事業に伴う発掘調査によって、熊本市の二本木遺跡群からは古代と中世に属する古人骨の出土例が増加している。2003（平成15）年度に熊本市教育委員会が調査をおこなった二本木遺跡群第18次調査区から古代に属する人骨が1体出土した（松下、2005）。この人骨は溝から出土した四肢骨の骨片にすぎなかった。2006（平成18）年度におこなわれた第28次調査区においても古代末の人骨が2体出土したが、これは大腿骨片と歯のみであった（松下・他、2008）。熊本市教育委員会が2006（平成18）年度に実施した二本木遺跡群（合同庁舎跡）の調査でも12世紀初頭の人骨が1体出土しており、2008（平成20）年度の二本木遺跡群（市電敷地）における発掘調査では10世紀代の人骨が3体出土した（松下真実・他、2012a、2012b）。また、2008年度の二本木遺跡群（さつま荘跡）における発掘調査でも10世紀代の人骨が1体検出されているが、この人骨は古代人骨としては珍しく保存状態が良好で、特筆すべきは、この男性被葬者の推定身長が164.97cm（Pearson式）の高身長であること、大腿骨には繩文前期人みなみの柱状性（骨体中央断面示数125.93〔右〕、145.83〔左〕）が認められたことである（松下・他、2012b）。古代人骨の保存状態は一般的に悪いものが多く、形質所見を明らかにできるものはきわめて少ないので、このような特徴が古代人の普遍的な時代的特徴であるのかはまだ明確ではない。

2009（平成21）年度におこなわれた二本木遺跡群春日地区第11次調査区の発掘調査では、1区から2体、3区からは1体の古代人骨が出土しており、2010（平成22）年度には二本木遺跡群春日地区第13次調査区4区からも古代の人骨が1体出土している。

2008（平成20）年度におこなわれた二本木遺跡群第40次調査区F地点からは、頭を甕に入れ、おそらくは両足も左右別々に甕に入っていたものと推測される、10世紀末～11世紀に属する人骨が出土している。また、同じ年度に二本木遺跡群第41次調査区からは11世紀頃の古代末に属する人骨が1体出土している。この人骨は長頭型であり、低顎で、歯槽性突頭を示す男性骨であった（松下・他、2011）。2009（平成21）年度におこなわれた第49次調査区からも10世紀半ばから11世紀前半頃の古代人骨が2体出土しており（松下・他、2012a）、同年度に実施された二本木遺跡群第50次調査区からも10世紀半ばから11世紀前半の古代に属する人骨2体が出土している。

その他に、2005（平成17）年度には、大江遺跡群第97次調査区から9世紀後半の男性人骨（松下、



図1. 遺跡の位置 (1/25,000)
 (Fig.1 Location of the 6 C area, Shinyashiki site, Kumamoto City, Kumamoto Prefecture)

2007b) が、古町遺跡第5次調査区では 10世紀初頭に属する男性人骨が多く埋葬品(土師器など)を伴って出土したが、ともに保存状態は著しく悪いものであった(2007a)。また、大江(学苑)遺跡群(松下、2006)と江津湖遺跡群では平安時代の火葬骨が出土している。

今回出土した人骨の保存状態は悪いものであったが、現場で観察をおこない、性別などを推測することができたので、その結果を報告しておきたい。

資料

本遺跡から検出されたのは9体の古代人骨と1体の近世人骨の合計10体である。人骨はすべて墓坑内から検出することができたが、見た目ほど保存状態はよくない。9体はいずれも成人骨で、そのうち6体は男性骨と思われるが、残りの3体は性別不明である(表1)。各人骨の性別、年齢、頭位などは表2のとおりである。なお、年齢区分を表3に示した。

このうち6体(ST01～ST06)は8～9世紀に造られたとみられる溝の中(埋土)から出土した。溝がある程度埋まった時に造墓されたものと思われる。また3体(ST09～ST11)はこの溝の縁から出土した。9体の人骨は、考古学的所見から、8世紀から9世紀頃に属する人骨で、残り1体(5E区ST01)は近世人骨と推測されている。

計測方法は、Martin-Saller(1957)によった。

表1 資料数 (Table 1. Number of materials)

	成 人			幼小兒	合 計
	男 性	女 性	不 明		
古代人骨	6	0	3	0	9
近世人骨	0	0	1	0	1
合 計	6	0	4	0	10

表2 出土人骨一覧 (Table 2. List of skeletons)

人骨番号	性別	年齢	頭位	埋葬姿勢	発掘年度	備考
< 6C 区 >						
ST01	男性	老年	北	仰臥	2011 年	古代
ST02	不明	不明	不明	不明	2011 年	古代、骨片
ST03	不明	不明	北西	仰臥	2011 年	古代
ST04	男性	壯年	南西	仰臥	2011 年	古代
ST05	不明	不明	不明	不明	2011 年	古代、下顎骨のみ
ST06	男性	不明	北	仰臥	2011 年	古代
ST09	男性	不明	東	仰臥	2012 年	古代、鉄製品 1 点
ST10	男性	不明	北西	仰臥	2012 年	古代
ST11	男性	不明	北	仰臥	2012 年	古代、鉄製品 1 点
< 5E 区 >						
ST01	不明	不明		不明	2011 年	近世

表3 年齢区分 (Table 3. Division of age)

年齢区分	年 齡
未成人	乳児 1歳未満
	幼児 1歳～5歳（第一大臼歯萌出直前まで）
	小児 6歳～15歳（第一大臼歯萌出から第二大臼歯歯根完成まで）
成人	成年 16歳～20歳（蝶後頭軟骨結合癒合まで）
	壯年 21歳～39歳（40歳未満）
	老年 60歳以上

注) 成年という用語については土井ヶ浜遺跡第14次発掘調査報告書(1996)を参照されたい。

所 見

I 6C区

ST01 人骨 (男性・老年)

埋葬構造は土壇墓。埋葬姿勢は仰臥。頭位は北。残存していたのは、頭蓋、上部頸椎、右側鎖骨、右側肩甲骨、右側上腕骨のみである。下半身、左側上肢は、発掘調査時に人骨に気がつかずレンチ掘削によって取り扱われたものと思われる。前腕の骨と下肢骨が残存していないので、肘関節、膝関節の様態は不明である。

頭蓋の保存状態は比較的良好であるが、頭蓋内に土が充填しているためにかろうじて形を保っているので、頭蓋内の土を取り除くことができない。外後頭隆起はやや発達している。三主縫合の外板は癒合している。おそらく内板も癒合閉鎖しているものと思われる。左側外耳道観察ができたが、骨腫は存在しない。頭蓋の径は大きい。頭蓋は観察によれば長頭型に傾いていた。下顎骨の径は大きく、下顎枝はかなり幅広く、高さは低い。

上下両顎には歯が釘植していた。残存歯と歯槽の状態を歯式で示すと、次のとおりである。

／＼＼＼＼＼＼＼＼	／＼ 3 4 5 6 7 ⑧
⑧ 7 6 5 4 3 2 1	① ② ／＼＼＼＼ ⑧

(●:歯槽閉鎖 ○:歯槽開存 □:不明 △:先天性欠損 番号は歯種)

[1:中切歯、2:側切歯、3:犬歯、4:第一小白歯、5:第二小白歯、6:第一大臼歯、7:第二大臼歯、8:第三大臼歯]

咬耗度は Broca の2度(咬耗が部分的に象牙質まで及ぶ)～3度(咬耗が象牙質まで及ぶ)で、咬耗はかなり強い。

頭蓋と下顎骨の径が大きいことから、性別は男性と推定される。年齢は、三主縫合の外板が癒合していることから、老年と推定した。副葬品はない。

ST02 人骨 (性別・年齢不明)

ST01の西側から検出された人骨で、脛骨体と腓骨体のごく一部と見られる骨片が残存していたにすぎない。性別、年齢は不明であるが、成人骨である。もしこの骨が脛骨体と腓骨体の一部であれば、埋葬状態を保っていたものと考えられるので、頭位は南になる。

ST03 人骨（性別・年齢不明）

埋葬遺構は土壇墓。埋葬姿勢は仰臥。頭位は北西。上半身のみが残存していた。残存していたのは、頭蓋、左右の上腕骨である。左側の上腕骨の位置が不自然なので、左側は攪乱を受けたようである。頭蓋は左側半分が残存していたが、保存状態はきわめて悪く、頭型と顔面の特徴は不明である。

上下両顎には歯が釘植していた。残存歯と歯槽の状態を歯式で示すと、次のとおりである。

8 7 6 5 4 3 2 /	/ 2 3 4 5 / 7 /
8 ⑦ ⑥ 5 4 3 2 1	1 2 3 4 5 ⑥ ⑦ 8

〔●：歯槽閉鎖 ○：歯槽開存 /：不明 ▽：先天性欠損、番号は歯種〕

〔1：中切歯、2：側切歯、3：犬歯、4：第一小白歯、5：第二小白歯、6：第一大臼歯、7：第二大臼歯、8：第三大臼歯〕

咬耗度は Broca の2度（咬耗が部分的に象牙質まで及ぶ）である。

性別、年齢は不明である。副葬品はない。

ST04 人骨（男性・壮年）

埋葬遺構は土壇墓。埋葬姿勢は仰臥。頭位は南西。肘関節と膝関節は左右とも伸展状態である。ほぼ全身の骨が残存していた。左側の尺骨は、現場では確認できなかったが、本来残存していたものと思われる。また、腓骨も確認できなかった。残存していたのは、頭蓋、鎖骨（左右）、肩甲骨（左右）、上腕骨（左右）、桡骨（左右）、尺骨（右）、寛骨（左右）、大腿骨（左右）、脛骨（左右）、足の骨、肋骨、椎骨であるが、足の骨、椎骨、肋骨はほとんど骨粉状であった。

頭蓋壁はやや厚い。三主縫合は内外両板とも開離している。眉上弓の降起はやや強く、頭型は長頭型であるが、歯槽性突窓は認められない。前眼窓間幅は 17 mm、鼻根横弧長は 20 mm、鼻根彎曲示数は 85.00 となり、鼻根部は扁平であるが、鼻骨最小幅は 7 mm で、鼻骨は狭い。

上下両顎には歯が釘植していた。残存歯と歯槽の状態を歯式で示すと、次のとおりである。

/ 7 6 5 4 3 2 1	1 2 3 ④ ⑤ 6 7 ⑧
⑧ ⑦ ⑥ 5 4 3 2 ①	① 2 3 4 ⑤ 6 7 ⑧

〔●：歯槽閉鎖 ○：歯槽開存 /：不明 ▽：先天性欠損、番号は歯種〕

〔1：中切歯、2：側切歯、3：犬歯、4：第一小白歯、5：第二小白歯、6：第一大臼歯、7：第二大臼歯、8：第三大臼歯〕

咬耗度は Broca の2度（咬耗が部分的に象牙質まで及ぶ）～3度（咬耗が象牙質まで及ぶ）で、咬耗はやや強い。

大腿骨の径はやや大きく、現場で計測した左側大腿骨の最大長は 423 mm あり、長さは長い。なお、大腿骨から算出した推定身長値は 160.83 cm（Pearson 式）で、身長はやや高い。

性別を大腿骨体の径が大きいことから男性と推定した。年齢は、三主縫合の内外両板がまだ開離していることから壮年と思われる。

ST05 人骨（性別・年齢不明）

ST04 の南から検出された。下頸骨のみである。下頸骨はほとんど骨粉状で、歯が存在することから、かろうじて下頸骨と判断できる程度の残存状態である。埋葬姿勢や性別、年齢などは不明である。

下頸骨には歯が釘植していた。残存歯と歯槽の状態を歯式で示すと、次のとおりである。

/ 7 6 5 4 3 //	// 3 4 5 // 8
----------------	---------------

〔●:歯槽閉鎖 ○:歯槽開存 ／:不明 ▽:先天性欠損、番号は歯種〕
 [1:中切歯、2:側切歯、3:犬歯、4:第一小白歯、5:第二小白歯、6:第一大臼歯、7:第二大臼歯、8:第三大臼歯]
 咬耗度は Broca の 1 度（咬耗がエナメル質のみ）で、咬耗は弱い。

ST06 人骨（男性・年齢不明）

埋葬遺構は土壇墓と思われる。埋葬姿勢は仰臥。頭位は北。左側肘関節は前腕骨が残存していないので、不明であるが、右側は伸展状態である。左側膝関節は伸展状態であるが、右側は約 100 度に曲げていた。残存していたのは頭蓋、鎖骨（右）、肩甲骨（左右）、上腕骨（左右）、橈骨（右）、尺骨（右）、寛骨（左右）、大腿骨（左右）、脛骨（左右）、椎骨である。なお、橈骨、尺骨、椎骨、鎖骨は骨粉状態であった。

頭蓋は土圧で潰れており、保存状態は著しく悪かったが、径は大きい。顔面頭蓋は残存していなかった。
 上下両顎には歯が釘植していた。残存歯と歯槽の状態を歯式で示すと、次のとおりである。

/ 7 6 5 4 3 //	1 2 3 4 5 6 7 /
//////// 4 3 2 1	① 2 3 4 5 6 7 ⑧

〔●:歯槽閉鎖 ○:歯槽開存 ／:不明 ▽:先天性欠損、番号は歯種〕
 [1:中切歯、2:側切歯、3:犬歯、4:第一小白歯、5:第二小白歯、6:第一大臼歯、7:第二大臼歯、8:第三大臼歯]
 咬耗度は Broca の 1 度（咬耗がエナメル質のみ）で、咬耗は弱い。

大腿骨体の径はそれほど大きくない。右側の最大長を現場で計測することができた。大腿骨最大長は 370 mm（右）で、長さは短い。大腿骨最大長から算出した推定身長値は 150.87 cm（Pearson 式）で、著しい低身長である。

性別は頭蓋の径が大きいことから男性と推定したが、年齢は不明である。

なお、頭蓋の北側や墓坑のへり周辺からは多数の鉄釘等（Fig.137 210～215）が検出されている。

ST09 人骨（男性・年齢不明）

埋葬遺構は土壇墓。埋葬姿勢は仰臥。頭位は南東。残存していたのは、頭蓋、鎖骨（右）、上腕骨（左右）、前腕の骨（左右）、大腿骨（左右）、脛骨（左）である。左側の脛骨はトレント掘削時に切られしており残存していない。肘関節、膝関節はともに伸展状態である。

脳頭蓋は破損しており、頭型は不明である。顔面頭蓋は観察と計測が一部可能であった。眉上弓の隆起はやや強く、鼻根部は扁平ではない。顔高は計測できないが、上顎高は 66 mm で、高径は低い。頬骨弓幅と中顎幅も計測できないが、観察によれば顎の幅径はやや広いようである。眼窩幅は 40 mm（左）、眼窓高は 33 mm（左）で、眼窓示数は 82.50（左）となり、左側は mesokonch（中眼窓）に属している。

鼻根部の計測値は、前眼窓間幅が 18 mm、鼻根横弧長は 22 mm、鼻根彎曲示数は 81.82 となり、鼻根部は扁平ではない。また、歯槽側面角は計測できないが、観察したところ歯槽性突頸傾向がうかがえる。

上下両顎には歯が釘植していた。残存歯と歯槽の状態を歯式で示すと、次のとおりである。

//////// 3 2 1	1 2 // 4 5 // //
⑥ ⑦ 6 5 4 3 2 1	1 2 3 4 5 6 //

〔●:歯槽閉鎖 ○:歯槽開存 ／:不明 ▽:先天性欠損、番号は歯種〕
 [1:中切歯、2:側切歯、3:犬歯、4:第一小白歯、5:第二小白歯、6:第一大臼歯、7:第二大臼歯、8:第三大臼歯]
 咬耗度は Broca の 2 度（咬耗が部分的に象牙質まで及ぶ）で、咬耗はやや強い。

大腿骨は両側とも取り上げて、復元ができた。骨体は大きいものではなく、粗線は突出しているが骨体は

横径の方が矢状径よりも大きい。

計測は右側のみが可能であった。骨体中央矢状径は 25 mm (右)、横径は 27 mm (右) で、骨体中央断面示数は 92.59 (右) となり、矢状径よりも横径の方が大きく、柱状性は認められない。骨体中央周は 82 mm (右) で、骨体はやや細い。

眉上弓の隆起がやや強いことから性別を男性と推定したが、年齢は不明である。

なお、からだの右側から鉄製品 (Fig.137 204) が 1 点出土している。

ST10 (男性・年齢不明)

埋葬遺構は土壙墓。埋葬姿勢は仰臥。頭位は北西。残存していたのは、頭蓋、肩甲骨 (左)、上腕骨 (左右)、大腿骨 (左右)、脛骨 (左)、腓骨 (左右)、胸椎である。肩甲骨と胸椎は骨粉状態であった。肘関節の様態は前腕の骨が残存していないので、不明である。膝関節は両側とも伸展状態であった。

頭蓋は土圧で変形しており、頭型は不明である。眉上弓から眉間にかけて強く隆起しており、乳様突起も大きい。顔面の保存状態は悪いが、観察によれば鼻根部は狭く、扁平ではない。また、下顎骨は大きく、下顎枝は幅広い。

上下両顎には歯が釘植していた。残存歯を歯式で示すと、次のとおりである。

/ / / / / / /	/ / / 4 / 6 7 /
5 4 3 2 /	/ 2 3 4 5 6 7 /

〔●:歯槽閉鎖 ○:歯槽開存 /:不明 ▽:先天性欠損、番号は歯種〕

〔1:中切歯、2:側切歯、3:犬歯、4:第一小白歯、5:第二小白歯、6:第一大臼歯、7:第二大臼歯、8:第三大臼歯〕

咬耗度は Broca の 3 度 (咬耗が象牙質まで及ぶ) で、咬耗がかなり強い。

上腕骨体、大腿骨体は保存状態が悪く、取り上げることが困難であったが、観察によれば、これらの骨体の径は大きい。

上腕骨体、大腿骨体がともに太いことから性別を男性と推定したが、年齢は不明である。

副葬品は存在しない。

ST11 (男性・年齢不明)

埋葬遺構は土壙墓。埋葬姿勢は仰臥。頭位は北。残存していたのは、頭蓋、鎖骨 (左)、肋骨、上腕骨体 (右)、前腕の骨 (右)、大腿骨体 (右)、脛骨体 (左右)、腓骨体 (左右) である。左側の上肢骨は残存していない。右側肘関節は伸展状態であるが、膝関節は両側とも強屈状態で左側に倒れていた。

頭蓋の保存状態は著しく悪く、頭型も顔面の形態も不明である。上顎骨歯槽部と下顎骨はかろうじて保存されていた。

上下両顎には歯が釘植していた。残存歯と歯槽の状態を歯式で示すと、次のとおりである。

／ 7 6 5 4 3 2 1	1 2 / 4 5 6 7 8
8 7 6 5 4 3 2 1	1 2 3 4 5 6 7 /

〔●:歯槽閉鎖 ○:歯槽開存 /:不明 ▽:先天性欠損、番号は歯種〕

〔1:中切歯、2:側切歯、3:犬歯、4:第一小白歯、5:第二小白歯、6:第一大臼歯、7:第二大臼歯、8:第三大臼歯〕

咬耗度は Broca の 3 度 (咬耗が象牙質まで及ぶ) で、歯の咬耗はかなり強い。また、上顎中切歯はダブルシャベルを呈しており、これほど明瞭なものは珍しい。

下顎骨は大きく、下顎枝は幅広い。四肢骨の保存状態は悪く、その特徴も不明である。

下顎骨が大きいことから性別を男性と推定したが、年齢は不明である。

なお、からだの右側から鉄製品（Fig.137 205）が1点出土した。

II 5E区

ST01 人骨（性別・年齢不明）

埋葬遺構は土塙墓。埋葬姿勢は判然としないが、頭位は東である。残存していたのは、頭蓋、上腕骨、橈骨、尺骨である。

1. 頭蓋

左側の側頭骨と左側の頭頂骨、下顎骨が残存していたにすぎない。頭蓋壁はかなり薄く、側頭骨は小さい。下顎骨の高径はやや高く、下顎体は堅牢である。

下顎骨には歯が釘植していた。残存歯と歯槽の状態を歯式で示すと、次のとおりである。

/ 7 6 5 4 3 2 1		1 2 / 4 5 / 7 /
▽ 7 6 5 4 3 2 1		/ / / / / /

／：不明 ▽：先天性欠損、番号は歯種）

[1:中切歯、2:側切歯、3:犬歯、4:第一小臼歯、5:第二小臼歯、6:第一大臼歯、7:第二大臼歯、8:第三大臼歯]

咬耗度は Broca の1度（咬耗がエナメル質のみ）で、咬耗は弱い。また、歯の咬合形式は不明である。

2. 四肢骨

（1）上肢骨

①上腕骨

両側の骨体が残存していたが、保存状態は悪く、計測や三角筋祖面の様態の観察はできない。観察によれば、骨体の径は小さいものではない。

②橈骨

両側の骨体が残存していた。骨体の径は小さく、骨間縁の発達も悪い。

③尺骨

右側の近位端が残存していた。径は小さい。

3. 性別・年齢

本例は性別の推測が困難であった、頭蓋壁は著しく薄く、側頭骨の径は小さく、橈骨と尺骨の径も小さい。これらは女性的である。しかし下顎骨は堅牢で、頭頂骨や側頭骨と同一個体か疑義を抱くほどその差が大きい。また上腕骨体の矢状径はやや大きく、これらは男性的である。いずれにしても決定する根拠に欠けるので、性別は不明としておきたい。また、縫合の観察ができなかったので、年齢についても不明としておきたいが、下顎骨が堅牢であることや歯の咬耗がかなり弱いことから、年齢は比較的若かったことが予想される。

考 察

計測が可能であった大腿骨について、熊本県内の古代人骨と比較してみた。また、全国的にも古代人骨の例数が少ないので、比較資料もほとんどないが、参考までに山口県萩市の見島にあるジーコンボ古墳群出土の例と比較してみた。

表4は男性大腿骨の比較表である。ST09の骨体中央周は82 mmであるが、この値は新屋敷ST01と同じ計測値で、表4では最小値を示しており、大腿骨体は細い。表4をみてみると、大腿骨の大きさから3つのグループに分けることができる。1つ目は二本木（さつま莊跡）で、中央周の値が突出して大きい。2つ目は中央周が86～87 mmの二本木50次、二本木（合同府合跡）で、3つめは82～83 mmの新屋敷ST09とST01、ジーコンボ古墳群である。本例は大腿骨の径がもっとも小さい3番目のグループに属していることがわかる。

ST09の骨体中央断面示数は92.59で、この示数値は表4中でもっとも小さく、本大腿骨には粗線や骨体両側面の後方への発達は認められない。

表4 大腿骨計測値（男性、右、mm）(Table 4. Comparison of measurements and indices of male right femora)

	新屋敷	新屋敷	二本木50次	二本木41次	二本木 (合跡・合跡)	二本木 (さつま莊跡)		ジーコンボ古墳群	
	古代	古代	古代人	古代人	古代人	古代人		古代人	
	熊本県	熊本県	熊本県	熊本県	熊本県	熊本県		山口県	
	熊本市	熊本市	熊本市	熊本市	熊本市	熊本市		萩市	
	(松下・他)	(松下・他)	(松下・他)	(松下・他)	(松下・他)	(松下・他)		(松下・他)	
	ST09	ST01	ST180	1号	S 040	S 003	16号埴	72号埴	155号埴A
6. 骨体中央矢状径	25	29	28	-	28	34	-	26(左)	28
7. 骨体中央横径	27	23	26	-	27	27	-	27(左)	25
8. 骨体中央周	82	82	86	-	87	98	-	83(左)	83
9. 骨体上横径	-	30	33	30(左)	31	-	31(左)	29	28
10. 骨体上矢状径	-	21	24	22(左)	24	-	24(左)	21	24
6/7 骨体中央断面示数	92.59	126.09	107.69	-	103.70(左)	125.93	-	96.30(左)	112.00
10/9 上骨体断面示数	-	70.00	72.73	73.33(左)	77.42(左)	-	77.42(左)	72.41	85.71

要 約

熊本中央区新屋敷1丁目にある新屋敷遺跡6C区の発掘調査が2011（平成23）年度と2012（平成24）年度におこなわれ、古代人骨が9体出土した。また2011（平成23）年度には近世人骨が1体出土した。人骨の保存状態は悪かったが、人類学的観察などによって性別などを推測することができた。その結果は次のとおりである。

1. 古代人骨のうち埋葬状態を保った状態で検出されたのは7体で、2体は人骨の一部が検出されたにすぎない。7体の埋葬遺構は土壙墓で、埋葬姿勢は7体とも仰臥である。肘関節の屈伸状態がわかる4体(ST04,06,09,10)は、肘関節をほぼ伸展した状態で検出された。膝関節の様態がわかるものは5体で、4体(ST04,06,09,10)は伸展していたが、1体(ST11)は強屈していた。北に頭位があるものが4体(ST01,06,09,11)、北西が2体(ST03,10)、南が1体(ST02)、南西が1体(ST04)であった。
2. 近世人骨(5E区ST01)の埋葬姿勢は不明である。
3. 9体は8世紀から9世紀頃に、1体(5E区ST01)は近世に属する人骨と推測されている。
4. 9体の古代人骨はすべて成人骨で、6体は男性骨であるが、残りの3体は性別不明である。1体の近世

人骨も成人骨であるが、保存状態が著しく悪く、性別を明らかにすることはできなかった。

5. 今回出土した古代人骨の保存状態は著しく悪く、頭蓋の計測はできなかったが、頭型の観察ができた2体（ST01,04）は長頭型であった。顔面の特徴の一部が判明したのは1例（ST09）のみで、この例は上顎高が66mmと、顔の高さは低く、額幅が広く、鼻根部は扁平ではなかったが、歯槽性突顎の傾向が認められた。他に上顎骨歯槽突起の観察ができるものが1例（ST04）あったが、歯槽性突顎の傾向は認められなかった。
6. 齒の咬耗は強いもの（ST01,04）と弱いもの（ST05,06,09,10,11）とが存在する。また、1例（ST11）の上顎中切歯に明瞭なダブルシャベルがみられた。
7. 大腿骨は骨体が大きそうなもの（ST10）とやや細いもの（ST09）とが認められた。
8. 現場で大腿骨の最大長を計測できるものが2例あった。1例（ST04）は423mm（左）、もう1例（ST06）は370mm（右）で、長いものと短いものとがみられた。
9. 現場で計測した大腿骨最大長から推定身長値を算出することができるものが2例あった。1例（ST04）は160.83cm（Pearson式）で、わずかに高身長、もう1例（ST06）は150.87cm（Pearson式）で、低身長であった。
10. 今回出土した9体の古代人骨の保存状態は著しく悪いものであった。頭型は、推測できた2体は長頭型であった。1例のみ顔面の特徴の一部がわかった。この1例は低・広顔で、鼻根部は扁平ではないが、歯槽性突顎の傾向が認められた。大腿骨は長いものと短いものとが、また骨体が太いものと細いものとが混在しており、新屋敷古代人の特徴を特定することができない。二本木遺跡群からは多数の古代人骨が出土しているので、今後、これらを含めて検討してみたい。

謝辞

『掘筆するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた熊本県文化課の皆様に感謝致します。』

参考文献

1. Martin-Saller, 1957 : Lehrbuch der Anthropologie. Bd. I. Gustav Fischer Verlag. Stuttgart : 429-597.
2. 松下孝幸・他、1983：山口県萩市見島ジーコンボ古墳群出土の平安時代人骨。見島ジーコンボ古墳群（山口県埋蔵文化財調査報告73）: 32-36。
3. 松下孝幸・他、1984：防府市周防国府跡出土の平安時代人骨。防府市文化財調査年報VI : 535-544。
4. 松下孝幸、1985a：山口県見島ジーコンボ古墳群出土の人骨－山口大学埋蔵文化財資料館所蔵の資料－。山口大学構内遺跡調査研究年報IV : 83-90。
5. 松下孝幸、2005c：熊本市二本木遺跡群第18次調査出土の古代・近世人骨。二本木遺跡群I－第18次調査区発掘調査報告書－: 41-46。
6. 松下孝幸、2006：熊本市大江（学苑）遺跡群出土の平安時代火葬骨。大江遺跡群II（熊本県文化財調査報告第231集）: 80-84。
7. 松下孝幸、2007a：熊本市古町遺跡第5次調査区出土の平安時代人骨。熊本市埋蔵文化財調査年報第9号 : 148-152。
8. 松下孝幸、2007b：熊本市大江遺跡群第97次調査区出土の平安時代人骨。大江遺跡群VI－第97次・第106次調査区発掘報告書－: 114-117。
9. 松下孝幸・他、2008：熊本市二本木遺跡群第28次調査区出土の古代・中世以降人骨。二本木遺跡群V－二本木遺跡群第28次調査区（E-I・K・L・P地点）発掘調査報告書－熊本駅西地区画整理事業にともなう発掘調査報告（2）: 178-183。
10. 松下孝幸・他、2011：熊本市二本木遺跡群第41次調査区出土の古代人骨。二本木遺跡群XII－二本木遺跡群第41次調査

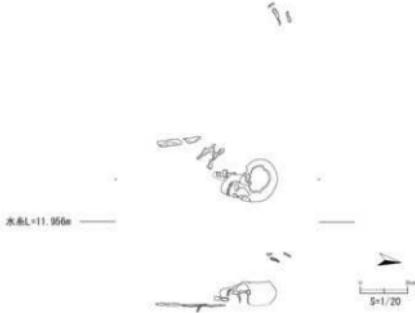
区発掘調査報告書－：127-135。

11. 松下孝幸・他、2010：熊本市二本木遺跡群 40 次調査区 F 地点出土の古代・中世人骨。二本木遺跡群 X 1－二本木遺跡群第 32 次調査区（B・O 地点）・第 40 次調査区（F・G・J・L 地点）発掘調査報告書－熊本駅西土地区面整理事業にもなる発掘調査報告（5）：197-201。
12. 松下孝幸・他、2012a：熊本市二本木遺跡群第 49 次調査区出土の古代・近世人骨。二本木遺跡群 19－二本木遺跡群第 49 次調査区発掘調査報告書－（熊本市の文化財第 19 集）：77-84。
13. 松下孝幸・他、2012b：熊本市二本木遺跡群（さつま荘跡）出土の古代・中世人骨。二本木遺跡群（春日地区）6 第 9・10 次調査（熊本県文化財調査報告第 274 集）：424-435。
14. 松下孝幸・他、2013：熊本市新屋敷遺跡出土の古代人骨。新屋敷遺跡 2（熊本県文化財調査報告第 286 集）：140-154。
15. 松下孝幸・他、熊本市二本木遺跡群春日地区第 11 次調査区出土の古代・中世人骨。（投稿中）
16. 松下孝幸・他、熊本市二本木遺跡群春日地区第 11 次調査区 3 区出土の古代人骨。（投稿中）
17. 松下孝幸・他、熊本市二本木遺跡群春日地区第 13 次調査区 4 区出土の古代人骨。（投稿中）
18. 松下孝幸・他、熊本市二本木遺跡群（合同庁舎）出土の古代・中世人骨。（投稿中）
19. 松下真実・他、2012a：熊本市二本木遺跡群（市電敷地）出土の古代・中世人骨。二本木遺跡群（春日地区）6 第 9・10 次調査（熊本県文化財調査報告第 274 集）：411-423。
20. 松下真実・他、2012b：熊本市二本木遺跡群（市電敷地）出土の古代人骨。二本木遺跡群（春日地区）6 第 9・10 次調査（熊本県文化財調査報告第 274 集）：398-410。
21. 松下真実・他、2012c：二本木遺跡群（春日地区第 6 次調査）出土の古代人骨。二本木遺跡群（春日地区）5 第 6 次・第 14 次調査（熊本県文化財調査報告第 271 集）：140-152。
22. 松下真実・他、熊本市二本木遺跡群（田崎校区）出土の古代人骨。（投稿中）

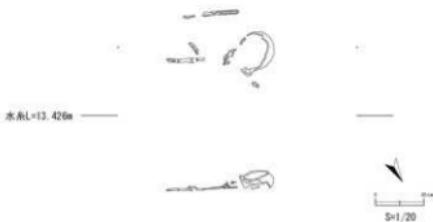
* Masami MATSUSHITA, ** Takayuki MATSUSHITA

（特定非営利活動法人人類学研究機構）

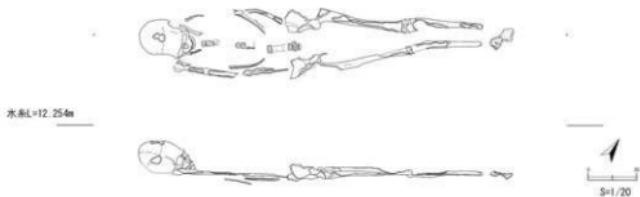
6C区 ST01



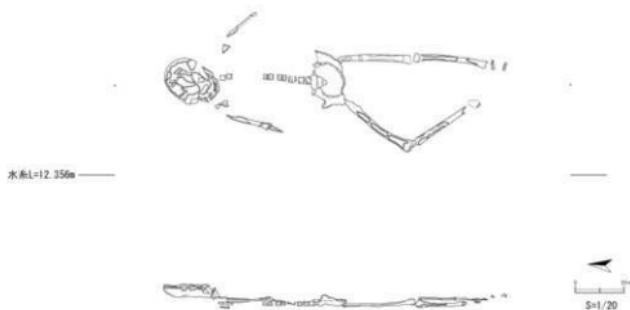
6C区 ST03



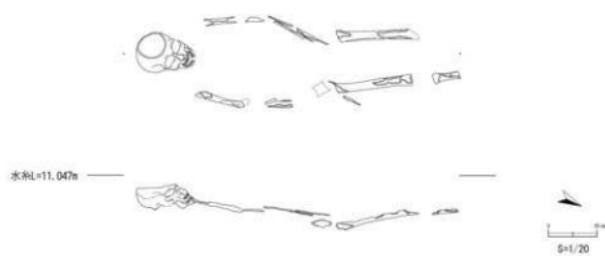
6C区 ST04



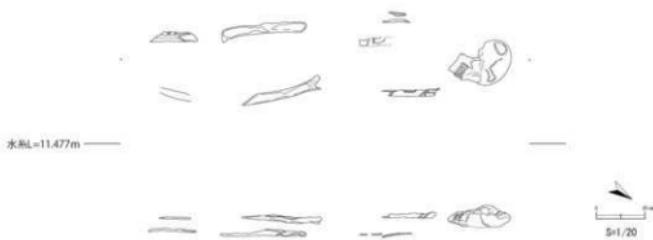
6C区 ST06



6C区 ST09



6C区 ST10



6C区 ST11



表5 顔面頭蓋(㎜、度)(Facial skeleton)

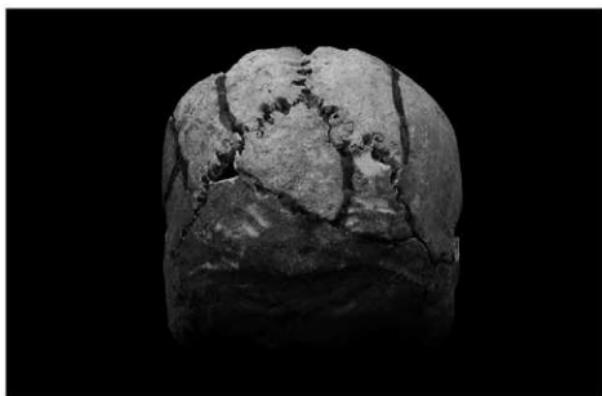
	新屋敷	新屋敷
	ST04	ST09
	男性	男性
40. 頬長	-	-
41. 側頬長	-	-
42. 下頬長	-	-
43. 上頬幅	-	-
45. 頬骨弓幅	-	-
46. 中頬幅	-	-
47. 頤高	-	-
48. 上頤高	-	66
47/45 頤示数(K)	-	-
48/45 上頤示数(K)	-	-
47/46 頤示数(V)	-	-
48/46 上頤示数(V)	-	-
40+45+47/3 頤面モルスス	-	-
50. 前眼窓間幅	17	17
44. 肉眼窓幅	-	-
50/44 眼窓間示数	-	-
51. 眼窓幅(右)	-	-
(左)	-	40
52. 眼窓高(右)	-	-
(左)	-	(33)
52/51 眼窓高示数(右)	-	-
(左)	-	(82.50)
54. 鼻幅	-	-
55. 鼻高	-	-
54/55 鼻示数	-	-
55 (1). 梨状口高	-	-
56. 鼻骨長	-	-
57. 鼻骨頭小幅	7	-
57 (1). 鼻骨最大幅	-	-
60. 上頬高横長	-	-
61. 上頬高横幅	-	-
62. 口蓋長	-	-
63. 口蓋幅	-	-
64. 口蓋高	-	-
61/60 上頬歯槽示数	-	-
63/62 口蓋示数	-	-
64/63 口蓋高示数	-	-
72. 全側面角	-	-
73. 鼻側面角	-	-
74. 齒槽側面角	-	-

表6 鼻根部(㎜、度)(Nasal root)

	新屋敷	新屋敷
	ST04	ST09
	男性	男性
50. 前眼窓間幅	17	17
50 A. 鼻根横弧長	20	22
50/50A 鼻根弯曲示数	85	81.82
57. 鼻骨最小幅	7	-
44. 肉眼窓幅	-	-
50/44 眼窓間示数	-	-
a. 前額突起上幅(右)	-	-
(左)	-	-
b. 前額突起水平傾斜角	-	-
c. G・N 投影距離	-	-
d. 鼻根角	-	-
e. G・R 距離	-	-
f. 重線高	-	-
f/e 鼻根間隙示数	-	-
Fa 鼻頸骨角	-	-
Fh fmo 間距離	-	-
Fh 重線高	-	-
Fh/Fa 頤面扁平示数	-	-

表7 大腿骨(㎜)(Femur)

	新屋敷
	ST09
	男性
1. 最大長	-
2. 自然位全長	-
3. 最大軸子長	-
4. 自然位軸子長	-
6. 骨体中央矢状径	25
7. 骨体中央横径	27
8. 骨体中央周	82
9. 骨体上横徑	-
10. 骨体上矢状径	-
15. 頚垂直径	-
16. 頚矢状径	-
17. 頚周	-
18. 頚垂直径	-
19. 頚橫徑	-
20. 頚周	-
21. 上頸幅	-
8/2 長厚示数	-
6/7 骨体中央断面示数	92.59
10/9 上骨体断面示数	-



頭蓋後面 (Rear view of the skull)

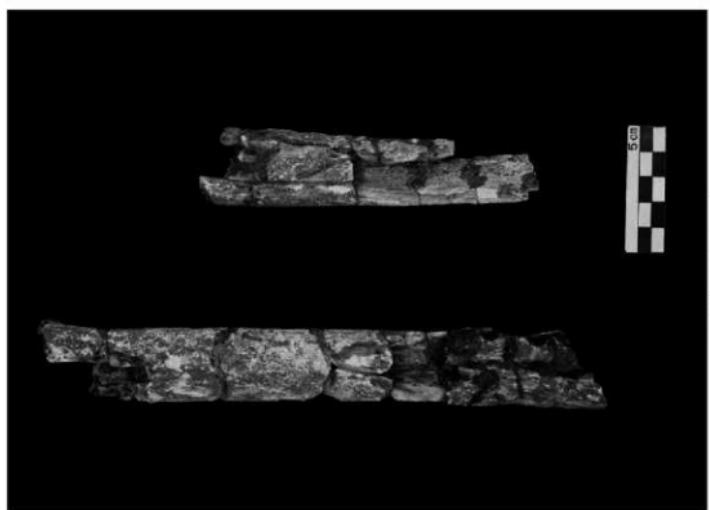


上顎骨 (The maxilla)



下顎骨 (The Mandibula)

新屋敷 6C ST04 (男性・壮年)
(The skeleton ST04 from the 6C area at the Shinyashiki site, young adult male)



大腿骨 (The femur)

新屋敷 6c ST09 (男性・年齢不明)

(The skeleton ST09 from the 6c area at the Shinyashiki site, male unknown age)



大腿骨 (The femur)

新屋敷 6c ST04 (男性・壮年)

(The skeleton ST04 from the 6c area at the Shinyashiki site, young adult male)

第6章　まとめ

1 繩文時代後期 (Fig.138)

8～12区において、縄文後期前半の辛川式から後期後半の三万田式及び晩期に位置づけられる古闕式土器を確認している。本地域における先行調査及び研究は、熊本市教育委員会により調査事例が積み重ねられている。当遺跡の北東に位置する子飼橋周辺では、縄文後期に丘陵上に形成された集落域が確認され、太郎追式土器を出土する遺構群を確認している。

当遺跡で縄文後期土器が出土した調査区は、明午橋に近い調査区である。10区及び11区北側を中心とする竪穴建物及び土坑を、8区、9区及び12区から土坑等を確認している。調査区間の比高差を比較すると竪穴建物を検出した地域が土坑のみ確認している地域と比べ高く、微高地状の高まりに位置していることから、当遺跡の縄文後期から晩期にかけての遺構を概観すると、微高地上の竪穴建物を中心に周辺に土坑群が広がる縄文集落遺跡であったと考えられる。

2 古代（奈良時代から平安時代）(Fig.139、141)

当遺跡に隣接し官衙の性格を有する遺構群を確認している大江遺跡群の存在を抜きにして、当遺跡の性格及び位置づけをすることはできない。両遺跡とも遺跡の年代は8世紀から9世紀前半期とほぼ同時期と想定され、検出した遺構の種類には大小、多寡あるが、同様の遺構が確認されている。

大江遺跡群は、西海道の一部である古代官道とそこから二本木国府への分岐にあたる八街が想定されるなど古代の遺跡の中でも重要地点上にあり、遺構の密度等を勘案すると、大江遺跡群に形成された集落域の縁辺部にあたるものと考えられる。

当遺跡の6C区溝SD02及びSD03から出土した須恵器大甕は、集落に伴う貯蔵器としての遺物と考えられる。溝から一括して出土していることは集落の廃絶に伴う廃棄とともにされるが、本事例のみでは詳細は分からなかった。大甕でありながらも規格性があるので同一産地からの搬入品であろう。同遺構からは、他にも土器師甕及び杯、須恵器で鉄鉢模倣土器が出土しているため、寺院に関係する資料の可能性も捨てきれない。当遺跡では寺院に関する遺構ととらえることのできる遺構は検出しておらず、認識もしていない。よって、隣接する域内に集落とは違う性格の遺構の存在を予想させる遺物でもある。

3 近世（江戸時代）(Fig.140、142)

この時代の遺構として明確な遺構は、溝状の遺構があげられる。その他、土坑及び建物等について表土直下から続く土を主体とする遺構があるが、中世以前の遺構・遺物を検出していない範囲については調査の標準に基づき調査対象とはしていない。

同じく近代の遺構には、溝状遺構がある。現在、遺跡の西側を流れる白川に直行するように掘削されており、白川が付け替えられたのちに掘削された溝であるものと考えられる。

4 その他（現代）

当該調査地は、江戸時代後期に城下町だった範囲外に新たな屋敷及び町家が形成された地域の一つで、明治に入り県庁、市役所等が白川を挟み置かれた。また、東部地域を中心に陸軍が置かれ、軍都熊本が建設されたのに伴い市街地中心部に位置することとなり、人口密度が高い状態を維持したまま現代に至るまで都市化を続けてきた。

そのため、太平洋戦争末期の本土空襲に伴い熊本市街地も米軍による空襲を受けており、調査区の表土中に焼土層を認めている。今回の調査では調査対象にしていないが、表土層直下に見られる焼土層がそれで、当地の歴史を語る一つの要因である。

この層に一部重複しながらも戦争遺構として地下式の防空壕を四基確認した。熊本市内一円で普遍的に見られる遺構である。

【参考文献】

- 熊本市新熊本市史編纂室『新熊本市史 史料編 第一巻考古資料』1996
熊本市教育委員会『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集－平成18年度－』「新屋敷遺跡42次調査区」
熊本市教育委員会『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集－平成19年度－』「新屋敷遺跡15次調査区」
熊本市教育委員会『新屋敷遺跡1』熊本市の文化財第22集 2012
熊本県教育委員会『新屋敷遺跡1』熊本県文化財調査報告第270集 2012
熊本県教育委員会『新屋敷遺跡2』熊本県文化財調査報告第286集 2013
熊本県教育委員会『新屋敷遺跡3』熊本県文化財調査報告第298集 2014
熊本県教育委員会『大江遺跡群Ⅲ』熊本県文化財調査報告第232集 2006
熊本県教育委員会『ワクド石遺跡』熊本県文化財調査報告第144集 1994
綱田龍生「肥後における回転台土師器の成立と展開」『中近世土器の基礎研究』X 日本中世土器研究会
綱田龍生「古代荒尾産須恵器と宇城産須恵器」『中近世土器の基礎研究』X 日本中世土器研究会

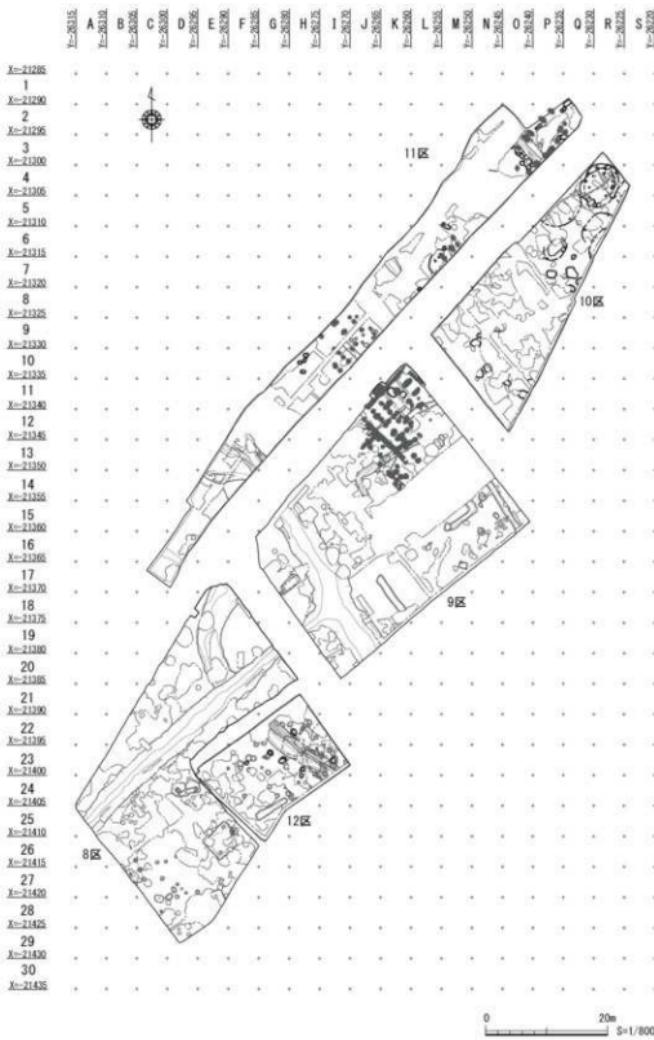


Fig.138 8~12区遺構配置図（縄文）

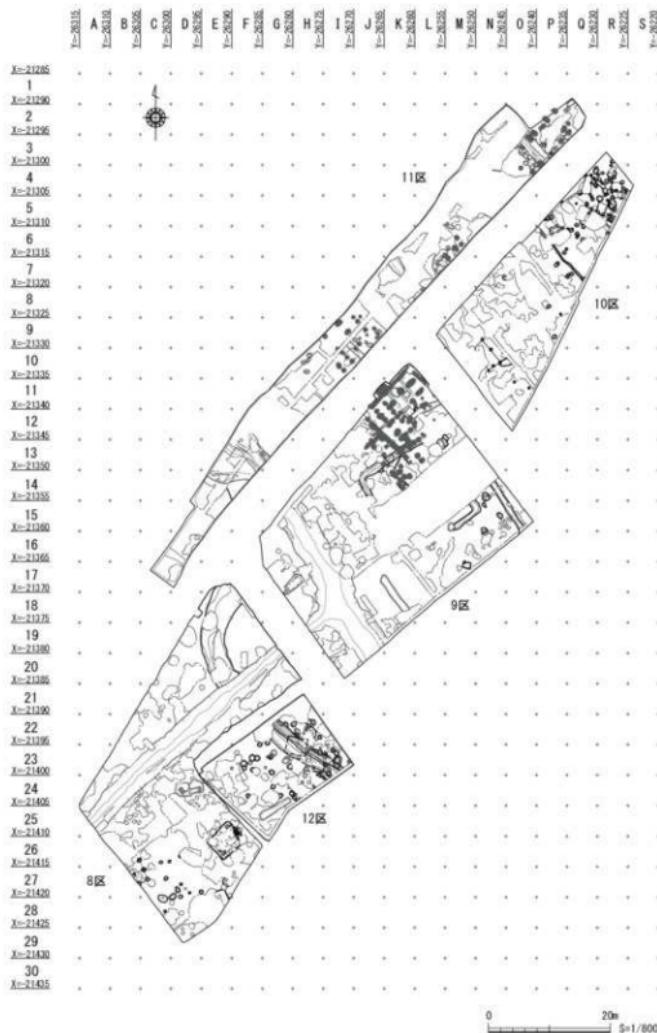


Fig.139 8～12区遺構配置図（古代）

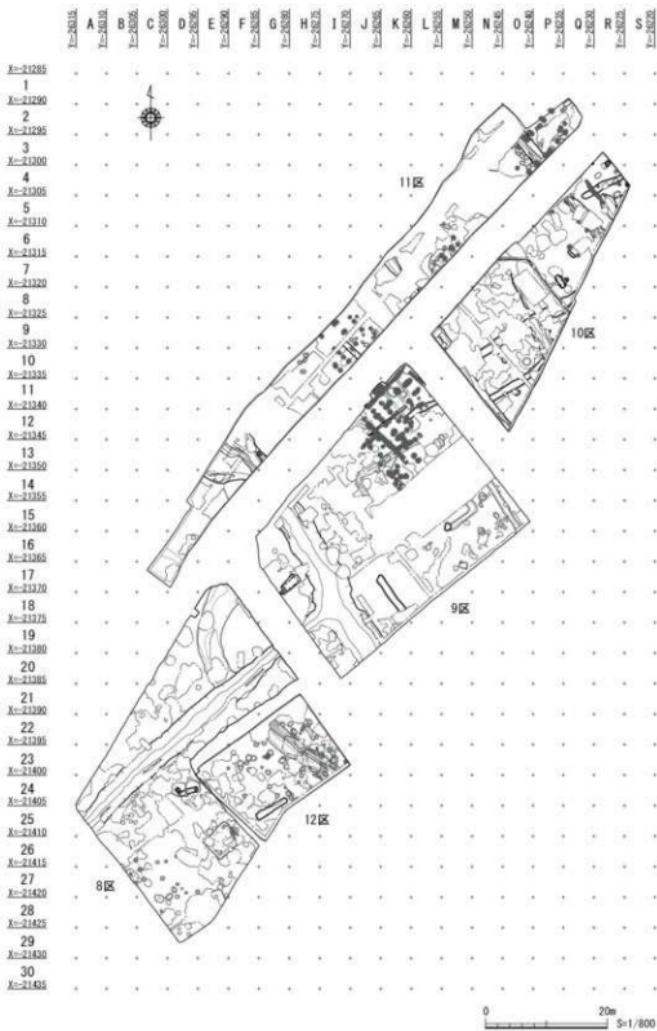


Fig.140 8 ~ 12 区遺構配置図(近世)

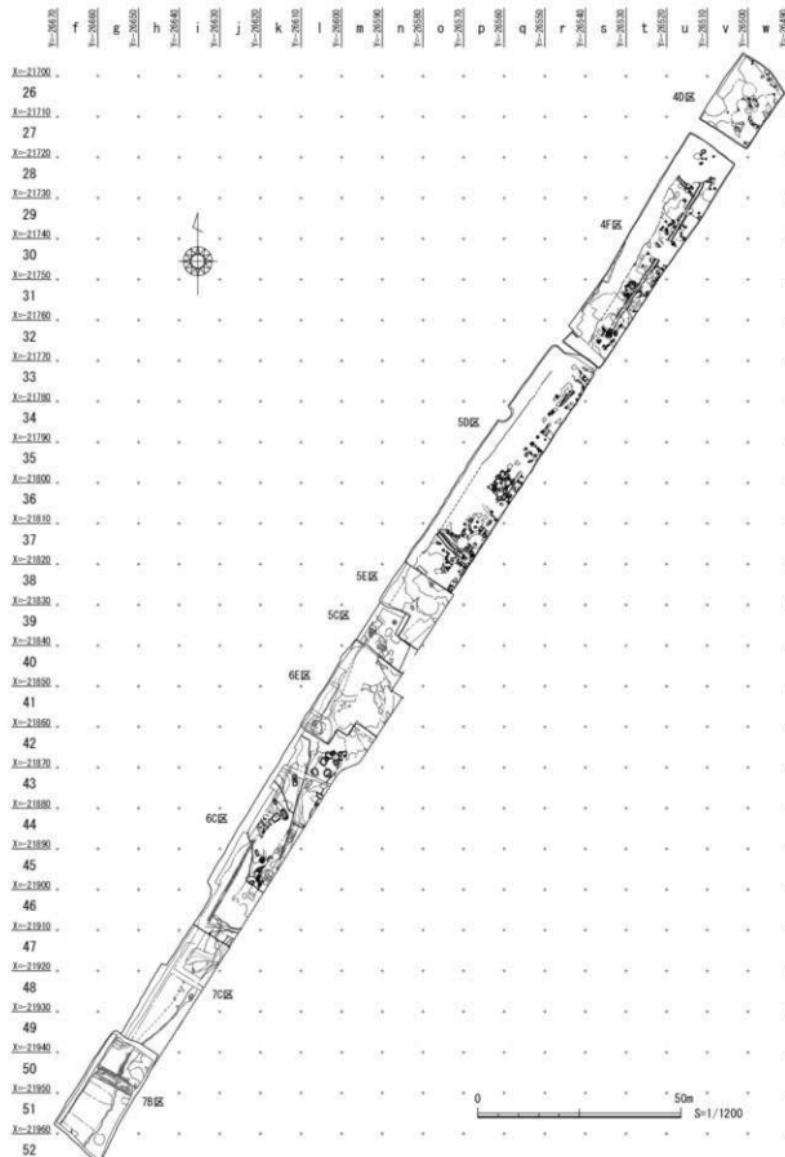


Fig. 141 4 ~ 7 区遺構配置図（古代）

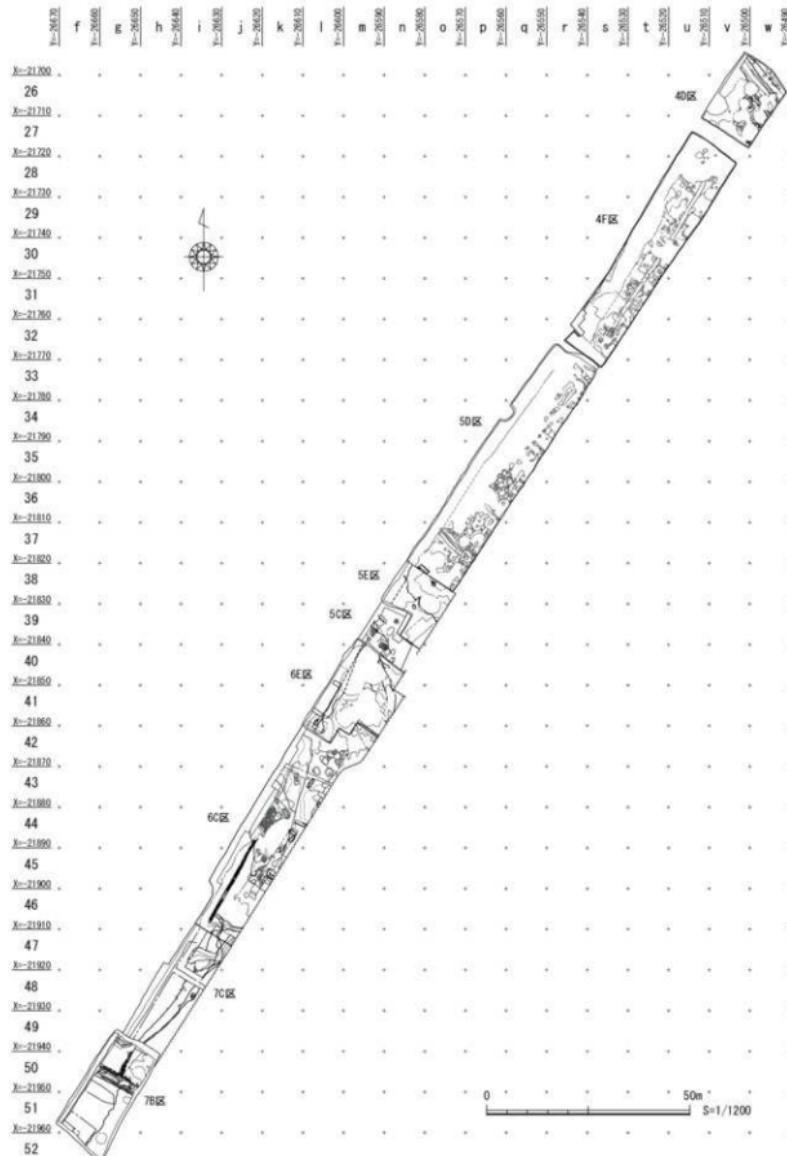


Fig.142 4～7区遺構配置図（近世）

PLATE 写 真

【現場】
撮影機材及び使用フィルム

カ メ ラ : MAMIYA RB67
Nikon F3

フィルム : FUJI RDP III
FUJI NEOPAN ACROS 100

【遺物】
撮影機材及び使用フィルム

カ メ ラ : SINAR S 4 × 5in 判

レ ン ズ : アボジンマー 240mmF5.6

フィルム : FUJI RDP III 4 × 5in
FUJI NEOPAN ACROS 100 4 × 5in

PL.9



1. 8区調査区全景
2. 8区SIOI完掘状況



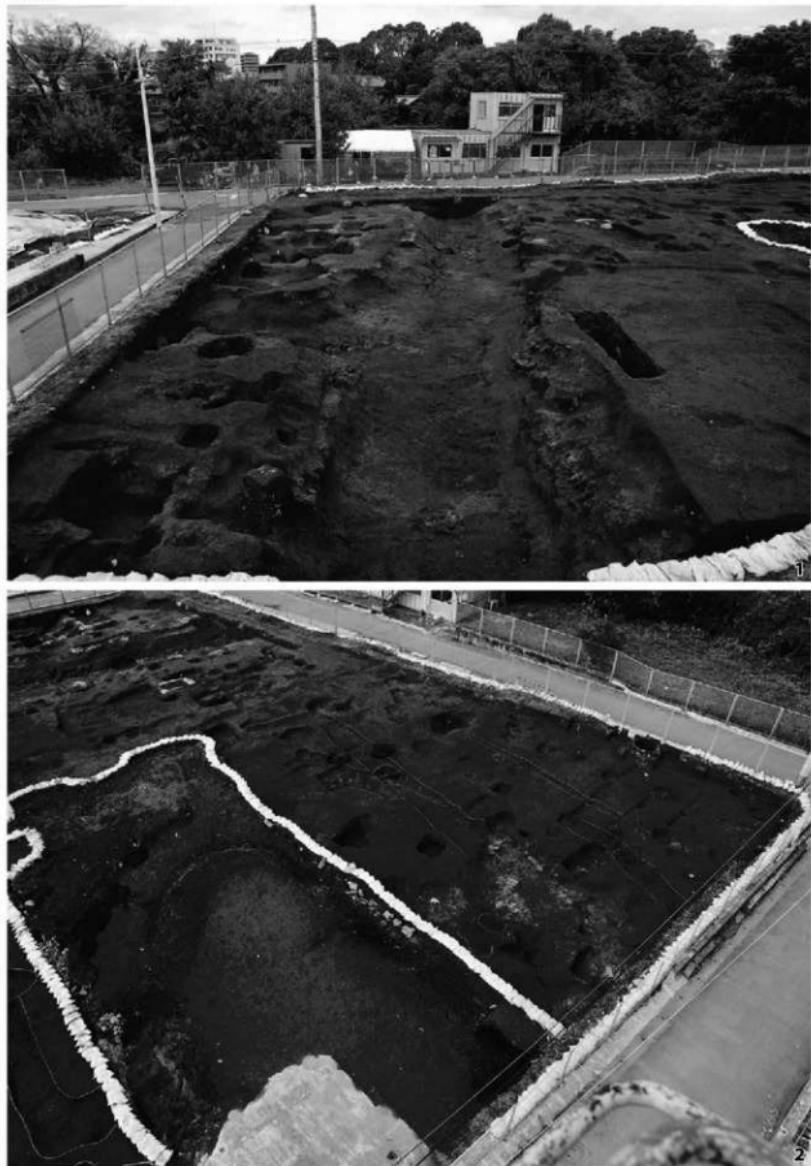
1



2

1. 8区 SD02 完掘状况（古代）

2. 8区 SD01 完掘状况（近世）

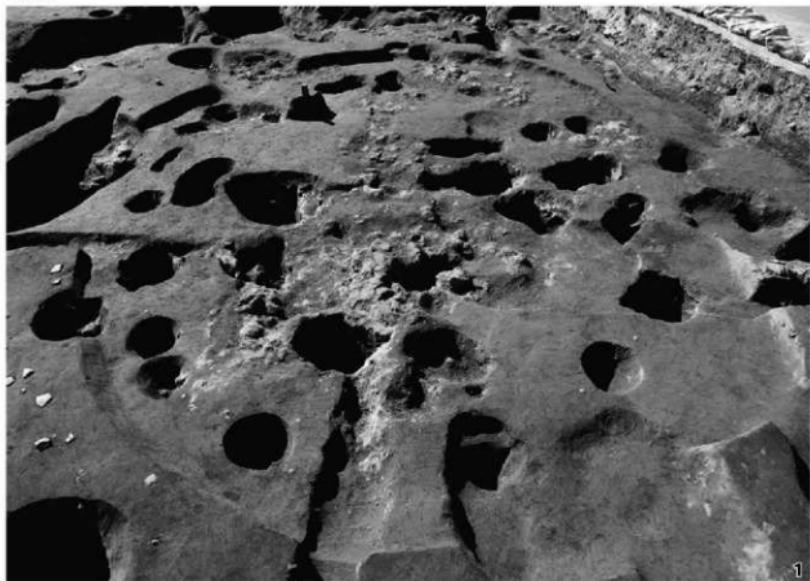


1. 9区 SD03 完掘状況

2. 9区 3層完掘状況（縄文）



1. 10区調査区全景
2. 10区SK32遺物出土状況



1. 10区 SI03 完掘状况

2. 10区 SI04 遗物出土状况



1



2

1. 11区・12区調査区全景
2. 11区S101 遺物出土状況

PL.15



1



2

1. 11区 SD03 完掘状况
2. 12区 SI01 完掘状况



8区 S101 出土遗物—①



8 区 S101 出土遗物一②



15



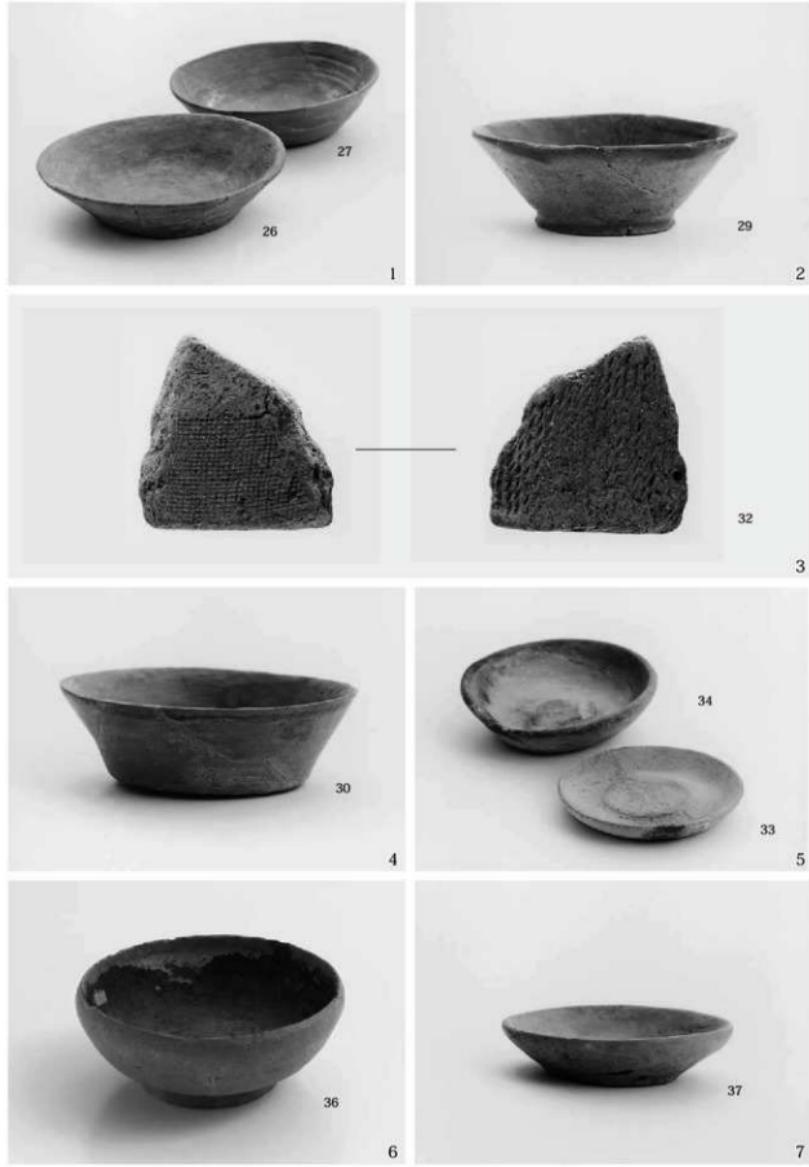
16

17

8区 S101 出土遗物—③

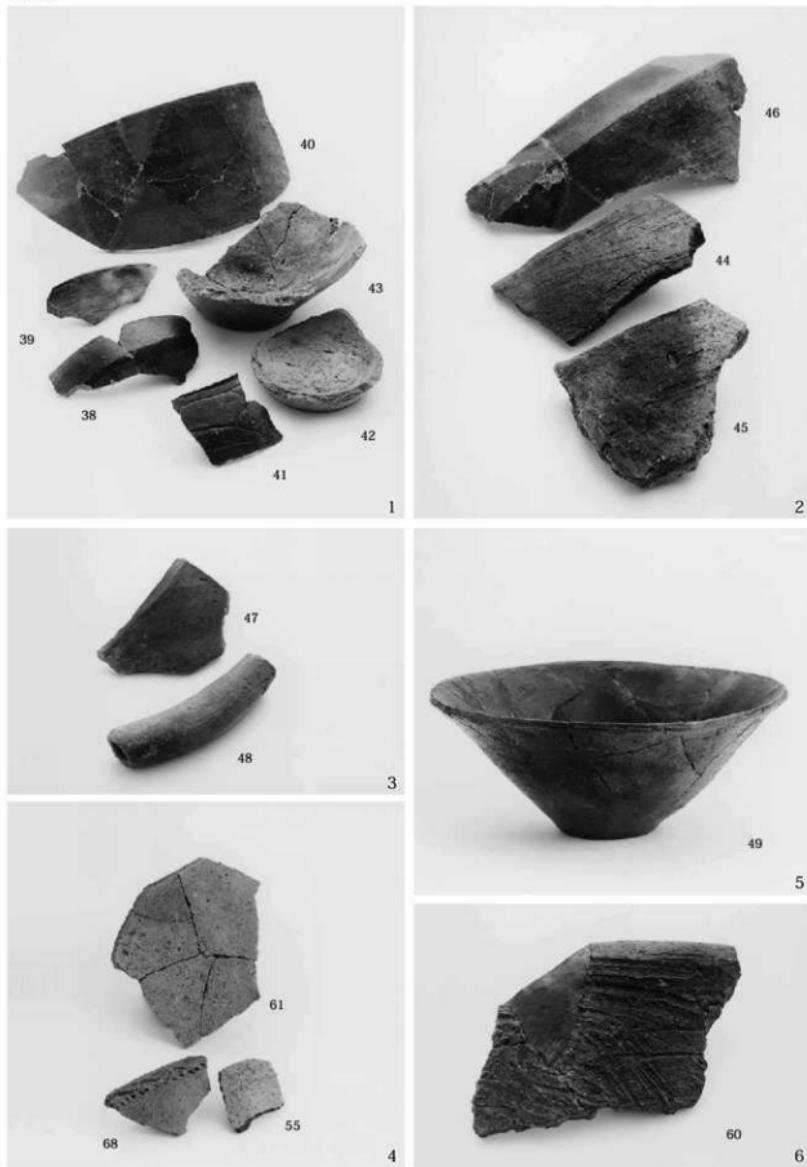


8 区 S101 出土遗物一④



1 ~ 4. 8区 SD02 出土遺物
5 ~ 6. 8区 SD01 出土遺物

7. 9区 SD03 出土遺物

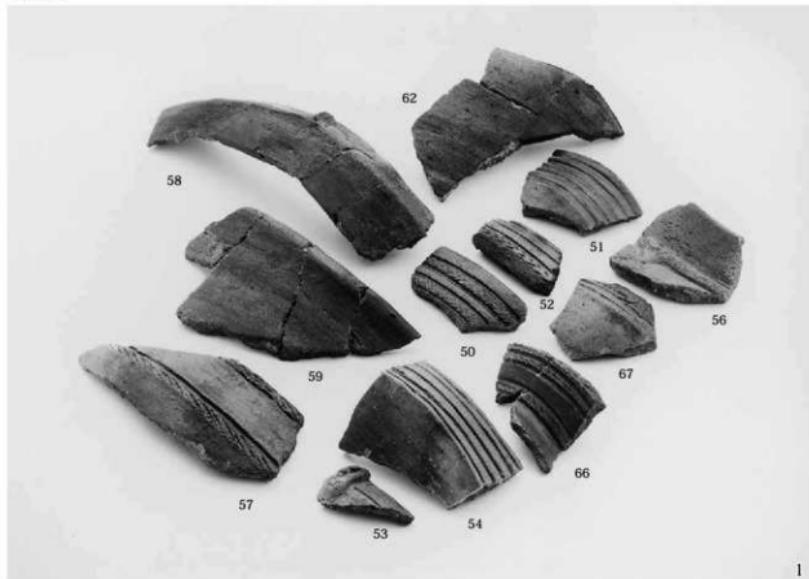


1. 10区SI03出土遺物
3. 10区SI08出土遺物

2. 10区SI04出土遺物
4~6. 10区SK32出土遺物—①



10 区 SK32 出土遺物一②



1

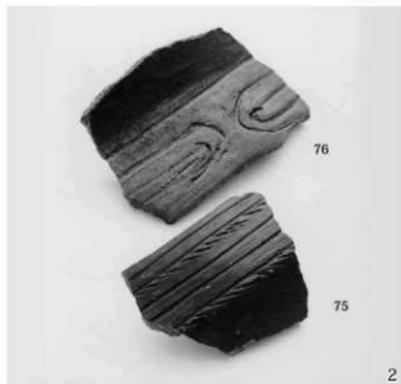


1 • 2. 10 区 SK32 出土遺物—③

3. 10 区 SK33 出土遺物



1



2



3



4



5

1. 10 区 SK34 出土遗物
2 • 3. 11 区 SK32 出土遗物

4. 11 区 SI02 出土遗物
5. 11 区 SD04 出土遗物—①



89



90

1

2



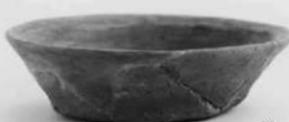
91

3



92

4



93

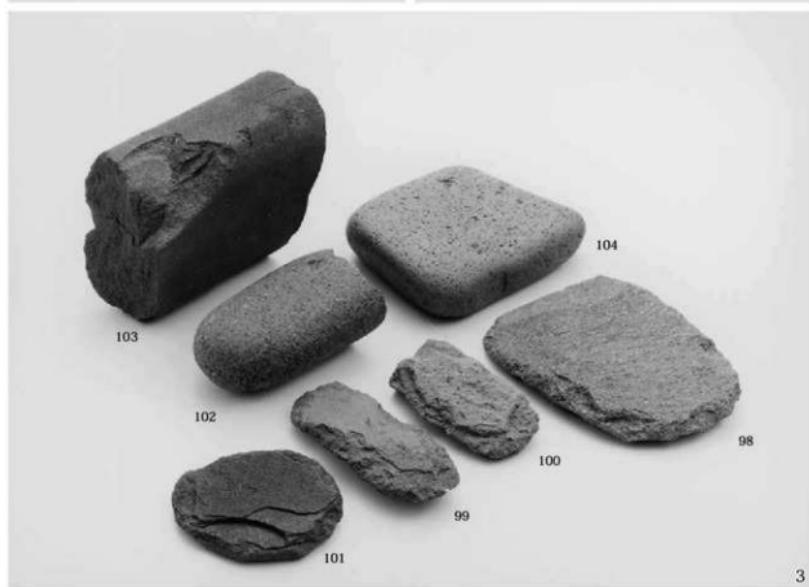
5



94

6

- 1 ~ 3. 11 区 SD04 出土遺物—②
4. 12 区 S101 出土遺物
5. 12 区 SD01 出土遺物
6. 12 区 SD02 出土遺物



1. 鐵製品
3. 石製品

2. 石鐵



1・2. 緑釉陶器

3. 染付（景德鎮窯 碗）

5. 染付（漳浦窯系 碗）

4. 白磁（中国 碗）・青磁（中国 碗）



1. 広東(皿・碗)

3. 肥前一青磁(皿・碗・鉢 17世紀)

2. 肥前(皿・碗 16世紀)

4. 肥前一綠釉(碗・壺 17世紀)



肥前（皿・碗・小鉢・壺・仏花器 17世紀）



1



2



3



4



5

1・2. 肥前 (鉢・蓋・碗 18世紀)
3. 肥前 (蓋・遊道具 19世紀)

4. 有田 (蓋・碗・鉢 17世紀)
5. 有田 (碗 18世紀)



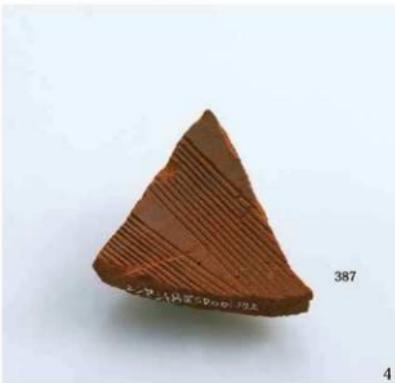
1



2



3



4

1. 有田（合子 18世紀）

3. 肥前（紅皿）

2. 有田（碗・鉢 17～18世紀）

4. 描鉢



1



2



3



5

1. 初期伊万里（盃）
2. 熊本（碗・急須蓋）

3. 唐津（碗）
4. 嬉野（蓋）
5. 薩摩（急須）



1



2

1. 土人形
2. 酒瓶・サイダー瓶



1. 4F区調査終了時状況
2. 4F区SD01完掘状況



1

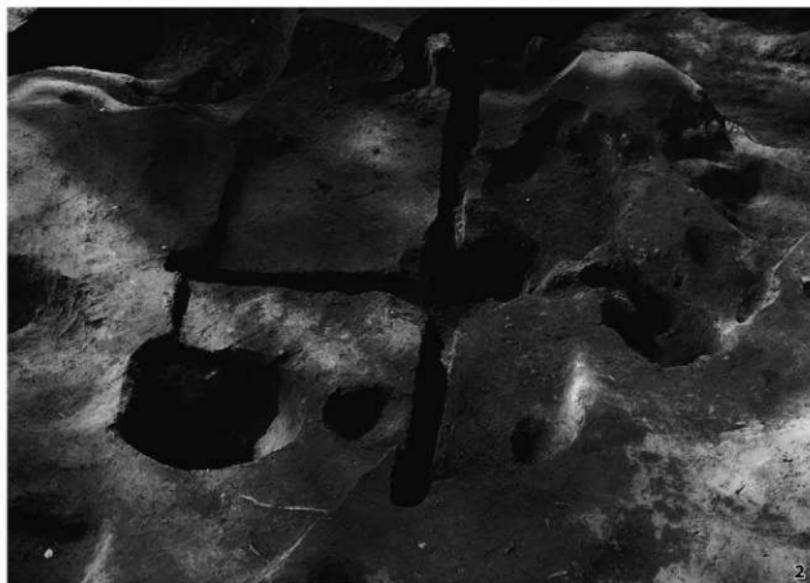


2

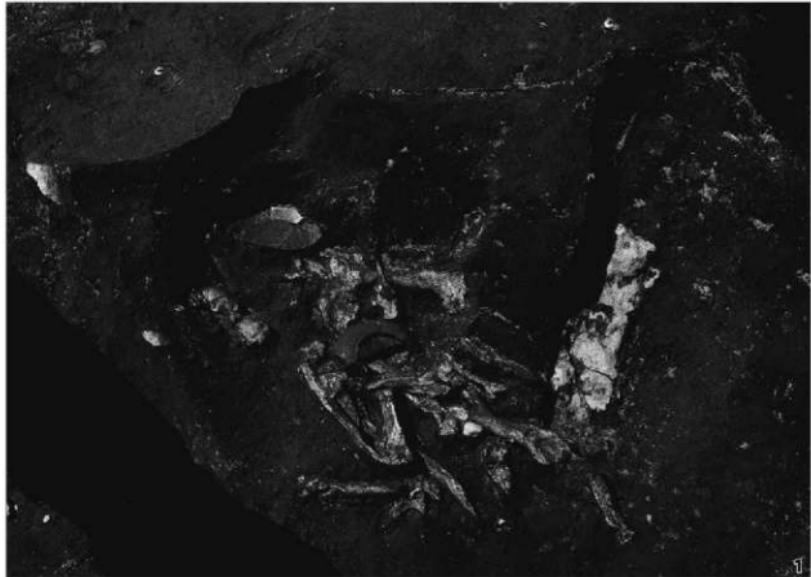
1. 5C区調査終了時状況
2. 5D区S101完掘状況



1. 5D区 S103 完掘状况
2. 5D区 SK05 遗物出土状况



1. 5E 区 SK01 遗物出土状况
2. 6C 区 SI01 完损状况



1. 6 C 区 SK19 熊骨出土状况
2. 6 C 区 ST01 人骨出土状况



1

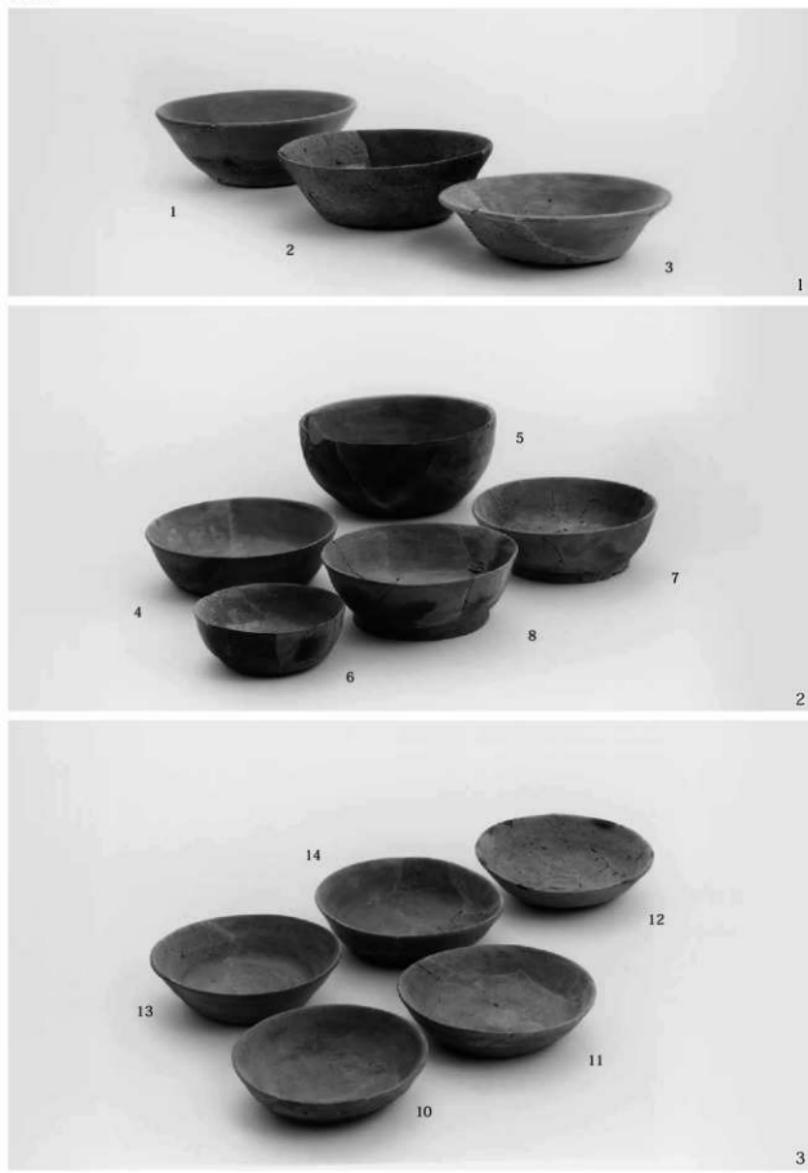


2

1. 6 C区 ST02 人骨出土状况
2. 6 C区 ST03 人骨出土状况



1. 6C区 ST06 人骨出土狀況
2. 6C区 ST10 人骨出土狀況



1. 4D区 SK02、SP22・25出土遺物
3. 5D区 SI01・02・03出土遺物

2. 4F区 SK21出土遺物

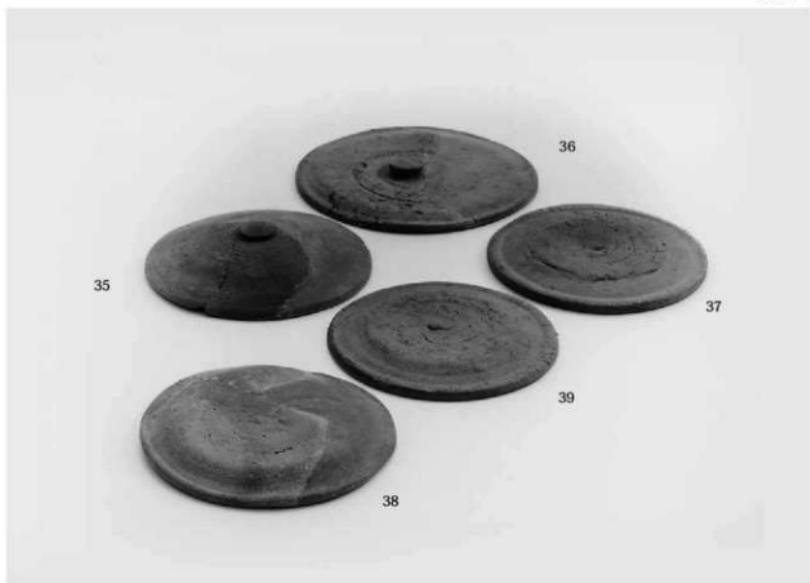


1. 4 D 区遺構内出土遺物
2. 5 D 区 SD05 出土遺物

3. 5 E 区 SK01 出土遺物
4. 6 C 区 赤彩蓋・杯



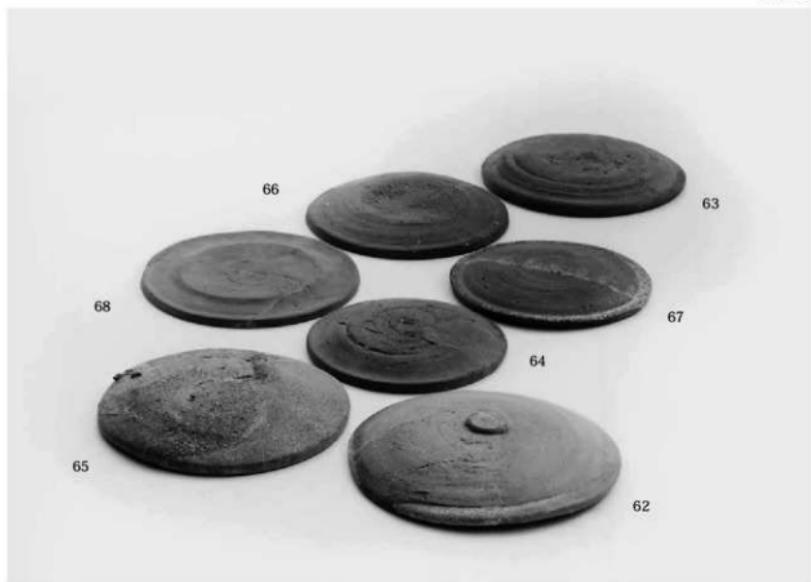
6C区SD01出土遺物—①



6C区 SD01 出土遺物-②



6C区 SD02 出土遺物—①



6C区 SD02出土遺物-②

PL.47



77

78



61

76

6 C 区 SD02 出土遗物—③



6C区 SD03出土遺物-①



6 C 区 SD03 出土遗物—②



6C区 SD03 出土遺物-③



6 C 区 SD03 出土遺物—④



122



123



124



125

PL.53



126



127

6C区 SD03 出土遺物—⑥



129



130

1

2



132



131

133



134

135



136

3

1・2. 6C区 SD04出土遺物
3. 6C区 SD05出土遺物



1

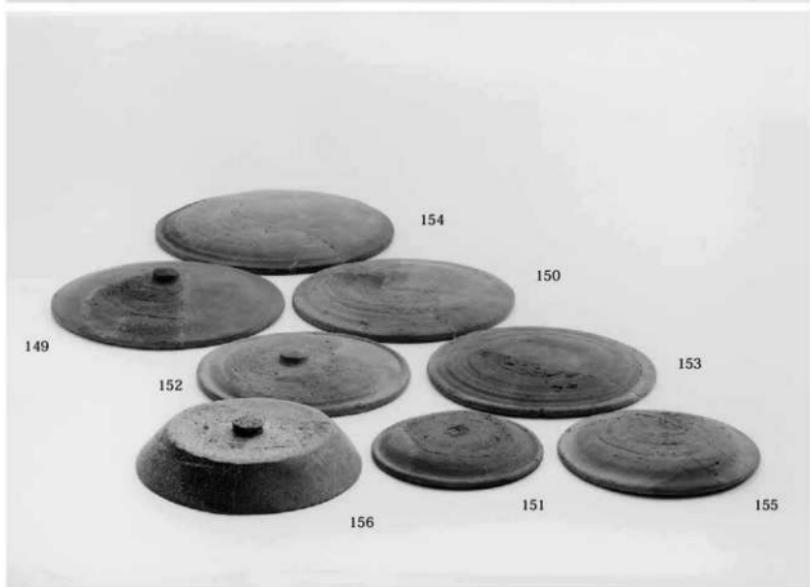


2



3

1. 6C区SK02出土遺物
2. 6C区SK04出土遺物
3. 6C区SK15出土遺物-①



6C区SK15出土遺物一②



6C区 SK15 出土遺物—③



162



163

1

2



164



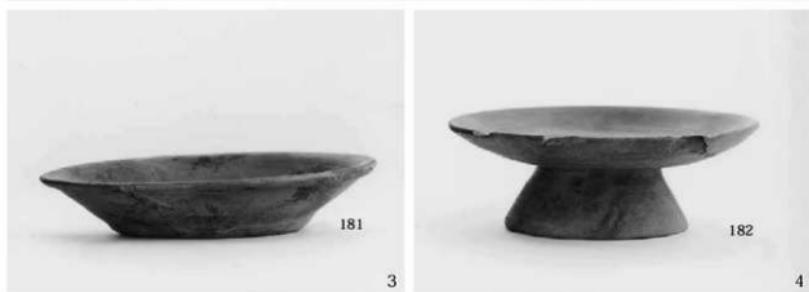
169

3

4

1 ~ 3. 6C区SK15出土遺物—④

4. 6C区SK20出土遺物



1. 6C区SK18・19・20出土遺物
3・4. 7C区NR02出土遺物-①

2. 6E区遺構内出土遺物

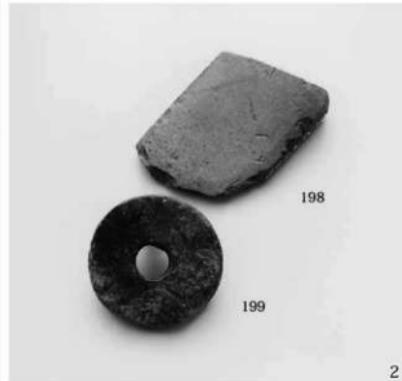


7C区 NRO2 出土遺物-②



196

1



198

199

2

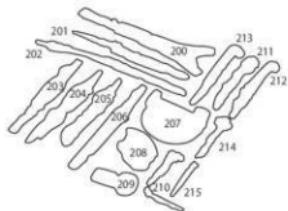


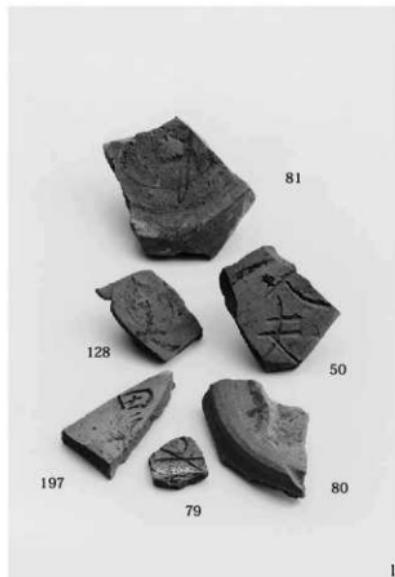
3

1. 7C区 NR02 出土遺物—③

2. 石製品

3. 鉄製品





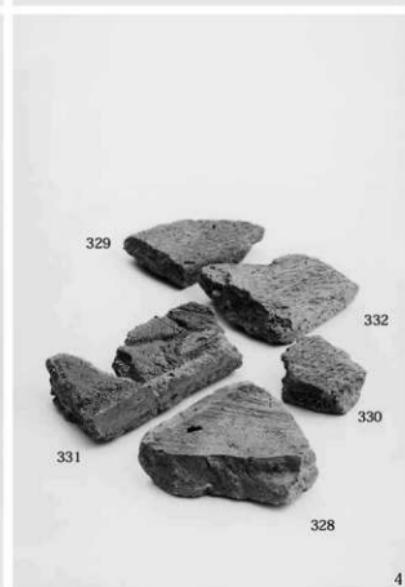
1



2



3



4

1. 墨書土器・刻書土器
3. 土錘

2. 製塩土器
4. 瓦



6C区 SD03 須恵器大甕

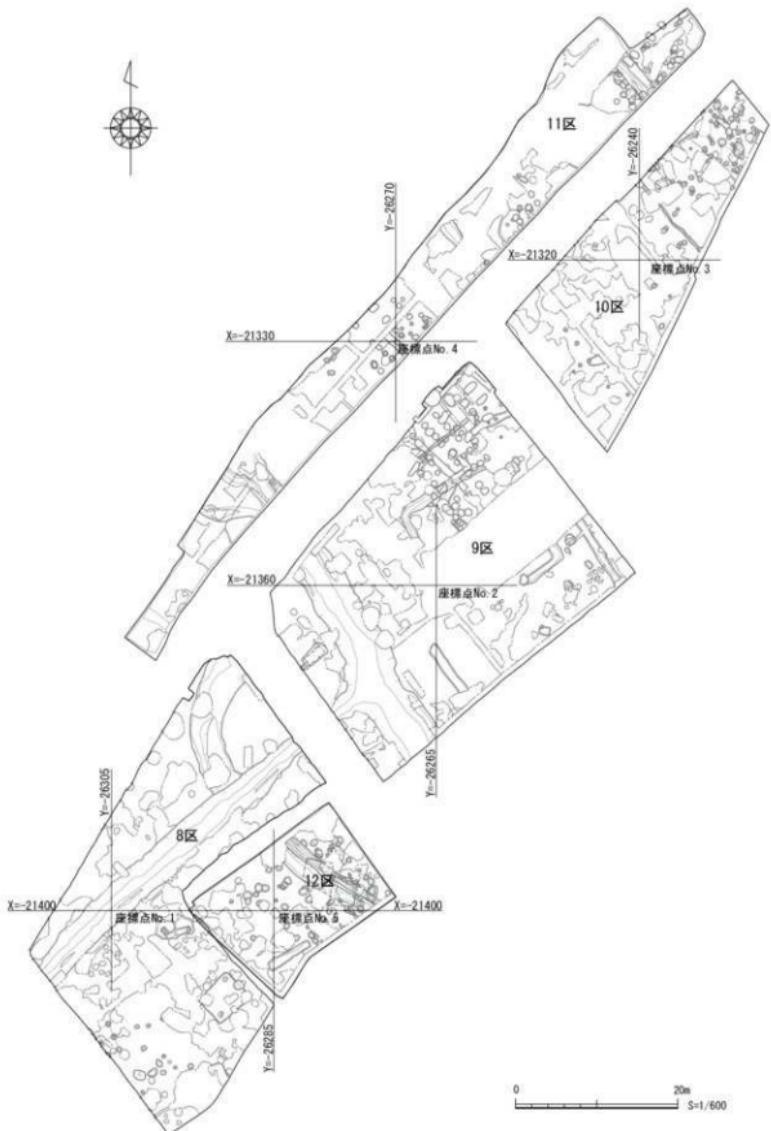


Fig.143 8 ~ 12 区座標測地点図

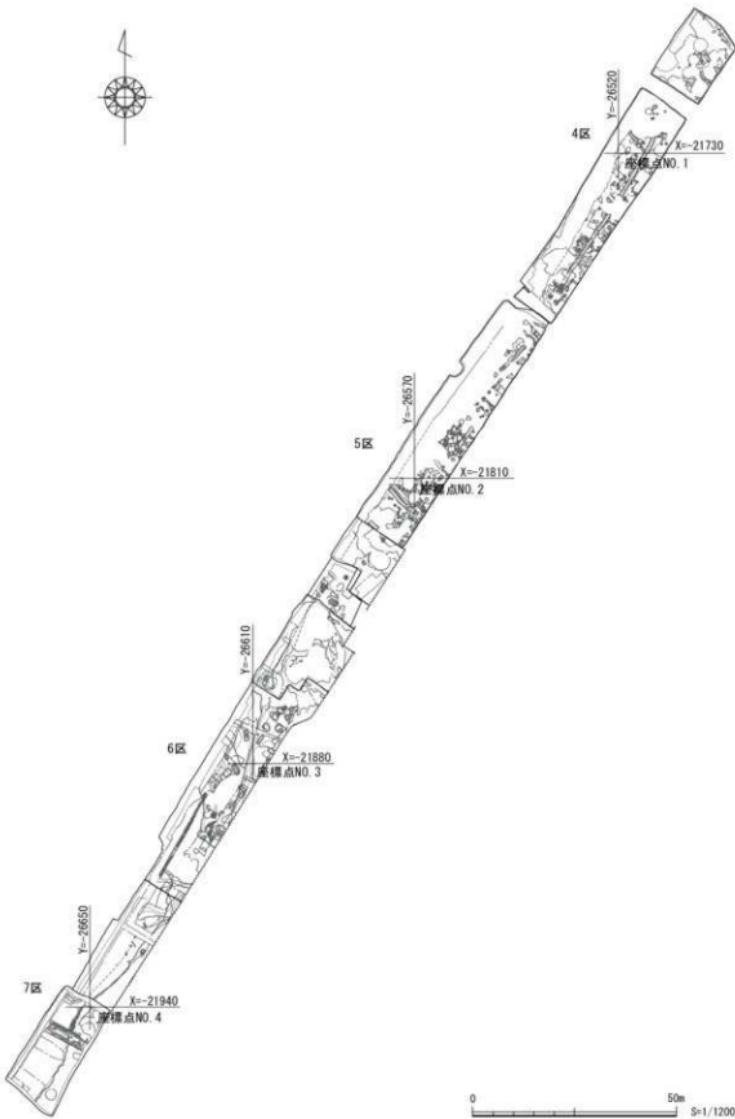


Fig.144 4 ~ 7 区座標測地点図

報告書抄録

ふりがな	しんやしきいせき
書名	新屋敷遺跡6
副書名	国土交通省白川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査
シリーズ名	熊本県文化財調査報告
シリーズ番号	第317集
編著者名	長谷部善一・高瀬美智代・横山明代
編集機関	熊本県教育委員会
所在地	〒862-8609 熊本県熊本市中央区水前寺六丁目18番1号 TEL 096-383-1111 (代)
発行年月日	2016年(平成28年)3月31日
資料の保管場所	熊本県文化財資料室 〒861-4215 熊本県南区城南町沈目1677 TEL 0964-28-4933

ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積(m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しんやしきいせき 新屋敷遺跡 8～12区	くまもとしゅうじゆうりょうく 熊本市中央区 しんやしきいせき二丁目	43	熊本眼	(8区 №1) 32° 48'24" (9区 №2) 32° 48'25" (10区 №3) 32° 48'27" (11区 №4) 32° 48'26" (12区 №5) 32° 48'24"	(8区 №1) 130° 43'09" (9区 №2) 130° 43'10" (10区 №3) 130° 43'11" (11区 №4) 130° 43'10" (12区 №5) 130° 43'10"	H21.5～ H21.12	(8区) 1,235m ² (9区) 1,392m ² (10区) 670m ² (11区) 810m ² (12区) 300m ²	白川河川 改修 工事
4～7区	くまもとしゅうじゆうりょうく 熊本市中央区 しんやしきいせき一丁目	201	熊本市	(4区 №1) 32° 48'13" (5区 №2) 32° 48'11" (6区 №3) 32° 48'09" (7区 №4) 32° 48'07"	(4区 №1) 130° 43'01" (5区 №2) 130° 42'59" (6区 №3) 130° 42'57" (7区 №4) 130° 42'56"	H21.5～ H21.12 H23.5～ H23.7	(4区) 1,620m ² (5区) 1,392m ² (6区) 670m ² (7区) 810m ²	

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
新屋敷遺跡 8～12区	散布地	縄文時代後期 古代 近世・近代	竪穴建物・掘立柱建物 溝・土坑 防空壕	縄文土器・須恵器・土師器 陶器・陶磁器 石器・鉄製品
4～7区	散布地	古代 近世・近代	竪穴建物 溝・土坑・土壙墓 防空壕	須恵器・土師器 陶器 石器・土製品・鉄製品

要約	【8～12区】 新屋敷遺跡は白川中流域左岸に位置する。今回の調査は自然堤防上に立地する白川の河川改修工事に伴い平成21・23年度に熊本県教育委員会が発掘調査を実施した。 主に古代遺構(8～9c)が中心であるが、今調査では8区でカマド付き竪穴建物を1軒検出、10区で縄文後晩期の竪穴建物を4基検出した。また近代遺構として全調査区から防空壕を検出している。
	【4～7区】 今回の調査は自然堤防上に立地する白川の河川改修工事に伴い平成22～24年度に熊本県教育委員会が発掘調査を実施した。 主に古代遺構(8～9c)が中心である。5D区にて4軒の竪穴建物、5E区にて人骨を伴う土壙墓1基(近世)、6C区においては人骨を伴う土壙墓を9基(古代)検出した。また、近代遺構として防空壕も検出されている。

2016年3月31日 印刷

2016年3月31日 発行

熊本県文化財調査報告第317集

新屋敷遺跡6

著作権所有 熊本市中央区水前寺六丁目18番1号

発行者 熊本県教育委員会

印刷者 熊本県上益城郡益城町広崎1630-1

株式会社 城野印刷所

発行者：熊本県
所屬：教育庁文化課
発行年度：平成 27 年度

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第317集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：新屋敷遺跡6

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺6丁目18番1号

電話：096-383-1111

URL：<http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：西暦2023年1月13日